作詞少女

詞をなめてた私が知った8つの技術と勇気の話

仰木日向
まんが・イラスト まつだひかり

CamScannerでスキャン

○プロローグ

「作詞って……私が？」
「うん。うちの軽音部でオリジナル曲作ってるんだけど、作曲はまぁいいんだけど歌詞が全然でさぁ……お願いゆっぴ！」
「ええ!?　無理よ尚子！　作詞なんて無理無理！　やったことないもの！」

――来た。ついに来たわ。私の才能に気づく人が、ようやく現れたのね。

昼休みの図書室。ゆっぴこと私、江戸川悠のもとを訪ねてきたのは、軽音部でギタリストをやっている友達、佐々木尚子。そんな彼女が私に相談をきたのは、『作詞の依頼』だった。
「だってほら、ゆっぴって読書家だし頭良いし、そういうの得意でしょ？　……私ってほら、音楽ばっかりやってるから語彙力とか全然なんだぁ」
　実に正しい判断だわ尚子。まぁこの子が何をもって私のことを頭が良いとか読書家とか言ってるのかについては、ちょっとした誤解があるんだけど。というか、固定観念？　たし

かに私は、メガネとロングヘアーと学級委員と読書家の4点セットでいかにも頭が良さそうなイメージがあるのかもしれないけど、実際の私は別にそういうのではない。なんていうか、〝ただ普通に真面目〟っていうのが私。メガネはゲームのやりすぎで目が悪くなっただけだし、学級委員っていうのもほかに立候補もなかったから、じゃあやりますって感じだったし、江戸川って名字だからって江戸川乱歩や推理小説が好きってわけでもないし殺人事件にやたら出くわすっていうわけでもない。……読書家って印象はきっと、普段よく読んでるラノベとかのことかしら。あ、でも待って。ラノベってひと口に言ってもいろいろあるのよ？　世間じゃなんだかラノベ＝浅いみたいな空気もちょっとあるけど、それについてはちゃんと読んでから言ってよねって感じだわ。そうよ。最近のラノベはすごいんだから。

それにしても、なんだか感慨深いわ。いよいよ私の出番なのね。私くらい作詞に向いてる人はたしかにこの学校ではほかにいない気がするわ（根拠はないけど）。うふ、ちょっと意識的に賢そうに見える振る舞いをしていたのが、ここにきてついに実を結んだのね。熱い展開だわ。私のイマジネーションは今まさに爆発寸前。思わず一筆したためてしまいそう。日々の感動を綴っている私の心の詩集『ココロノート』が火を吹くときが、どうやら来たようね。

「やっぱ迷惑だよねゆっぴ。……ごめんね、ほか当た――」

「仕方ないわね。あんまり期待しないでね？」

「え、やってくれるの？」
「ええ、困ってるなら仕方ないわ」
「ホント？　よかった～！　じゃあ、あとで曲渡すね！」
期待しないでね、なんて言ったけど、うふふ。楽しみにしておきなさい尚子。私のとっておきの作詞を、お見舞いしちゃうんだから！

目次

プロローグ 3
第1話 詩文と私 9
第2話 作詞とはどういう技術なのかという話 43
第3話 歌詞のフォーマットの話 71
第4話 資料読みの話 103
第5話 字数と語彙力の話 137
第6話 自分らしさの話 165
第7話 歌い心地とナンセンスの話 189
第8話 作詞の全工程の話 209
詩文語録一録音の仕方 236
第9話 私が知りたくなかった作詞の話 237

第10話 江戸川悠の話 267
第11話 一番大事な作詞の話 291
詩文語録―韻の世界 302
第12話 伊佐坂詩文の話 303
第13話 共感する歌詞の正体の話 337
第14話 音楽という呪術の話 351
第15話 テーマの作り方の話 363
第16話 周りの目と羞恥心の話 389
詩文語録―作詞に役立つ参考文献 410
最終話 相対価値と絶対価値の話 411
エピローグ 434
あとがき 440

CamScannerでスキャン

第1部

時事と私

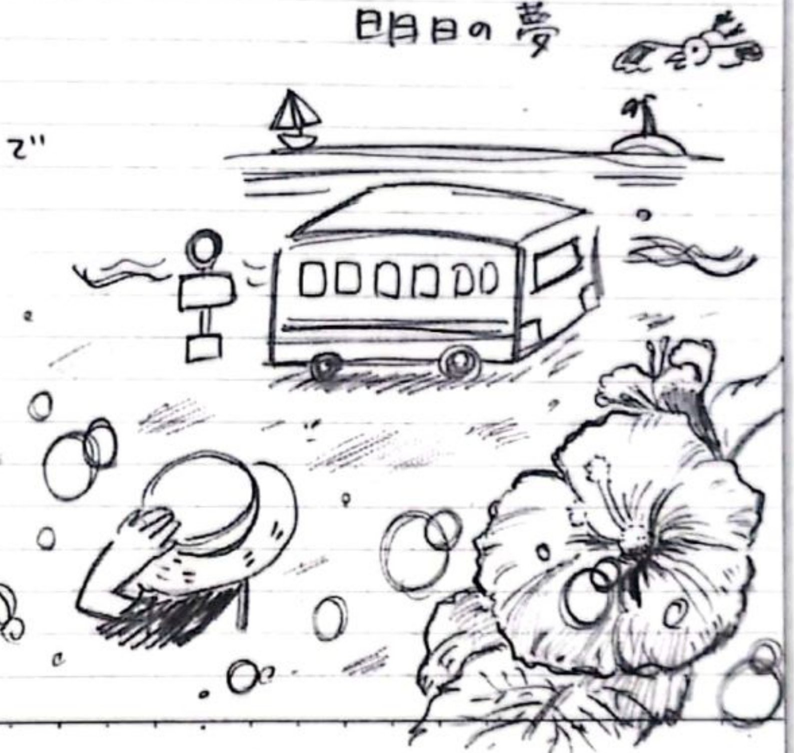
CamScannerでスキャン

No
Date

眩しく照りつけた太陽が
キミを光の中に誘う
聞いてほしいことがあるの
海沿いの道のバス停で
キミとすれ違う 光の中で
風を追いかけ
同じ景色見ながら
僕たちは いつも
真っ白な優しさで
光に満ちた世界
悲しみのない場所で
夏を探そう

ヘアバンドを外しながら
君は振り返ると
光の中で微笑んで
何も言えなくなるけれど
長い髪をほどいて
もっと キミのそばで
透明な気持ちが
もし あなたなら

明日の夢



CamScannerでスキャン

「ねぇ尚子」
「……ギクッ。あ、ゆっぴ。アハハ……何？」
「いや、この前渡した歌詞なんだけど」
「そ！　そういえばゆっぴ！　昨日の『TALK BACK』観た？　展開ヤバイよね～！　マジ泣けたっていうか……」
「え？　ああ、あのドラマね。録画してるけどまだ観てないわ。そうじゃなくて歌詞の話なんだけど、感触どう？　そういえばまだコメントもらってなかったから」
「え、えーっと……ア、アハハ……あーアレね！　あ～……それなんだけど……」

あれから私は、尚子からもらったバンドのオリジナル曲に私なりの歌詞を書いて、ひとまず渡した。かかった時間は1週間。まだ細かいところは納得がいってないところもあるんだけど、なんか途中で何が正解かわからなくなったりもしつつ、プロの歌詞とかいろいろ見たりパクったり（あ、じゃなくて、インスパイアされて）とか、紆余曲折(うよきょくせつ)をしながらどうにか、とりあえずは仕上がった。
ちなみに、自己評価としては、良いところもあるし、どうかなっていうところも正直ある。けど、初めてにしては上出来だったんじゃないかしら？　うん、かなりそれっぽいんじゃないかなと思う。ちょっと、ちょっとだけど自信あったりして。いや、まだまだなんだけど、

悪くない出来だとも思うし、率直な意見を聞きたい。
……と思ってるんだけど、歌詞を渡してから3日経っても尚子から何のコメントももらっておらず、シビれを切らした私は、ついにそれを聞いてしまった。

「あー、えっと、うーんとね、ちょっとわかりにくかったカナ〜……みたいな」
「そう？　どのへんが？　解説するわよ？」
「いや、まず、メロディにどうハマるのかがよくわかんなくって……なんか文字数合ってなくないアレ？」
「ああ、それはそうしたのよ。メロディにハメるのすごく難しかったから、とりあえず思った通りに書いてみたのよね」
「え。……へぇ〜、そ、そうなんだぁ」
「でも、曲のイメージは掴んでたでしょ？　メランコリックなとことか」
「う〜ん……そ、そうかな？　うん、まぁ、そんな気もしなくもないような……？　でも、ちょっと意味がよくわかんない言葉とかもあったりして……」
「どこ？　そんなのあったかしら？」
「あー、たとえば最後らへんの『透明な気持ちが　もしあなたなら　明日の夢』とか……あれどういう意味なのかなーって」

「ああ、意味なんてないのよそれ」
「へ？」
「私いろいろ調べて思ったんだけど、歌詞って結構意味不明じゃない？　よく読んでも実は意味なんてない、みたいな。結局、その歌詞を良いと思うかどうかは聴く人のそのときの気分次第みたいなところあるじゃない？　だからそこはむしろ、どうとでも取れる歌詞にしたのよね」
「……ああ〜。ん〜〜……なるほどぉ〜……。言われてみればなるほどって感じかも……？」
「でしょ？　結構考えて書いたんだから」
「うん……う〜ん……。あ、あのね、私はすごく良い歌詞だなって思ったんだけど……バンドメンバーがあんまり気に入ってないみたいな感じで……ほ、ほら！　バンドの子らって洋楽好きだから、日本語の歌詞ってだけであんまりピンとこないみたいなとこもあって……その……なんていうんだろ……」
「……何？」
「……ふ、不採用的な……カンジっていうか………」
「……へぇ。そうなの」
「あ、ゆっぴ？　ごめんね？　いやいや、良い歌詞だと思うよ！　私は好きだし……」

「……うん、ありがと。じゃあ、その歌詞捨てといて……」

私は、申し訳なさそうにしている尚子を背に、教室を後にする。

ああ。1週間前のあの楽しかった気持ちはどこへやら。たしかに、うん。書き始めて1日で私も気づいたのよ。『これ、そんな簡単なやつじゃないぞ』って。でも、初めて書いたにしては上出来じゃない？　たしかに文字数は合ってなかったし、なんとなくしっくりこないなって思うところも言われてみればたしかに結構あったけど、良いところもあったと思うのよ。それなりに。ちょっとくらいは。

……だって、やったことないんだから仕方ないじゃない。何を私に期待してたのよ。だいたい、なんで私に頼んだのよ……。その人選の時点で間違ってるのよもともと……。

~~*~*~*~*

「……はぁ」

人がたくさんいても、常に静かな図書室。その、傷ついた心を癒してやまない秩序（ちつじょ）に満ち

たくつろぎ空間で私は、ひとりため息をついている。ちなみにこの図書室にはなんと、生徒会の努力によって紙コップ注水式のコーヒー自販機が設置されている。クリーム5、砂糖5に設定した激甘コーヒーを読書机に運んだ私は、つっぷしながら改めてヘコみ直す。グズグズと。

（歌詞をボツにされるのって、こんなに精神的にクるものなのね……）

思いの外ダメージがでかい。もともとできないことなんだからもっと軽く考えればいいって頭ではわかってるんだけど、でも、なんだろうこの、何もかもを否定されてしまった感。私のすべてがダメな感じがする。一生懸命書いたのに……あんなのひどい……。あ、まずい、なんか泣きそう。ダメ。ダメよ悠。私は泣かない、明日は明日の風が吹くんだから。ちょっとした事故に巻き込まれたみたいな話なんだから。

（そんなにひどいかしら……）

私は、改めて自分の書いた歌詞を見てみる。そこにあるのは、今となってはなんだかすごく恥ずかしい黒歴史。精一杯プロっぽいの書いたつもりだし、自分にしてはよくここまでっ

て思った。思ったし、今朝まであんなに自信満々だったのに……いや、それも実は嘘……というか強がりね。本当は、もしダメって言われたらどうしようって内心すごく不安だった。自分でもわかってるのよ。なんかこう、言葉にするのは難しいけど……これじゃダメだっていう雰囲気。とんでもなく恥ずかしい感じ。どう言えば伝わるかしら……？　なんていうか、描けもしないのに描いちゃった漫画のイラストを、あとで見返しちゃったときみたいな……。

（ぐぅ………なんで私、歌詞なんか書いちゃったのかしら……）

1週間前の私を止めたい。あんたの本気の歌詞、冷静に見たらめっちゃ寒いわよって言ってやりたい。黒歴史しか生まれないから絶対やめときなさいって忠告してあげたい。

（ああああああ〜！）

私は、心の中でジタバタする。ここは図書室だし、あくまで静かに。脳内の私は地面をゴロゴロ転がりながら叫んでいた。

「……はぁ。………はは……。まぁ、私ってこんなもんよね」

ボツになった歌詞が書かれたノートを見つめながら私は、誰にも聞こえない小さな声でポツリと呟く。張り切って表に大きく『作詞ノート』と書かれたその記念すべき1冊目の1作目は、それと同時に人生最後の歌詞になってしまった。でも、そうよね。私ってこんなもんよ。

「へぇ～こりゃあいいや！　図書室なんて退屈な場所かと思ってたが、暖房もバッチリなんてちょっとした穴場だな。おやぁ……？　コーヒーまであるのか！　すげぇな！　はは、まるで喫茶店だな！」

「？」

　憩いの図書室の静寂を破ったのは、ガサツな女子の声だった。誰かしら……？

「あたー、１００円かぁ……チェー。金とんのかよー。まいったなぁ」

　……何かしらこの子。……しかしうるさいわね。

　見てみると、そこにいたのはおよそ図書室には似つかわしくない女子生徒だった。銀色に染めたショートカットで、赤のメッシュも入ってる。まるで頭から血が一筋流れてるみたいな過激な色合い。それに、いかにも品のない攻撃的な目つき。声だけ聞くと少年のようにも聞こえる、ワンパクでボーイッシュな語気。ボタンをふたつ開けたシャツ。リボンもこれ、学校指定のやつじゃないわね？　わざとだらしなく付けていて、よもぎ色っぽいカーディガ

ンはまぁまともだけど、スカートは限界なくらい短く巻き上げてるし、その足元は……ルーズソックス？　いつの時代の女子高生よあなた。しかも靴は、どういう靴なのよそれってくらい底が厚い目測20センチくらいの厚底靴だった。なんていうのかしら、昔こういうファッション流行ったらしいわよね？　コギャル……っていうんだったかしら？　身長はかなり低そうだけど、靴で上げ底してるぶん私と同じ平均身長くらいに見える。実際は150もないんじゃないかしら……？　いや、っていうか、上履きはどうしたのよ上履きは!?　なんで校舎内で普通に靴履いてるのよ。ありえないわ。ハァ……こういうルールを守らない人って大嫌い。ところで何？　この子、図書室のこと気に入ったの？　ごめんだわ。あなたみたいな人に私のユートピアを壊されるのなんて、絶対許さないわ……！

「あなた、ここは図書室よ。静かにしてよ」

「ん？」

私は座ったまま、少し大きめの声で言った。

「なんだぁ、お前」

ギャルの子は、ジロリと鋭い目で私を睨む。その声には、ドスの効いた迫力があった。

「……し、静かにしてって、い、言ってるのよ。何？　文句ある？」

しまった。虫の居所が悪かったのもあってつい突っかかっちゃったけど、私こういうの苦手なのよ……。不良とかギャルとか、そういう反社会的な人たちとはできるだけ接点を持たずに生きてきたのに、なんで今日に限って……失敗した……。

「……おお！　なるほどな。それが図書室のマナーってやつか。なぁるほど。あっはっはっは、そいつは悪かったな！　これから気をつけることにするからよ、大目に見てくれよな！」

大きな声で返事をするギャルの子。いや、それをやめろって言ってるんだけど……でもまぁ、思ったより物わかりはいいのね……？　た、助かった……じゃなくて、そうよ！　当然じゃない！　悪いのはあっちなんだし、私が遠慮する必要なんて何もなかったんだわ！

ええ！　もちろんよ！

「ところでお嬢さん、アタシはコーヒーを一杯もらいてぇんだが、あいにく持ち合わせがなくってね、悪いんだが一杯ご馳走してもらえるかな」

「おじょ……。１００円なんてあげないし、静かにしないなら出ていってよ」

なんだかよくわかんないけど、変なプレッシャーがあるわね……見た目が不良っぽいのもあるけど……。って、これってもしかしてライトな恐喝（きょうかつ）……？　１００円、あったかしら……ああでも、これって払っちゃっていいの？　どうしよ……。

「んー？　なんだぁお前、作詞なんかやってんのか？」

「へ？」

お財布のことを考えている途中、出し抜けに言われた言葉でキョトンとした声を出してしまった。なんでそれを……？

「し、しし、してないわよ？　なんのこと？」

「いや、だってそのノート、お前んだろ？」

「え……」

チョコチョコと私に接近してきたギャルは、私の前に置いてあるノートの表紙にデカデカと凝ったレタリングで『作詞ノート』と書かれているのを見てそう言ったらしい。うん、これはたしかに、誰がどう見ても作詞ノートよね。

「へぇー、見せてみろよ♪」

「ちょ……やめて！」

「んんー？　なんだこりゃ？　これは……ああ。へぇ～」

「やめてって言ってるじゃない！　返して！」

「ぶはははは！　こいつはひでぇな」

「……っ……は？　……何よ、あなた作詞なんかわからないでしょ？」

「いやいや、だってこれ、NRM31の丸パクリじゃねぇか。ほかにもいくつか混ざってるな」

CamScannerでスキャン

私は、ボッと顔を赤くした。……なんなのこいつ？　なんでバレたの？　もしかしてNR
M31のファン？　……そんなことどうでもいいわ！　最悪！
「……返してって言ってるでしょ！」
「はーははは。いるんだよな、お前みたいなやつ」
一瞬、なんだか変な空気になる。ギャルの子はなんだか知ったような態度で、どこか呪い
めいた重みを込めて、言った。
「作詞くらい誰でもできるとか思ってるタイプのさ。笑っちゃうよな」
「……何？　あんた、さっきから」
ギャルの言葉に、私はいよいよ腹が立ってきた。何こいつ。なんかバンドとかやってる子
なの？　いや、っていうか一体なんなの？　何様のつもり？
「あなた、作詞やったことあるの？　私はこれでも作詞についてかなり詳しい方なんだけど」
明らかに怒気をはらんだ私の声。私にしては珍しいくらい攻撃的な態度だった。……けど、
ギャルはそんな私を見ても一切物怖じせず、ズイと接近してくる。うっかり萎縮してしまい
そうな気持ちをなんとか保つ私。そしてギャルは、おでこがくっつくくらいの距離で、低く
言った。
「……お前みたいなやつのことくらい全部わかるんだよバァーカ。アタシはな、お前みたい
な作詞をなめてるやつが一番嫌いなんだ。わかったらこのくだらねぇノートと一緒に消え

ろ。目障りなんだよ」

「………」

黙って睨み合う私とギャル。その喧嘩の様子を見守るおとなしい生徒だけの図書室の静寂。そして、まるでラウンド終了を告げるゴングのように、チャイムが鳴った。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「尚子、私にもう一度チャンスを頂戴」

「え……それって、歌詞のこと？」

5・6時間目の授業を終えた放課後、軽音部の部室に向かう尚子をつかまえた私はそう切り出した。

「もちろん歌詞のことよ。もう一度書いてもいい？」

「えっと……いいの？」

「ぜひやらせて。何がなんでも絶対に良い歌詞を書くから」

「ゆっぴ……不採用だったのやっぱり怒ってる？　ご、ごめん……もう一回みんなを説得……」

「いや、いやいや、そういうことじゃないの尚子。どっちにしろあの歌詞はボツよ。あんな

CamScannerでスキャン

歌詞じゃ全然ダメだわ。ちょっとね、絶対に許せないことがあって、作詞をやり切るって決めたの。私の個人的な事情だから、そこは気にしないで。むしろありがとう。あの歌詞が採用されてたら私は一生目が覚めなかったかもしれないわ」

「そ、そうなんだ……？」

「テキトーになんて書いてない。それを証明しなきゃいけないの。ぜひやらせてほしいわ」

「わ、わかった、わかったからゆっぴ、なんか恐いよ……？」

「おっと、ごめんなさい。もし迷惑だったらいいんだけど……ダメ？」

「いや、そこまでの迫力で言うなら、そりゃ、うん、時間はまだあるし、2週間後の文化祭までに間に合えばそれでいいんだけど。……っていっても、待ててもあと1週間くらいなんだけど、それでもいいならもう一回頼んでみようかな……？」

「ありがとう尚子！　今度こそ、尚子もバンドメンバーも認めるような素敵な歌詞を書いてみせるわ」

「な、なんか迫力あるなぁゆっぴ……そんなに気負わなくていいと思うよ？」

「そうだ。それと……ねぇ尚子、軽音部に、銀髪のギャルっていたりする？」

「え？　銀髪のギャル？　いないけど？　その子がどうかしたの？」

「そう……ううん、なんでもないわ」

……あいつが一体何者だったのかは結局わからない。けど、もしこのまま作詞を途中で投げ出してしまったら、あいつの言ったことが半分くらい事実になってしまう感じがする。そんなの絶対認めないわ。私は本気で作詞をやってるのよ。何もしてないあんたみたいな、ただ人を笑うだけのギャルとは全然違うんだから。

「1週間待っていて尚子。本物の歌詞ってやつを見せてあげるわ」

そんな、料理漫画のキメ台詞みたいなことをかっこよく言った私は、尚子のバンドへの作詞に再挑戦することになった。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

帰り道、校門を出てすぐにインスピレーションが湧いてきた私は、そのまま学校前の喫茶店「バードランド」に入って歌詞のアイデアを考えることにした。

「……ふぅ。やはり作詞は喫茶店に限るわね……」

こげ茶色を基調とした、落ち着いた店内の雰囲気。図書室もいいけど、喫茶店もまた私の憩いのスペースだった。適度な温度、適度な人の流れ、適度な話し声、あらゆるものが適度

CamScannerでスキャン

な喫茶店。ここに溜まってるエネルギーみたいなものは、私の創作意欲を刺激してやまない。
　どうやらここは個人経営なのかしら？　学校の前にあるからいつも気になってはいたんだけど、なんだかすごく大人チックね。たしかこういうのを純喫茶っていうんだったかしら？
　やっぱり喫茶店は個人経営に限るわね。チェーン店なんてお子様の行くところよ。ほら、周りのお客さんもすごく大人って感じで素敵。……うふふ、今まさに私は〝違いのわかる女〟といったところかしら？　ダバダーの歌がしっくりくる物憂げな表情でコーヒーを一口、なんてね♪
　あっ！　キタわ……っ！

トゥインクル　トゥインクル
お星様の歌が窓際のお姫様を
舞踏会に誘う放課後
王子様は大慌て
嫌なことは全部忘れて
魔女に渡してしまいましょう
ほら素敵な夜が始まる

白馬の馬のたてがみは星座の模様
遅刻した王子様を運んでくるの
トゥインクル　トゥインクル
世界中の涙を星屑に変えて
月のうさぎとダンスを踊りましょう

「……ふふ」

渾身(こんしん)の一作ができてしまったわ。今日の嫌な出来事もすべてなかったことになるくらいのクリティカルヒットな詩ね。んふっ。タイトルはどうしようかしら。やっぱりここは『お星様の舞踏会』かしらね？　キマった。完璧にキマったわ。どうしましょ、これヤバくない？

「……ココロノート　No.71『お星様の舞踏会』……っと」

こうやって詩を書くのが私の趣味。これをすることで私はなんていうか、ストレス発散？とはちょっと違うんだけど、頭の中がすっと整頓されるみたいな感じがあったりする。いろんな嫌な気持ちも、こんな風に詩にしたらどうってことないものに思えるっていうか。……しかし良い仕上がりね。どうしようかしら。これSNSとかで投稿したらすごいことになっ

ちゃうんじゃない？　ああでも、逆にそれはやめた方がいいわね。良い詩を自慢げに投稿するなんてダサいわ。これは、私のココロノートの中だけにあるからこそ良いのよ。うん。
……おっと。作詞のこと考えるために喫茶店に入ったんだったわ。いけないいけない。つい良いフィーリングが来たからとっさに詩を書いてしまったわ。……さてと。作詞ね……。尚子とバンドの人たちをギャフンと言わせる歌詞を書くにはどうすればいいか……。
　そもそも、良い歌詞ってなんなのかしら。やっぱりこう、表現が良いっていうのは大事よね。なんかこう、比喩表現（ひゆひょうげん）とかいろいろ使ってる感じの。メッセージ性があるのも大事だわ。社会風刺っていうか、ビシッと言ってやったり。私はそういうの得意な気がするし、それは強みになりそうな気がするわ。それでいて、やっぱり人の心を救う歌詞じゃなきゃダメね。うん。自分だけ気持ち良くなるために書く歌詞なんて単なる自己満足だわ。リスナーに夢を与えたり、希望を与える歌詞じゃなきゃ。
　頭に巡る歌詞のアイデアをメモしていきながら、コーヒーをもう一口。心地良い充実感を覚えつつ、私はホッと深呼吸する。はぁ。今日の私はいろいろあったけど、うん。まだまだ頑張れるわ。私は負けない。あの銀髪に赤メッシュのチビッ子ギャルに何を言われても、次はビシッと言い返して――。

銀髪に赤メッシュの、ギャル……。え？
この素敵な喫茶店に似つかわしくない銀髪に赤メッシュの学生が、私の視界に入ってきた。印象的な厚底スニーカーに、かわいげをまったく持ってない猫みたいな鋭い目。……え、何？　幻覚でも見てるの？　なんであの不良娘がこんな場所に……？
「……なんだ、てめぇ昼間の勘違い作詞ガールじゃねぇか。アタシの店で何やってんだ」
「⁉」
アタシの店？　何言ってんのこいつ……？
「は、話しかけないでくれる？　あなたとはもう二度と関わりたくないの」
「本当のことを言われたらムカつくのも当然か。はは。そりゃあ悪かったな」
「あんたホントになんなの⁉　もう許さないわよ！　喧嘩売ってるなら買ってやろうじゃない！　大体あんたに作詞の何がわかるのよ。何を偉そうに――」
「ほらよ、これがアタシだ」
「え？」
ギャルは、喫茶店に飾ってあるCDをひとつ乱暴に掴むと、私のテーブルに投げた。そこには、今流行ってる月９ドラマ『ＴＡＬＫ ＢＡＣＫ』の主題歌ＣＤ……。

「これの作詞をしたのがアタシだよ」
「は？　そんなわけないでしょ。アホなの？」
「チッ……」
面倒くさそうに舌打ちをしたギャルは、学校カバンからゴソゴソと何かを取り出す。そして、1枚のカードらしきものを机に荒々しく叩きつけた。
「見ろ」
「これは……名刺？」
「そのCDの歌詞カードのクレジットを見てみろ。作詞家んとこにSiE（シイ）って書いてあんだろ。アタシがそのSiEだ。作詞家だよ。わかったらそのクソ生意気な口に残りのコーヒーをぶち込んでとっとと帰れ」
「……は？　え？」
歌詞カードの名前と、今ギャルが出した名刺の両方を見比べる。そこに記されている名前は、間違いない、作詞家SiEその人のものだった。
「……あんたが、プロの作詞家？」
「そうだよ」
「『TALK BACK』の主題歌って……え？　今ネットでもメチャクチャ話題になってるあの曲の……？」

「そうだっつってんだろ」
「ちょ、は？　そんなまさか……」
そのドラマは、今世間を賑わせている話題作だった。そうそう、主題歌が神曲なんだけど、エピソードの終わりの引きのところに良いタイミングで入ってくるのよね。あの演出は最高だわ。……って、あれの歌詞を書いてるのがこのギャルなの⁉
「アタシの名前は伊佐坂詩文。作詞家としてのペンネームはS‐i‐Eだ」
「そ、そう……」
「〝作詞のことなんかわからない〟、と思うか？」
「……いや、えっと」
まさか、そんなことってあるの？　あのドラマの歌詞を書いてたのが女子高生で、しかもうちの高校の生徒で、さらによりによってこいつなの⁉　そんなことってありえるの⁉
「ハァ……まぁ、いいや。これも何かの縁ってやつだよな。何はともあれ作詞に興味があるらしいやつが、アタシの学校にいたってんだから」
気だるくブツブツ言いながら、私の座っているテーブルの向かい側にドッカと座る伊佐坂詩文。その座り方はまるで男子みたいで、ガサツを体中で表現してるみたいな様子だった。
「ちょ……え？　あの……」
どう対応すればいいのかわからない。ど、どうしよう……。

「お前、名前は？」
「え？」
「名前だよ。アタシが名乗ったんだからお前も名乗れよ」
「ああ、え、ええっと……江戸川悠よ」
「ふうん」
聞いといて興味なさそうにするのなんなの？　っていうか何よこの状況。
「……ぁ……謝りなさいよ」
「ああ？　何をだよ。わけわかんねぇな」
「ゎ……私が適当に作詞してるって、言ったでしょ昼間。あれから私ずっと考えてるけど、適当になんて書いてない。あんたが何者でも、プ、プロでも、そんなの関係ないんだから。だから、謝って！」
伊佐坂は、ギロリと私を睨む。プロって聞いたのもあってか、なんだかこいつのヤバさは見た目だけじゃないような気がしてしまう。
「…………考えてみりゃあ、まだお前が何かくだらねぇことをしたわけでもないもんなぁ……」
「……え？」
ふいに伊佐坂は、どこか明後日の方向を見つめながら、うんざりしたような声で呟く。

CamScannerでスキャン

「……お前に限った話でもなくてな、作詞ってのは、なめられてんだよ。素人が趣味でやる分にはまだいいとして、プロの世界ですらな」

「なめられてる……？」

「正直に言えよ。なめてんだろ、お前も」

「そ、そんなことはないわ。作詞の難しさは、私はよくわかってるもの」

「だったら聞くがな、作詞と作曲、どっちの方が難しいと思う？」

「……それは、えっと」

作詞と作曲、どちらが難しいか。そのふたつで言ったら、やっぱり……いや、そんなことはないわ。作詞も難しいもの。両方難しい。

「〝両方難しい〟とかわかったようなこと言うんじゃねぇぞ嘘に決まってんだから。今お前は、〝作詞の方が簡単だと思った〟。そうだろ？」

「そんなこと思ってないわ。何を根拠にそんなこと言うのよ」

「ハハー。だって作詞は、文字だもんな。文字なら扱えそうな気がするよな。センスでやれそうっていうかさ。メロディを作るよりはよっぽど簡単そうだ。そりゃそうだよな、だって日本人なら誰でも、読み書きくらいできるもんな」

「…………」

「正直に白状しろよ。別に責めてるわけじゃねぇんだ。みんなそうだよ。特に、素人のお前

がその気持ちで入ってくるのはフツーのことだ」
「……まぁ、作曲よりは手に負えなくはないっていうところも、少しはあるかもしれないわね」
「おお、ちょっとは正直なんだな。うん。それでいい。要するにな、作詞ってのはカメラみたいなもんなんだよ」
「カメラ？　なんで急にカメラ？」
「絵を描くのは難しいだろ。でも、カメラはシャッターひとつで撮れる。どっちの方が難しいと思う？」
「そりゃ……えっと……いや、どっちも難しいわ」
「だから、そういうのはいいんだって。ちゃんと答えろよ」
「……カメラの方ができそう……ね」
「そう。そうだ。カメラの方が〝できそう〟だよな。絵なんてとてもじゃねぇけど手に負えねぇよ。その点、カメラも、作詞も、センスでどうにかできそうな気がする。それを証拠に、写真投稿のSNSは今日も今日とて大好評だもんな」
「……まぁ、言ってる意味はちょっとわかるわ」
いや、ちょっとじゃない。それは言わない約束っていうか、痛いところを突かれたような気がする。……いや、違うわ、私は作詞をなめてなんかいない。カメラもなめてなんかいない。

作詞は難しいものだと思う。……けど、そうね、"できそう"だとは思った。これについては、ギクッとするほどハッキリその通りだわ。……でも、頑張ればできそうじゃない？　いや、簡単だとは思わない。くどいようだけど本当に。作詞は難しいわ。けど、頑張ればなんとか……。
「……今までいろんな作曲家と仕事してきたけどな、みんな愚痴るんだよ。クソみたいな作詞家をあてがわれたときの話をな。『こんな曲になるはずじゃなかった』って、そりゃあもう寂しそうに言うんだぜ。作曲家がとりあえずつけた仮歌詞の段階では良い曲になるって全員が思ってたのに、本チャンの歌詞がついたら急に台無し。よくある話なんだよ、これは」
「……へぇ」
プロの世界の話……よね？　そんなことってあるの？
「お前に突っかかったのは悪かったよ。まだお前がそのクズどもみたいな"ワルさ"をしたわけでもなかったのにな。けど、お前みたいなノリで作詞をやって、なんか勘違いして作詞家を目指して、内容なんて何もないのに世渡りがうまいだけでなんだかんだでプロになって、作曲家の作ったメロディの可能性をことごとく台無しにするっていう"いつもの流れ"が、アタシには堪え難いんだよ。あいつらはアタシの天敵だ。見つけ次第ぶっ殺してやりたいと常々思ってる。つまりお前はそのクズども——"テキトー作詞家"の予備軍だ。少なくとも、アタシから見りゃあな。わかるんだよ、そういうのは」

「……考え方が過激ね」

とんでもない決めつけで凄まじい八つ当たりを受けていた。こいつ頭おかしいわ絶対。私とその作詞家の人たちに一体何の関係があるっていうのよ。こんなひどい言いがかり聞いたこともないわ。

「あんたってなんていうか、被害妄想？　思い込み？　激しすぎるんじゃない？　あんたみたいに根拠もなく決めつけて人をバカにするやつの方が、どうかしてると私は思うわ」

「だから、それについては悪かったって。まだ決定してないお前の未来を先読みして罪を責めてもしかたないもんな。〝まだ〟お前は何も悪いことはしていない」

……いちいちカンにさわる言い方ね。

「あんたはたしかに作詞のプロかもしれないけどね、こんな風に人を見下して上から目線で語る人が良い作詞家だなんて私は全然思わないわ」

そのひと言に、伊佐坂詩文はギロリと目を鋭くして毒々しく言う。

「作詞をなめ、作家を騙り、音楽を踏みにじるクズどもを敵視して、何がおかしいんだ」

「……っ……だから、なめてなんて……」

「好きなものを踏みにじられたら、怒るのが当然だろうが。それでも平然としていられるやつのことを器が大きいとか言うやつもいるがな、それは違う。そんなもん、ただ単に好きなものがないってだけだ。アタシは、音楽と作詞が死ぬほど好きなんだよ。だからこそ、不真

面目な連中に適当なことをされるのが、我慢ならねぇんだ。その怒りの意味くらい、わかるだろ？」

「……まぁ……そういう話なら、ええ。わかるわ。私もその点に関してはあんたと同じ意見よ」

なるほど……あんな絡まれ方をする意味がわからなかったけど、こいつはこいつで何か思うところがあるのね。……でもそれ、私には関係ない話じゃない。とんでもない魔女裁判だわ。

「だろ。……おーい叔母さん、イチゴミルク。ホットで」

店員さんを呼び止めた伊佐坂は……て、え？　おばさん？

「おばさんってあんた、親戚かなんかなの？」

「ああ。言っただろ。ここはアタシの叔母さんの店だ。学校帰りによく暇つぶしに来てる」

「……へぇ」

カウンター越しにいる詩文のおばさんらしき人は、ハイハーイと言って注文を受けていた。どうやら本当に親戚なのね……。しかしイチゴミルクのホットだなんて、見た目に似合わず意外とかわいいものを注文するのね。

「……あんたの事情はわかったわ。でも、伊佐坂……さん。だったら私は――」

「詩文でいーよ」
「そう。じゃあ詩文、あんたの個人的な事情や思うところがあるっていうのはわかったけど、それは私には関係のない話だわ」
「そーだな」
……まったくそうだなんて思ってない乾いた返事。相変わらず、詩文は私がそういう適当な作詞をする人の予備軍だと思ってるらしい。
「……いいわ、じゃあ百歩譲って、もし本当に私がその〝テキトー作詞家〟の予備軍だったとするじゃない？　だったら私はどうすればいいの？　……自分がその予備軍だなんて全然思ってないけど、でも、作詞って初心者からすれば何をすればいいのか全然わからないのよ……」
「ふーん」
「……あんたの言うそのテキトー作詞家だって、みんな、そんな作詞家になりたくてなったわけじゃないでしょたぶん。良い歌詞書きたいって思ってやってるわよきっと。それに、良い歌詞とかテキトーな歌詞とか、一体何を根拠に言ってるのよ。そんなのあんたの主観でしょ？」
「だったら作曲をまずやれよ」
「え……」

作曲を……？

「どいつもこいつもハッキリ言わねぇんだ。こんなに大事なことをさ。作詞ができるようになるには、作曲の意味がわからなきゃ話になんねぇんだよ。当たり前のことだろ」

「そうなの？　いや、でも、作曲と作詞は別のスキルでしょ？」

「……まぁ、説明するならそこからだよな」

テーブルに届けられたイチゴミルクを一口飲みながら、詩文は続ける。

「なんで作曲が必要なんだと思う？」

「いや、それは、できるに越したことはないと思うけど……でも作詞と作曲は別でしょ」

「別だな」

「だったら、どうして……」

「だから、それを聞いてんだ。なんで必要なんだと思う。あるいは、必要じゃないと思うならなんで必要じゃないと思うんだ」

「それは……」

いや、だからそれは今言った通りじゃない。できるに越したことはないって、そりゃそうでしょ。それ以上どう説明しろっていうのよ。

CamScannerでスキャン

「どうした、早く答えろよ」
「作曲はたしかに大事だと思うわ。けど、向き不向きっていうものがあるでしょ。世の中に作曲をまったくやってない作詞家なんて大勢いるじゃない。だったらあんたは、その作詞家全員がダメな作詞家だって言うの？」
「そうだ」
「…………」
詩文は、ためらいもなくそう言い切った。その断言には、単なる返事以上の強い意志を感じる。
「……なんか、あんたってやっぱりおかしいわ。あんた、自分の信じる正義以外は全部間違ってると思ってるんじゃない？」
「ほお。だったらなにか？　お前は作詞に作曲の理解は必要ないと、つまりそう思うわけだな？」
「……だから、いちいち極端なのよあんた。言ったでしょ？『できるに越したことはない』って」
少しの沈黙と、そのあと、呆れ返ったような溜め息を吐きながら、詩文は言う。
「……そうやってなんでもかんでも曖昧にして、大事なことをうやむやにするのはお前らのいつものやり方だよな。手に負えねぇよ本当」
「……っ……いい加減にしなさいよ！　私をバカで適当なヤツみたいに言うのやめなさい！

この自己中なうぬぼれ屋の勘違い作詞家！」
「…………」
「…………？」
あれ、何も言い返してこないの……？
「……お前さ、作詞できるようになりたいのか？」
「もちろんよ。だから頑張ってるんじゃない」
「だったら、教えてやろうか」
「え……？」
詩文は、水を打ったように静かな面持ちで、淡々と言う。その言葉には激しさがない分、なんだか不気味だった。でも、何を言い出してるのこいつ？　こいつが私に？　作詞を教える？
「……いいえ、あんたなんかから作詞を習うなんてごめんだわ」
「いやいや、悪かったよ。アタシはどうやら勘違いをしていた。うん、お前はあのクズどもとはどうやら違う。アタシの目も曇ったもんだ。お前は真面目に作詞に取り組んでいる初心者だ。そういうことなら話は別だよ。どうだ、アタシから作詞を習ってみないか？」
「…………えっと」
何、なんか気持ち悪いんだけど。なんで急にこんなテンションになってるのこいつ……？

「いや、え？」

「作詞のテクニックは明確にあるんだぜ？　ひとりでもできなくはないだろうがやみくもに勉強するのと教わるのとじゃスキルアップの速度が断然違う。お前が真面目な作詞初心者だっていうことはわかった。だとしたらアタシは、あんたにはむしろ敬意を払うよ」

「…………」

え、どうしよう、なんなのこの流れ。今詩文の心の中でどういう心境変化があったらこういう話になるの？　でも……作詞のテクニック、具体的な話、教えてもらえるの……？　それはちょっとありがたいけど、でも……こいつだし。こいつから習うの？　それってどうなの……？

「や、やっぱりいいわ。あんたから作詞を習うなんて……」

「そうか。だったらいい」

「…………」

しばし沈黙が流れる。詩文は残りのイチゴミルクを飲み干すと、席を立った。

「アタシは大体ここにいる。もし作詞を習いたくなったらまたここに来い」

そう言い残して立ち去る詩文。残された私は、なんだか言いようのない変な気分のやり場もなく、ただポカーンと座っていた。

CamScannerでスキャン

第2話

作詞とはどういう技術なのかという話

「むむむ……これは……」

「どうだったの尚子？」

11月上旬、2学期の中間テスト。採点された答案用紙が返ってくるその時間は、いつものことながらちょっとしたスペクタクル。ちなみに私の英語の点数は72点だった。……あ、私のことを賢いとか、または逆にバカだとか思ったかもしれないけど、それはまだわからないわ。肝心なのは平均点だしね。

そして、明らかに嫌な汗をかきながら答案を見つめる尚子。一体どれくらい悪かったのかしら……？

「ゆっぴぃ〜……」

涙目の尚子の答案用紙には、40点と書いてあった。おお……これはなかなか……。

「……た、大変そうね尚子」

配り終わったところで先生が平均点を発表する。平均は75点。私は、ちょっと平均を下回ってしまった。それと同時にちょうど授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。すると、尚子が飛びかかってきた。

「どうして!?　おかしいよこんなの！　ちゃんと全部の解答欄埋めたのに！」

「採点ミスがあったりとか……？」

CamScannerでスキャン

「そ、それは……ない気がするけど……」
ギャグみたいな半泣き顔でコメディ全開な尚子の答案用紙を見てみると、そこに書いてあったのはなんだか変な解答だった。
「……尚子、この問7の解答だけど、『very cool . very cool』って、何?」
「え？　覚えてないけど……どんな問題だっけそれ」
そして、問題用紙の方を見てみる。するとそこには、外国人留学生のトムがケンジから空手を習うっていうイラスト付きの問題で、ケンジの空手トークにトムが返事をしてるシーンだった。ちなみにこの問題は『下の中の語句を組み合わせて文章を完成させなさい』っていうタイプの問題で、意味的には『わかりました。空手で大事なのは競争より礼儀なのですね』になるように文章を作る問題だった。
「そしてvery coolね……。あんたちゃんと問題読んだの？　veryもcoolも語句にないじゃない」
「だって、絵的にこのトムすごい感動してるし、絶対こう言ってると思ったんだもん……」
「いや、たしかに絵的にはこのトム感動しすぎだけど……」
「あーこれも正解にしてくれないかなぁ～。△でもいいんだけどなぁ～。いっぱい埋めたし良い点だと思ったのに……」
「空欄を埋めればいいってもんじゃないでしょ」

「うーむ……。勉強は苦手だー……」

なんというズッコケぶりかしら。さすがは我がクラス随一の天然の名をほしいままにしている尚子。ギター以外は何もできないと豪語するだけのことはあるわね。っていうか、今のは間違うにしてもひどい間違い方じゃない？　せめて語句を適当に並べるとか、そういう間違い方ならまだわかるけど、語句にない言葉を書くとは……天然少女の頭の中は謎だわ。

隣の席で頭を抱えてギャグ顔をしている尚子を横目にしつつ、テストの感想戦もほどほどに私はスマホをいじる。検索エンジンに入れたキーワードは『作詞家　S・i・E』。そう、昨日私の前に現れたあのわけのわからないギャルの素性について、調べていた。

ネットで見つかるプロフィールに年齢は書いてなくて、情報は少なめだった。でも、その手がける楽曲のうち10曲以上が私の知ってる（というか好きでよく聴いてる）曲だった。まさかあの夢と希望と優しさが詰まった歌詞を、あんな人格破綻者が書いていたなんて信じられないわ。作品と作者の人格は一致しないとかよく言うけど、これがまさにそのパターンなのね……。

（……フォロワー数、2万人超え……？）

検索して発見した、作詞家S・i・EのSNSアカウント。そのフォロワー数は2万人を越

える、超大物だった。そりゃそうか、あのドラマの主題歌の歌詞とかやってる人だもんね……。

つくづく、そのチグハグさに驚く。あのチンチクリンの銀髪赤メッシュの超過激派の外道が、この作詞家S・i・Eだなんて……。

「ん？　ゆっぴ何見てるの？　あ！　S・i・Eだ。ゆっぴもS・i・E好きなの？　良い歌詞書くよね〜！」

「へ？　え、あ、そ、そうね」

テストの点数にヘコみ飽きたのかもう回復したのか（早い）、尚子はのほほんと私のスマホを覗(のぞ)き込んでそんなことを言う。

「『TALK BACK』の歌詞も良いけど、ほかのもすごく良いんだよ！　知ってる？」

「ええ。私もS・i・Eの曲は結構聴いてるわ。なかなか良いわね」

「だよね〜！　なんかこう、わかってるなぁって感じの歌詞だよね！　愛が深いっていうか」

「愛なんてないわよ。あんなやつ」

「え？」

「……あ」

「ゆっぴ、S・i・Eと知り合いなの？　まさかね……？」

「いや、あ、え、えーっと……そ、ソウネ。し、知り合いのような、ようじゃないような

……」
「え……？　え⁉　え、ちょっと、マジで⁉　すごいね！　え⁉　どうやって知り合ったの⁉　なんで⁉　どういうきっかけ⁉」
「いや、それは、えーっと……」
どうしよう、どう説明したらいいかしら。うちの学校にいる伊佐坂詩文って子がそのＳ・ｉ・Ｅで、そいつはとんでもない人格破綻者のメチャクチャなやつで、なんかそいつに絡まれた……っていうのが実際だけど、でも尚子もＳ・ｉ・Ｅのこと好きみたいだし、だったら夢を壊すようなことは言わない方が……。
「も……もしかしてゆっぴ、Ｓ・ｉ・Ｅから作詞習ってる……とか？　そういうこと⁉」
「エッ……⁉」
そんなバカなことあるわけないじゃない。まったく、何をバカな……。
「…………」
「バ…………」
「ば？」
「バレてしまっては仕方ないわね！　実は、私はＳ・ｉ・Ｅの弟子なの。うふふ、クラスのみんなには内緒よ？」

「わぁ〜やっぱりそうなんだ！　すごい！　ヤバいヤバい！　ねぇねぇ、ＳｉＥって何者なの？　どんな人⁉」

「そ、そうねぇ、思ってたよりずっと若い人で、なかなか厳しい人だけど、うん！　まぁ、実力は確かよ」

「もしかしてあれ？　天才肌って感じの？」

「まぁそうね。ふふ。結構メチャクチャよあの人。歌詞の中では良い人だけど」

「わぁ――、なんかそういうのってリアルだねぇ！」

私は何を口走っているのか……。いや、いやいや、別にあいつに媚びてるとかじゃなくて。普通に考えてそんなのしないでしょ？　だってあいつよ？　たしかに、良い歌詞いっぱい書いてるしフォロワー数も２万とかだけど、それとこれとは話は別っていうか……。

「そっかぁ、もう一回歌詞書かせてほしいって言ったの、本気の本気だったんだね。なんかゆっぴ、かっこいいなぁ。私もそんな風に思い立ったら即行動！　即実行！　って感じでやらなきゃなぁ」

………。

「……まぁ、私はそうでもないと思ってたんだけど、どうやら自分で思っていた以上に筋が

良かったみたいなのよね。先生は私のこと『類い稀な才能だ』みたいなことを言っていたけど、うふふ、それは大げさよね。うっかり真に受けないようにしなくちゃ」
「うわぁ～！　大絶賛だね！　やっぱり、ゆっぴってそういうセンスありそうだったもんね！　ゆっぴの歌詞、バンドのみんなには気に入ってもらえなかったけど、やっぱり良い歌詞だったんだね～！」
「ふふ、そうでもないわよ♪」
待って、今のはなんていうか、こう、夢のある嘘っていうか……わかるでしょ？　いやいや、見栄を張ってるわけじゃないのよ断じて。話の流れでこう言った方が自然だったっていうか、なんていうか……ど、どうしよう……。引っ込みつかなくなってきちゃった……。
「ゆっぴのそういうところ、見習わなきゃなぁ」
「ふぇ!?　そういうところ!?」
「その行動力、すごいよ。人生は行動だねぇ。……っていうか、どうやってSiEに弟子入りしたの？　誰か知り合いがいたとか？」
「そ、それはえーっと……」
まずいわね、思った以上の食いつきだわ。尚子め、なんて積極性のあるギタリストなのかしら。向上心ありすぎよ。……でも、本当のことを言ったら、「なーんだ自分で行動したわ

けじゃないのか」ってせっかく尚子の中で急上昇してる私の株が下がってしまうわ。ここはあくまで、詳細は言わずに上手にぼんやりと……いや、嘘をつくとかじゃなくてね？

「く、詳しいことは……守秘義務！　守秘義務だから言えないんだけどいろいろあったの！まぁそんな感じよ。だから楽しみにしててね。この前の歌詞、リテイクして持っていくから」

「守秘義務……リテイク……？　って、うわぁ〜！　なんかプロ感すごいね〜！」

「そう？　うふふ」

〝リテイク〟って一度使ってみたい言葉だったのよね。詳しい意味は知らないんだけど、使い方合ってるのかしら？　ま、まぁ尚子も知らないだろうし大丈夫よね！

ふぅ……しかし、人から尊敬されるってなんて素敵な気分なのかしら。うふふ。でもでも、実は私ってまだまともに歌詞書けないのよね。それについてはなんていうか、アレよ。嘘から出た誠っていうか、できるようになっちゃえばこっちのもんだし、大丈夫大丈夫。ノープロブレムだわ。順番がちょっと前後しちゃうだけのことよ。

――午前中の授業をほとんど聞き流すように受けながら、私は考える。

さて、困ったことになったわ。やんごとなき事情で、私は尚子の中でＳｉＥの弟子という

ことになってしまった。いや、別に自分を大きく見せようとかそういうつもりじゃないのよ？　もともと、『S・i・Eの弟子になって作詞のテクニックを学ぶのもいいかな』って思ってたところもあるし、うん、もうそれはほとんど決定だったの。それに、それにね？　詩文だって私に作詞習わないかって、そもそも詩文の方から言ってきてたし、そう、そうよ！　あのときすぐに返事はしなかったけど、私の中ではほとんど習うって決まってたのよね。ただ、やっぱりすぐ決めるのはあれだからと思って一晩寝かせたっていうか、そういう、ね。そういうのよ。

考えてみれば、これはありえないくらい恵まれた状況かもしれない。ほかでもないあの有名な作詞家S・i・Eが、どういうわけか私に作詞を教えると言っている。尚子のバンドの歌詞を仕上げるのが私の今の最優先ミッションなわけで、それを実現する上であのぶっとび作詞家の持っているテクニックはきっと有効だわ。ひとりで悶々とやるより教わった方が断然賢い。そうね。あいつの人格が終わってるのについてはこの際、寛大な心で受け止めてあげることにしましょう。私ってば、これでなかなか器が大きいじゃない♪

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「……よぉ、お前か。まさか本当に来るとは思ってなかった。ちょっと意外だよ。どういう風の吹き回しだ？」

放課後の喫茶店バードランド。昨日言った通り、詩文は同じテーブルの同じ席にいた。

「まぁね。作詞を本気でやりたいっていうのは本当だもの。実力のある作詞家のあんたが教えてくれるっていうなら、それは願ってもない話だわ」

「へぇー。昨日とはずいぶん態度が違うんだな」

「一晩考えて冷静になったのよ。あんたは私とは比べものにならないくらい作詞について詳しいわ。そんな力量差もわからないほどバカじゃないもの」

「はは。そんなに急にしおらしくされると、調子狂っちまうな。威勢のいいお前の方が張り合いがあっておもしろいぜ」

そんなことを言ってカラカラと笑う詩文。相変わらず山賊かってくらい行儀の悪い座り方をしていて、立膝と短いスカートの組み合わせじゃパンツが見えそうになっている。

「……座り方、なんとかしなさいよそれ」

「ああ？　それ作詞となんか関係あんのか？」

「ないけど……行儀悪いでしょ」

「アタシはこれがラクなんだよ」

「……あっそ」

一応注意してみたけど、やっぱりこうよねこいつは。言っても無駄なんだった。我慢我慢。

「はい詩文ちゃん、ミルク」

「は？　イチゴミルクっつったじゃん叔母さん！　なんだよこれ⁉」

テーブルに運ばれてきたグラス一杯の冷たいミルク。おっとりした様子の女性店員さんは、どうやら詩文のおばさんらしい。優しげな目尻は詩文とは対照的で、話を聞いてなかったら親戚だとはまず思わない人だった。

「ごめんね、今日イチゴ切らしちゃって。大丈夫よ、詩文ちゃんなら飲めるわきっと♪」

「……チッ……もういいよこれで」

穏やかでおっとりした詩文のおばさんは、私の方をチラッと見てニッコリと目配せをして、また厨房の方に戻っていく。

「オェ。まっず……」

「え、あんた牛乳嫌いなの？」

「別に」

「いや、イチゴミルクは好きなのに牛乳は嫌いなのね……？」

「………」

　詩文は、まるで部屋の隅にいる動くものに気づいた猫みたいな顔で、不思議そうにじっくり私を見る、というか覗き込む。
「妙なところ見てるんだなお前」
「ええ、昨日飲んでたでしょ？　見た目が過激なのにイチゴミルク好きなんだって思って」
「イチゴミルクも好きじゃねぇよ。牛乳よりはマシってだけだ」
「マシ？」
「アタシは大きくなりたいんだよ。牛乳はまずいからイチゴ混ぜて飲んでんだ。悪いかよ」
「……あ～」
　このぶっちぎれの過激派ギャルは、背が小さい。たぶん１５０センチもない。でもそれを誤魔化（ごまか）すように、厚さ20センチの厚底スニーカーを履いている。そういえば、こいつって言うことがいちいち迫力があるから実際の身長より大きく感じるみたいなとこあるけど、はたから見るぶんには結構ちっちゃくてかわいい少年ぽい感じなのよね。
「背低いの、コンプレックスなの？」
「うるせぇぞ」
「へぇー！　あんたにしてはかわいい悩みじゃない♪」
「おい」
　詩文は、私の楽しげな雰囲気を圧するように、ドシリとした声で言う。

CamScannerでスキャン

「二度と店員のことを言うな。次言ったらぶっ飛ばすからな」
「……え、ええ」
刃物を向けられてるわけでもないのに、その言葉はまるで刃物のように私をのけぞらせる迫力があった。それを誤魔化すように、私は店員さんを呼び止めてコーヒーを頼む……。
「と、ところで――あんたってS・i・Eなのよね。それってうちの生徒は知ってるの？」
「知らねーよ。だって言ってねぇもん」
「なんで言わないの？　言ったら大ニュースなのに」
「言わねーよ。何がおもしろいんだそんなの」
「いや、おもしろいっていうか……みんなビックリすると思うわよ？　だって、今流行ってるドラマの主題歌の歌詞書いてる人が学校にいるなんて」
「へぇ。すげぇどうでもいいなぁそれ」
「……そう？」
　詩史のこの感じ、どう言ったらいいのかしら。……やっぱり、普通の人とは少し違う。私だったらそりゃあもう、嫌味にならない程度にうんと人に言っちゃうと思うんだけど……。
「私、作詞家なんて普段あんまり名前見てなかったけど、S・i・E……あんたが作詞してる曲を調べてみたら10曲くらい好きなのがあったわ」
「へぇ。どれが好きなんだ？」

パッと声色を明るくする詩文。なんか、ようやく笑顔を見た気がするわ。こういう話は喜ぶんだ……？

「ドラマの主題歌になってたやつが今一番気に入ってるけど、映画の主題歌になってたやつ、《シャム猫とピアノマン》だっけ。あれなんか素晴らしかったわ」

「ああ。あれか。あれはお気に入りのバラードだ」

「ほかには、これはアニメの曲だけど《１００万粒の涙のあとに》とかも好きね。アイドル声優のマリリンが歌ってる《カルボナーラ食べたい》も泣ける良い曲だったわ」

「わっはっはっは！　そうだろうそうだろう！　もっと褒めていいぞ！　実に気分が良い！」

「……作詞者さえ人格者なら、あとは完璧だったのにね」

「ん？　人格も完璧だし非の打ち所がないだろ。何を言ってるんだ」

「……はぁ……」

実際惜しい。この反社会的な風貌に、たまに手がつけられないくらい荒い気性。優しさなんかカケラも持ち合わせてないこの過激さと衝動の塊みたいな野蛮ささえなければ、実力も知名度も申し分なしのすごい人なのに、すごく惜しい。

「あんたがあの《シャム猫とピアノマン》の作詞家なんてねぇ……」

「えらく不満そうな顔をするじゃないか。一体どうしたんだ悠。このアタシに相談してみろ

よ。アタシはあんたのマブダチだろ？」
「……いつからそんなことになったのよ。あんたは私の先生で、私はあんたの弟子でしょ。作詞の」
「ああ、そうだったな。クックック……」
変な含み笑いをする詩文。何よ、嫌な感じ。何か企んでるの？
「はぁ……なんか、ガッカリだわ」
「ガッカリ？　何がだ？　自分にか？」
「あんたがＳｉＥだってことにガッカリしてんのよ。あの曲好きだったのに……台無しだわ」
私の非難と落胆(らくたん)交じりの言葉を聞いた詩文は、不思議そうに言う。
「……妙なことを言うもんだなぁおい。なんだ？　正体がアタシだったらＳｉＥの歌詞はその瞬間からクソになるのか？　おいおい、変なことを言うじゃねぇか。その歌詞に感動したのはまぎれもなくお前だし、その歌詞は昨日とまったく同じく、一文字だって変わっちゃいないんだぜ？」
「変わるわよバカ。何言ってんのよ……」
わかったようなこと言ってんじゃないわよ。ホントにムカつく。
「なるほどぉ……ってーことは、アタシが仮に、お前の思ってた通りの人物だったとしたら、アタシの歌詞も昨日のままの良い歌詞に見えたりする……ってことでいいのか？」

「……そうね、そういうことになるわ」
「それじゃあお前、変だと思わねぇのか？」
「変って、何がよ？」
「真面目に考えてみろよ。本当に、変だと思わないのか？」

私は、じっくり考えてみる。たしかに、どんな人が書いたとかで歌詞の良し悪しが変わるのは、よくよく考えたら変な話かもしれないわ。……けど、そこには感情ってもんがあるじゃない。どんな素晴らしい歌詞だったとしても、それがたとえば犯罪者が書いたものなら、やっぱりNGだわ。うん、印象ってものがあるもの。
「……あなたの言ってることも、たしかに一理はあるわね。けど、人には人情ってものがあるでしょ？」
「なるほどなぁ……ふふ、じゃあ良いものを見せてやろうか悠」
少しニヤッとした詩文は、カバンの中からペンケースを取り出して、その中から1本のボロい鉛筆をつまみあげる。
「これだ。丁寧に扱えよ」
「あんた今どき鉛筆なんて使ってるのね。何？　普通に使い古しのボロい鉛筆だけど」
「これはアタシの宝物でね。実はこれ、オークションで5万円もしたんだ」

CamScannerでスキャン

「はぁ!?」

5万円の鉛筆なんて、この世にあるの!?

「何それ、ありえないでしょ。なんでそんなの買ったのよ……っ」

「ふふ、これはな、『漫画の神様・手塚治虫が、鉄腕アトムを描くときに使ってた鉛筆』だ」

「え……っ、ええ!? マジで!? なんでそんなの持ってるの!? ちょっと見して!?」

手塚治虫って、あの手塚治虫よね!? 漫画史において伝説といわれ、そして晩年は神様とも呼ばれた、もはや歴史上の偉人じゃない! そんな人の鉛筆を、なんでヘタレ女子高生が持ってるの……!?

「い……意外と普通の鉛筆なのね……て、っていうか! なんでそんな大事なものを普通に裸でペンケースに入れてるのよ!? バカじゃないの!? 丁寧に扱えはこっちのセリフよ! ちゃんと特製の桐箱を作って、湿度計のついた保管庫に入れておかなきゃダメじゃない! 劣化したらどうするの!? まさかだけど、これ使ったりしてないでしょうね!?」

「ぎーッハッハッハッハ! なーに言ってんだ! 嘘に決まってんだろぉ!」

「えッ!?」

私は、自分が何をされたのかがわかって、ボッと顔が赤くなる。

「だ……騙したわね!」

「ギャハハハ、ネッタネタだ! いやあ笑った笑った。あー……今のがすべてだよ。この鉛筆

は言うまでもなく、ただの鉛筆だ。それ以上でも以下でもない。ふふ、けどおかしなもんだよな、この鉛筆が手塚治虫のもんって肩書きが入るだけで、急に価値があるように見えたりする。これが『相対価値』ってやつだ」

「え？　ソウタイカチ？」

「『相対価値』。つまり、それ自体に価値があるわけじゃないが、それにまつわるエピソードや肩書き、周りの評判で付加価値がつくという、そういう〝印象の心理〟だ。これの逆に、それそのものに価値があるということを『絶対価値』という」

「……ふ、ふうん」

な、何の話を始めたのコイツ……？

「今は意味がわからないかもしれねぇけどな、もし本当に作詞をするつもりなら、今の話はよく覚えておけよ悠。これはもしかしたら、創作におけるもっとも根本的で、もっとも大事なことかもしれないんだぜ」

「……え、ええ……」

さらさらと、なんでもないよくある世間話をするような感じで言葉を続ける詩文。でもその内容は……普通の女子高生の域を軽々と越えていることのような気がした。

＊～＊～＊～＊～＊～＊

「ところで詩文、改めてちゃんと言うわ。私に作詞を教えてほしいの」
「おう。丁寧だな。ここにまた来た時点でそういうことだとは思ったが、律儀なやつだねぇ」
「習うからには最低限の礼儀を持つのが私のポリシーよ」
「ふぅん。しかし、作詞のテクニック、ねぇ。じゃあ、どこからやろうかな」
「おまかせするわ」
　詩文はミルクをグイッと飲むと、苦いものでも飲んだみたいな顔を一瞬して、また静かに虚空を見る。そして、こう言った。
「作詞って、何をすることを言うんだと思う？」
「え？」
　その質問は、なんだかえらく漠然としたものだった。
「何をすることって……そりゃ、曲に歌詞をつけること……でしょ？」
「物理的にはそうだな。じゃあ、役目としては一体どういうことなんだ？　作詞っていうポジションは、楽曲においてどの部分を担当してるんだ？」
「どの部分を担当してる……って、えっと、あんまり意味がわからないんだけど……？　それはそのまま、歌詞の部分を担当してるじゃない？」
「違うよ。そういう話じゃない。作詞、作曲、編曲、歌唱。一番最小限のこの役割分担の中

CamScannerでスキャン

で、それぞれはそれぞれに、〝何をしてる〟んだ？」

……質問の意味がよくわからない。どうしよう、どう答えたらいいんだろうこれ……。

「……レッスンの最初のテーマはこの部分だ。作詞とは楽曲にとってどういうポジションを扱うことなのか。作詞がなぜ特殊技術で、なぜテキトーなセンスとやらじゃ絶対にできないことなのか。これをまずは知ってもらわなきゃな」

「え、ええ。それは私も知っておきたいことだわ」

「ヒントを出そう。作曲は『言いたいことや伝えたい情景を作る』〝主体性そのもの〟だ。編曲は『作曲の言いたいことをさらに盛り立てる』演出家。演奏家や歌手は、そうやって作り上げられた言いたいことや情景を『聴衆に語り伝える』語り部だ。さて、じゃあ作詞っていうのは、なんだ？」

……作曲と編曲と、演奏と歌唱。そもそもそれぞれを普通にそのままの意味としてしか考えてなかった私は（っていうか、編曲ってそういうことなのね）、今の言葉を受けてそもそもその概念自体にちょっと面食らう。作曲は主体性で、編曲は演出で、演奏と歌唱は語り部……なるほど、言われてみればそういうことなのかも……。でも、そんなにハッキリ分かれてるものなの？　音楽ってなんかこう、もっとアバウトっていうか、ひとかたまりで１曲って感じのイメージだったんだけど……。

「わかるか？　作詞が一体何をする役割なのか」

CamScannerでスキャン

「……う～ん」

今の話を踏まえると、メロディに歌詞をつけるとかそういう話ではなさそう。もっとこう、さっきの3つに並ぶようなビシッとくるものがある気がするんだけど……でも、作詞はメロディに歌詞をつけることでしょ？　それ以上どう説明すればいいのよ。

「作詞とは一体どういう技術なのか。それはな……」

頭を抱えて長考に入った私をしばらく待ったあと、詩文は言う。

「――『音楽語の日本語吹き替え』だ」

「え？　……音楽語？　……の日本語吹き替え？」

「おっと、ちょっと説明を端折りすぎたか。音楽語……の意味がわからなかった感じだな？」

「い、いや、言わんとすることは、なんとなくだけどわかるわ」

音楽語……音楽語……。そうね、音楽は国境を越える言語って言うものね。……そういう話？

「じゃあまずこれを覚えておけ。歌詞のない音楽……つまりインストゥルメンタル・ミュージックというのは『音楽語――文字を使わないでも意味が通じる言語』で綴られている音の物語だ。作曲家は常にこの『音楽語』という言語を扱って心情や風景を描写する。ミュージ

シャンのセッションなんかはまさに〝音楽語による会話〟と言っていいだろう。壮大なオーケストラについては、作曲家の示した物語を大勢が〝音楽語で〟演じ、語り上げている」

「……ふ、ふ〜ん……」

何その新しすぎる概念……でも、なんだかすごくそれっぽいわ……。

「クラシックやジャズとかいったインスト曲ってのは言ってみればサイレント映画というか、言葉のない物語なんだよ。ＢＧＭひとつでたしかに心の流れは存在するし、言葉なんかなくても成立する」

「なるほど。インスト音楽はサイレント映画っていうのは、たしかになんとなくわかる感じがするわね」

「さて、そこに登場したのが歌詞という文化だ。これが一体なんなのかというとな、もともとは音楽家同士だけで語り合う音楽語という文字の存在しない会話のやりとりを、誰にでも伝わる形にするための手段。それが歌詞だ。これによって、メロディの語る物語性を音楽家以外の人もハッキリと理解することができる。『音楽語の日本語吹き替え』って言ったのは、つまりそういうことだよ。別に日本語に限る必要はないが、要は一般言語に置き換えるっていう翻訳技術だ。

「そうね……」

音楽語の日本語吹き替え……なるほど、そう言われれば作詞の印象って変わるわね……。

「しかしな、この前提をわかってないで作詞をしているやつは大勢いる。するとどうなるか、わかるよな？　そのサイレント映画の物語をなんとなく雰囲気で追いながら、たぶんこの登場人物はこう喋ってるんだろうくらいの雑な理解で、実際に喋っていることとは全然違うトンチンカンなことを当てはめて『良い歌詞ができた』とか言っちゃうことになるのさ。……でも始末の悪いことに、音楽語の〝正しい解答〟を知っているのはその曲を作った作曲家だけだし、しかもその作曲家は音楽語を日本語翻訳するのが苦手ときている。だから作曲家すら〝なんかこの歌詞違うな～〟くらいのことしか言えないんだよ。そして、そういうものがそのまま世に出たりする。しょっちゅうある話さ。趣味どころか、プロの世界ですらね」
「あんたが昨日怒ってた話ね。言わんとすることは、ちょっとわかるわ」
「作詞なんててんでわからないアイドルちゃんに作詞をさせるプロデューサーなんてのもいてな。冗談じゃねぇ。なんだそのアホみたいな日本語吹き替えは。やらされてるアイドルちゃんが可哀想だ。まぁ、もし本人もまんざらじゃないなら、本当にどうしようもねぇけどな」

……なるほど、なるほど。これは、頭の中で曖昧だった作詞っていうものがなんだかものすごくハッキリする話だわ。そうか……作曲の日本語吹き替え……。

「ねぇ詩文、でもそれだったら、逆にこういうこともあるんじゃない？　そのアイドルちゃ

んが書いたトンチンカンな歌詞でも、なんとなく映画の内容と合ってるっぽかったり、逆に全然合ってなくても、なんかそれはそれでおもしろいみたいな雰囲気になる場合もあるというか……」

「…………」

詩文は一瞬鋭く眉を寄せ、明らかに殺意を込めた目で私をジロリと睨みつける。でもそれはほんの一瞬で、まるで誤魔化すように明るくこう続けた。

「ああ御名答。そういうことだってまぁ、あるかもしれねぇな。ただ、まともに考えてみろよ。たとえば然、なんらかの経緯でどういうわけかお前に外国映画の日本語吹き替えが頼まれたとしよう。海外で大ヒットしてる素晴らしい内容の映画だ。お前はその映画の持つ主義主張、比喩、暗喩、普遍的な人間愛のそのすべてを汲み取って、しかも日本語として日本人に伝わるかたちに翻訳しなきゃいけない。……どうだ、できそうだと思うか？」

「……まぁ、絶対無理ね。何もわかってない翻訳者が翻訳すると、どんなに素晴らしい映画もチャチな三流映画になってしまうと思うわ」

「まったくだ。伊達や酔狂でやるっていうのがもともとのコンセプトだったら、たとえばアイドルちゃんがめちゃくちゃな翻訳をするのもたしかにアリだろう。しかし真面目にやるなら、その曲――映画がちゃんとした内容で作られている限り、その表情やセリフを的確に読み取って吹き替えする大事さは、誰にだってよくわかるだろう。これが最低限心得るべき

CamScannerでスキャン

〝作詞技術の基本中の基本〟であり、なぜ作詞がセンスなんかじゃできないものなのかという根拠だ」

「なんとなくわかってきたわ。じゃあたとえば、作詞も作曲も両方やるシンガーソングライターっていう人たちは、つまり自分で映画を作って日本語吹き替えも自分でやってる人たち……っていうこと？」

「まさにそうだ。だからこそほとんどのシンガーソングライターは、作詞だけ依頼されても即座に対応できる。作曲の意味をわかっている――つまり音楽語をネイティブに話すことができるバイリンガルな人たちってことだからな」

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

詩文は追加で頼んだチーズケーキを食べながら、話を続ける。私はモンブランを食べつつ。

「つつーわけだよ。合点いったか？」

「……ええ。ちょっとわかったわ。たしかに、そう聞いたら作詞はセンスや直感なんかでできるものじゃなさそうね……」

「あたりめぇだ。しかし文字さえ埋めりゃ一応それで完成ってことになっちまうから、作詞ってのはなめられるんだよ。合ってるか間違ってるかはさておいて解答欄を埋めさえすれば合

格点、みたいなことになっちまう。ふざけた話だろ？　どう考えても。文字が埋まってりゃ良いってもんじゃねぇ。そんなのは誰でもわかるのに、実際その程度の認識のやつが腐るほどいる」

「……ええ。そうね」

その話は、私にとってはタイムリーな話だった。ちょうど同じセリフを、私自身も今日尚子に言ったばかり。いよいよ、詩文の言うテキトー作詞家予備軍に私は該当してしまいそうね……。

「……なんだぁしょぼくれて。昨日の勢いはどうしたんだ。たしか言ってたよな、アタシに向かって『これでも私は作詞について詳しい』とかなんとか」

「……それは……その……悪かったわよ。あんたの方が詳しいわ」

……っていうか、あんたプロなんでしょ。だったら素人をいじめないでよ。あんたの方が強いに決まってるじゃない……。

「まぁ、ここからだよ悠。よかったじゃねぇか早い段階で気付けて。たくさんの曲をテキトーな歌詞で台無しにせず済んだのかもしれないぜ？」

「……それもそうね」

「うし。今日はこのへんにしとくか。アタシは帰るわ。じゃあな」

「え……あ、うん」

終わった終わった、とでも言うような、なんだか愛想のない声色。バタバタとカバンを持って席を立った詩文は、財布からお金を出してテーブルに置く。
「詩文、忙しいの？」
「ん？　んー、ああ、おう。忙しいな。これでもアタシは学生作詞家だからな。いろいろ予定があるんだよ。明日からは具体的なテクニックの話を教えるよ」
「そう。うん。じゃあ、また明日」
去り際、そうだ、と呟いた詩文は思い出したようにカバンの中を探ると、私にある物を渡す。
「……この鉛筆はお前にやるよ。『相対価値の鉛筆』だ。これはお前にピッタリだからな」
私の手に鉛筆を握らせた詩文は、小さな体を翻（ひるがえ）してそのまま喫茶店を後にする。カランと、小気味のいいカウベルの音が響いた。
言葉の意味を、私は何度か頭の中で咀嚼（そしゃく）する。けどその言葉の意味は、私にはまだよくわからなかった。

第3話

歌詞のフォーマットの話

CamScannerでスキャン

「ねぇ尚子、伊佐坂詩文って知ってる？」
「え？　伊佐坂詩文……？」
翌日の教室。私は、尚子に聞いてみた。

こんなに目立つ生徒なのに、私はこの伊佐坂詩文っていう生徒に心当たりがない。ある日図書室に現れて、私の人生を全力で引っ掻き回してるこの謎の人物。気になった私は、そもそもこの伊佐坂詩文が何組の生徒なのか、素性（すじょう）についてを調べようとした。……けど、不思議なことに、クラスの数人に聞いても誰も知らないみたい。ということで、登校してきた尚子にも同じことを聞いてみている。
「伊佐坂詩文って、伊佐坂先輩のこと？」
「え？　いやいや、3年じゃなくて………」
……？　!?
「……ねぇ尚子、3年に、伊佐坂っていう先輩いるの？」
「うん。いるよ。たしか下の名前は詩文だったんじゃないかな？　もう引退しちゃったけど、うちの軽音部の先輩たちと仲良くて、たまに部室に遊びに来たりしてたよ」
「そうなんだ……」
「おもしろい人だよねー♪　でもなんでゆっぴが、あんなヤバい人のこと知ってるの？

ゆっぴとはまるで接点がないタイプの人だと思うんだけど」
「え。まぁ、えっと……はは、ちょっと気になっただけというか……え、ちょっと待って尚子、しふ……伊佐坂先輩って、なんかヤバいの？」
「ヤバいなんてもんじゃないよ。3年の間じゃあの人のこと知らない生徒はひとりもいないって。3年でうちの高校に転校してきた人らしいから1年や2年はあんまり知らないかもしれないけど、これは先輩から聞いた話なんだけどね――」

それは、今から4ヵ月前の7月、初夏のことだったらしい。ある日、私たちの通うこの高校の3年2組に転校してきた生徒、伊佐坂詩文。彼女の見た目は最初からあの状態で、もう見るからに問題児バリバリだったけど、基本的にはただ退屈そうに過ごしてるダウナーなだけの生徒だとクラスメイトは思ったらしい。

でも2週間が過ぎたとき、その事件は起きた。3年2組では、どうやらある生徒が無視されたり机にいたずらをされたりする……まぁ要するに、イジメがあったらしい。主犯がハッキリしてるわけでもないけど、でも確実に存在するグループ規模の陰湿な空気。それにはみんな気づいているけど、でも声を上げて「イジメはよくない」なんて言ったら今度は自分が

ターゲットにされるかもしれないし、結局ほとんどの人は見て見ぬ振りをしたりっていう、そういう暗黙の了解。……詩文は教室の隅でそのイジメを見ながら、ひたすら退屈そうにしていたらしい。しかしある瞬間、のっそりと教室を出ていくと――。

廊下側から、凄まじい轟音を上げつつ教室のドアを蹴破って、割れるドアガラスを踏みしめながら消化器を教室中に撒き散らした。そしてさらに、渾身の力で目の前にある机のひとつを黒板に叩きつけると、こう啖呵を切ったらしい。

――『イジメなんてくだらねぇことを、アタシのガッコーでやるんじゃねぇ！　次そんなことをしやがったらアタシがひとり残らず全員ぶっ殺してやるからな！　被害者も加害者も傍観者も全員だ！　わかったな⁉』

そう叫んだあと詩文は、カラになった消火器を黒板に叩きつけて教室を去った。割れたドアガラスと壊れた机と、ヒビの入った黒板と、消火薬剤まみれのクラスメイトたち。破壊と轟音のあとの無音に残されたクラスメイトは全員、ただただ唖然とするのみだったらしい。

もちろん詩文は1週間の自宅謹慎になったけど、謹慎のあとこのイカレた転校生が登校するようになると、クラスでは露骨なイジメは二度と起こらなくなったらしい。やり方の是非

はともかく、実際イジメは沈静化して、それを機に詩文は学年でその名を知らないぶっちぎりに頭のおかしい生徒という存在となった。

――尚子から聞いた話は、ざっとそんな内容だった。そしてそれは、とても心当たりのある私の知ってる伊佐坂詩文が持っている気の触れた〝やりすぎ〟という性質をあまりにも確信に変えてしまうものだった。尚子は笑いながら、さすがに尾ヒレ腹ヒレのついた噂だろうけど、とかって笑ってたけど、たぶんこの話に一切の尾ヒレはついていない。あいつならきっとそれくらいやりそうだと思う。

伊佐坂詩文が一体何者なのかについて、ちょっと調べるつもりが、思った以上に知ってしまった。破天荒(はてんこう)なんてもんじゃない、あいつは、ちょっと壊れてる。異端(いたん)とかそういうレベルじゃない。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

そして放課後、今日も今日とて学校前の喫茶店『バードランド』に向かう私。……けど、なんだか変な気持ち。今朝聞いたエピソードが頭にこびりついて、詩文っていう人物との関

わりをどうすればいいのかちょっとわからなくなっている。あいつ、本当の本当にヤバいやつなんじゃないかしら。

　そんなあやふやな気持ちのまま、ひとまずバードランドに赴く私。いつものドアベルが小気味よく鳴り、そして店の奥のいつもの席に目をやると、どうやら詩文はまだ来ていないようだった。ホッとするような気持ちで、私は席に着き、ココアを注文する。

　しかしまぁ、知らなかったら知らなかったで別に何も思わなかったはずのエピソードではある。そうね、変に態度を変えるのもおかしな話だわ。もしあいつが正真正銘犯罪者レベルのヤバいやつなら、その時は大急ぎで逃げればいい。しかし、考えれば考えるほど意味不明だわ。そんなあいつが、作詞家をやってるなんて。私のイメージでは、作詞家ってもっと大人しい詩人みたいな人ばっかりだと思ってたのに……。

~~*~*~*~*~*

「………来ないじゃないの」

　お店に来てかれこれ50分。午後4時半。私が来るのが早すぎたのかとも思ったけど、授業が終わってゆっくり来ても4時過ぎには来られるでしょ？　……何かあったのかしら……？

「……そうだ」

CamScannerでスキャン

私は、お財布に入っている１枚の紙を取り出す。それは、詩文から貰ったＳ・ｉＥの名刺。その中にある電話番号を携帯に打ち込んで、発信。８回のコールを聴いた。

「……つながら……あっ」

『もしもしー』

「もしもし？」

『……待たせたね、おはよう。美しい朝だな。ところであんた誰だ？』

「……おはようって……夕方よ。あんた、今どこにいるのよ」

『ん？　そのキュートな声はもしかしてアタシのマブダチの江戸川悠ちゃんじゃねぇか？』

「そうよ。このキュートな声は江戸川悠ちゃんよ。ずっと待ってるんだけど、何してるの？」

『待ってる？　何を？』

「あんたをよ！　喫茶店で！　作詞のテクニック、教えてくれるんじゃなかったの……？」

『あーっ！　そうだったそうだった、そういえばそうだっけねぇ。すまんすまん』

「……別にいいけど……じゃあ、今日はもう帰るわよ？」

『いやいや、悪かったって。じゃあ今からでも何かしようか。アタシんとこ来てくれよ』

「だから、あんた今どこにいるのよ」

『ガッコーの屋上。今日は天気が良かったからなぁ。ついつい５時間も寝てしまった』

「え？　学校の屋上……にいるの？」

学校の屋上って……生徒が入れる場所だったかしら？　っていうか5時間って、授業はどうしたのよ授業は。

『おー。そこにいるよ。好きなタイミングで来てくれ。もうしばらくはここにいるからさ』

「わかったわ」

電話を切ったあと、私はお会計を済ませると学校に戻る。そして校舎に入り、屋上に向かう。……けど学校の屋上って、自由に出入りできるような場所じゃないわよねやっぱり。そのはずだけど……私の勘違いだったのかしら？

階段を登って登って、屋上に続く階段も登る。普通は閉ざされているはずのその扉は、なぜか開いていた。

「……わぁ……」

漫画やアニメじゃ普通に出入りできるみたいに描かれてることが多いけど、実際はほとんどの学校で特別な理由がない限り立ち入ることのできないエリア、屋上。屋上に出たことのなかった私は、その景色に思わず声が出る。よく見知った街並み。別にこれといって自慢するようなものがあるわけじゃないけど、でも、自分の住んでいる街を見晴らしのいい場所から見るのは、やっぱりなかなか壮観だった。秋風がほんの少しだけ寒いけど、詩文の言った通り今日は天気が良いからか、ほどよくポカポカとあたたかい。なるほど、たしかにこれはお昼寝でもしたくなってしまうわね……。

CamScannerでスキャン

「良い眺めだろ」

景色に見とれている私に、詩文が後ろから話しかけた。振り返ったその視線の先、屋上の景色を逆光に背負いつつそよ風にスカートをなびかせる詩文は、今朝の噂を聞いたあとっていうのもあってか、なんだかよりいっそう迫力を帯びているように思えた。

「……私、屋上って初めて。入れるようになってたって知らなかったわ」

「ここはアタシのお気に入りだ。お前でいうところの、あの図書室みたいなもんかもね。落ち着くんだ」

「わかるわ」

「こっち側はフェンスも低くて景色が良いぜ」

「危なくない？」

「大丈夫大丈夫」

楽しげに、屋上をウロウロと散歩する私たち。なるほど、これは良い場所だわ。今度はお弁当を持ってこようかしら。

「ところで詩文……あんたってもしかして、３年生なの？」

「そうだけど？」

「………」

どうしよう、今さら敬語使うの、なんかすごい抵抗あるわ。……でも相手は3年生だし

……。

「なんだ、同級生だと思ってたのか」

「い、今さらだけど敬語とか、使った方が、いいデスカ……詩文先輩……？」

私は、なんだか頬の筋肉がひきつりそうになりながら聞いてみる。すると、詩文はあっけらかんと答えた。

「いや、そんなのどうでもいいだろ？」

「どうでもよくはないわよ。あんたみたいなやつとはいえ一応先輩と後輩だし……」

「……敬語っていうのは、相手を敬ってる場合に使う言葉だ。お前が心の中でアタシを敬ってない限りは、タメ口でいい。それが正常だ。敬うものは自分で決めろ」

「……そ、そうね……ええ。もちろんそのつもりよ。敬語なんか使わないんだから、そっちもそのつもりでいてよね」

「おう！　それでいいと思うぞ」

詩文は、ことのほか上機嫌にそう答えた。たぶん、詩文の中で敬語っていうのは、むしろ嫌いなものに部類するらしい。なんとなく、そんな気がした。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「なぁ、いつまで待たせるんだよ。日が暮れちまうぜ」
「いや、待って詩文。落ち着いて。でもやっぱりこれは……」
作詞のテクニックを教わる上で、まずは現状の私を確認する必要があると詩文は言った。でもそれはつまり、詩文と初めて会ったときに読まれたあの歌詞をもう一度見せるということでもある。となると……私はまた詩文からとんでもない罵詈雑言を食らわせられることになるんじゃないかと思って、なんだか歌詞を見せられない……。
「何を籠城戦しているんだ。知ってるよあのときの歌詞だろ？　いいから見せろって」
「……だ、だって」
尚子たちにボツにされて、詩文にもケチョンケチョンに言われたこの歌詞。もはやこの歌詞は、自分で読み返すのも恥ずかしい。っていうか捨てたい。今すぐ破り捨てたい。これはボツなんだから、今さら掘り返さなくてもいいでしょ……？
「アタシが飽きるぞ。いいのか？　あーもう飽きそう。5・4・3……」
「……わかったわよ！　見せればいいんでしょ!?　……あんたってホント嫌なやつよね」
「親身に相談に乗ってるってのにその言い草はずいぶんだねぇ。ああ、こんな感じの歌詞だったよな。はい、あと音源も」
「音源？」

私は、いよいよ観念してこの前の歌詞を詩文に渡す。……音源？　って何？
「ああ、音源ってのはあれだ、『曲』のことだよ。ＣＤかｍｐ３か、なんらかの形で曲もらってるんだろ？　そういう曲データ自体のことを、音源って言ったりするんだ」
「へぇ。音源っていうんだ。それだったら、今スマホに入ってるわ」
「よし、じゃあその音源と歌詞、両方みて問題点をこのドクター詩文が診察してしんぜよう」
そして私は、スマホに接続したイヤホンを詩文に渡し、尚子から受け取っていた曲の再生ボタンを押す。

「……へぇ、思ったより本格的なんだな。２年生軽音部か。やるねぇ。……曲調は、まぁいかにもなガールズバンドだけど、ポジティブさとフレッシュさがあっていいね。リフはシンプルだけどパワーがある。構成もドンズバのＡＢＣ構成か。うん、いいね。ちょっと切ない感じがＢメロやサビにあるのも、等身大の高校生って感じで王道だな。スピード感もあるし、文化祭でやったら客ウケも良さそうだ。なんだ、良い曲じゃないか」
「ええ。私もちょっとビックリしたわ。うちの軽音部、なんか妙にクオリティ高いのよね」
「ところで……なぁ悠、この歌詞は、どういう感じにハマるんだ？」
「え、ああ、そ、それなんだけど……」
「かなり集中して目で追ってはみたけど、ほぼどこもわからなかったぞ？」

「いや、あの……」
「そうだ、ちょっと歌ってみてくれよ」
「だからそれは……難しくて……字数はハマってないのよ……」
「へ？」
「だから……む、難しかったから！　とりあえず字数は無視して書いたのっ！　悪い!?」
「いや、悪いっつーか、それじゃダメだろ……？」
「う……」
言われてみればあまりにもごもっともな指摘。そうよね。文字数合ってないって、論外よね……。
「なるほどねぇ、これはあのギターちゃんも苦笑いするわけだ」
「……そ、そう？　ちなみに、字数以外にはどこを直せば……」
「どこって、手に負えねぇよ。オペは中止だ。診断結果で言うならすでに死んでいる。もし直すなら全部だよ。こんな歌詞で作詞したつもりになってるなら本気でどうしようもない」
「………そうね」
「歌い心地や音楽語の読み取り・吹き替え以前に、そもそもハマってない字数、内容も意味不明というか、パクリを切って貼ってただうすらボンヤリしてるだけで特に主義も主張もない」

「そ、それは……聴く人によって受け取り方が違うというか……」
「適当に並べただけの言葉で誰が感動するんだ。お前はそんなのに感動したことがあるのか？　受け取り方が違うってのは、歌側にまずひとつ明確な答えがあって、それを聴く人それぞれが勝手に解釈してるってことだよ。ランダムに並べた言葉なんて、単なる鳴き声みたいなもんだろう。あと、〝光〟が多すぎるな。全部で4回も出てきてる。どんだけ光ってんだ。しかしド頭に『伝えたいことがある』って歌詞があるけど、何が伝えたいんだよ。さっぱりわからん。ギターちゃんのご指摘通り最後のとこも意味がわからないし。あと――」
「――そん……」
「ん？　どうした？」
「……そ、そんな風に言わなくてもいいじゃない……。一生懸命書いたのに……」
「あ～……。う～ん。……な、泣くなよぉ悠～っ！　生きてりゃそのうち良いことあるさ！」
「泣いてないわよバカ！　泣きそうになっただけよ！　だから嫌だったのよ…………もう……ひどさについてこれ以上追求しないでよ……私のライフはとっくにゼロよ……これじゃダメだって、そんなのわかってるんだから……」
「まぁ、わかってるならいいか。これをどうにかするための作詞レッスンだもんな」
本当に、容赦（ようしゃ）ないわコイツ。ありえない。人の子じゃないわ。鬼よ。こいつは鬼だわ。何

今の？　ひどさをわかっててわざわざ傷口に塩を塗りたくるなんて、優しさのある人間のやることじゃないわ。女子高生の皮を被った悪魔よ。特に「光が多すぎる」とかホントにキツいわ。よく見ればたしかにいっぱい出てきてるけど、具体的に指摘しないでよ、恥ずかしさで死にそう……。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「思った以上にひどいな」

「うん……」

屋上の隅っこでどんよりと三角座りをする私と、屋上フェンスに腕を乗せつつたそがれながらグラウンドを見つめる詩文。思っていた以上に深刻だった病状に唖然とする医者と患者みたいなふたりがそこにいた。

「つい昨日は結構高度なことを喋ったが、どうやらお前に必要なのはもっともっと初歩的な部分らしい」

「うん……」

「内容もだが、読みにくさも同じくらい気になるな」

「え？　読みにくい？」

内容についてはまぁさておいて、読みにくいっていうのはどうなのかしら？　それは……そうでもないと思うんだけど……？

「読みにくいよ。……まぁ、良い状態を知らねぇお前にはそれすらわからねぇんだろうが」

「でも、これが私には一番書きやすいやり方なんだけど……？」

「作詞家の作品は歌詞カードではなく、歌詞だ。歌詞の書き方で一番気にするべき点は『ちゃんと伝わるかどうか』なんだよ。〝この書き方が自分らしい〟とか言いたくなる気持ちもわからんではないが、だったらそれはそれとして別のノートにでも書いとけ。人に見せる場合は、とにかく〝わかりやすく伝わる書式〟が大事だ。それさえ達成できてるならどんなフォーマットでもいい」

「……？　ええ」

歌詞の書き方？って、そんなに大きく影響するものなのかしら？　でもまぁ、ちゃんとしたスタイルみたいなのがあるならそれは身につけておきたい話ね。いかにもプロって感じだわ！

「ちなみに悠は、どういうものを使って作詞してるんだ？」

「もの？　さっきも見せた通り、普通にノートに書いてるけど……」

「そのようだな。実はこの時点で、選択は主にふたつに分かれる。『手書き派』か『パソコン派』か、だ。これはどちらの方が優れてるとかそういうのはない。それぞれに特徴があり、それ

それの良さがあるし苦手なこともある。違いを書くならざっとこんな感じだ」

○手書き派
・改行などの制約がない分、自由なメモ書きがどんどんできる。ラクガキもできる。
・手書きで書く、という行為自体で発生するモチベーション。
・ギターや鍵盤などを鳴らしながら書くシンガーソングライター向き。
・ただし、データで渡すときにはどっちにしろパソコンに打ち込む必要がある。

○パソコン派
・改行などの制約はあるが、その分キチッとしていて見た目がさっぱりしている。
・タイピングする、という行為で発生するモチベーション。
・届いた音源をＰＣ上で再生操作しながらの作詞なので便利。
・ただし、タイピングに慣れていない人には不自由に感じる。

「ちなみにアタシはパソコン派だ。持ち運びに便利な薄くて軽いのを使ってる」

「私はじゃあ……手書き派ってことになるのかしら。私もパソコンでやってみようとはしたんだけど、パソコンで直打ちするのって、なんか直感的じゃないというか……別のところに頭使う感じがして苦手なのよね」
「まぁ、それはツールに対する慣れの話だろうな。あとはシンガーソングライターとかはそもそもギターを持ちながらメモを取っていく感じで作詞することも多いから、手書き派が多くなるってのもあるだろう。アタシみたいな作詞特化型ならパソコンメインってこともある。パソコンはパソコンで、いろんな情報を検索するのに便利だったりするしな。……さてと、それはそうと、お前の歌詞をちょっと、改めて整頓しよう」
「え……あの歌詞まだ使うの……？」
「せっかくだしな。良い状態の歌詞体裁と悪い状態の歌詞体裁、これを見比べれば一目瞭然だ」
そう言いながら、詩文はスマホのメモ帳アプリを開いて素早く歌詞を打ち込んでいく。
……？　それだけじゃないわね。何かほかにもいろいろ書き足してる……？
「これが一般的な歌詞のフォーマットの一例、アタシ型だ。どうだ？　グッと見やすくなっただろ？」
「おおおお！　なんかすごくそれっぽいわ！」
「初心者的には、そもそもどういうフォーマットで書けばいいのかって時点で不明だから

歌詞のフォーマット例

歌詞書式について一番気にすべきことは「誰にとっても読みやすいものであること」だ。書式をやたら特殊にしたりするやつもたまにいるが、そんなところで奇抜ぶったり作家性を主張しても仕方ない。歌詞の内容で個性的なものを作ってこそだからな。

AFTER

ざ☆ぐっどたいみんぐ
文化祭用新曲＿初稿改＿日付とか

『なんか曲名』

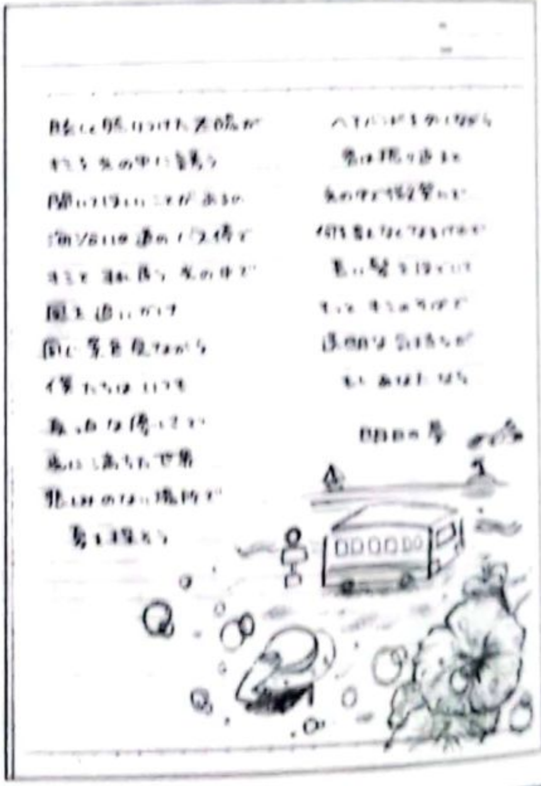
作編曲：佐々木尚子
作　詞：江戸川悠

【A】
眩しく　照りつけた
太陽がキミを　光の中に誘う
聞いてほしいことがあるの
海沿いの道の　バス停で
キミとすれ違う　光の中で

【B】
風を追いかけ
同じ景色見ながら
僕たちはいつも
真っ白な　優しさで
光に満ちた世界
悲しみのない場所で
夏を探そう

【C】
ヘアバンドを外しながら
君は振り返ると
光の中で　微笑んで
何も言えなくなるけれど
長い髪をほどいて
もっとキミのそばで
透明な気持ちが
もしあなたなら
明日の夢

BEFORE



CamScannerでスキャン

な。こんな具合に、上には必要情報を一通り、歌詞の部分についてはパート区分をしてやりつつ、読みやすさや体裁を考えて文字に隙間もつけたりする。真ん中揃えで書いてたのもあんまり良くないな。詩的ではあるけど歌詞的には小節アタマを追いにくくて不便だ。左揃えの方が見やすい」

「ねぇ、このABCって何？　何か決まりみたいなのあるの？」

「いや、このアルファベットは実は決まったルールはない。曲の雰囲気が変わるところに、パート分けとして便宜上振るものだ。一般的な流れの曲だとAメロ、Bメロ、Cサビって感じが多いな。Aメロ、Bサビとかってケースもある。しょっぱなからサビとかってときは『INTRO Cサビ』って書いたりすることもあるな。2番以降には『2A』とかって感じで、数字が追加されていく。この曲はまさにその王道ABC展開だったから、歌詞見た感じたぶんここだろってところで区切ってみた。合ってるかわかんねェけど。どうだ？　これで初見の人でも目で追いやすくなったと思わないか？　歌詞を見失ってもブロックごとに追い直せるってわけだ」

「そうね！　それになんか、この歌詞すごく良い歌詞っぽいわ！　フォーマットひとつでこんなに印象って変わるのね……。いつもノートに書いてる詩集と同じ感覚で考えたらそういう記号っぽいのがいろいろ入るのって邪道かと思ってたけど、歌詞の場合はアリなのかもしれないわね」

CamScannerでスキャン

「――悠、お前詩集なんて書いてるのか？」

「エッ⁉　…………いや、えっと……な、なんのことカシラ⁉」

「へぇ～いいじゃん！　どんなのだ？　見せてみろよ♪」

まずい、この流れはまずいわ。この鬼ヶ島出身の無慈悲（むじひ）な作詞家に私の大切な心の詩集・ココロノートが読まれたりしたら、どんな心ない言葉を食らうかわかったもんじゃない。作詞ノートであの罵詈雑言だもの。絶対断固、死んでもこいつに読ませるわけにはいかないわ！

「カイテナイ、カイテナイ。シフミ、作詞ノ　ハナシ　ヲ　シマショ？」

「なんでロボみたいになってるんだよ」

「書いてナイわ。さっきのは……あれよ、そういう友達がいるってだけ。ええ。そうよ。いい歳してポエムを書くなんて、そんなことするわけないじゃない。この私が、そんな夢見がちなイタい女子なわけないでしょ？」

「ふーん。あっそお」

……ふぅ、危ないところよ。ったく、あんたみたいに土足で人の心を踏み荒らしてさらに友達も招いてピザパーティしてしかも散らかしたまま帰っちゃうような常識知らずに、だーれが大事な詩集を読ませたりするもんですか。

「おお、これか。なになに？『ココロノート No.71 お星様の舞踏会』。なるほど」

「え？」
「ほほう、ふむふむ。ふむふむ」
「ギャアアアアアアアアアア！」
「おい、なんだ、でかい声を出すなよ」
「ア、あたあたアンタねぇ!? 返して！ 返しなさい！ 一昨日も今日もそうやって人のもの勝手に触ったり見たりするのホンッットやめなさいよ！ 盗賊!? 盗賊なの!?」
「へぇ、なんだ、良い詩も書けるんじゃないか」
「いいわようるさいわよほっといて！ 聞きたくない！ 聞きたくないわ何も言わないで！ ええそうよどうせ下手クソ……え？ 今なんて……？」
「いや、良いの書けるんだなって。言ったんだけど？」
「え？ え……？」

まさか、え？ いやいや。いやいやいやいや。そんなまさか。
「……は、ははーん。さては、一度上げといて私が調子に乗ったところで『なわけねーだろ』とか言って大爆笑するってハラね？ ダメダメ、そんなのお見通しなんだから。その手には乗りませんよ――っ！」
「何言ってんだ悠？」

「あれ……？」

詩文の言葉に先回りで反撃しようとした私。でも、詩文のテンションは明らかに、むしろキョトンとしてるような雰囲気だった。

「……もしかして、本当に良いと思ってる……の……？」

「作品の良し悪しについて嘘をつくことは絶対にないから安心しろ。なかなか良いポエムを書くじゃないか。作詞に向いてるかどうかはまだわからねぇけど、なんらかの創作の才能はあるんじゃねぇか？」

「……ホントに!?　ホントに言ってるのそれ!?」

「お、おお。なんだ、えらい食いつきようだな？」

「う、嘘だったら許さないわよ!?」

「いや、知らねぇよ。あくまでアタシから見ての話だ。万が一お前に才能がなかった場合はアタシの読みがハズれたってだけの話だよ。……まぁ少なくともアタシから見れば、って話だ」

「……そ、そう。私、才能あるの……」

「なんだ、上がったり下がったり変なやつだな。才能があるって言葉がそんなに嬉しいのか」

「あ、当たり前でしょ。だって、そんな風に言われたこと、なかったから……」

CamScannerでスキャン

詩文が、ほかでもない作詞家のＳ・ｉＥが、私の詩集をみて才能があるって言っている。そんなことってありえるの？　からかってるならそれホントたち悪いわよマジで？　……あぁ、何この、体験したことのない気持ち……信じたいけど信じきれない……。

「……ねぇ、なんで才能があると思ったの？」

「うるせぇなぁ。なんでもかんでもアタシに聞くな。アタシが受け付けてるのは作詞に関する質問だけだよ」

「そう言わずに、ねぇ詩文先輩♪　どうして？」

「うわ、気持ち悪いなお前。肩を揉むな肩を。ん－、何をもって才能があると思ったか、ねぇ……。まぁ、言えばひと言で片付くことだけど、そんなもんお前が自分でわかれよ。解答を書き写しても問題を解いたことにはならねぇだろ」

「……う。なるほど。それもそうね。ええ！　もちろんそのつもりよ！　その答えは、私が私の手で見つけてみせるわ！　ふふ……あるとわかればこっちのもんよ！　〝ひとつなぎの大秘宝〟は実在する！　……でも、ホントなの？　私、本当に才能あるの？　ないものを探して見つからなかったら虚しさが半端じゃないんだけど」

「だーかーら！　知らねぇって言ってんだろぉ！　それはそうと悠、お前さっきみたいなポエムが書けるのになんで歌詞になるとこんなにクソなんだよ」

「え？　……う～ん……というか、私にはこの歌詞とココロノートの違いがわからないんだ

けど……ってかむしろ、歌詞の方がいつもより頑張ったし、プロっぽい感じにできたかなと思ったんだけど……」

　ここが腑に落ちない。私からしたらココロノートもこの歌詞も、大きな違いはない気がする。けど決定的に、詩文から見れば歴然なくらい、このふたつには何か大きな違いがあるらしい。

「ああ……なるほどねぇ。まあ、これについてはアタシの口から言ってどうこうって話じゃないかもな」

「どういうこと？」

「根が深いんだよこれは。でもま、ちょっとやる気が出たね。ただの暇つぶしのつもりだったが、お前に作詞を教えたくなってきたよ」

　さらっと詩文が言った言葉を、私は聞き逃さない。作詞を教えたくなってきた……って、それって、私に才能を見出したってこと……なのよね……？　ほ、ほんとに……？　ほんとなのね！

「ええ！　ど……ドンドンいきましょ！　よろしくお願いするわ詩文先輩♪」

「気持ち悪いからそれはやめろ」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

午後5時半過ぎ。今日はフォーマットの話くらいしかできなかったけど、外が暗くなってきたのでそろそろ帰ることにした私たち。屋上の扉を閉めて、階段を降りる。そのとき――。

「コラ――ッ！　またお前か伊佐坂ぁ！」
「ふぇ⁉」
「まずい！　見つかったぞ悠！　ダッシュだ！」
「えええええ⁉」

男の先生が、詩文に怒鳴る。そして詩文が一目散に走りだす！　それをワンテンポ遅れて追いかける私……え？　え？？　どういうことなの？　やっぱり屋上入っちゃダメだったんじゃない？？　何？　なんなの⁉

「伊佐坂ぁ―――っ！」
「あばよ――とっつぁん！」
「ま、待ってよ詩文～っ！」

CamScannerでスキャン

——数分後。

「ハァ……い、一体どういうことよ……？」
「あははは！　いやーまさかバレるとはなぁ！　いやいや、あーおもしろかった！」
「おもしろくないわよ！　屋上、勝手に入ってたの!?」
「そうだな！」
　校舎の外まで追いかけてきた先生を振り切るために結局駅前あたりまで走った私たちは、息を切らせながら話す。
「あんた、入って大丈夫って、言ったじゃない！」
「おいおい、そんなこと言った覚えはないぜ？」
「言っ……言ってなかったかしら……？」
　私は思い出してみる。たしかに、詩文は入って良いとか、許可があるとかそういうコメントは、ひと言も言ってなかった気がする。
「だ、だったら私を巻き込まないでよ！」

「あははは！　まぁ堅いことをいうなよ。別に誰かを傷つけたわけでもあるまいし」
「そういう問題じゃないでしょ!?　よくわかんないけど……不法侵入よ！　っていうかどうやって入ったのよ!?」
「そんなに怒るなよぉ。女の子は、笑顔が一番かわいいんだぜ♪」
「うるっさいわねぇ！　ちゃんと聞きなさい！　あんたってなんでそんなに非常識なの!?　やることなすことといちいち非常識非常識！　こんなことばっかりしてたら、いつか停学になるわよ!?」
「いっそ退学でもいいんだけどな」
「……え？」
さらっと言った詩文の言葉は、笑い声混じりではあるけど、耳にスッと刺さるひと言だった。
「いや……よくないでしょ……？」
「ガッコーやめてぇなー。……って毎日思ってるよ。だってつまんねぇんだもん」
「……学校、楽しくない？」
「楽しくねぇよ。全然。仕方ない事情で通ってるけど、ガッコーなんてアタシからしてみりゃ、明るい監獄（かんごく）みたいなもんだ」
「監獄……って……」
詩文は、作り笑顔では誤魔化せないような、微妙な苦笑いをする。どうやら、何の冗談で

もなく詩文はこう言っているらしい。監獄……学校を監獄だなんて、思ったことないけど、一体どういう意味なのかしら……。
「学校が監獄って……どういう」
「ああすまん、なんでもない。なんでもないよ」
「なんでもなくないでしょ。どういう意味なの？」
「意味なんかないよ。カッコつけてニヒルを気取ってみただけだ。それに、ガッコーを楽しいと思ってるやつだって大勢いるんだからな。今の言葉はそいつらに失礼だった。すまんな」
「……いや」
意味もわからず謝られても、どう答えればいいのよ。
「アタシ向きじゃねぇんだよガッコーみたいなところはな。ただそれだけだ」
「……まぁ、あんたって独特っていうか、一匹狼みたいな感じだものね」
「だろー。あはは。まったく。早く終わらねぇかなー。狼の群れはどこにあるのやら。こんなところにいても、仲間になんか会えるわけねぇのに」
詩文は、カバンを持つと私に背を向けて歩き始める。
「じゃあ、また明日な悠。悪いけどもう少し、アタシの暇つぶしに付き合ってくれ」
「……ええ、また明日……」

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

　家までの帰り道、私はさっきの件も含めて、詩文っていう人物について考えている。

「詩文って、どういうやつなの本当……」

　秋風がさらさらと流れる街路樹の脇を歩きながら、私はポツリと呟いてみた。やることなすことメチャクチャで、ワガママで、極端で、過激で、なんでも断言して。……でも、その話は100パーセント否定しきれるわけじゃないものもあったりして……。

「んんん〜……」

　ああ、なんとなくわかってきたわ。要するにあいつ、天才なのね。よくよく考えてみたら詩文って現役高校生で普通にプロの作詞家をやってるようなぶっちぎりの天才だったわ。でも……だったら詩文の言ってることは……正しさとかそういうものですらない……？

「……天才って、倫理観が欠如してたりするとも言うわよね」

　だからあんな風に、人がどう思ってもおかまいなし、ルールも無視で、自分が一番正しいと思ってて、アウトローで、退学になっても気にしないどころかむしろ望むところみたいな、無法者全開なことを言えたりするのかしら。でもそれって、人として何かが壊れてる。だって、あんなの、やっぱりダメでしょ。常識も社会性も協調性もゼロじゃない。ああでも……。

CamScannerでスキャン

「だからこそ、なのかしら……」

それが天才と凡人の決定的な違いなのかしら。でも、あんなのがまかり通るならそれこそメチャクチャだわ。天才とかそんな理由でなんでもしていいわけない。そうよ、あいつは……。

「あいつは一体、なんなのよ……」

CamScannerでスキャン

第4話

資料読みの話

CamScannerでスキャン

「さぁて、これを見ろ悠」
「これは……？」

いつのまにかちょっとした常連になった、喫茶バードランド。その店内のいつもの一角に座っている私は、詩文が書き出したメモを見つめている。

「ちょっと気が変わったんでな。今日からは本気で作詞を教えてみることにしたよ」
「昨日までは本気じゃなかったの……？」
「あ？　あー……はは。昨日までも本気だったよ。別の意味でな」
「……別の意味？」
「細けぇことはいいんだよアタシがその気になったっつってんだから。そんなことより見るのはこれだ。アタシにしては珍しくわざわざ段取りを考えてまとめてきたんだから。ありがたく読め」
「え……ええ」
そして私は、もう一度机の上に置かれたノートのまとめメモに目を移す。
「……なんか、あんたの字って感じね……なんで筆？」
どういうわけか、そのメモはやたらといかつい毛筆で書かれていた。いや、私たち一応女

CamScannerでスキャン

作詞、要点

作法「作詞とは」〜作詞自体についての認識あらため

「歌詞書式」〜一見して明快なフォーマットの手本

「資料読み」〜作詞材料の下ごしらえ

技術「字数」〜字数を当てこみにまつわる諸々

「語彙」〜音楽のための言葉

「母音」〜歌い心地の基本

「韻」〜リズムとイントネーション

「ナンセンス」〜意味性と無意味性

子高生なんだし。もうちょっとかわいいペンとかなんかいろいろあるでしょ。なんで毛筆？　このチョイスのセンスはなんなのかしら。まぁ、詩文っぽいといえば詩文っぽいんだけど……。

「はっ？　筆記用具なんかどうでもいいだろ？　で、だ。今お前がいるのはこのふたつ目『歌詞書き』が終わったところってわけだ」

「うん」

見てみると、内容についても妙に和風な言い回しがある。『あらため』とか。……というか、これはなんとなく感じてたことでもあるけど、詩文って妙にボキャブラリーが古風なときがあるのよね。なんなのかしらこれ？

「でも、さすがプロね。作法と技術に分けて全部で8項目？　ああ……でもなんか、たしかに大事なことはこれでひとまとまりなのね。韻ってあれよね、ラップみたいな？　あと……母音？　母音が何か関係あるの？　それと……ナンセンス……って何？　意味性と無意味性……？」

「まあまあ。慌てんなよ。これはなんつーか、お前がダラけねぇようにざっとこの先の流れを教えといてやろうっていうアタシのサービス精神でまとめたメモだ。どうだ、なんとなくだが全体像が見えた気がするだろ？」

「まあ。うん。たぶん。意味はよくわからない項目もあるけど」

「そのへんは追って話していく。今日注目するのは3つ目の項目『資料読み（ほんよみ）』についてだ」
「ほんよみ？　資料（しりょう）読みって書いてあるけど……？」
「まーこれはあれだよ、業界用語的なやつだ。なんでもかんでもホンヨミって言うんだよ」
……何それ。なんかすごい玄人（くろうと）っぽいじゃない……！　テンション上がるわね……！
「さて、この資料読みって項目。これは、何についての話だと思う？」
「何について？　資料を読むってくらいだし……なんか調べ物するんじゃない？　うまい人の作詞を研究するとか、流行りの傾向を分析したりとか」
「違うな。資料読みは、曲の目的やコンセプトを整理する工程だ」
「……ああ。つまり、狙いっていうか、方向性を決めるみたいな感じね？」
「そうだ。しかしお前はこれができていない。できていないというか……お前にとってはそもそも思考の外で、きっと考えたこともなかったんだろうな」
「……え、そうかしら。私、一応いろいろ狙いとか方向性とか、それなりに考えて書いたつもりだったんだけど……？　……まぁ、下手だったけど」
「いいや下手とかそういう話じゃねぇ。お前は〝やってない〟からその点でいうなら赤点どころか0点だ」
「いや、だから、やってなくはないと思うけど……？」
　まぁそう思うだろうな、とでも言いたげな顔をした詩文は、準備してたようにこう続ける。

CamScannerでスキャン

「悠、お前さ、その尚子チャンのバンドの歌詞、『この曲がいつどのタイミングで、誰が誰に向けて何を歌うものなのか』本当に考えて書いたのか？」

「えっ……そりゃあ、もちろん……」

「なら言ってみてくれよ」

あの曲がいつ、どのタイミングで、誰が、誰に向けて……。それは、えっと……。

「これは、軽音部が文化祭で歌う……」

「なるほど、軽音部が歌う曲だよな。で？」

「で……って？」

「それで終わりか？」

「いや……うん、終わりだけど……？」

「そんなわけないだろ。これが『資料読み』の一番重要なポイントだ。軽音部が文化祭で歌う曲、なんてそんな大雑把(おおざっぱ)な情報だけで、一体どんな歌詞が用意できるんだよ。アタシでも無理だよそれじゃ」

「……え、でも、実際そうじゃない？」

「違うって、もっと考えるんだ。もっと察するんだ。じゃあヒントだ。悠、お前その軽音部のバンドのこと、どれくらい知ってるんだ？」

「え……っと……」

……詩文が言わんとすることが、少しわかってきた。やばい。これは痛いところを突かれたわ。私、尚子のバンドのことはほとんど知らないかも……。

「知らないんじゃ、ないのか？」

「いや、そ、そんなことは……」

「だったら、バンド名を言ってみろよ」

「………ごめん、知らないわ」

「これだよ、信じられない話だ。まさかバンド名すら知らないのに、歌詞提供とかするつもりだったのかよ」

「ぐぐ……」

たしかに、それは決定的に私の落ち度だわ。ぐうの音も出ない……。

「……佐々木尚子がギターボーカルを務めるガールズバンドの名前は『ざ☆ぐっどたいみんぐ』だ」

「え？　なんで詩文が知ってるの？」

何？　なんで詩文がバンドの名前を……っていうか尚子のフルネームまで知ってるの？

「そんなことはどうでもいい」

何？　探偵？

「作詞をしようって場合にはざっと３つのケースがある。ひとつは曲が先に用意されてる今

回みたいなケース『曲先』。もうひとつは、歌詞を先に書いてそれにメロディをつける『詞先』。そしてあとひとつは、作詞と作曲を同時に行う『作詞作曲』のケースだ。主にシンガーソングライターがこのスタイルを好む。歌わない音楽家でも作詞作曲をまとめて手がける人は大勢いるけどな」

「っていうことは、今回のケースだと曲がもうあるし『曲先』っていうことね？」

「そうだな。そしてこの曲先か詞先かってところでやるべき準備は多少違ってくる。曲先の場合は、言うなれば〝後攻〟だ。すでに用意されたメロディの情報ってのがある。そして詞先の場合は〝先攻〟だ。この場合は作曲者が作詞に込められた情報を頼りにメロディを作る」

「作詞が先って……そういう場合もあるのね」

「最近じゃ珍しいけどな。でだ。お前が資料読みについて間違えてしまったのは〝曲先だったからこそ〟だろう。もし詞先だったらお前はこの件を間違えたりしなかった。たぶんだがな」

「……この件？」

「お前はメロディと曲の雰囲気だけで歌詞を書いてたんだよ。それだけじゃ全然足りねえんだ」

「……ああ」

言わんとすることは、わかる。そうか、もし私がメロディを受け取らずに作詞を先にやるっく作業をやっていれば……私が調べたことは……きっと湖子のバンドのことだわ。

「なんとなくわかったようだな。そうだ。作詞を依頼されたら、最初にするのは『資料読み』だ。プロならたとえば原作を読んだり、放送されてる番組を見たりとかそういうことをやったりするが、これはプロアマ関係なくやる。たとえば今回の場合の資料読みの対象は『尚子のバンド』だろ？　そのバンドが一体どういうバンドなのか、編成は？　ポリシーは？　今まで作った曲の中で一番お気に入りのヤツは？　どういうメンツなのか？　今回の曲は、どういうポジションの曲として作られたものなのか？　……ほら、知らなきゃいけないことはいっぱいあるだろ。お前これ、何個答えられるんだよ」

「……ひとつも答えられないわ」

「これがまず、第一であり絶望的な部分だ。昨日アタシが手の施しようがない患者だって言ったり、図書室で歌詞を一瞥してクソだって言ったのは、これが根拠だよ。そもそも『何のために作られたのか』がない単なるランダムパズルのあの歌詞は、そりゃ尚子チャンだって苦笑いだよ。まぁこれについては、気を利かせてバンドにまつわる情報を共有しようとしなかった尚子チャンにも多少の落ち度はあるけどな」

「……なるほど、返す言葉もないわ……」

「で、ほかに尚子チャンに聞いておくべきことは、何がある？」

「え、まだあるの？」

「あるよ。ほかには何を聞いておかなきゃいけない？」

CamScannerでスキャン

え、今のだけでかなりいろいろあった気がするんだけど、まだ足りないの？　何だろう……尚子の趣味とか？　メンバーの好きな食べ物とか……いや、それ歌詞に関係あるかしら？　誕生日とか？　血液型……家族構成とか？　ああ、これ全部絶対違うわ。え？　ほかに聞いておくこと？

「……き、休日の過ごし方……とか？」

「なんだそりゃ。芸能人のインタビューじゃねぇんだから」

「む……むぅ……」

何？　え？　だってバンドのことはさっきのでいろいろ聞いたでしょ？　これ以上何を聞くのよ……。

「……『いつ、どのタイミングで、誰に向けて、何を』の部分だよ。バンドの件は『誰が』のとこだけだろ」

「ああ！　そ、そういうこと！」

「それ以外何があるんだよ。血液型でも聞くのか？」

「まさか、そんなこと夢にも思ってなかったわ。そうね、『いつ、どのタイミングで、誰に向けて、何を』……っていう話でいうなら、文化祭のトリで、曲順は……聞いてないわ。誰に向けてっていうと、そりゃ全校生徒よね」

「全校生徒、って言い方はターゲットが曖昧になって良くないな。もっと具体的に言うなら『15～18歳のうちの高校の生徒』だ。ほら、これでこのターゲットがどういう日常生活を送っていて、そしてどんな歌にグッとくるのか、なんとなくわかるだろ？　曲順も聞いといたほうがいいかもな。１曲目なのか、まんなかなのか、それともラストなのか。それによっても曲の傾向は変わる。作詞に必要なのは『その音楽に関わる発信側と受信側にまつわる情報』だ。プレイヤーとオーディエンス、両方についてを〝資料読み〟して初めて、さてどんな歌詞にしようかって話ができる。それをしてないでよくわからん引用まみれのパクリ・コピー＆ペーストの歌詞を用意しても、本当に何がなんだかわからんだろう」

まずいわ。ビックリするぐらいのド正論。っていうか、私って本当に何考えて作詞してたのかしら。え、私の洞察力、低すぎ……？

「……ぐぐぐ……」

「まぁ、お前はお前でプロっぽい歌詞を用意しなきゃダメだとかそういう気持ちでたどり着いたやり方なんだろうけどな。プロの猿真似がなんとなくうまい、なんてのは良い歌詞なんかじゃない。それを歌う人、聴く人たちにとって最適な歌詞こそが、良い歌詞なんだよ」

「……おっしゃる通りだと思うわ」

「作詞で一番時間が掛かる工程はここだ。実作業は瞬発力で書くことが多いが、資料読みに

ついては1日か、かかるときは3日とか、1週間とかかけることもある。体験できる類のものなら実際にその場所に行ってみたり、スポーツがテーマなら実際にやってみたり、詳しい人から話を聞いたり、そういうことをしたりもする。それくらい、作詞は資料読みが勝負なんだよ。誰が誰に向けて歌う歌なのか、何をとらえればいいのか、それを真剣に考えて、音楽譜を読み解きながらそこに当てはまるベストな答えを導き出し、翻訳し、歌詞を作る。それが作詞家がやる一番基本で、そして一番大事なことだ」

「…………」

「どうした、黙り込んで」

「いや、なんていうか、さっきからいちいち言う通りだからちょっとヘコんだっていうか……そうね。私、あんまりわかってなかったかも」

「よし、じゃあそろそろ行くか。ちょうどいい時間だ」

「え？」

詩文はピョンと席を立つと、レジでさっさとお会計を済ませる。

「詩文、どこかに行くの？」

「ん？　何言ってるんだ、お前も一緒に行くんだよ」

「どこに？」

「〝資料読みができる場所〟に、だよ」

CamScannerでスキャン

詩文は、なんだか楽しそうにニッコリと微笑み返す。そして私たちは、バードランドを出た。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「……いや、無理無理」

「何言ってんだ。いいからさっさと乗れよ♪」

夕方６時半の外。もう暗くなって足元が見えにくくなっている暗がりの中、詩文はお店の裏の方に回り、停めてある乗り物のカバーをバサッと大げさにめくり上げる。すると、そこに現れたのは、ビックリするくらいイカツい赤いバイクだった。

「ちゃあんとふたり乗りだぜ。ヘルメットもほら♪」

子供みたいな体型の詩文には明らかに大きすぎるバイク。いや、これは私でも普通に大きいわ。明らかに男性の、しかも体の大きな人が乗るタイプのやつ。バイクは詳しくないからよくわからないけど、これあれじゃない？　アメリカンなんとかっていう？　違うかも？まぁなんでもいいけど……バイクに乗るなんてそんなの、普通に恐いわ。無理無理、そんなの不良じゃない。

「嫌よ。っていうかあんた、バイクなんてまともに運転できるの？」

「おっと？　何を心配してるのかと思ったらそんなことか。よせやい、アタシのブンブン丸は日本で一番速いんだぜ？　どんなやつが相手でもゴボウ抜きにしてやるよ」
「私が心配してるのはむしろそこよ。速さなんかどうでもいいから安全運転を保証しなさいよ。っていうか本当に免許持ってるの……？」
見た目のギャルっぽさとこいつの性格から考えたら、バイクに乗ってるっていうのはまぁしっくりくるけど、この無法者がおとなしく教習所でバイクの乗り方を習ってる様子はなんだか想像がつかないし、それがどーしたアタシが法律だくらいな感じで交通法規も普通に破りそうだから油断できない。……と、思ったら、あら？　ちゃんと運転免許持ってるのね。
「わかったろ？　ったく失礼しちゃうぜ。このアタシが法を犯すだなんてさ」
「あんたくらい法を軽んじるやつもいないでしょ。……で、でも、どこにいくの？　どこだか知らなけど、普通に電車か自転車で行きましょうよ……。それに、もうすぐ夕飯だし……」
「夕飯はキャンセルだ。ママンにメールを入れておけ。早く行くぞ、いいから乗れって♪ほら」
そう言いながら、ヘルメットを投げる詩文。受け取った黒いヘルメットにはなんかワルそうなシールがいっぱい貼ってある。……けど、ちょっとかっこいいわね。

「遊びに行くわけじゃねぇんだからよ。なんだ、行かねーのか？」

「……えっと」

その言い方をされると、なんだかちょっと断りにくい。でも、なんでバイクなのよ。ほかの交通手段もあるでしょ。

「ハァー。いかねぇならもういいや。アタシだけで行くし。あと3秒で決めろ。3、2……」

「……わかったわよ行けばいいんでしょ！」

「よしっ♪」

相変わらず強引な詩文のカウントダウンを遮った私はガボッとヘルメットをかぶり、勢い余ってメガネがズレたのを直す。詩文はその真っ赤な大型バイクにまたがって、エンジンをかけた。迫力のある起動音と排気口から出る風でブワッと私の体を圧倒したそのバイクは、なんだか低く唸る獣みたいで、それに乗ってる詩文はさながら、猛獣の主人のような印象があった。

「良い音だろ。後ろ乗れ。足かけるトコあるだろ」

「え、ええ」

詩文に促されて、後ろのシートに座る。足のあたりにはふたり乗り用の補助棒みたいなのが折りたたみ式になっていて、それに足をかけて腰を下ろすと、後部座席では音と振動がお尻に伝わる。その感覚は、私が体験してこなかった未知のドキドキがあるものだった。

「よーし行くぞ」
「うわっ!?」
私が乗るやいなや、グンと前進するバイク。大したスピードは出してないんだろうけど、まだ心の準備が整ってなかった私は、思わず詩文の背中に思いきり抱きついた。
「ちょ、ちょっと待って詩文! まだ発進しないで! ちょわ! あーっ! 私、バ、バイク乗ったことないのよ! どど、どこ持てばいいのこれ!? こ、これ、これどうすれば!?」
「騒がしいなぁ! とりあえずそれでいいよ、腰に巻きついとけ。イテテ、そんなに力いらねぇだろ」
「だ、だって……ちょ、一旦停まって……」
「あー……おい、やっぱあんまくっつくな。胸が背中にあたって不愉快だ。離れろ」
「へ……無理よ、え、何? 胸?」
「……チッ。牛乳も飲んでねぇくせに! なんでそんなに無駄に肉がついてんだお前は! ムカつくんだよ!」
「そんなの知らないわよ! 私のせいじゃないでしょ!?」
「あっははは! それもそうだ!」
「え? あ……あはは。うふふふ」
急にキレたり笑ったり、変なやつねホント。

バイクの感じに慣れてきた私は、少しだけ余裕をもってあたりを見渡してみる。お父さんの車の中で見た街並みとも自転車で見る街並みともちょっと違う、いつもの街。秋風に少しだけ冬の匂いが混ざり始めてる空気を引き裂くように走るバイクは、妙にロマンチックだった。

「……意外といいものね。へぇ……バイクってこういう感じなんだ……」

唸るような低音を吐き出しながら走る赤いバイクは小さな体の詩文とは不釣り合いかとも思ったけど、見ているとなんだかこれじゃないとむしろ不自然なようにも思えてくる。身長は低くても、実際よりずっと大きく見える詩文（目の前にある背中を見たらやっぱり小柄だけど）。その有り余るパワーを受け止めるっていう意味では、このくらい大きなバイクでようやくちょうどいいくらいな気もした。

「どうだ、ブンブン丸の乗り心地は♪」

「うん、なんか、思ってたより恐くないかも。たしかに、後ろの席ってそんなに強く抱きつかなくてもわりと平気なのね」

「一応持っとけよ、あぶねーから。自慢の胸をおしつけるのはほどほどにな」

「あんた、どんだけ胸のこと気にしてるのよ……。――ところで詩文、そろそろ教えてよ。どこに向かってるの？」

「言っただろ、作詞に必要なことがわかる場所だよ。特に、お前にとってな」

「え……私にとって?」

~~*~*~*~*~*

バイクでしばらく移動した私たちは、この地域では一番オシャレなエリア『ベニーズ・ヴィレッジ』にやって来た。ここは近くに大型ショッピングモールのファイヴベニーズがあったり、映画館のシネベニーズがあったり、変な雑貨屋さんがあったり、そういう若者文化の集合地域。そして詩文がバイクを停めたのは、中でもちょっとコワそうな気配のある薄暗いネオンが印象的な『CLUBベニーズ』の駐輪場だった。

「こ、ここに入るの……?」

「おう。一応親にメール入れとけよ? 夕飯だったんだろ。なんならアタシとバイクも一緒に写メに写ってやってもいいぞ」

「それは遠慮しとくわ……」

見た目不良娘のこの子だけでも十分マズいのに、さらにバイクまで写したりしたらうちの親は卒倒するわ。とんでもない非行学生になったと思われてしまう……。そうね、ここはひとつ、友達と大事な話があるから近所のファミレスにいるとか、なんかそんな感じのことに

してメールしときましょ……。

「ええ、連絡しといたわ。……って、ここに入るってマジで言ってるの……？」

「おい、まだか？」

ライブハウスなんて入ったことのない私は、その入口の佇(たたず)まいに圧倒される。怪しげなネオンの光る入口。英語なのかなんなのかわからない謎のシールがメチャクチャに貼ってあるエントランスは、全体的に暗い。もっと明るくて楽しそうな雰囲気にしなさいよ。なんでこんな悪そうな感じにしてるの？　こんな場所、私みたいな平和を愛するティーンエイジャーが立ち入るには場違いすぎでしょ。……っていうか実際場違いなんじゃない？　逮捕されるんじゃない？　え、この歳で前科持ち？　いや、そこまでのことにはならないにしても、普通に補導とかされるんじゃ……。

「ねぇ詩文、やっぱり私帰るわ。だって、もう夜の7時よ？　それに、制服でこんな場所にいたら補導されるんじゃ……？」

「まだ7時じゃねぇか。何言ってんだ。高校生が補導されるのは夜11時以降だよ。そんな風にオドオドしてなけりゃ平気だ。それにほら、見てみろ。特に今日は、ここに高校生がいるのは普通のことだ」

「え……？」
詩文の指差した先には、ＣＬＵＢペニーズの今日のライブの告知。『高校生バンドバトル　ｉｎ ペニーズ KICK OUT BAND FES』だった。そして、そのポスターの参加バンドの中に、私は意外な顔を見つける。
「尚子!?」
「聞いてた通りだ。今日は尚子チャンのバンド『ざ☆ぐっどたいみんぐ』も出てるらしい」
「尚子、こんなコワいところでライブなんかやってるの……？」
「今どき珍しいことでもねぇよ。まぁ、部活レベルをちょっと越えてるってのは確かだけどな」
「……ねぇ、さっきからなんで、尚子やバンドや、ライブのことをあんたが知ってるの？」
「お前こそなんで知らねぇんだよ。まぁあれだ、アタシは顔が広いからな。ちょっと聞きゃ大体のことはわかるんだよ」
「……そ、そうなの……」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「カンケー者の伊佐坂詩文だ。おお、もぎりはブチ子なのか。キタムラモーターズはあと何分後だ？」

「おぉー、暴君じゃん！　珍しいし。何？　ジュンちゃんのライブ観に来たの？」
　ブチ子（さすがにあだ名よね？）と呼ばれたレザージャケットを羽織って鼻にピアスをつけたタレ目で恐い化粧のお姉さんが、詩文が取り出した２人分の関係者チケットをもぎる。え、超恐いんだけど何この人？　まさかうちの高校の人じゃないわよね？　こんな物騒な人はうちにはいないし、他所の学校の先輩……よね？　……あ、でも、見た目の感じは恐いけど、普通に笑顔は優しい……？　私が勝手に恐がってるだけなのかも？　いや、やっぱりちょっと恐いかも……。――それにしても詩文、暴君ってあだ名なのあんた。ピッタリね。
「ジュンちゃんのライブ観んのもこれで最後かもしれねーからな。挨拶代わりだよ。あと、この『ざ☆ぐっどたいみんぐ』ってバンド、ジュンちゃんの後輩だよな？　いつだ？」
「ぐっどたいみんぐはモーターズの前だね。ちょうど次がぐっどたいみんぐだよ。まさにグッドタイミングだし。へぇー、ジュンの後輩に興味あんの？　リハ聴いたけどなかなかうまいよこの子ら」
「いや、そのバンドに興味があるのはこいつだ」
　詩文に促されて、私が喋る番みたいになる。……私に振らないでよ……。
「ど、どうも……江戸川です」
「へー。あ？　このメガネちゃん、なんかオドオドしてるけど？　どしたの？」
「お前の顔にビビってんだよブチ子」

「暴君がそれ言う？　キャハハ、チョーウケるし」

カラカラと笑う、見た目が恐いお姉さん。もっと年上かと思ったら、聞けばやっぱりどうやら詩文と同じ高3らしい。どうやったら18歳でこんな迫力になるの？

「行くぞ悠」

「あ、うん」

詩文に連れられて、明かりの少ないロビーや通路を歩いてライブの会場に入る。すると中は、信じられないくらい大きな音量でライブの真っ最中だった。お客さんの入りはかなりのもので、前の方の盛り上がりは特にすごかった。後ろの方はわりと落ち着いてる感じだけど。

「辛口ジンジャーとアイスミルク。え？　ミルクねぇの？　なんでだよ。……じゃあいいや、ジンジャーふたつ」

ステージ後方にある備え付けのバーみたいなところで、詩文は慣れた感じにドリンクを注文する。なんかドリンクチケット？　これギターのピックじゃない？　ああ、これがチケットになってるんだ。へぇー。

「ほら飲みモン、次が尚子チャンの出番だぞ。よく観とけよ」

「うん。……かっ……辛っ！　何これ、ジンジャエールじゃないの？」

「辛口だよ。うまいだろ」

「なんか喉が熱いんだけど……」

甘いより辛いの方が強い、生姜くささのあるジンジャエール。耳に絶え間なく入ってくる爆音に、けたたましい照明。この空間が大勢のテンションを引き上げるっていうのは、ちょっとわかる気がするわ。なんだかこう、体の外側から体幹を揺らすように、振動が体を高揚させる……。

今やってるバンドがどうやら最後の曲を演り終わったらしくて、スッと照明が落ちる。そしてステージの準備の様子がゴソゴソと行われている中、流れているのは知らないバンドのセンチメンタルで透き通るようなギターの曲。こういうのなんていうのかしら、アコースティックギターじゃないけどガガガって感じでもないやつ。涼しげでキラキラしてていいわね。

「悠、今この瞬間からだ。アンテナ感度を最大にしてライブを観ろ」
「え……？」
「目と鼻と口と、耳と肌と脳と、心と血と体で感じるんだ。いいな」
「え、ええ……」
「準備ができたようだな」

――薄暗がりに佇む４人の影。オレンジ色の照明が後ろから照らして逆光になったステージには、スモークが立ち込めてなんだかものものしい雰囲気になっている。耳鳴りのように

CamScannerでスキャン

小さく鳴りっぱなしの、たぶんこれはキーボードの音。その音はゆっくりと消え、針を落としてもわかるようなキンと詰まった静寂になる。その停止したような空気を破ったのは、シンバルの合図だった。

それと同時に一気に照明に照らされるステージ。響き渡る歪んだバンドサウンド。ギターしか見てないような没入した目が乱れる髪の隙間から覗く、そんな激しい演奏をしているのは、ギターの尚子と、私の知らない軽音部の3人。ドラムの子は大きめのお母さんみたいな雰囲気で、ベースの子は無口っぽくて、キーボードの子はなんだかちょっとおかしなテンションで笑いながら演奏してる。全員うちの制服で、まさに高校生のガールズバンドといった印象だった。スピード感のあるイントロに、ピッタリ息の合った演奏。学生のお遊びだと思ったら大間違いだとでも言うような鋭い目をしたキーボードが小気味良く鍵盤を叩きつけつつ曲に明るさを加えて、それを裏切るように重く激しくぶつかっていくようなギター。その図式だけでも、もうすでに何かが始まっているのがわかった。そこにいたのは、いつものほほんとしている尚子とは思えない、あるバンドのギターボーカルだった。

歌い出しの歌詞を気取りなくまっすぐハッキリ発音する歌い方。意図的にビブラートを拒否してるような、無骨(ぶこつ)で華麗さのない、なんだかすごくリアルで等身大を感じるその歌声は率直で、でもそれと同時に不完全で、それが逆にひとつの特徴にもなっている気がした。

サビに差し掛かると曲は、それまでのシリアスな感じをまるごとひっくり返したみたいに

明るい曲調になった。その到達感というか、カタルシスというか、「やっとだ」っていう感じは、なんだかこっちまでちょっと泣けてくるような切なさと楽しさがあって、明るいからこそむしろ寂しさを感じた。あっという間の1曲は、かっこいいキメでバシッと終わる。

「ふぅー。……ど～もー、こんばんわ！『ざ☆ぐっどたいみんぐ』です！ いやいや～すごい熱気だねぇ～。照明超暑いよ～！」

ひと言喋った声を聞いて、私はズッコケそうになる。ああ、そういえばこの子、尚子なのね。ゆるい雰囲気のギャップがすごいわ……。

「えーと、あー。あれです、喋るのは苦手だけど、あのー、うん！ 初めての人もいるのかな？ 私たちはなんかグッドタイミングって感じで一期一会的な？ なんかそういうのいいなって思ってるバンドです！ 今日は追い出しライブということで、このあとの大トリ『キタムラモーターズ営業中』さんと対バンできて超テンション上がってます！ 後輩バンドも最高のメンバーだぞっていうのを聴いてもらえたらいいなとか、思ってたり、えへへ」

喋るといつもの尚子。なんだかちょっと安心する。ところでキタムラモーターズ営業中？……って、これバンド名なの？

「ねぇ詩文、『キタムラモーターズ営業中』って……？」

「ああ、さっきの受付のヤツが言ってたアタシの友達のバンドだよ」

CamScannerでスキャン

「へぇ……」

なんか最近って変なバンド名多いけど、まぁこれってなんかそういうものなのね……？

「さぁ！　どうせあんまりうまくないMCを続けるのもあれだし、なんか時間も押してるみたいだしドンドンいっちゃおうかな！　次の曲です～聴いてください！《ギターが好き》！」

次の曲は思ったより激しくなくて、ミディアムテンポくらいの曲だった。でもなんか、歌詞はほとんどない曲で、一応サビのところにはちょっとだけ歌詞があるみたいな、なんていうんだろう、通好みな感じ？のする曲。でも、これはこれでじっくりと好きになるスルメ曲的な良さがある気がした。――そしてまたMC。

「さーてと、バンドの数が多いのもあって3曲がいっぱいなので次がラストです！　一瞬だね～！　じゃあ一気に行っちゃう感じでギュイイイイン！　私たちのお気に入りの1曲です！　最後まで盛り上がってこーう！　せーのっ！」

尚子の掛け声で始まるラスト1曲。イントロのド頭を全員で合わせて、そこからキーボードの速弾きから始まるその曲は、キメを全員で揃えてまさにグッドタイミングな曲だった。

スピード感がある中で、ちょっとエンディング感のある曲。
歌詞は、この曲も少ない。ラララが多くて、でも多くを語らないその曲の中で印象的に突き刺さったのは「青春がもうすぐ終わるらしい」っていうフレーズだった。元気で明るい曲。それはまるで、笑顔で手を振る別れのような印象だった。
その曲を聴きながら私は考える。激しくぶつかり合うようなパワーに満ちた１曲目。しっとりと、でも心の中は激しいような２曲目。そしてこの、別れを惜しむような３曲目。尚子のバンド『ざ☆ぐっどたいみんぐ』が歌いたいことはなんなのか。言葉にすれば安っぽくなってしまいそうな〝それ〟は、どんな言葉ならふさわしいだろうか。「青春」だけじゃ足りない、焦りというか、開き直りというか……どんな言葉でも足りない気がする。
「あ……」
――その瞬間、私はほんの少しではあるけど、〝ある感覚〟に触れた気がした。それは……。
「ねぇ詩文」
「………」
ああ。会場の音が大きすぎて私の声なんてまったく聞こえないわね。でも、うん。これは詩文に確認しなくてもいいかもしれない。これは……これこそは――。
「……『音楽語』、ね」

CamScannerでスキャン

……演奏が終わり、尚子たちは「またねー！」と言いながら、余韻が足りないくらいあっさりパタパタと舞台袖にはけていき、そしてまた次のバンドの準備が始まる。スピーカーから流れるしっとりとしたギターのＢＧＭを聴きながら私は、なんだか多すぎる情報を頭の中でまとめられずに、ただ立ち尽くしていた。

「尚子チャンのバンド、良いバンドじゃん」

「……え、ええ。そうね。………？」

言葉が喉の奥にひっかかって、私は違和感を覚える。尚子のバンドは素晴らしかった。ハッキリ言って感動した。今まで一番なんじゃないかってくらい感動した。それに、これが音楽語ってことなのねとか、いろいろ思う。アンテナ感度を上げるっていうことの意味も、ちょっとわかったような気がする。その話を詩文に興奮気味に話そうと思ってたのに、そう、すごいでしょ私の友達とか言おうと思ってたのに、何かがおかしい。なんだか、言いようのない気持ちが私の中に生まれているのがわかる。

……大勢の前であんなに堂々と歌い切る尚子は、なんだか生き生きしてて、やりたいことやってるなぁって感じで……。

――それが眩しくて、なんか嫌だ。

いつもぼんやりしてると思ってた尚子——私の知ってた尚子は、尚子のほんの一面でしかなかった。私は、なんでだか尚子は自分と同じくらいの人間だと思ってた。いいや違う。中学の頃からずっと一緒にいて、どこか抜けてる天然な、どちらかというと私より不器用でダメな子のような気もしてたのに。それは私の勘違いだったらしい。

「……まあまあじゃない？　尚子も結構やるのね。でも、歌詞は足りてない気がするわ」

「ん？　あー。ははは。まぁそうだな。歌詞はまだまだだよな」

詩文の顔を見ず、私はこの、心の中というか、胃腸あたりのところにドンと重く存在感を誇るダンベルのような何かに戸惑う。いや、違うわね。これは違う。そもそも、私と尚子は違うもの。比べてどうこうとかそういう話じゃない。そう。人は人、私は私でしょ。勝つとか負けるとかそんな話じゃないわ。

「どうしたんだ黙り込んで」

「いや、えっと、次のバンドってどういうバンドかしら？」

「ああ、次はアタシの友達のバンドだよ。今日の主役、キタムラモーターズだ」

「楽しみね」

「おう。こいつらはなかなかいいぞ」

尚子は尚子。私は私よ。うん。これはもう考える必要のないことだわ。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

キタムラモーターズの演奏も、圧巻だった。詩文の友達だなって感じの口が悪いボーカルのジュンさんは、弾けるような演奏と歌で観客を最後まで盛り上げ切っていた。ＭＣで高校を卒業したら実家のバイク屋さんで働く（キタムラモーターズってどうやら家のお仕事みたい）っていうことを喋ったりして、高校最後のライブだって言いながら激しく演奏していた。詩文はそんなジュンさんの様子を見て、ちょっと寂しそうに笑っていた。

――帰り道、なんだかいろんなことが一度に起こりすぎてよくわからない気持ちになっていた私は、頭の中を整理しながら黙り込む。そんな私に詩文は、何か聞いてくるわけでもない。詩文が運転するバイクは行きよりもずっとゆっくりとした速度で、大きくゆったりと私たちをのせて走る。その背中越しに、私は詩文に話しかけた。

「……今日はいろいろ勉強になったわ」

「ん？　おー。おもしろかっただろ」

「資料読みが一体なんなのか、少しだけわかった気がするわ。それに、音楽語のことも。……私、本当に何も知らないまま歌詞を書こうとしてたのね」
「ようやくそれがわかったみたいでよかったよ」
「うん……」

夜9時。私にしては長い外出。お母さんに怒られるかしら。でもまぁ、メールには一応書いておいたし、平気よね。私は詩文の背につかまりながら夜の街を見つめる。ゆっくりと過ぎていく、建物や乗り物の光。自転車でも普通に見たことがある景色のはずなのに、なんでなのかしらね。今日はなんだか、見たことない景色を見てるような気がする。

「……ねぇ詩文……どうして、私に作詞を教えてくれる気になったの?」
「…………」
ふとした率直な疑問を、私は詩文の背中に語りかける。すぐに返事が来るかと思ったら、なぜか詩文は黙ったままだった。
「詩文? ねぇ聞こえる? どうして――」
「聞こえてるよ。……理由なんてない。アタシの気まぐれだ。それとも、気まぐれで教えちゃマズいのか?」

「いや、そんなことはない……けど……」
詩文は、意味のないことはしない気がする。といいつつ、気まぐれも詩文らしいけど……だったらそれはどういう気持ちの気まぐれなの……？
「……なぁ悠、その質問はもうするな」
「え……なんで？」
詩文は、うっとうしそうにというか、面倒くさそうに言う。
「次その質問をしたら、レッスンは打ち切りだからな」
「だから、どうしてよ？」
「するなって言ってんだろ。わかったか？」
「……え、ええ。わかったわ」
ハッキリと、何かがある。けど、それについて聞くことは今、封じられてしまった。
「そんなことよりさ悠！　お前……」
話題を変えるような、大きな声で楽しげに詩文が聞いてくる。
「何？」
「――腹ん中に変なもん入ってんじゃねぇの？　……ま、それもどうでもいいか」
「……どういう意味？」
楽しげな声とは裏腹に、それは意味深なひと言だった。

CamScannerでスキャン

それから黙ってしまった詩文は私を家の前まで届けてくれて、そしていつものカラッとした雰囲気で、適当な軽口を言いながら足早に去っていった。

第5話

字数と語彙力の話

CamScannerでスキャン

「泊まりに来たぞ♪」
「は？」
土曜日の昼過ぎ。今日は一日中ダラダラゴロゴロして過ご……じゃなくて英気を充電しようと思って、自室でピザチップスをモリモリ食べながら漫画を読んでベッドで脱力してた私の元を訪ねてきたのは、真っ赤なバイクを颯爽（さっそう）と乗り回すチビッ子ライダー詩文だった。
そういえば私服みたことなかったけど、白くて大きめのシャツ（たぶんこれ男性用よね？）にはギターを担いでる外国人の写真が大きくプリントされてて、肩が出そうな首元には黒いインナーが覗いてる。シャツの上に羽織ってるのは……こういうのなんていうのかしら？　革ジャン？　じゃないわね。なんか、黒い革製のバイク乗りが着てる感じのやつだった。背中に鳥のマークが入ってる。そして下は、さっきの大きなシャツでほぼ隠れてるデニムのショートパンツ。上半身はしっかり防寒してるのに下半身寒くない？　足元はまさかのビーチサンダルだった。っていうかこんな服でバイク乗って寒くないのかしら。秋とはいえ結構冷えると思うんだけど。
「アタシ今家出中なんだ。帰りたくねーからとりあえず今夜はお前んちに泊まろうと思うんだけど、どうだ？」
「どうだ？　じゃないわよ。って……家出？　何よそれ、お断りよお断り。家出かなんか知

らないけど、なんの約束もなく急に来て泊まりたいってあんた、非常識にもほどがあるでしょ」

「そこをなんとか！　頼むよ、高校生じゃホテル泊まるのもいろいろ面倒でな、ネットカフェで過ごそうとしても追い出されるし……それにほら、着替えもちゃんと持ってきてんだ♪」

「……ああ、そう。なんか……ハァ……。どうせ言っても無駄よね……。――ちょっと待ってね、お母さんに聞いてくるから……」

「おおーさすが悠！　話がわかる女だ！」

「聞いてダメだったらダメだからね？」

この暴君銀髪少女は、やると決めたらもう変えない。抵抗してもどうせ体力を消耗するだけだと思った私は、もはや慣れつつある対応でこの無茶振りに応えることにした。

＊～＊～＊～＊～＊～＊

私は、言い忘れてたけど今日友達が泊まりに来るの、みたいな適当なことを言って、母親の説得を試みる。さすがに急な話で一度は嫌な顔をしたお母さんだけど、しばらくねばって渋々ＯＫを獲得した私は、家の前で待つ詩文を迎えに行った。

「泊まっていいわよ」
「やったー！　さすが悠！　おっじゃまっしまーす♪」
「ちょっと！　最後まで話を聞きなさい。ちゃんとうちのお母さんからあんたの親に電話で挨拶させること！　それが条件だって」
「え――。何それ。マジかよ。だっりぃ」
「えーじゃない。これが普通よ。オフィシャルな形じゃないとうちの敷居はまたがせないわ」
「わかったよ。じゃあ……ちょっとまてよ……ほいこれ」
「何このメモ？　……ああ、これがおうちの番号？」
「おう。『伊佐坂詩文は預かった、返してほしくば５０００兆円とお前の持ってる土地の権利をよこせ。あと逃走用のヘリも用意しろ。12時間以内にだ』って電話してくれ」
「……はいはい」
意外とすんなり親の連絡先を渡してきた詩文。家出って言うからには自分の現在位置を親に知られるのは嫌なんじゃないかと思ったけど、なんかどうやらそういうわけでもないらしい。

………。

「……お母さん、確認ＯＫって。ただ、あんたは基本的に私の部屋から出ないようにね。お

風呂とトイレは貸すけど」

「いいよそれで。お前の部屋だけで十分おもしろそうだしな」

「……っていうか、あんたの親は家出公認なのね……？」

「ん？　はは。違う違う。さっきの電話番号はバードランドにいる叔母さんだよ」

「え？　そうなの？」

「保護者ならそれでいいんだろ？　アタシが家出するのはいつものことだからな。叔母さんさえ現在地を把握してたらそれでいいって感じになってんの。オヤジには絶対言うなって言ってあるけどな」

「そうなんだ……」

まぁ、家庭の事情なんて人それぞれよね。あんまり深く立ち入るのも悪いかしら。

「おい悠！　何して遊ぶ⁉　なんかないのか？　よし！　お前ん家を探検しよう！」

「それは禁止だって言ったでしょ！　もう……私の部屋の中では何してもいいから、家の中うろうろするのだけはやめてよね……」

「何してもいいのか？」

「嘘。何してもいいっていうのは嘘嘘嘘。全然嘘。やっていいことはものすごく限られるわ。あらゆる行動について逐一(ちくいち)私の承認を得ること」

「なぁ悠、このイラストってお前が書いたのか？」

「ギャアアアアアアア！　なに勝手に引き出し開けてんのよ⁉　しかもそれ、私が中学のときにうっかり描いちゃったイラストノートじゃない⁉　私もどこにあるのかあんまり覚えてないようなものをなんで一瞬で発見するの⁉　トレジャーハンター⁉」
「あっはっはっは！　いいじゃねぇか、こういう創作をついついやっちゃってるってのは良いことだよ。クオリティについてはさておいて。……このキャラのセリフいいな『お前は俺の、運命の女だ』ときたか。カァーこいつはなかなかのイタリア男だな！」
「うるさい！　ああうるさい！　うるさいうるさい！　うるさいわねあああもう、勝手に触るな！　正座しなさい正座！！」
「わかったわかった、おとなしくするよ。ところで悠、この家はお茶も出ないのか」
「出ないわよ！　呼んだ覚えもない客に出すのは水だけよ！」

――10分後。

「……お前の部屋、やることねぇなー」
「クローゼットとか机とか棚とか勝手に開けたらしばくわよ」

CamScannerでスキャン

「やることねー し作詞のレッスンでもするか？」
「そうね。私もそれを提案しようと思ってたところよ」
「どこまで話したんだったか」
「資料読みの大切さ、までかしらね」
「あ──そうだ、そんなこと話したね。じゃあ今日からはいよいよ、技術的な話をしていこうか。まずは『字数と語彙力について』だな」
「よろしく頼むわ」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「……っていうか、お前の最初に書いた歌詞さ、これはむしろアタシから聞きたいことなんだが、そもそも字数が合ってない状態でなんで大丈夫だと思ったんだ。むしろ大胆な発想だ」
「……それは……別に理由なんてないわよ」
というより、できなかったのよバカ。わかるでしょ。改めてそんなこと聞かないでよ。
「まぁこりゃわかりきってることだから、あえて言うのもちょっとバカバカしいところだが、歌詞について最低限守るべきことがあるとすれば、そりゃもちろん『字数が合っていること』だ。お前に足りてないテクニック的な部分で、特に最初に触れるべきところとしての

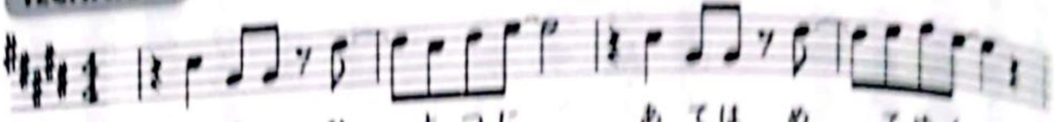
『文字数』について、これをまずは簡潔に見せていこう」
そう言うと詩文は、ノートに図を描いていく。
「さぁてと、書き上がった。まずはこれを見てくれ」
「ええ。……と、これは……？」
「文字数の"あてこみ"ってのがどれくらい自由度の高いものなのかってのをざっと表した図だ。作詞初心者はまずこれを知っておくだけで、"文字数にハメるのが難しい"って問題を解決できるだろう」
「…………ああ、わかったわ」
「おお、早いな。でもまぁ、図にしてみりゃなんてことはない。つまりそういうことなんだよ」
この図が端的に表しているもの、つまりそれは、"ひとつの音符に詰め込んでいい文字数は別に1文字っていうわけじゃない"っていうこと、だと思う。
「つまり、1音1文字じゃなきゃダメっていう気がしてたのがまず間違いだったっていうことね？」
「そうだ。まぁ、もっと言うとね、これは実はかなりのバリエーションがあって、口頭でさらさらっと全部を例に出すのは難しい。難しいがあえていくつかの特徴的な例を出すと、たとえばMr.Childrenだ。ミスチルは知っているか？」
「ええ。お父さんが好きでよく聴いてるわ」

CamScannerでスキャン

歌詞のあてこみバリエーション

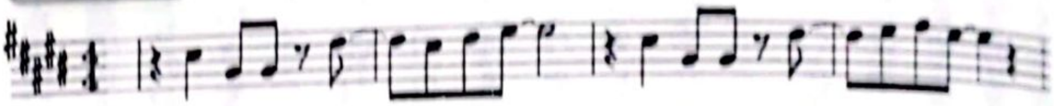
（※譜面は尚子の曲の最初のとこ）

TECHNIC 1 『一音一字』



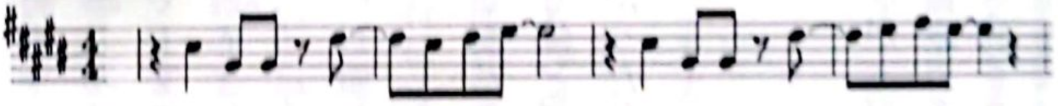
一つの音符に一つの文字をはめる一番ポピュラーなあてこみ。"言葉をはっきり聞かせる"という演出に効果的。しかしその分スピード感が少ない。グルーヴも少ないので、これだけでいくと全体的に曲がのっぺりする。とはいえ、必ず使う基礎中の基礎。

TECHNIC 2 『こぼし』



母音やイントネーションを"こぼす"一音二字のあてこみ。上記の「一音一字」と「こぼし」の両方を使って、歌詞で緩急をつける技。こぼしのところは音符として数えずナチュラルに流す。メロディに合ったポイントで使えば良い歌い心地とスピード感を得られる。

TECHNIC 3 『英語調子』



スピード感が劇的に上がるアクロバットな技。洋楽的なフレージングで一音に対して３つ以上の文字を入れる。ミスチルやラブサイケデリコといったアーティストが得意とするあてこみ。便利な技だけど特徴の濃いものなので、使いこなすにはセンスが必要。思い切って全体に使うと洋楽チックな曲になる。

CamScannerでスキャン

「うん。ミスチルの曲がどんなかっていうとね、簡単に言うと"洋楽歌詞チック"をやっている。たとえば『暗い道の中』みたいな歌詞があったら『Cry道の中』、みたいなね。ほら、これで『く・ら・い』3文字分必要なものが発音的には『Cry』で1文字分扱いになる。これだけで、歌詞の文字数あてこみというやつは、あまりにも無限ってことがわかるだろう？」

「言われてみれば、そうね。なるほど、これは……」

これはなかなか、たしかに、言われてみればそうね……プロの歌詞ってなんか、そういう良いカンジのハマり方みたいなのが結構あるっていうか……。ああ、なるほど、そういうカラクリだったのね……音符にひとつひとつハメようとしてうまくいかなかった私の歌詞の謎も、ちょっと理由がわかったかもしれないわ。

「おや、ひらめいた顔をしてるね。なんとなく意味は伝わったようだ」

「ええ。これは良い情報を聞いたわ。これだけでたしかに、かなり自由度が上がりそう」

「初心者が最初は癖にした方がいいのは、まずこのあたりだろうな。受け取ったメロディに対して、マックスでどれくらいの文字数を"ねじ込む"ことができるのか。それを最初にさらっと考えてみて、そこからシンプル化していくくらいでちょうどいい。4分音符4つには4文

CamScannerでスキャン

字じゃなきゃダメなんて、そんな固定観念をまずはしっかり取り払うのが大事だろう。言葉のイントネーションっていうものは、そんな杓子定規で扱うものじゃないからな」

「マックスでどれくらい文字数をねじ込めるか……なるほど、たしかに最初にそれをやっておくと、そこから文字数を減らすのは簡単な気がするわね」

「そう。つまりそういうコト」

詩文は私が用意したたけのこチョコをポリポリ食べながら、オレンジジュースを飲む。あ、牛乳にしてあげればよかったかしら。

「まぁなんでもかんでも自由にあてこんでいいってわけでもないんだけどな。実際、"ミスチルあてこみ"をすれば字数的に解決することもあるが、大事なのはその節回しのグルーヴ感──つまり"ノリ"が、その曲のコンセプトに合ってるかどうかだ。4分音符に4文字だって、それがニュアンスとして正しいなら正解だ。特にミスチルのさっきのやつは嫌でもスピード感が出ちゃうしね。主張が濃い分、目的とズレてるならこの手段は使えない。でもまぁ、知ってるか知らないかじゃ雲泥（うんでい）の差だ。曲のコンセプトとメロディの傾向を鑑（かんが）みて、合ってる方を選ぶのが正解だな」

「ええ。使い方次第ねこれは。これこそまさに、作詞のテクニックって感じだわ！」

「まずこのことを踏まえて、自分の好きな曲をいくつか聴いてみるといい。すると気づくは

ずだ。思った以上にあてこみはテクニカルだってね。それをすることによって発生するリズミカルなグルーヴもある。それをコントロールするのもまた、お前の好きな〝作詞のテクニック〟ってやつだ。作詞家の個人的な作風のポイントも、ここがそのひとつだな」

さすが作詞家SiEね。これこそ私の聞きたかった作詞の具体的な話だわ。これさえ知っておけば、私のあの歌詞も良い感じに曲にハマって素敵な歌詞に……いや。

「詩文、あてこみの可能性の広さについてはわかったけど、もうひとつ教えてもらっていいかしら」

「なんだ？」

「あの、情けない話だけど、そもそも語彙力が低いっていうか、思いつかないときはどうすればいいの？　私が思いつく歌詞ってなんだか、ありきたりっていうか……。もっと気の利いた語彙とか出てくればいいのになって思うんだけど……」

「何に悩んでるのかよくわからねぇな。どういう質問だそれ？」

「えっと……え？　わからない？　いや、思いつかないのよ良い言葉が。なんか作詞家の歌詞って、グッとくる言葉いっぱいあるじゃない？　ボキャブラリーすごいっていうか……」

「あ――……。ああ。なるほどな」

詩文は、明らかに〈何言ってんだこいつ〉って顔をして眉毛をへの字にしながら、何かに納得したようだった。
「……もしかしてあんた、語彙力のことで悩んだことないの？」
「ねぇな。お前の質問の意味が一瞬わからなかった」
「あ、そう……」
まぁ、高校生でプロの作詞家やってるような天才だもんね。そりゃそうか。
「しかし、お前が何をわかってないのかについてはなんとなく察しがつくぜ」
「そう？　だったら、どうすればいいかわかる？　そうそう、これは尚子も言ってたことなのよね。語彙力が足りなくて歌詞ができないって――」
「おっと、そこについてはちょっと待て。お前が歌詞を書けないのと、尚子チャンが歌詞を書けないのとは同じ理由じゃあない。というか、ほぼ真逆だ」
「……？　真逆？」
「お前のケースはこうだ。〝音楽語がわからないから語彙の出しようがない〟。しかし尚子チャンの場合は違う。尚子チャンは〝音楽語をうまく日本語変換できない〟んだよ」
「……ああ。なるほど」
「曲に歌詞をつける上で必要なのは『音楽語の理解』と『音楽語の日本語翻訳能力』だ。〝良い語彙が出てこない〟ってのは意味不明――というか的外れな悩みなんだよ。例えでいう

CamScannerでスキャン

となど、どこぞの部族が一生懸命歌ってるとする。お前はその部族の言葉をまったく知らないが、なんか雰囲気真剣ってことくらいはわかる。けど、さてその歌に日本語の歌詞をつけようってなると、ポイントは〝良い語彙が出てこない〟じゃあないだろ。〝何言ってるのかがまずわかんねぇ〟ってのが実際の問題だ。

「それは、そうかもしれないわね」

「しかし音楽ってのは大変曖昧な言語かつ、そもそも〝言質が取れない言語〟だってのは言ったよな。だから言ったもん勝ちになっちまう。何言ってるのかわかってなくても『これはこう言っている』とか言い切ったらそれはそれでなんとなくアリみたいなことになっちまう。テキトー作詞家がハナクソをほじりながらゴミみてぇな歌詞をつけるときは大体このパターンだ」

「あんた、よっぽどその人たちのこと嫌いなのね」

「うっかり話題にあげちまったが議論する価値もねぇ本当のクソだよ連中は。まぁそんなことはどうでもいい。さてもう一方のパターンの話をまだしてなかったな。尚子チャンの場合だ。尚子チャンにおいては、音楽語に関する理解は十分だ。しかしあの子の場合は、音楽語基準で喋ろうとしてしまうからこそ、歌詞が書けない。ある意味じゃ、それは尚子チャンが優秀な演奏家であることを証明しているんだけどな。あの子にとって音楽語はもう、日本語より気持ちを伝えやすい言語になってるんだよ。そして音楽語ってのは、音楽語でしか言いよう

CamScannerでスキャン

のない言葉もたくさんある。だからこそ、それを日本語で言おうとしたときに発音的な違和感が生まれたり、逆に発音が合ってても意味的な違和感が生まれたりして、『これじゃない』ってことになる。それを的確に翻訳する能力は、やはりやらなきゃ鍛えられるものじゃない」

「なるほど……」

視点が違う、と思った。良い語彙が出てこないっていう悩みは、そもそもメロディを理解するっていう能力の低さから来るもの……。なるほどね。その部分についてそれ以上考えないようにしてたところも、あるかもしれないわ。

「……じゃあ、どうすれば良い語彙が出……じゃない、良い翻訳ができるようになるの？」

「はは。その言い直しをするあたり、少しはわかったようだな。その認識の方がグッと実際的だ。『良い語彙が出ない』って言葉は実に嘘クセェ。曲を無視して意味を捏造する気マンマンって感じだもんな。それでいい。お前は曲を無視するバカになんかなるんじゃねぇぞ」

「ええ。もちろんよ」

「この件についての対策はそれぞれこうだ。音楽語の意味がそもそもわかってないお前については『音楽語を知る』のがまず最初だな。そして音楽語がわかる尚子チャンの状態になったら、『キャッチコピーを考える訓練』をしろ」

「キャッチコピーを考える訓練……？」
「そう。キャッチコピーだ。たとえばお前が音楽語を正確に感じ取ることができるようになったとしてだ。失恋ソングのあるメロディの成分を『すれ違い』『共依存』『十代』『プラトニック』『別れ』『激情』という具合に分析したとする。優秀な曲はこういった情報をたったワンフレーズで描き切るわけだ。今のキーワードだけでざっくりだが、頭の中で鳴った曲があるだろ？」
「……そうね。なんかギターで寂しげな雰囲気だけど、途中から伴奏が派手になるみたいな」
「こういった成分分析がどれだけ的確にやれるかが『音楽語を知る』ということだ。そして、それがわかる状態になったら、〝このキーワードのニュアンスすべてを含むキャッチコピー〟を考えろ」
言わんとすることがわかってきたかもしれない。なるほど……？
「あんたが今例に出した……すれ違い、共依存、十代、プラトニック、別れ、激情……これって要するに、中高生の初めての恋愛とか、そういうことよね？」
「そうだな。まぁ絶対99.9パーセント成就することのない初恋だとかそういったものだろう。つまりこの曲――この叙情、情景に、たったひと言のキャッチコピーをつけるとしたら、何が良い？　お前がこの曲を聴きたくなるようなワンセンテンスはなんだ？」
「……なるほど、難しいわね」

ないかしら。

……とは言いつつ、私は思う。難しいけど、これはしっかり考えれば良いのが出るんじゃ

「曲に歌詞をつける順番にこれといった決まりなんて別にねぇが、アタシなりに決めてるこ
とはある。それは、『その曲の一番印象的な場所の歌詞を最初に決める』だ」

「え、歌詞ってそういう書き方なの？」

「お前はどう書いてたんだ？」

「えっと……頭から順に書いてた……けど？」

「そのやり方は今ひとつだ。どんなやり方でもいいとは言ったがな。そのやり方だと、その
曲にとって一番重要な部分を書くところまでにいろんな流れが決まってしまって、肝心なと
ころを〝都合に合わせなきゃいけなくなる〟。それじゃ優先順位がおかしい。その曲の一番
特徴的で、まさにキャッチコピーを当てるにふさわしいところをまずは決めるんだ。そして、
そこに合わせてほかの部分を決めていく。段取りとしてはこっちの方がグッと実際的だろう」

「それは……そうかもしれないわね！」

「曲を１回聴いて覚えてる歌詞なんて、せいぜいワンフレーズかツーフレーズくらいなもん
だ。そしてそここそが、その曲のパワースポットなんだよ。作詞をする段取りは、その曲の
音楽語で語られている本質を見抜き、的確なキャッチフレーズを乗せることだ。それがうま
くできている曲は、〝覚えられる曲〟になる。印象的で、リスナーが『あの曲』と語れるよう

なアイコニックなものになるというわけだ。それこそが、曲がもともと言いたかったことの代弁であり、作詞が目指すところのひとつでもある」

「……うん。なるほど。そうね。その通りだと思うわ」

私の悩み……『語彙力がない』っていうものは、そんな表面上の話じゃなかった。なるほど、でも言われてみればあまりにもそれは的確だわ。…………でも、それだと……。

「……ねぇ詩文、っていうことは、私はまだ音楽語が曖昧にしかわからないし……私には作詞はできないっていうこと……になるわね。音楽語を知るためには作曲……か」

正直、敷居が高い。作曲なんて手に負えないと思う。でも、詩文の話を聞けば聞くほど、その重要性はやっぱり無視できないものだった。

「なんだ、作曲やりたくなさそうだな」

「いや、やりたいとかやりたくないとかじゃなくて……無理だし……」

「向いてないかどうか、やってもないのに言うのはそれこそ不真面目の証拠だけどな」

「…………おっしゃる通りね」

言ってることの意味はわかる。正しいとも思う。……けど、それって詩文みたいなスーパーマン以外立ち入り禁止ってことじゃない。私は……正直自分の出来が良いとは思わない。作

曲なんて、やるまえから無理ってわかる。……でも……私だって、作詞したい。
「ねぇ詩文、あんたみたいな完璧超人にはちょっと理解できないかもしれないんだけど……」
「おう、アタシみたいな完璧超人はそうそういるもんじゃないからな」
「私みたいな普通の人は、作曲ってもう敷居が高すぎて、それだけでくじけそうなのよ……。もう今この時点で心が折れそうっていうか……」
「ほお」
私は、正直に話してみる。ハッキリ言って作曲をやるなんて無謀だわ。音楽語の理解が大事っていうのはわかる。よくわかる。けど……。
「……だったらまぁ最低限、歌うことから始めりゃいいんじゃねぇの？」
「歌……？」
「おう。作詞のアプローチはふたつある。ひとつがアタシみたいな作曲系の『作家型』。もうひとつがボーカルや楽器演奏者といった『アスリート型』だ。このふたつは結構違うが、どうしようもなく作曲が苦手ってんならアスリート型で〝歌心〟を徹底的に体に叩き込むってのも手段のひとつだろう」
「いっぱい歌えばいいってこと……？」
「頭カラッポで歌うってわけじゃねぇぞ。心地良い発音発声とはなんなのかを、それこそプ

CamScannerでスキャン

ロボーカルにでもなるつもりで、演奏家として取り組むんだ。音楽を取り扱えるのはなにも作曲家だけじゃない。演奏家もまた、音楽語を取り扱うスペシャリストだ。どんな角度からでもいいから、音楽語を扱えるようになれ。そうすれば遠からず、音楽語を無視した歌詞なんてむしろ書けなくなるだろうよ」

「……そうか……歌！　ボーカルも音楽語をわかってる人よね！」

「……お前さては、次はボーカルをなめてるな？」

「いや、そんなことはないわ。ボーカルなんて難しそうだけど……でも、作曲以外に選択肢があるっていうのはちょっと救いだわ。ボーカル……なるほど！」

「まぁ、なんでもいいんだよ音楽語を体で扱えるようになったらな。これについては、自主的に勝手になんかやっとけ。手段は問わねぇよ。ギターでもピアノでもドラムでもトランペットでもボーカルでも作曲でも。音楽語のネイティブになるには音楽をやるしかねぇってことだけは、よく覚えておくんだな」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

夕飯のカレーをふたり分私の部屋に運びつつ、一緒に食べる晩ご飯。詩文は終始うまい！って言っていて、なんだかやたらゴキゲンだった。それからあとは、どうやらやったことがな

かったらしいニンテンドーのテレビゲームをやったり。考えるまでもなく一番大きなキャラクターを選ぶあたり詩文っぽかったけど、ゲームは下手くそだった。

「コースの上にバナナ置いたやつ誰だ！　何考えてんだ⁉　あぶねぇだろ！」

「これはそういうゲームなのよ」

「信じられねぇ。今アタシがせっかく気分良くバイクをとばしてたってのに、なんだあのゴリラは。どういうつもりなんだ」

「仕返しもできるわよ？　ほら、そのアイテムを使って……」

「よっしゃ！　見ろ悠！　あのゴリラぐるぐる回ってコースの外に落ちたぞ！　はっはっは！　因果応報だ！　ざまぁみろってんだ猿野郎！　相手を見てバナナ置きやがれ！　あっ！　おい悠！　お前今なんかピカピカ光ってぶつかってきただろ⁉　なんだ今の⁉　反則じゃねぇのか⁉」

「これはそういうアイテムよ。うふふ」

思いの外ハイテンションでプレイする詩文。こんなに大ハシャギするとはちょっと意外だった。詩文のことだし、ゲームなんてつまんねーとか言って冷めた感じかと思ったんだけど。聞けばどうやら、詩文の小さい頃はテレビゲームが家になかったらしい（今はあるらしいし、お父さんからやろうって誘われたりもするらしいんだけど、やったことないとか。な

んだか、複雑そうだった)。
「なるほどねぇー。テレビゲームってのはなかなか、思ってた以上に愉快なんだな。おおっとあぶねぇ! その手にゃのらねぇぞキノコ頭め! ……ゲームも知ってるっちゃ知ってたけど……アタシの中でニャンテンドーっつったら花札のイメージだったなぁ」
「え、なんで花札……?」
「ニャンテンドーといえば花札だろ? 『こいこい』でもするか。アタシはつえーぞ♪」
「こいこい? ってなんかそういう遊び? でも花札ないわうち」
「え……マジで?」
詩文が、心底驚いた声を出す。なんだか、ものすごく非常識なものを見たような顔で。
……いや、今日日、花札が普通にある方が珍しくない……?
「いや、だって、それじゃ正月とか……どうすんだ? ほら、着物着て、『おいちょかぶ』やったり、『花合わせ』やったり……」
「……何それ?」
「え、あれ?」
「…………」
「……もしかしてアレって、やってるのうちだけなのか?」

「う〜ん……ウチもまぁ、私の友達でもあんまりお正月をしてる人はちょっといない気がするけど……。かるたとかは昔はやってたけど」

「そうなのか。お正月に着物着て花札やってるの？　この詩文が？　高校生にもなって？　なにその大和撫子みたいなキチンとした感じ。想像がつかないわ……」

「……そうなのか。あのクソオヤジ、こんなとこにもそんな隔離教育をほどこしてやがったとは。つくづく油断ならねぇ。死んでも帰らねぇからな」

「あんたのお父さん、厳しい人なの？　でもさっき、一緒にテレビゲームしようって誘ってきたとか……フレンドリーな話してなかった？」

「よくわかんねーよ。なんか知らねーけどアタシに関わろうとしてくるんだよあのオヤジ」

「……それは、単純にあんたのことが好きなんじゃない？」

「うえ。そういうキモいこと言うのやめろよ。ムリムリ。ドン引きだわ」

「まぁ、ちょっと気持ちわかるけど。お父さんって距離感難しいわよね。でも、私はお父さん好きよ？」

「へえー。変わってんねぇ」

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「……詩文～……もう寝ましょうよ……」
「まだまだ！　ようやくコツがわかってきたんだから♪　おい悠、起きろ。居眠り運転なんてドライバー失格だぞ。手抜きでわざと負けたりしたら許さねーからな！」
「……うん。わかった」
「試してみたがやはりカートよりバイクだな。こっちの方がアタシらしいぜ」
夕飯のあとのテレビゲームは、なんとあれから7時間ぶっ続けで今深夜3時。普段大体11時には寝てる私みたいな規則正しい生活をしてる人にとって、深夜3時はだいぶキツい。けど、詩文はむしろさらに覚醒している。どうやら普段から夜行性らしい。ハイテンションなBGMが鳴るテレビ画面と、丑三つ時（うしみつどき）に静まり返った窓の外。眠たい目をこすりながらゲームに付き合っていると、ふいに詩文は呟いた。
「……悠、今日はすまなかったな」
「……え、今なんて？」
そのひと言で、私はハッと目を覚ます。
「すまなかったって、言ってんだよ。あと、助かった」

「……………言を選ぶ発言だわ。あんたが、人に気を遣うようなことを言うなんて。」

「なんつーか、いろいろあるんだよアタシも。今日はどうしても、あの家に帰りたくなかったんだ」

「……まぁ、そうみたいね。うん。わかるわ」

その声色は、なんだか詩文らしからぬものだった。どんな家庭にもそれぞれに悩みはあるもの。だと思うけど、詩文がこういう性格になったのはきっと、家庭環境もあるのよね。聞いてる感じ、なんだか謎の多い環境だけど……。

「ふうん。なるほどねぇ。あんたにもちょっとは高校生っぽいトコあるのね」

「ん？　どういうことだ？」

「普段のあんたの話聞いてると、とても高校生とは思えないことばっかりだから。なんか、ちょっと親近感わいたわ。ふふ……あんたと出会った日から考えると、こうやって一緒にゲームしてるのってなんだかおかしいわね」

「それもそーだな。アタシもビックリだ」

「距離感近すぎてつい忘れそうになるけど、あんたってS・i・Eなのよね。それも、改めてつくづく不思議だわ。……はーあ、いいなぁ。アタシもあんたみたいな有名人だったら、どん

なに楽しいかしら」
「有名人？　アタシが？」
「そりゃそうでしょ。だってあんた2万人もフォロワーいるのよ？　ありえないくらい有名人じゃない」
「何を言ってるんだか。じゃあ近所のコンビニの店員に聞いてみろよ。『作詞家のS・iEって知ってますか』って。ほぼ絶対知らねーよ。2万だかなんだか知らんが、そんな数字に惑わされるなよ」
「でたでた、あーあ、これだから勝ち組はいやだわ。余裕に満ちた態度ね」
「……お前さぁ、そんな風に人の目ばっか気にして、楽しいのか？」
「……楽しいか楽しくないかで言ったら、楽しくないわよそりゃ。……けど、気になるでしょ？」
「あんまわかんねぇなぁ。人の目なんてさ、浮気なもんだろ。そんなフラフラしたもんに合わせてたら、それこそくたびれちまうよ」
「……あんたみたいに、そう思い切れたらいいなとは思うけどね。でも、浮いたら嫌じゃない」
「目立ちてーのか目立ちたくねーのか、ハッキリしねぇなぁお前」
「……私もそのへんはよくわかんないのよ。でも、いろんな人に支持されてるって、うらやましいわ」

CamScannerでスキャン

「つまりお前は、あくまで褒められることを前提に目立ちたいわけだ」
「……そういう言い方をすればたしかにそうだけど……いや、そういうのじゃなくて……自分でもよくわかんないのよそのへんは。みんなそうでしょ？」
ゲームをしながら、詩文はしばし黙る。ＢＧＭと楽しげな効果音が鳴る中、ゆっくりと言ったのは、こんな言葉だった。
「……悠、悩むべきことはよく考えろよ。悩みの質は、人間の質だ。つまらないことに悩んでるお前は、つまらないやつだったりするんだぞ」
妙に核心めいた言葉に、やっぱり私は改めて、この女子高生に距離を感じる。言ってることの意味はわかる。わかるけど、こんなことを言う人は、周りにひとりだっていない。
「ねえ詩文……じゃあ、あんたは、何に悩んでるの？」
「アタシに悩みなんてねーよ」
「それは嘘ね。もしそうなら、家出なんかしないじゃない」
「……」
私は、詩文に少しだけ感じた高校生らしい部分についてつついてみる。すると詩文は、一

瞬嫌そうな顔をしつつ、答えた。
「アタシの悩みは……わかるだろ。……アタシが、まだ未成年っていうことだ。悩んでどうこうなるようなもんでもないけどな。退屈で退屈で、毎日死にそうだ。気が狂いそうになる。保護されたいだなんてまったく思ってないのに、保護者がいなきゃ何をするのも許されない。自分の人生なのに自分の人生じゃないみたいで、生きてる心地がしないんだよ」
「へぇ……。なんか、あんたらしいっていうか……。それはたしかに……どうにもならないわね」
「世間を見渡せば、いつまでも学生でいたいとか言ってる中途半端な大人も大勢いるらしいけど、アタシからしてみりゃ心底意味不明だ。〝生かされてる人生〟なんて、そんなの家畜とどう違うんだよ。こんなクソみたいな時間、早く終わってほしいってずっと、思ってるよ」
その話のあと、詩文はまたハイテンションでゲームを続けた。私はそれから数十分後、力尽きて眠りに落ちた。

第6話

自分らしさの話

CamScannerでスキャン

ココロノートNo.75『人生レシピ』

これ入れたら美味しくなるかな
小さく切ったほうが食べやすいかな
強火でさっと炒めよう

ちょっと多すぎるかな
もうちょっと煮たほうがいいかな
スパイスたっぷりぶち込もう

みんな喜んでくれるかな
作りすぎたし、やっぱ残るかな
残ったやつは明日出そう

なんて素敵な人生レシピ

うふふ、どう今の詩？　控えめに言って天才の仕事ね。とんでもないわ。ここにきてまさ

かの自己新とは、自分のポテンシャルにゾッとしてしまいそう。語彙の知識も加わって、いよいよ私の詩も深みを増してきたわ。しかし、どうやらまだ研鑽の余地はあるようね。それにしても、これは声に出して読みたくなる素晴らしい出来栄えだわ。完全にキマってるわね。文字のひとつひとつが輝いているわ。うふっ。なーんてね。これで満足する私じゃないわ。だって、このままいけばもっともっと素敵な詩を書けるようになる気がしてるんですもの！

なんてことを思いながら、教室で過ごす私。授業の内容を追いかけながら、それと同時にそのペンは溢れんばかりのイマジネーションに従っている。今日の調子は特に良いわね。ぶっちゃけ授業なんか聞いてる場合じゃないわ。でも授業も大事ね！　自分が当てられる問題だけさっさと解いて、あとは詩を書いちゃおうかしら？　うふふ♪

~~*~*~*~*~*

「江戸川さん、前、回して」

「へ？」

いつのまにチャイムが鳴っていたのかしら。授業は終わっていた。いけないいけない。い

くら集中力が極まってるからって、ちょっと夢中になりすぎたわ。後ろの席のクラスメイトが、提出ノートを回してきている。私のノートも乗せて、前の席の子に回す。

「ゆーっぷ♪　おっけるっだよーん♪」

「尚子、あんたなんで必要ないときもギター背負ってるの？」

「この子は私がいなきゃ泣いちゃうんだ」

「うふふ……むしろ泣いちゃうのは尚子の方なんじゃない？」

「あははは、そうかも♪」

「……けど、そういうのっていいわね。なんか、相棒って感じで」

「そうかな？　でもたしかに、ギターのない人生はもう考えられないなぁ」

「ふーん。私にとってはそれって、何になるのかしらねぇ」

昨日の日曜日、私は詩文の話を踏まえつつ、だったら私も楽器かボーカルを始めなきゃねと思って楽器屋さんに行ったりした。そこに並ぶさまざまな種類の楽器を見て、私は想像してみたり。ボーカルをやってる私、ギターを弾いてる私、ヴァイオリンを弾いてる私、サックスを吹いてる私、ドラム、ギター、ベース、タンバリン、リコーダー、鍵盤ハーモニカ

CamScannerでスキャン

……カスタネット……。まぁ、要するに、すごい難しそうでどれも私には無理なんじゃないかと思った。
「……ねぇ尚子、ギターって難しい？」
「え？　えーっと……まぁ難しいけど、楽しいよ？」
「ふーん……」
「もしかしてゆっぴ！　ギターを弾いてみる流れ!?」
「いや、いやいや、そんなに食いつかないでよ。ちょっと聞いてみただけ」
もう目がキラッキラして私の腕を掴んで離さないみたいなそんな雰囲気になりかける尚子のテンションをさらっとかわして、私は続ける。
「……例の先生が、楽器かボーカルやれって。作詞をわかるために必要なんだって」
「へぇ――。そうなんだ。じゃあギターをやるっきゃないね。それ以外考えられないね」
「……一応、歌の練習はやってみようかと思ってるのよね。一番なんとかできそうな気がするっていうか」
「おおーゆっぴ、それはなかなか、大それたことを言うねぇ～♪」
「そう？　いや、ギターよりはなんとかなりそうかなって……」
まぁでも、尚子みたいなミュージシャンからしたら〝歌の方が難しい〟とかってそういう感覚なんでしょうね。違うのよ。音楽やってこなかった私からしたら、歌くらいしかマシに

やれるものがないのよ。……とか言ってもまぁ、仕方ないわね。

でも、ちょっとうらやましい。いつもギターと一緒にいて、ギターとセットじゃなきゃむしろ尚子じゃないみたいな、ギターが本体みたいなアイデンティティがハッキリしてる尚子の、そのなんていうか、ブレなさみたいなのがうらやましい。

私にとってのそれは……詩なのかしら。それのない人生は考えられないって言えるようなもの。うん、そういう意味では、私にとって詩はそれに匹敵するものかもしれないわね。まだ尚子ほどハッキリしてるものではないと思うし、ギターみたいな物理的なものでもないけど、私にはそれが大事なものなんだと思う。たぶん。

「——なぁ、なんか変なノート混ざってるんだけど、これ誰の？」

「変なノート？」

教卓に積まれた現国のノート。それを職員室に運ぼうとした日直の山波さんと沢木くん、クラスメイト数人が、なんだかザワザワしている。私と尚子も、その声に耳を傾ける。

「このノート誰のだ？」

CamScannerでスキャン

「誰かが間違って出したんだよね？　ねえ、これ誰のー？」

!?

山波さんが手にかざしている、そのノートに私は戦慄する。それは……そのノートこそは……私の心の雑記帳――『ココロノート』だった……！

「ぁ……ぁ…………ぁ……」

「あれ誰のやつだろうね。ん？　もしかしてあれ、ゆっぴのノート？」

「い、いや、いやいや、私は……まさか。チガウチガウ。……私のじゃないわ。誰のかしら」

「……うわ、すげぇ何？　このノート！　すごくね？　やベーポエムがぎっしり！」

…………！

「ちょっと……ダメだよ勝手に見ちゃ……」

「うわー、これは……これはすごい……これはイタいねぇ～」

……。

「こりゃすげぇな、誰のなんだろ。なー、これ誰のー？」

ココロノートが、私の宝物が、衆目に晒されている。そして、ページをめくられては、口々

に発される言葉。特に男子の声が大きく響く。その言葉はもちろんポエムへの賞賛なんかじゃなく、珍奇なものを見下して笑い者にする、そういうニュアンスに満ちたものだった。

「もう！　ダメだったら！」

「このノートどうする？」

「んー、まぁ、持ち主が取りに来るんじゃない？」

「じゃあ教卓にでも置いとくか」

「うん……そうしよっか。じゃあえっと……誰のかわからないけどこのノート、ここに置いとくから……ごめんね」

！

山波さん！　そのノートをそこに置き去りにしないで！　このままじゃ、人が出入りするたびに手に取られて、笑い者にされてしまう……。けど、どうすればいいの。『私が預かっておくわ』っていうのも変な話よね。どうしよう。どうすれば、この最悪の展開を乗り切れるの!?

万が一にも、あのノートが私のものだとバレちゃまずいわ。そんなことになったら私のニッ

クラームはポエムクイーン江戸前になってしまうに違いない。それだけは断固、断固阻止しなきゃ。でもどうすればいいの？　あれを回収したとしても。もし持ってることがバレたらつまりそれは自供してるようなものだし……どうする……どうすればいいの!?

待って、考えるのよ悠。これは未曾有（みぞう）の大ピンチだわ。どうにかしてあのノートを回収……じゃない。回収はダメ、所持するのはもう危険すぎるわ。あれはもはや、持つものを必ず不幸にするデスノートだわ（死ぬのは私だけだけど）。ってことは、速やかに処分するしかない。そうね、誰にも気付かれずに、あくまで速やかに、人目のつかない場所に葬らなきゃ……ダメ！

私は時間割表に目を向ける。昼休みの今、どうしても人通りが多いぶんこのノートは注目度抜群のホットアイテムになってしまっている。……でも次は体育。次は体育！　これよ！　体操服に着替えてグラウンドに向かうこの流れ。この流れで一番最後に教室を出て……いや！　それではダメ！　きっとクラスの悪ふざけが好きな人が、最後に教室を出る人……つまり犯人に注目してしまっているわ！

いや、しかし悠。あなたはひとつ、この状況を打破する究極のステータスを持っているわ。それは学級委員であるということ。そうよ、私は、別に真面目ってわけではないけど真面目キャラを印象付けるためだけに学級委員になった経緯がある。そして、体育の前に教室の鍵

を閉めるのも学級委員である私。つまり私は、必然的に最後のひとりになるという状況を作ることができるわ。やった！　その手があったわ！　よし、よし、よし！　これならイケる！

もはやデスノートと化した私のココロノートは、昼休みが終わるまで散々、クラスの暇な人のおもちゃにされてしまった。いたたまれなくなった私は教室を出ようとも思ったけど、でも、ノートの行方を見守らなきゃいけないのもあって、その笑い声に耳をふさぎながら、自分の席に居続ける。その永遠とも思える最悪の時間は、たった10分だったというのに私には2時間にも感じるほどの責め苦だった。

……そして、地獄からの夜明け、体育の準備で着替え始める女子生徒たち。1組が男子更衣室で2組が女子更衣室。こっちが女子側で本当によかったわ。万が一にも男子側だったら、このノートはさらに男子の遊び道具にされてしまうところだった。

そして、学級委員である私はあくまでしれっと、そしらぬ顔で、まるでノートの件なんてそもそも知りませんよみたいな顔で、クラスメイトが着替え終わり、グラウンドに向かうのを待つ。

「ごめんねゆっぴ、私とろくて……お待たせ！」

「……」

よりにもよって最後が尚子とは。これじゃ最後にひとりでノートを処分するって流れにできないじゃない。ど、どうしたものかしら……。

「いこ、ゆっぴ♪」

「うん……」

ああ！　どうすればいいの⁉　このままじゃ……またあのノートが……！

考えるのよ悠。尚子と一緒にグラウンドに行くまでに、もっと考えるのよ！　どうにか、どうにかして教室に戻って……あ！

「尚子、私トイレ！」

「え？　あ、そう？　じゃあ待ってるよ？」

「へ⁉」

トイレって言ってるんだからさっさと先に行きなさいよ！　なんて空気の読めない尚子なの⁉

「い、いや、でも、あの、トイレなんだけど……」

「どしたのゆっぴ？　具合悪いの？」

「大きい方だから時間かかるし尚子は先に行ってて！」

「……あー、うん。そっか。じゃあ行ってるね」

………。

ふぅ。なんとか尚子を追い払ったわ。しかし何かしら。私なんだか、何かを失った気持ちでいっぱい。うふふ。

「いや、そんなことを言ってる場合じゃないわ！」

そして私は、大急ぎで教室に戻り鍵を開ける。そして手にしたノートを、教室のゴミ箱の底の方に押し込んで、さらに別のゴミを上に被せて、まず発見されないようにしてから、再び教室をあとにした。

……ふぅ。これで安心。あとは教室のゴミ当番がゴミ袋を焼却炉に持っていけば、完全犯罪は成立ね。持ち主不明のまま闇に葬られるコースが決定したわ。危ないところよまったく。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

体育は持久走だった。持久走とかいいながら、まぁ校舎の外周をダラダラと散歩するみたいな、高校生特有のダラけきった持久走。ご多分に漏れずただ歩いているだけの私は、でもクラスメイトとおしゃべりするわけでもなく、さっきの件について考えながらひとりで黙々と歩いていた。

……しかし、考えてみればあのポエムノートはイタさの極みだったわ。クラスのみんなの

反応もうなずける。これが噂の黒歴史ってやつなのね。自分では無自覚だった分、気づいてみたらこんなに恐ろしいものってないわね。とんでもない爆弾を持ち歩いていたものだわ。そういえば卒業文集とかでも、妙に感動的なことを書いてる人って結構いたけど、あとで読み返すと悶絶（もんぜつ）モノの黒歴史になってるものなのよね。はからずも、私もそれを日々書き溜めていたのかと思うとそら恐ろしい。そういえばＳＮＳの日記とかも似たようなことになってるわよね。ああこわいこわい。とんでもない危険物を私は生み出していたのね。

思春期には、哲学的なことにハマることは多いんだと思う。けどその様子って、周りから見たらヤバいくらい滑稽（こっけい）なのよね。これが噂に聞く中二病というやつ。日頃から、ああはなるまいと思っていたけど、まさかこの私が中二病をこじらせていただなんて。考えれば考えるほどゾッとする話だわ。

でも、このタイミングで気づけた私はギリギリセーフね。危ないところよ。作詞をするにしても、中二病全開のイタい歌詞なんて目も当てられないわ。なるほど、言われてみれば私の歌詞はそういうニュアンスもなくはなかったわね。詩文が私の歌詞を見て酷評（こくひょう）したのも、つまりそういうことなのかしら。ああ、何もかも合点がいくわ！　つまりそういうことだったのね！

ダラダラとした持久走。しかし私は、新しい自分になったその喜びと、イタかった自分に

CamScannerでスキャン

別れを告げるように、ちょっと元気に走り出す。ええ。これにて一件落着ね！

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「……いやぁ、あんまりおもしろいからついついアタシも買っちゃったよあのゲーム！　昨日も徹夜でやってしまった。ありゃあいい暇つぶしになりそうだ。タイムアタックがおもしろいんだよ。こう、ゴースト？とかって自分の最高記録と比較して勝負するんだけどさ、ほかでもないこのアタシ自身が相手だからツエーのなんのって！　やはりもっとも恐るべき敵は自分だな！」

「どんだけハマってんのよあんた」

いつも通りの喫茶店バードランド。『暇つぶし』とか言いながら、なんだかんだで作詞レッスンをしてくれている詩文は、でもそろそろ飽きてきてるみたいな気配も若干漂わせる雰囲気で、作詞とは関係ないただの雑談に花を咲かせている。16時からかれこれ2時間強。もう外も真っ暗になっている。……まぁ、ゲームの話も楽しくないわけじゃないから別にいいんだけど、今日は作詞の話とかしないのかしら……？　そろそろ私、帰らなきゃいけないんだけど……。

「ねぇ詩文、作詞のレッスンは次はどういう内容なの？」

CamScannerでスキャン

「えっ？　あー、やる？　めんどっちぃってあんた……めんどっちぃなぁ」
「あー、次はあれだ、えーっとなんだっけ？『韻と母音』についての話か」
「でも、今日はもういい時間になっちゃったわね……」
「まぁそういう日もあっていいんじゃねぇの？　大丈夫だよ、お前はたぶんまともに作詞をできるようになるさ。アタシの見立てではね」
「……そう？　なんかそういう見通しがあるの？」
「だってお前、詩集書いてるだろ。そういうやつは大丈夫さ」

！

「詩集……はは……そ、そんなもの書いていたかしら？」
「は？　なにすっとぼけてんだ。この前読んだやつ。あれが大事なんだ。ちょっと貸してみろよ♪」
「いやいや、私は詩なんて書いてないわ。なんの勘違いかしら？」
「……お前さぁ、そうやって恥ずかしがって自分の作ったもの見せない癖、いい加減どうにかしろよ。面倒くさいんだよ」

「だから、書いてないって言ってるでしょ!?」
「書いてただろ!　なんでわけのわからん嘘をつくんだ!」
「……ああ、あ～。あのノートのこと。あれね。あれ、捨てたの」
「は……?」
詩文が、すっとんきょうな声で驚く。そんなに驚くようなことかしら……?
「いや、だってあんなの黒歴史じゃない。クオリティ低すぎっていうか、誰かに見られる前に自分で闇に葬ったのよね。いやぁ、あんなのを自慢げに書いてたなんて、ホントにイタいわ。危ないところよまったく。っていうか、詩文も気づいてたんなら言ってくれればよかったのに」
「どこに捨てたんだ!?」
「え?　そんなのどこでもい――」
「どこに捨てたんだって聞いてんだ!　……もう回収されちまったのか……?」
「いや……まだ。……だと思うけど……」
詩文の焦った様子に、なんだか虚をつかれるというか、こっちこそ少し驚く。何をそんなに焦っているのかしら……?
「そうか……よかった……。――どこにある?」
安堵のため息みたいなのをしたあと、えぐるような上目遣いで私を睨みつける詩文。……

な、何？　ちょっと、怖いんだけど。

「何あんた、さては……！　あのイタいノートを脅しに使うんじゃないでしょうね⁉　そうはさせないわ！」

「ふざけたこと言ってないでさっさと教えろ。どこにあるんだ」

――詩文の声のトーンが、明らかにいつもと違う。詩文が迫力のある声を出すのはたまにあることだったけど、今のひと言はこれまで聞いたものとは質が違う。その声は低く、重く、冷たく、なんの冗談も通じないものだった。

「……き、教室の……ゴミ箱の中だけど……。何よ、なんで怖い顔してるのよ……？」

「行くぞ」

「行くってどこに？」

「教室に決まってんだろうが」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

すっかり外が暗くなった夜19時。今から帰るところだったけど、詩文はズカズカと歩いて

喫茶店のお会計を済ませつつ、私を待たずにどんどん行く。止める隙もなかった私は、しぶしぶ詩文のあとを追った。

19時の学校は、部活の生徒もすでにみんな下校したあとなのか、完全に夜の佇(たたず)まいだった。暗がりにそびえる校舎の中、廊下を照らすのは緑色の非常口のランプ。それは、外から見てるだけでもかなり不気味で、まさかこの中に入るなんてちょっと正気じゃない。そういう怖さもあって、私は中に入ることにかなり抵抗を感じていた。

「……ねぇ詩文、やっぱり帰りましょ？　っていうか、こんな時間に来ても、学校開いてないでしょ？」

「大丈夫だ。合鍵を持ってるからな」

「なんでそんなの持ってるのよ」

「借りたときに近所の金物屋で複製した」

「いや、ダメでしょそれ。どう考えても」

……ほんとこいつ、呼吸するように非常識ね。

「アタシの行動範囲はアタシが決めるんだよ。大丈夫、ちゃんと戸締りして帰るから」

「そういう問題じゃないでしょ。なんであんたって――」

「――さっきからうるせぇぞお前。ガタガタ言わずについてこい。2年2組だったな」

CamScannerでスキャン

「っ……」

思わず声を詰まらせる。詩文の目と声は、どっしりとした怒気のようなものをはらんでいた。その物々しい様子は、いつか聞いた3年生のクラスで起きたらしい『皆殺し宣言』の噂を思い出させる。なんだか詩文は妙によそよそしくて……そう、まるで、初めて会ったときみたいな強烈な敵意をふくませて、私に言葉を投げつける。……めちゃくちゃなことに付き合わされている私だし、帰ろうと思ったら帰れなくもないんだろうけど、夜の校舎に入る恐怖よりもっと、詩文のただならぬ気迫は私の行動を制限していた。

――そしてたどり着く、私のクラス。2年2組の教室。ドアを開けると、詩文はゴミ箱にまっすぐ向かい、そしてそれを放り投げるように乱暴に中身を床にぶちまけて、ごそごそとノートを探した。

「…………あった」

……。

変な空気が漂う。何？　詩文は何がしたいの？　そのノートに一体なんの用があるのよ。だいたい、そのノートを私がどうしようと詩文には関係ないじゃない。

「本当に、ゴミ箱に捨てたんだな」

「そうよ。悪い？　そんなのただの黒歴史よ。稚拙（ちせつ）で粗末な落書きよ。っていうかネタで書いてただけのやつだし。むしろちょうどよかったわ。誰かに拾われる前に焼いて完全に——」

パシン……ッ！

「えっ……？」

一瞬の出来事に、私の頭はついていかない。振り向きざまの詩文の、体重の乗った重い平手打ちが私の頬を打った。ほとんど拳に近いような、チラッと星が飛ぶほど強烈なその一撃は、私に尻餅をつかせ、メガネを床に弾き落とした。

「……えっ……え？　な、なんで……」

「いいか！　これから先、誰に何を言われても！　絶対に！　自分の作ったものを、捨てるな——！」

わななきながら、声を震わせて叫ぶ詩文。いつものあっけらかんとした、人を食ったような態度の詩文からは想像できないくらい、その声は怒りと、どこか悲しげなものに満ちていた。血が逆流してるんじゃないかと思うほど激怒したその表情は、私を震え上がらせるには十分すぎるほどだった。

CamScannerでスキャン

息を少し整えた詩文は、続けざま吐き捨てるように言う。

「……おおかた、クラスメイトに見つかって茶化されたとか、そんな理由だろ。バカバカしい。バカバカしすぎて反吐が出る。茶化した連中も、そんなのを真に受けてこれを捨てたお前も！　見損なったぞ悠。お前がここまで馬鹿だったなんてな」

「……だって……そんなこと……言われても……」

頬の痛みと、気圧されてすくむ体と、震える声と、涙が流れるのとで、私はまともな返事もできない。でも、もし普通の状態でも、私には返す言葉が何も見つからない。……だって、私もそう思ってるから。そんなみっともない理由であのノートを捨てる自分に疑問がなかったなんて、そんなわけない。

けど――。

「もう……勘弁してよ……ただでさえ恥ずかしさでっ……死にそうなの、に……なんでまだ怒られなきゃいけないのよ……」

教室の床にへたり込んだ私を重く見下ろしながら、詩文はココロノートをペラペラとめくる。私が鼻をすする音と、ページをめくる音だけが、教室に響いていた。

そしてその静寂をそっと破りながら、詩文は言った。

「……創作が恥ずかしいのは、『自分らしい』からだ。逆に言うと、自分らしくないものを人に見られるのはまったく恥ずかしくない。だってそれは『借り物』だからな」

私の前に、あぐらをかいて座る詩文。そして詩文は覗き込むようにして私の顔を上げさせると、さらにこう続けた。

「お前は、人に見られちゃ恥ずかしいような本当の自分を、このノートに綴ってたんだろ。だったら、お前はこれを捨てちゃダメだ。お前がお前の心を裏切って、お前らしさをゴミ箱に捨ててしまったら、もう二度とそれは蘇らない。命に代えても守らなきゃいけないもの、それがこのノートであり、お前自身だ」

「…………」

「……良い詩じゃないか、お前らしくて。ダサくて幼稚で、夢見がちで、見栄っ張りで。……でも、憧れに満ちてる、お前そのままの詩だ。大事にしろよ」

詩文の口から出た初めての優しい言葉は、そんな言葉だった。私は詩文からココロノートを受け取ると、ノートがしわくちゃになるほど、強く抱きしめた。

「ごめん……ごめんね……」

こぼれ落ちる涙が、ノートを濡らす。何に対する謝罪なのか、でも、口をついて出たその言葉はたぶん、自分への言葉なんだと思う。私が——臆病な私が、人の目を気にして捨ててしまいそうになったもの。それをもう一度抱きしめる資格のない私は、それでもやっぱりこのノートの中にいる自分を愛している。そのどうしようもなさと、恥ずかしさと、情けなさと、そして、また一緒に居られるという嬉しさで、私は何度も、ごめんねと繰り返した。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

「ねぇ詩文……先輩」
「なんだ、急に後輩風吹かせて」
「後輩風って……初めて聞いたわそのワード」
帰り道、泣き止んで落ち着くまで私を待っていてくれた詩文になんて言えばいいのかわからず、気恥ずかしさでしばらく黙っていた私は、そんな言葉で話しかけた。
「……尊敬できるようになったら勝手に先輩って呼べって、あんた言ってたでしょ。……言ってましたよね。あの……。今日はありがとうございました。私、先輩のこと誤解してました」
「おいおい、なんだ気持ち悪い。すっかりリスペクトモードじゃないか。ついにアタシが尊敬に足る素晴らしい先輩であることに気づいてしまったのか？」

「はい」

「…………」

「私、嫌だったんです。詩文先輩みたいな、好き勝手やってるわがままで自分勝手で人のこと考えてない人、最低だと思ってたんです。けど、先輩ってそれだけじゃないんですよね。もしかしたら、一番人のこと考えてるのは、先輩みたいな人なのかもしれないなって」

「買い被りすぎだよ、何を言い出してるんだ。手の平返しが華麗すぎるだろ悠。落ち着け、アタシはお前が思ってるような聖人君子なんかじゃねぇよ。アタシは冷たいやつだ。下手に的外れな尊敬をされても、きっと期待外れになっちゃうぜ」

「それでもいいです。私が尊敬するって決めたので」

「……へー。そう。…………じゃあ、好きにすればいいんじゃねぇの」

「はい。明日からも作詞のご指南、よろしくお願いします」

「……調子狂うけどま、よろしくどーぞ」

私は、深々と腰を折って今日のお礼を言った。改めて、今度こそ本当に、流れやなんとなくじゃなく作詞家SiE……詩文先輩の弟子になった私。この人から教えてもらえることは、きっと私の想像をはるかに超えることなんじゃないかと、この夜、そんな予感がした。

CamScannerでスキャン

第7話

歌い心地とナンセンスの話

CamScannerでスキャン

「ゆっぴ!? どうしたのその顔!?」
「え? ああ、これ? なんでもないわ。ちょっとね」

翌朝の学校。私の顔を見た尚子は大げさな声を上げた。それもそのはず。昨日の夜、詩文先輩から強烈な一発をもらってしまった私の頬は、昨晩から今朝にかけてバッチリ腫れていた。まぁ、一晩しっかり冷やしたからもうどうってことないんだけど。
「もうはがしても平気かしら……? イタタ……ほら、なんともないでしょ?」
「……ああ、たしかになんともなさそう……だけど、どうしたの? 誰かと喧嘩でもしたの……?」
「大したことじゃないわ。これはなんていうか、愛の鞭みたいなものなの」
「あ、愛の鞭……?」
「ええ。むしろ感謝しかないわ」
「……な、なんかよくわかんないけど、平気なんだね……? ま、まさかゆっぴ、変な趣味に目覚めたとか……?」
「目覚めたといえば、まさに目覚めた感じね。今までの私は本当にダメダメだったわ。まるで生まれ変わったような気分よ」
「そ、そうなんだ……? とにかく、あは。なんかよくわかんないけど元気ならよかったよ!」

CamScannerでスキャン

チャイムが鳴り、授業を受ける。そのあいだも、私の心はずっと上の空だった。どう言えばいいのかちょっと難しいけど、なんだか、言葉にできない決意めいたものというか、やってやるぞーっていうか、そういう抑えきれないエネルギーでいっぱいになってる。

——今度こそ私は、本当に本当の意味で、作詞家S・i・Eに弟子入りする。

流れのままになしくずし的に習い始めた作詞レッスンだったけど、ここで仕切り直しだわ。あの詩文先輩から作詞を伝授していただく限りは、私も立派な弟子としてあるべき態度じゃなきゃいけない。一言一句をしっかり噛みしめて、身につけていきたい。今までの非礼をどう詫びればいいかしら。それこそ切腹モノの無礼をしきりにはたらいてた気がするけど、まずはそこからね。

＊～＊～＊～＊～＊～＊

授業が終わるやいなや私は、可能な限りを尽くした最速の段取りで喫茶バードランドに向かう。万が一にも詩文先輩を待たせるわけにはいかないわ。

「……はええな悠」
「はい。授業が終わった瞬間走ってきました」
「は？　なんで？」
「先輩を待たせるわけにはいきませんから。あ、イチゴミルクこれ、今来たばかりのもので私まだ飲んでないので、先輩どうぞ」
「……なんだ、めちゃくちゃ気持ち悪いんだが」
「いえ、むしろ今までがおかしかったんです。正しい態度で学ばせてください」
「いやいや、昨日までと同じでいいだろ別に。その変な敬語ブームはやめろ」
「今までいろいろ失礼なこと言ってしまってすいませんでした。改めて、作詞のご指導よろしくお願いします」
「話聞けよお前」
「そ、そうだ、今日は『韻と母音』についてですよね！　これってどういうお話なんですか？」
「はぁ。なんかお前にしちゃ妙に頑なだな。……まぁどうでもいいか」
詩文先輩は露骨にうっとうしそうな顔をする。どうやら私の敬語が気に入らないらしい。
……まぁ、信じられないくらい無礼な後輩だったし、それは仕方ないわね。少しずつ名誉挽回していかなきゃ。

CamScannerでスキャン

「よし、じゃあ今日の作詞レッスンとやらをしてやるぜ悠後輩。『韻と母音』について。ここは作詞テクニックの中でも特に音楽的なラインだ。ちなみにお前、カラオケは好きか？」
「えっと……得意かどうかはわかりませんけど、どちらかというと好きです」
「カラオケで、どんな曲を歌う？」
「そうですね……えっと……」

これは何を聞かれてるのかしら。曲によって正解とかあるのかしら？　でもまぁ、考えても仕方ない気がするわね。私がカラオケで歌う曲……。

「……きゃりーぱみゅぱみゅとか……ですかね。《ファションモンスター》とか」
「お？　思ったよりナウいチョイスだな」
「ナウいって……まぁ、カラオケって盛り上がる曲の方が楽しいですし」
「なるほど。じゃあ聞くが、きゃりーぱみゅぱみゅの何が良いんだ？　盛り上がるとかっていう周りの事情は抜きにしてだ。何が良いのか言えるか？」
「え……えっと……」

……何が良いか？　え、えっと……何が良いか⁇　何がって……なんか、漠然と良い曲っていうか、そんな感じだと思うんだけど……？　なんか歌ってて楽しいし……。

「……歌詞が良いですよね」

「は？　歌詞が良い？」

「あ、あ、いや、今のは違います。えっと……」

「そうだな。実に良い歌詞だ」

「ですよね！」

「どこがどう良いんだ？」

「……その……えっと……」

ああ、なんかつらい。いや……もうこれダメね……。

「いや、すいません。わかりません。なんか漠然と良いっていうか……バカみたいなコメントなんですけど……なんか歌ってて気持ち良いっていうか――」

「それだよ」

「え⁉」

「きゃりーぱみゅぱみゅに限った話じゃないけどな。カラオケで歌いたくなる曲は大体の場合、〝歌い心地が良い〟んだよ」

CamScannerでスキャン

「歌い心地が良い……まあ、それはそうですね」

「まるで当たり前のような、でも実は曖昧なこの話が、今日のテーマだ。『歌い心地の正体』とは何か。これを具体的に明らかにしていく」

「はい！　よろしくお願いします詩文先輩！」

「──ちょっと待った。……やっぱりやめだ。っていうかもうレッスンもやめだ」

「え？」

詩文先輩が、なんだかすごく不機嫌そうにしている……？

「あの……え？　なんでですか……？　どうしたんですか……？」

「さっきから気に入らねぇんだよ。てめぇの態度が」

「…………」

詩文先輩は、間を置いてこう言う。

「……お前にはきっと見えねぇものだし、言ったところで仕方ねぇことだとも思うけどな、そのくだらねぇおべんちゃら混ざりの敬語をやめろ。まるで〝あいつら〟みたいだからな」

…………？　あいつらって……？

「お前のハラん中で起こってることついてはまぁ大体察しがつくよ。どうせ昨日のことが発端なんだろ？　アタシに対する印象が変わったのについてはお前の中で勝手にそう思っと

け。でもな、アタシは、そんな風に尻尾を振ってキャンキャンと嬉しそうに、なんの疑いもなくアタシの話を鵜呑みにするだけのバカになっちまったお前に、使ってやる時間なんてねぇんだよ」

「……いや、そんなことはな——」

「お前、アタシに〝弟子入り〟でもしてる気でいるんだろう？　自分の正しさをないがしろにして、アタシの言うことをなんでもかんでも真に受けるってことにしたんだろ？」

「……それは」

「アタシが言った『自分らしさを放棄しない』ってのは、こういうことも含むんだよ。アタシのやり方やアタシの教えたことをそのまま正しいと思えば、お前がラクなんだろ？　責任とらなくていいもんな。自分の気持ちよりお師匠様のお言葉が優先か？　変だとは思わねぇのか？　『たとえ間違っていると言われても自分らしくありたい』とは、思わねぇのか？　なんでそうやって簡単に自分らしさを手放そうとするんだ。昨日の話、何もわかってねぇんじゃねぇか」

「……」

「…………」

「…………」

「じゃ、帰るわ。邪魔した」

「詩文お願い[illegible]――待って――……待って続けて」

「…………」

「……ごめん、私、その……影響されやすいから……でも……教えてよ……作詞」

私は、席を立ってしまおうとした詩文を制止……詩文の服の袖を掴んで、そう小さくこぼした。

「…………」

「よっしー　じゃあ敬語禁止なら♪　それだったら教えてやってもいいぜ♪　ガンガン鍛えよー　アタシの言ってることなんて全部ザマタモだと思っちまえー」

「あ……はは……そう、だ……ん……うん」

機嫌良く座り直した詩文は、笑顔でそう言った。その様子に私は胸をなでおろす。

……生徒や弟子、後輩として真摯な態度でレッスンに臨めば、喜ばれるんじゃないかと思ってた。その関係がむしろ正常だと思ったけど、詩文が怒ったのは、私の思考にはまったくない部分だった。……でも、言われてたしかに私は思い出す。ほんの数分前、私は何もかも詩文の言う通りにやろうとしていた。それは、ポジティブな気持ちだったとしても実際としては「自分らしさの放棄」だったのかもしれない。……けど、それはそれで私の意思だとも思う。けど……考えることをやめようとしてたっていうのも実際で………。

……複雑な気持ち。けど、これでいい気も、しなくはない。でも、こんなに本気で怒るよ

うなことなのそれ？　わからないけど、詩文にとってそれはものすごく重要なことらしかった。

「アタシはアタシ、お前はお前だ。その上で、偶然アタシが知ってる作詞についての技術的な話を奇縁(きえん)のよしみで教えてやる、ただそれだけのことだと、頭の中で再確認しておけ」

「……ええ。わかったわ詩文」

「うん。この方がよっぽど正常だ。トンとくるね。……さてさて、何の話をしてたんだっけ？　我がマブダチの悠よ」

「……えっと……なんでし……だったかしら……」

突然の急ブレーキで、さっきのことを忘れてしまった。なんだっけ……？　なんかカラオケの話とかしてたような……？

「……思い出したわ。『歌い心地の正体』とかっていう話じゃなかったかしら？」

「おお、それそれ」

詩文はイチゴミルクをグイッと飲むと、続きを話す。

「歌い心地においてポイントになる部分は、主にふたつ。それは『共感性』と『発音快楽』だ」

「共感性って……あれよね。共感できる歌詞、みたいな……？」

「まぁそうだ。それについては特に説明する必要もないだろう。この歌詞わかるわーとか思

CamScannerでスキャン

いながら歌ってる気持ちのとき、『共感性』の部分でその曲を心地が良いと感じる」

「ええ、わかるわ。中島みゆきの《ファイト》とか、めちゃくちゃ共感しながら歌うし」

「今日話すのはその共感性とは違う、〝歌詞ならではの音楽的な部分〟だ。それがさっき言ったもうひとつのポイント『発音快楽』だ。少しでも歌詞を書いたことがあるお前ならきっとわかることだと思うが、歌詞を書いてるときに『この部分はアで伸ばさなきゃダメだ』みたいなことを思ったことはないか？」

「ええ。あるわね。歌い上げるところとかはやっぱり、その方が良さそうな気がするっていうか」

「本当に深刻なクソ作詞家になってくると、そこをまさかの『ん』で伸ばしたりする。本当によっぽどそれが意味があって効果的な事情でもない限り、これはアホのやることだ」

「それは、素人目に見てもひどいわね」

「さてさて、〝歌って気持ち良い母音〟。それを確定させるのが今から教える『母音検索』というやつだ」

「母音検索……？」

「これは実際にやってみた方が早い。悠、尚子チャンの曲を出してみろ」

「え？　うん……？」

詩文に言われるまま、私はスマホの中に入れていた尚子の曲を用意する。

「さて、この曲にはまだ歌詞がついていないよな?」
「そうね。前の歌詞はボツだし」
「一昨日、曲の一番大事な部分を先に決めるってなことを言ったが、それと同時にこれもやる必要がある。歌詞を書く工程の下ごしらえのもうひとつ。ある意味じゃもっとも重要な"音楽的工程"だ。さーて、悠、この曲を母音――つまり『あいうえお』と『ん』だけで、歌え」
「え、歌……うの?」
「大丈夫だ、どうやら今は客もアタシらだけみてぇだしな」
「え、ええ……?　でも……」
チラッと周りを見てみると、たしかに今は空いていて、お客さんは私たちだけみたい。
……でも、急に歌えって言われても……。
「早くしろよ」
「え、ちょ、ちょっと待って、まだ心の準備が……」
「はい、再生した。おー始まるぞー!　イントロが終わるまでに心の準備を済ませろ!　使って良い言葉は『あいうえお』と『ん』だけだからな!　ほら、さんはい!」
「えええええ!?」
詩文がそう言い終わるのとほとんど同時くらいにAメロが始まる。そして私は……。
「……あいあう　いーおいえー……あんおあ　えーえうえ……」

小さい声で、歌う。

「声が小せぇなあ。喫茶店ってロケーションはそもそも作詞に向いてねぇんだよな実際。……おい悠、ちゃんと歌え。聴こえねぇぞ」

「……っ！　あーうーう　うえーえーあー　ああいあえう」

「そうそう、その調子だ♪」

店内に響き渡る私の、なんだか奇妙な歌声。詩文の叔母さんがすごいこっち見てるけど、怒られないかしら……。ああ、今このタイミングでお客さん入ってきたらどうしよう……。私相当変な人だと思われるんじゃ……。

「いいぞ！　おーおー、思ったよりいいじゃん♪　そうそう、その感じだよ！」

サビに差し掛かると、曲調と音程につられて歌い方も力強くならざるを得ない。もうこうなったらトコトンだと思った私は、キッと覚悟を決めて最後まで歌い切る。

「ああいあいうえ　いあおおーいうお　あーいあう　うーいえ――……！」

「ピュー！　こいつはいいや！　叔母さん！　このとびっきりのパフォーマーにチョコパフェを出してくれ！」

「……はぁ。あっつ……」

体の芯から恥ずかしい。たぶん今ありえないくらい顔赤いと思う。……ほかにお客さんいなくてホントに良かった。詩文のことだし、もし居たとしても普通にこれやらせたわよね

……。そういう意味ではラッキーだったけど……はぁ……顔が熱い……。
「いい歌いっぷりだったじゃないか。思った以上に良かったぞ」
「いや、ホントそういうのいいから。で、今の何だったの？　ほんとにやらなきゃいけないことだったの……？」
「もちろんちゃんと意味はある。お前が今歌ったのは、『この曲の答えのひとつ』だ」
「……どういうこと？」
いや、わかる。わかるかもしれない。今歌ったのがこの曲の答えのひとつ……。それって……。
「……母音だけで歌って、〝気持ち良い母音を検索する〟……っていうことね」
「おお、説明しなくてもずいぶん合点がいったようだな」
歌ってみてわかった。メロディには、気持ち良い区切りかたや、伸ばしたい母音っていうのがある。歌詞から書き始めたらついつい無視しちゃってたけど、これってめちゃくちゃ大事な部分だわ。
「……つまり、こうやって〝発音快楽として気持ち良い母音〟をまず決めて、そこから歌詞を決めていくっていうこと……？」
「まぁ、ざっくり言えばそういうことだな。さっきも言ったがこれを『母音検索』という。

CamScannerでスキャン

母音検索をすれば、その曲の、〝発音していて気持ち良いトコ〟がハッキリするってわけだ」

「母音検索……なるほど、たしかに……」

「このテクニックを踏まえた上で、その『あいうえおん』に当てはまる言葉をとにかくなんでもいいからぶっ込んでみろ。するとおもしろいことがわかるぜ。何の筋も通ってなくても、〝漠然と歌い心地だけは良い曲〟の出来上がりだ」

「……そんなことってあるの？」

「それがあっちゃうんだよ。なぜならそれは、単なるハミングの一種だからな。気持ち良い母音にさえなってりゃ気持ち良いに決まってる。だからこそこの工程は〝音楽的〟なんだ」

「………なるほど」

「さて、発音快楽ってのが少しずつわかってきたと思うが、今からする話は発音快楽の世界のもっと深みの話だ。そういえばお前、きゃりーぱみゅぱみゅの曲をカラオケで歌ったりしてるんだよな？」

「ええ。良い曲よね」

「じゃあ聞くが、《ファッションモンスター》ってなんだ？」

「え……」

「《にんじゃりばんばん》でもいい。あれは一体何だ？　どういう意味なんだ？」

CamScannerでスキャン

「いや、意味っていうか……」
「これについてわかってないのは、作詞をする上で致命的な分析力不足と言っていいだろう。この概念を知ってるか知ってないかはまさに天地の差だ。ちなみにこの手法はもっと昔から、というかたぶん歌詞というものがこの世に生まれるよりもっと以前からあったものなんじゃないかとアタシは推測する」
「……ちょっと言ってることがわからないんだけど……？」
「ザ・ブルーハーツの《リンダリンダ》は知ってるか？」
「ああ、なんとなくだけど知ってるわ。リンダリンダーってやつよね？」
「まぁ有名な曲だから大体の人は知ってるだろう。でも、リンダリンダってどういう意味なんだ？　冷静に考えたら意味わかんねぇ歌詞だよな？　なにがリンダリンダなんだよ」
「…………いや、私に聞かれても……わかんないけど、あれはそういうものなんでしょ？」
「その通り。《リンダリンダ》もそう。サザンオールスターズの《勝手にシンドバッド》もそう。アニメソングでいうなら畑亜貴が作詞を手がけた《もってけ！セーラーふく》もまさにこれに分類するな」
「……なんとなく、似てるのはわからなくはないけど」
「これが発音快楽の極み——『ナンセンス』だ」
「ナンセンス……？　って、どういう意味だったかしら？」

CamScannerでスキャン

〝意味はないけど気持ち良い〟。それがナンセンスだ。ナンセンスについて語るなら、赤塚不二夫というナンセンスの巨匠について触れておかないとな」

「赤塚不二夫って……『おそ松さん』の？」

「おそ松さん？　おそ松くんだろ？　まぁそれだ。……赤塚不二夫といえば、『おそ松くん』に『ひみつのアッコちゃん』、そして代表作『天才バカボン』を生み、日本中に〝シェー〟の大旋風を巻き起こした昭和の巨匠だ。あらゆる他作品のキャラクター、数多の芸能人、ゴジラ、果ては当時10歳の皇太子、徳仁親王殿下までが〝シェー〟をしたっていうのは、今から考えても想像を絶するムーブメントだよな」

「……こ、皇太子が……シェーしたって……？　……マジなの？」

「『ナンセンス』ってのは、意味がなくて、それでいて発音すると気持ち良い。それだけであり、それ以上何か特別な意味がついた時点で偽物になる。それが『ナンセンス』の基本だ」

「な、なるほ……ど……？」

「もっと最近の例を出すならお笑い芸人なんかはわかりやすいな。小島よしおの『オッパッピー』や、ピコ太郎の『PPAP』、ダンディ坂野の『ゲッツ』、志村けんの『だっふんだ』。これらのギャグはナンセンスギャグといって、〝意味はないがなんだか気持ち良い〟に特化している特殊な芸風だ。なんでも理論立てて考えて整合性ばかりを重んじるタイプの人の中には、この『ナンセンス』がどうしても理解できず、楽しめないって人も結構いる。〝意味が

ない〟ことに耐えられないらしくてね。けど、このナンセンスこそはものすごく原始的に快楽に直結してるものだ。

……なるほど。ナンセンス。発音するのが気持ち良いだけでまるで意味がない言葉。そういうのはたしかにあるわね。なんか、子供の頃とかそういうの私もいっぱい言ってた気がするわ。

「さてと、このナンセンスがなぜ歌詞を書く上で大事なのかというとな、音楽語はひとつのフレーズでものすごい量の情報を含んでることが多分にある。もう既存の言葉じゃそれをどうしても捉えきれないとき、ああこれだ！ってな具合でぶち込むのが、その〝言葉にできない〟を示すナンセンスというわけだよ。そしてこのナンセンスはほとんどの場合、その曲の一番大事なポイントでこそ光る。サザンオールスターズの《勝手にシンドバッド》なんて、サビで『今何時!?』だぞ？　でも、だからこそ圧倒的だ。あの曲の言いたい〝言葉にできない何か〟は、まさにあのナンセンスによってゾッとするほど的確に日本語吹き替えされている」

「……っていうことは、さっきの母音検索とこのナンセンスを両方やれているのが、〝発音快楽を捉えてる歌詞〟っていうこと、かしら？」

「まさにその通りだ。歌詞を書くときに選べる手段は、文章として意味が通っていること以上に〝音楽語が言わんとしてることをちゃんと吹き替えする〟ことだ。意味のある言葉で言っ

た方がいいシーンもあるだろうし、そうじゃなくナンセンスでやった方がいい場合もある。この選択肢のことを知っているかいないかで、書ける歌詞の可能性は飛躍的に変わるだろう」

「そうね！　これこそまさに作詞のテクニックだわ！　すごい、なるほど……」

「じゃあおまけにもうひとつ教えといてやる。『韻』についてだ」

「韻？　って、あのラップとかのやつよね？」

「まぁラップで一番頻繁に使われてるやつではあるがな、母音検索をした上で、でも洗い出した母音とは違っても許される強制的な母音変更ができるのが、韻踏みというやつだ。これは、同じ母音のイントネーションのものを繰り返すことでグルーヴを増幅させるテクニックだが、曲が繰り返しのモーションをしていても、していなくてもぶっちぎって使える。まぁそれによって発生する別のニュアンスみたいなものも生まれたりはするが、それについてはお前がまともに母音検索を扱えるようになったら気にしてみろ。ラップミュージックを聴きゃその意味は一発でわかるはずだ。外国のものがわかりにくいならファンキーモンキーベイビーズなんかがポップでわかりやすいだろう。もうちょっとコアなところを聴くなら山下達郎なんかはラップミュージックにいち早く注目したミュージシャンのひとりだ。佐野元春の歌詞に関するアプローチは一般的なポップミュージックのグルーヴにはない独特のクールさがある。あれは色あせないな。実に良い。うん！　ありゃあ良いんだよなぁ！　ったく本当に良いんだよ！」

「へ、へぇ～……」
「そういやお前と音楽の話らしい話をしたことがなかったな。お前はどんなのが好きなんだ？」
「いや……それは……なんていうか……あの、普通よ？」
話してるうちに妙にテンションが高くなった詩文に、音楽の話を振られて私は不意にドキッとする。音楽の話……いや、まぁ、人並みに好きだとは思うけど……私に詩文に語れるような音楽の話なんか、たぶんひとつもないわ……。

それから私は、別段とりとめもなく自分が聴いている音楽の話なんかをしつつ、詩文の好きな音楽についての話を聞いた。まぁ、当然だけどその深度の違いみたいなのを感じつつ、私に足りていないものはそもそも音楽だということにも、改めて気づかされつつ、日が落ちた頃に私たちはバードランドを後にした。

第8話

作詞の全工程の話

CamScannerでスキャン

「ほえ………何……この声」

いろんな楽器をやってみることを一応検討はしたものの、最終的にボーカルから音楽語を知ることにした私。『ボイトレの本』とか『マジでボーカルになる人のための本』とかを読みながら発声の基礎とかをやってみたりしてるんだけど、試しに自分の歌声を録音してみて軽く吐きそうになっていた。

（……これはひどい。これはひどいわ。ボーカル無理でしょこれ。何これ？　音痴だしリズム感ないし、全体的にヨレヨレだし……っていうか私ってこんな声なの？）

自分の部屋でひとり、ちょっと大きい声で張り切って歌っちゃったけど、こんな声が家族に聴かれてたら大変だわ。二度と家では歌わないでおきましょ。え、こんな声で昨日、喫茶店の中で大声で歌ってたの？　お客さんいたらもうこの世の終わりじゃない。いや、っていうか、もう私一生喋らない方がいいんじゃない？　だってこんな変な声なのよ？　こんな声で今まで喋ってたっていうことにまず驚きだわ。

「……いや、みんなわりとそういうものなんでしょうねきっと。自分からしてみれば変ってだけで、周りからしたら別に普通っていう……」

いや、いや。それにしてもひどい。まさか自分の声がこんなにも恥ずかしいものだったなんて。歌唱以前の問題だわ。

CamScannerでスキャン

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「あっはっはっは！　それなー！」
「笑わないでよ……って、え？　それなって、あんたもそういうことあるの？」
今日も今日とて喫茶バードランド――ではない。理由はよくわからないけど、詩文が「今日はバードランドじゃダメだ」って言ったのもあって、じゃあってことで私たちは放課後の2年2組の教室にいる。この教室に詩文が遊びにくるっていうのは、なんだかちょっと新鮮な気分。放課後の学校では、運動部の掛け声や吹奏楽部の練習の音なんかが響いている。自分の席に座る私と、その前の机に立膝で座る詩文。相変わらずのガサツな様子。
「そりゃあもう、自分の声をキモいと感じるのは、一種の洗礼だよな。アタシも初めて自分の声を録音したときはたまげたもんだ。頭の中で反響してる自分の声と、実際外に出してる声は結構違うもんだよな」
「ちょっと安心したわ。あんたも最初は自分の声、変だと思ったのね」
「結局ボーカルにしたのか。お前の音楽カッドーは♪」
楽しげな様子の詩文。その傍らにはストローを挿したパックのイチゴミルクがある。
「歌ならできるかもしれないって思ったけど、とんでもないわね本当」
「はは。そりゃそうだ。作詞やカメラは自分さえこれでオッケーって言やぁ、ある意味じゃ

それも正解みたいなことになっちまうが、歌はアスリートの分野だからな。できてないやつはただただできてないってのが普通にわかる。まぁ気長にやれよ、楽しいもんだぜ、音楽は」

音楽の話をするときの詩文は、なんだか無邪気というか、優しい雰囲気になる気がする。

普段が普段だからこそまぁそう思うんだろうけど、こういう顔を見ると本当に詩文が、音楽のことを芯から愛してるっていうことが、なんとなく伝わってくる。

「さてと、アタシの作詞レッスンも今日がなんと最終回だ」

「え?? ちょ、え? 今日で終わりなの?」

「おう。今日で終わりだ」

「いや、でも、え……終わり……?」

「アタシが教えるのはやり方までだ。そこから先の必要な訓練についてはお前が勝手にやれ。その成長過程にまで付き合うつもりはねぇよ。そんなわけで今日が最後だ」

「………やめたくなったの?」

「あ?」

この流れは、要するに詩文がもうレッスンを面倒だと思って打ち切ることにしたっていうことな……気がする。

「……昨日の、敬語のことならほんとごめん。そんなつもりじゃなかったのよ」

CamScannerでスキャン

「んんーっ、あー……ああ。そういうことじゃねぇよ。全然それは関係ねぇし、本当にこれで終わりなんだもともと。別にお前の態度がどうのこうのとかそういうことじゃねぇよ。そんな不安そうな顔すんなって！　作詞を教えるってのは約束だろ。ちゃんと教えるから安心しろよ」

「そう……まぁ、そうならいいんだけど」

なんだか、急にゴールが現れた感じでちょっと拍子抜けする。たしかにいろんな良い話を聞いたけど、でも、私自身のスキルが上昇したみたいな手応えはそれほど感じてない。このままで私、ホントに良い歌詞書けるのかしら……？

「なんだ、腑に落ちねぇって顔してるな。上達した感覚がねぇって、そう思ってんだろ」

「まぁ……うん」

「上達はしてるよ。いや、上達というか、必要な部品は揃ってきてる。あとは、点と点を結べば一気に形になるだろう。今まで教えた話を全部まとめて組み合わせるのが、今日教える『作詞の実作業』についての話だ」

「作詞の実作業……そうか、つまり一通りの流れをやってみるっていうことね？」

「そうだ。ところで、今まで教えたことどれくらい覚えてる？」

「え、今までって、全部？」

「そう。全部だ。一体なんの話をしてきた？　それぞれの話はひとつ残らず、全部必要な部

品だったんだが」

詩文から教わったこと、教わったこと……いろいろありすぎてちょっとすぐには思い出せないんだけど……何かしら……一番最初に教わったことは……？

「たしか、一番最初に図書室で詩文に出会って……」

「そうだな。その時に話したのは、お前の歌詞がクソって話だ」

「……そうね。その理由は、流行りの歌詞のパクリを組み立てただけのものだったからで……」

「あのときのお前の名言は忘れられねぇよな。『私は作詞に詳しいんだけど』だっけか」

「……それはもう許してよ。……それから、作詞を教わるようになって……たしか最初は、屋上で『フォーマットの話』を聞いたんじゃなかったかしら？」

「そうだな。で、たしかその翌日にライブハウスで『資料読み』の話をした」

「ええ。その翌日に、あんたがうちに急に来て『字数の当て込みのバリエーションの話』と『語彙力っていうものの実際』の話をしたわ。……で、夜中までゲームしてたわね」

それから、そう。ココロノートのこと。……けど、これはいいわね。

「あとは『母音検索』と『ナンセンス』を含む発音快楽の話よね。昨日話した。……たしか

CamScannerでスキャン

に、こう思い出してみると結構いろんなこと話してたのね」

「そうだ。『作詞の基礎概念』『フォーマット』『資料読み』『字数』『語彙』『母音』『ナンセンス』『韻』。この要素の意味を十分に理解してさえいれば、まずこの時点でそれなりの歌詞は書けるようになる。大事なことは一通り網羅してあるってわけだ」

「……言われてみれば、そうなのね」

「実感がわかないのは、実際に歌詞を書くっていう工程を経てないからだ。というわけで今日は、実際に歌詞を書いていくっていうやり方で教えていく」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

《工程①　資料読み（資料まとめ）》

「最初の工程は『資料読み』だ。必要な情報を集めまくって、一度メモにまとめろ。……もう情報集め自体は終わってるよな。だとしたら、それをメモに書き起こしてみればいい」

「うん。それって、たとえばこういうこと？」

資料読み。誰がいつどこで誰に何を歌うのか、という、その歌詞の目的。私は、それぞれを思い出してみる。誰が……『尚子とそのバンドが』いつ……『文化祭で』どこで……『体

育館で」誰に……『全校生徒、15~18歳の学生に』——何を歌うのか。最後のは難しいわね。でもとりあえず、書き出してみる。もう使うことはないかと思っていた作詞ノートをカバンから取り出した私は、誰が、いつ、どこで、誰に、何をというのを箇条書きにまとめてみた。

「こういうこと?」

「いいや、足りないな。かなり足りない」

「どういう部分が足りないの……?」

「今お前が書き出した情報は、あくまで情報のタネだ。必要なのはむしろこの先にあるものだな」

「この先……?」

「ライブ告知のチラシ作りじゃねぇんだから、これじゃダメだってそれくらいわかるだろ。いいか悠、資料読みってのは、インプットも大事だがアウトプットできなきゃ何の役にもたたねぇ。忘れるなよ、これは〝作詞のための資料読み〟なんだ。だとすれば、お前はこの情報をどうすればいい?」

「どうすればって……」

どうもこうも、資料読みで得た情報はこれだけだと思うんだけど……?

「せっかくライブまで連れてってやったのにそりゃないぜ悠。たとえばこうだよ」

そう言いながら、詩文は私のメモに書き加える。『全校生徒、15~18歳の学生に』の文字

CamScannerでスキャン

を丸く囲んで、その周りに書き加えたのは、こういう言葉だった。

「『部活』『体育館』『教科書』『制服』『スマホ』『電車通学』『青春』……まだまだあるよな。特に思春期ってのはキーワードが腐るほどある。こうやって、得た情報から〝使える語彙〟を洗いざらい書き出すんだ。これを含めて資料読みという」

「ああ、そういうことね！」

いろんなことを思い出しながら、5つの項目の具体的な部分を書き加えていく。たしかに、これをしなきゃ思い出せない語彙はたくさんあったかもしれない。何も書かなくても思い出せるんじゃない？　ってちょっと思ったけど、そういうわけじゃなさそうだわ。ノートいっぱいに埋められてきた文字を見れば見るほど……うん。え？　なんかすでに良くない？

「うん、なかなかの情報量だ。良い感じだな」

「……ほんと、これだけでちょっと、もう良い歌詞できそうな気がしてくるわね」

そこに並んだ〝使える語彙〟の数々は、ひとつひとつの単語に筋が通っていて、どの言葉からもドラマが始まりそうな予感がする。……これが、資料読み……。

「しかしまだ足りねぇな。『何を歌うのか』の部分が足りてない」

「そこは……つまり尚子とバンドが何を伝えたいバンドなのかみたいな……話よね？」

「そうだな。でも、お前はそれも知ってるだろ？」

「え？　そうかしら」

「知ってるだろ。お前、あのバンドの演奏ちゃんと聴いてなかったのか？　あのバンドが何を歌って、何をやろうとしてたのか、それは紙に書いた文字なんかよりもっと正確に、お前が身をもって資料読み——体験したことだろ」

「…………そういうこと。ああ。それだったら、なるほど。知ってるわ」

尚子のバンドが何を歌っていたのか。私は知っている。そうね。だとすれば、尚子たち……『さ☆ぐっどたいみんぐ』だからこそ使っていい語彙は、きっとこういうものだと思うわ。

「なかなかいいじゃねぇか。バンド文化特有の語彙なんかも、よく知ってたな」

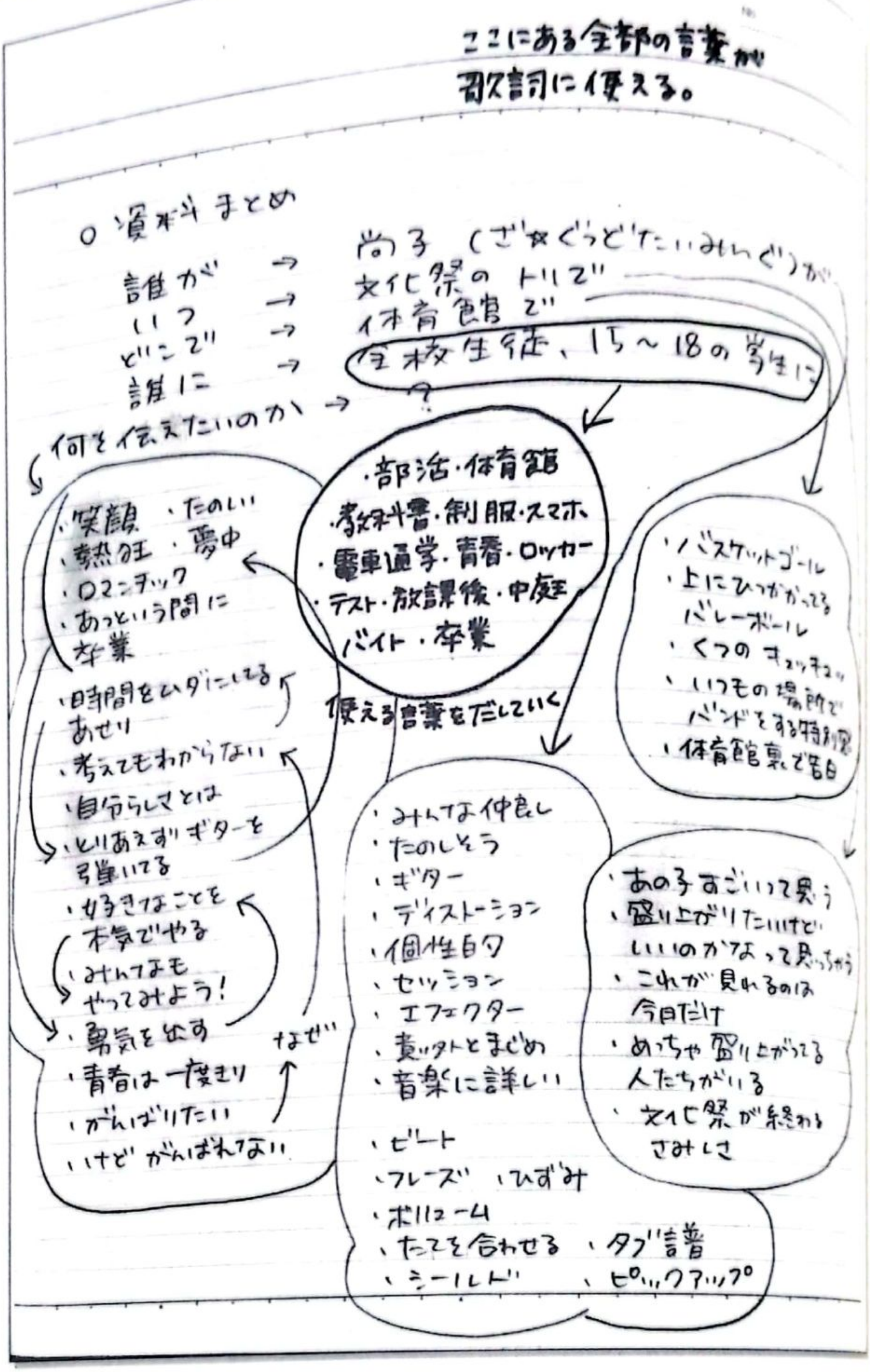
「……あれからバンドのこと、ちょっといろいろ調べたの。うふふ……歪みってあれ、ゆがみじゃなくてひずみって読むのね。ディストーションとかカッコイイ響きだわ」

「つまりこういうことだ。お前が観て聴いて知った感覚こそが、ここでは有効な語彙だ」

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

《工程②　母音検索》

「さてと悠、この資料読みのメモを見てみろ。なかなか良い予感がしてこねぇか？」



CamScannerでスキャン

「そうね。なんかもう名曲の予感でいっぱいだわ」
「だろ。なかなかユニークじゃねぇか。ユニークってのは、独自性があるって意味だぞ。使い回しの効かない、『ざ☆ぐっどたいみんぐ』のための語彙。いいね。"らしさ"を感じるだろ」
「そうね。この語彙は、尚子たちのために選ばれた語彙ばっかりだわ」
「さて、次の段取りに移るとしよう。次は『母音検索』だ」
「このタイミングで母音検索なのね」
「そう、ここでなんだよ。ここで歌う。さんはい」
「え?」
「どうした、早く歌えよ」
「え、いや、詩文、ここ教室なんだけど……」
「誰もいないだろ。みんな部活やなんかで、わざわざ放課後の教室になんか来たりしないよ。お前ってやつは細かいこといちいちうるさいよなぁ」
「いや、でも、わざわざ歌わなくても……」

——と、言ったところで、詩文は少し真面目な声色になる。

「そもそもな、喫茶店で作詞なんてバカげてるんだよ。あんな場所じゃまともに音出しでき

ねぇだろうか。たまにシンガー・作詞家が喫茶店でノマド気取って作詞なんかやってることもあるようだけどな、歌って声に出して確認できない環境でまともな歌詞なんて仕上がるわけねぇんだよ。この点だけでも既にあの連中がいかにメロディと発音についてを無視してるかがわかる。叔母さんの店だから待ち合わせ場所にしてたってだけで、本来喫茶店は作詞には不向きなんだよ。だから今日は声出しても誰にも迷惑かけないココにしたんだ」

「いや、たしかに迷惑はかけないかもしれないけど……やっぱり歌わなきゃダメ……？」

「あーもう、面倒くせぇな！　だったらどこで歌う⁉　屋上にでもいくか？　ああ、そりゃいいな！　あそこは歌詞を書くにはバッチリのロケーションだぞ！　アタシもよくあそこで書くんだよなぁ！　空が広くて風も気持ち良くて、声も出し放題で、あそこは最高だ！」

「いや、ごめん、やっぱり教室でいいわ」

こういう部分、やっぱり詩文ね……。このままじゃホントに屋上に行くことになりかねない。……となると……ここで歌うしかないのね。あの私の醜い歌声が、また響いてしまうのね……。どうか誰も来ませんように……。

「……はぁ。じゃあ、歌います」

「よっ！　待ってました！」

「あの、茶化すのだけホントにやめて？」

そして私は、誰もいないとはいえ教室で曲を再生して、あいうえお＋んで歌う。1回歌って、何となく感覚を掴みつつ、2回目。そして3回目になる頃には、たしかに〝ここは絶対こうじゃなきゃダメだ〟っていう自分なりの確定母音みたいなものがあることがわかってきた。

「ふぅ〜〜！　こ、こういうこと？」

「上出来だ。初めてにしちゃ良いカンジじゃん」

やってみてわかったけど、母音検索はかなり決定的な作詞テクニックかもしれない。ここでこの歌詞のルールが決まるっていうか、メロディが導き出した自然さがそこにあるというか……。

「……あんたが言ってたこと、ちょっとわかったかも。たしかに、母音検索は音楽的な工程ね」

「おお、良い反応しちゃって。意味がわかったようだな？」

「うん。メロディから必要な情報を引っ張り出す、みたいな感触があるわね」

「いいね。さて、なら次はこのふたつをよく見てみろ。お前が書き出した『資料まとめメモ』と『母音検索した歌詞』だ。次にやることは、なんだ？」

「次にやるのは……このふたつを使って歌詞を仕上げていくっていう工程……よね？」

母音検索で書いた歌詞

ざ☆ぐっどたいみんぐの新曲歌詞　母音検索工程 ver

A

あいあう　いーおいえー　あんおあ　えーえうえー
おんあう　えっいっあー　あっおうーあーあおーえ
えおおあ　あっえおあ　うーいあ　あーいうえー
いあおーうーあ　うーあいーいーえーうっおーあーえ

B

あーうーう　うえーえーあー　ああいあえう
えーっおー！　いーっおーおんあ！
うおお　おーおーおーおん
あーえーあ　うえーえーあ　うえええうお
いーっあ　うーっあ！
ああ　あえあうえあ　うーえーおーあー
うううう　あーあーあーあ！

C

いういあ　うっおあっえ　えっいおっあっえ
えいおんっあ　あーいあっあっあんあ
ういおーあいえ　いいえいいおいいおいいおいいおうっお！
あんえうっあ　あーいおあっえ　あっえあっえ　おーえあんあうあっえ
ああいあいうえ　いあおおーいうお　あーいあう　うーいえ

ちなみに、人によって『心地良い母音感』はそれぞれ違うから、必ずこの母音にならなきゃおかしいってことはまったくない。一番大事なのは『自分にとってこれが気持ち良い発音かどうか』だ。あと、これはあくまで『ハミング発音として気持ち良い答え』でしかない。歌詞として言葉を乗せていく上で、この母音ではない音に変更することは多々あるから、母音検索に縛られすぎないように気をつけるようにな。発音快楽として心地良く、意味としても気持ち良いものになっているっていうのが、目指す歌詞というわけだ。

CamScannerでスキャン

「その前にやるのが、『パワースポットの決定』だ」
「パワースポット……？　って、前になんかそういう話したわね？」
「そう。これはたしか語彙のときに話したことだな」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

《工程③　語彙のあてこみ》

「出来上がったこのふたつを使って歌詞をまとめていく。が、最初にやるのはさっき言った通りだ。『パワースポットを決める』」
「それって、どういう話だったかしら」
「この曲の一番ユニークな部分を最初に決めるんだよ。曲を聴いた感じの印象と、母音と、資料読みの情報、この3つから導き出した歌詞を、この曲で一番印象的な部分につける。これは何があっても絶対に変更しない『不動の歌詞』として確定させてもいいな。……今回についてはあくまでお手本だ。アタシがこれを決めよう。……ここだな、Bメロの最初あたり、お前が『いーっおーおん』って母音検索したここに、『ディストーション』って言葉を確定させよう」
「ディストーション？」

「これはまあ、アタシなりにみた尚子チャンバンドに対する感想みたいなもんだ。本来クリーンな自分にもっと過激さやドラマチックさをもたらすディストーションというもの、それに対して尚子チャンが感じてるものは、単なる楽器以上の何かだろう。まぁこんな具合に、この曲のアイコンになる部分はそれそのものが暗喩する別のものも含んだりする」

「……な、なるほど」

「スイッチで切り替わるとかってのも使えるワードだな。エフェクターっていうものにまつわる動作や関連用語は全部他の日常の出来事に絡めることができる。な。こんな具合だよ。パワースポットが決まれば、そこからいろんな枝葉が広げられる。決まってるのはパワースポットと母音。この状態になったらあとは、いわゆる一般的に言われている作詞の実作業の部分だ。今までのものもそのうちに入るが、ここが一番それっぽい部分だよな。資料読みでまとめた語彙を使いつつ、いろんな接続語やなんかを用いてああでもないこうでもないってやる時間だよ」

「うん。……でも、母音とパワースポットが決まってると、結構難しいわね……」

「そうだとも。だからこそ作詞は特殊技術なんだ。頭空っぽで文字を埋めても作詞……なんて具合に作詞ってのはいくらでも難易度を下げることができる。けど、今お前の目の前にあるのは〝ちゃんと考えれば自分の一番意図する良い歌詞にたどり着けるクロスワードパズル〟だろ？　当てずっぽうでもテキトーでもない、それなりに難しいが真剣にやれば解けないことはない問題だ。あとは、じっくり問題を解けよ。ここについてはパズル的な要素も多分にある」

CamScannerでスキャン

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

《工程④　仕上げ》

「気になる語彙は歌いながら確認しろよ。頭の中じゃなくてな。発音しなきゃその心地良さは確かめられねぇんだから」

「うん」

「……だんだん埋まってきたな」

「そうね」

「ねぇ、詩文、こういうことを自分で言うのもあれなんだけど」

「どうした?」

「ちょっと良くない?　この歌詞……?」

「どれどれ、うん。以前と比べりゃ100万点差くらい差をつけてこっちの圧勝だ。比べることすらバカバカしい、少しはマシな歌詞になってきてる」

改めて見てみる歌詞。それは、歌い心地がトンと胸に落ちる母音で、ここっていう聴きど

CamScannerでスキャン

母音検索と有効語彙の合成と全体構成

まずは全部埋まってなくて大丈夫だ。母音と語彙の意味が一致しないこともあるし、語彙を優先して母音を変更するということもよくある。発音快楽に完全に合わせたらいいってわけじゃないし、意図的な違和感母音は良いアクセントになったりもする。大事なのは「ここを聴かせる」っていうことをしっかり意識して組み立てていくことだ。

A

あいあう いーおいえー あんおあ えーえうえー
改札 一人で なんとなく 憂鬱で

おんあう えっいっあー あっ お うー あーあおーえ
ぼんやり ○○○ あっというまかもね

え お お あ あっえ お あ うーい あ あーい う えー
○○とか○○とか 準備ばっかりして

い あ おー うーあ うーあ いーいーえーう おーあーえ
いまこの瞬間 無駄にしてる…○○○

B

あーうーう うえーえーあー ああい あ え う
タブ譜 揺れてた 笑いかける

えーっおー！ いーっ おー お ん
軽音！ ディストーション

あっうおお おーお おー お ん
青春の グラデーション♪

あーえーあ うえー えーあ うええ え う お
なぜか すべてが 震えてるよ

いーっ あ うーっ あ！
ピックアップ！ ユーキャン！

ああ あえお あ あ え うーえーおーあー
さあ 音を合わせ ○○○○

う う う う う う あーあーあーあ！
○○○○○○ ○○○ Band!!"

C

いう い あ うっお あ っ え う っ い いっ あ っ え
歪みが ○○と鳴って ぶっちぎっちゃって

えいおんっあ あーいあっ あっ あん あ
○○ は 始まっちゃったんだ！

ういいおー あ い え いいえ いいおいいお いいお いいお いっお！
勇気を出して 響け君も君も君も君もきっと！

あんえ うっあ あーいお あっ え あっえあっえおーえ あ ん あう あ っ え
音楽って○○だって ○○○褒めらんなくたって！

ああい あいうえ いああ おーい う お おーんあう うーいえ
私○○○○ ギターを弾くよ ○○○○○○○

ほぼ変えないと最初に決めたパワースポット

ころがハッキリしてて、それ以外の部分もまだ若干手直ししたいなと思うところはあるとはいえそれなりに整っている歌詞だった。これは、良い。〝できてる歌詞〟と言って差し支えないものだと思う。

「さてと、まぁ細かい詰めに関してはあとは好きにしろよ。もう一点お前に教えておくことがあるとすれば、フルコーラスの作り方についてのちょっとしたアドバイスだな」

「あ、それ聞きたかったのよ。フルコーラスって、何か秘訣みたいなのあるの？」

「基本的に、まぁこれは別にそうしろって決まってるわけでもないことではあるが、まったく同じワードっていうのが何回も出てくるってのは意図的な演出でもない限りは避けた方がいい。同じ意味を別の言葉で言ってやった方が、リスナーの脳内に送る情報がもっと増えることになるからな」

「なるほど、それはその通りね。比喩表現とかをいろいろ使って、そこはそうしてみるわ」

「そしてな、アタシがひとつ決定的にこだわってることがある。これはまぁ、好きにすりゃいいんだが――『1番を書くときにすべてを出し切れ。2番があるつもりをするな』っていう考え方だ」

「え？　その方がいいの？　フルコーラス作るつもりで全体のバランス見た方がまとめやすいと思うんだけど……？」

「まとめやすいな。そのスタイルでもいい。しかしアタシはそのやり方をオススメしない」

「どうして？」

「なんでかっていうとな、それだと予定調和になるんだよ。予定調和。意味わかるか？」

「ええ。予定通りで逆に退屈……みたいなことでしょ？」

「そうだ。全体を見通しで作ればたしかにまとまりは良くなるだろう。しかし、まとまりが良いだけの歌詞なんて退屈なものもない。これはアタシの個人的な哲学というかポリシーだ。1番で最高のタイムを出す。後先考えずに、だ。そして、2番ではそれをさらに上回る自分との勝負をする。これこそが、作詞をする上で一番テンションが上がる瞬間なんだよな。毎回自分との勝負ができるんだよ。そしてそこには、予定調和の退屈さもなく、実にスリリングかつ即興的なスピード感がある」

「それはなんていうか……すごく詩文らしいわね。1番で最高のタイムを出して、2番でさらにそれを上回るって……なんかあれね。レースゲームのタイムアタックみたい」

「そうそう♪　アタシがあのゲームにハマったのはまさにそこだ。ちなみに、基本的に歌詞の2番ってのは1番より自由度が高い。なぜなら、構成的に1番で大体のことはもうリスナーに伝えたあとだからな。形を崩したものでもかなり成り立つ。逆にいうと、自由度が高くなった2周目でどれだけおもしろく思いきれるかが、2番の勝負どころだ。自分で提示した常識を自分の手で少しだけ逸脱する。これも作詞のおもしろいポイントだな♪」

CamScannerでスキャン

「なるほどね。言わんとすることはわかる気がするわ。でも……それって難しいわね。歌詞の2番ってなんだかネタ切れしちゃうっていうか……」
「ん？　なんでだ？」
「え？　なんでって……？　えっと……ネタ切れはネタ切れなんだけど……するでしょ？」
「しねーよ。よく思い出せよ。お前、ネタ切れするほど歌詞書いてきたのか？」
「……いや、そういうわけじゃない……けど」
「そうだろ。お前は特に、頼まれもしねーし褒められるわけでもねーのに自分全開のポエムを書き溜めるようなやつだ。お前にとってはそれは別に大したことじゃないつもりだったんだろうが、それは普通ありえない『才能』なんだよ。そんなやつが、ひとつやふたつ歌詞書いたくらいでネタ切れだ？　それはネタ切れじゃねぇよ。頭ん中に大量に抱えてる在庫の使い方がわかってねぇだけだ。今までお前があのノートに書いてきた感動やらなんやらっていうものを、今回の歌でどう応用すりゃいいのか、そう考えりゃやり方なんて何百通りでもあるだろ」
「……え、ええ。その通りね」

詩文が私のココロノートに才能を見出した、その理由を今さらっと言われた気がする。そうか……あんな風にポエムを書き溜めるのって、普通やらないこと……かもしれない。でも

そうね。1番の歌詞で書いたことを踏まえて、2番ではもっともっとその先のことを書けるに違いないわ。そこでネタ切れするような私じゃない。はずだと思う……！

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「よーし！　コングラッチュレーション！　これにてアタシのレッスンは終了だ。っつーわけであとは勝手に頑張れよ悠」
「え。……ええ」

やれやれ終わった、という雰囲気で椅子にドカッともたれて、立膝で座る詩文。けど、なんだろう。この、締まりが悪いっていうか、終わった感じがしない雰囲気……。

「……ねぇ詩文、これで全部なの？」
「全部だよ。免許皆伝だ。おめでとう悠」
「いや、でもまだ歌詞完成してないし……」
「どうやればいいかは全部教えただろ？　歌詞を書く前にやることも、最初にやることも、書いてる途中で気をつけることも、フル尺の仕上げ方も」

「それはそうだけど……」
「テクニックはこれで全部だ。テクニック以外の部分のなんつーか、メッセージ性？　とかについてはあれだよ、お前の好みの問題だから、好きなようにやれよ。もしテクニック的な部分でなんかわからねえことがあったら、教えたことを思い出せ。お前がこれからぶつかるだろう悩みの答えも全部、今までの話に入ってるよ。これ以上アタシが教えることは何もない」
「そう……それもまぁ、そうね……」
なんだか、釈然としない。たしかに、一応全体を通して習ったことはこれで一通りって感じだし、大事なことはしっかり教わった気もするけど……。
「でも、あの……詩文、私、やっぱりまだ歌詞書くの自信なくて……」
「やり方は教えた。よっぽどバカでもない限りは、もう自分でできるだろ。まずは書けよ。それともお前は、アタシに見守られてなきゃ歌詞のひとつも仕上げられないベイビーなのか？」
「いや、そういうわけじゃないけど……」
「ははは。なんだ、お前さては、アタシのことが大好きになってしまったのか？」
「嫌いではなくなったわ。というか、敬語は使ってないけど尊敬してるし……」

そう。尊敬してる。けど、私たちはそういう先生と生徒みたいな割り切った感じではなかったと思う。もっとざっくばらんな感じっていうか……うちに泊まりにきたりとか、一緒にバイク乗ったりとか、なんかいろいろあったじゃない。それなのに、なんだか急によそよそしいっていうか……。距離感あるっていうか……。

「約束は守っただろ。作詞の仕方は教えた。以上だ」
「そう……わかったわ。ありがとう詩文。おかげで本当に、いろんなことがわかったわ」
「おー。どーいたしまして」
「ねぇ詩文、だったら今聞くけど……なんで私に作詞を教えようと思ったの？」
「………それは聞かない約束だって、言わなかったか？」
「聞いたら作詞レッスンは打ち切りだって言われたわ。けど、今レッスンは終了したでしょ？」
「あー、たしかにな。それはその通りだが。しかしそれに答える義務はアタシにはねーな。気まぐれだよ気まぐれ。で、その気まぐれももう終わったってだけの話だ。いいから、アタシのことは気にせず早く尚子チャンの歌詞を書けよ。もしアタシと話すことがあるとすれば、その歌詞が仕上がったあとの感想戦くらいなもんだ。それくらいなら付き合ってやるよ」

――詩文の態度は一貫していた。私が詩文にフレンドリーに接しようとすればするほど、詩文は私に距離を取る。いや、まぁ、いいんだけどね。いいんだけど……。だったら今までのことはなんだったのかしら。

CamScannerでスキャン

○ざ☆ぐっどたいみんぐ
『Everybody loves The Band!!』_完成稿
作編曲：佐々木尚子／作詞：江戸川悠

私のこだわり

最初のところに語りとか入れちゃったりして
実はこれ、氷室京介の名言をもじってるフレーズ

MEMO

部活　校舎　教科書　制服　スマホ　片思い　失恋　ロッカー　テスト　青春　先輩後輩　放課後　部室　先生　渡り廊下　中庭　バイト　電車通学　改札　卒業　エフェクター踏んで　ディストーション　歪む　セッション　アンプ　シールド　エフェクター　ボリューム　ビート　フレーズ　縦を合わせて　タイミング　テイク　走っちゃう　もたもた　ピックアップ　振動する　サウンド　ライブハウス"体育館"へようこそ！(氷室京介リスペクト)　笑顔　楽しい　熱狂　夢中　焦り　ロマン　あっというま　終わる前に　すごい人になれなくても自分らしくはなれる　でもすごい人にもなりたいかも　ちょっとね　細かいことはわからない　ギターを弾いていれば　なにかわかるような気がする　だからやってみよう　勇気を出して　私はギターを弾くよ　ずっと　こんな風にね　私らしさ　褒められなくてもいい

資料読みで出した語彙のまとめ

INTRO

(語り)
Everybody Loves The Band!!
ライブハウス"体育館"へようこそ！
ううう～…!!　1・2・3・4！

曲全体で言いたいことは
『楽しいことやらなきゃ
もったいない』

A

こぼしのあてこみを使えるところは使ってる

改札ピッとして　なんとなく制服で
ぼんやり Wastin' Time　あっというま！かもね
『でも』とか『だって』とか　準備ばっかりして
いまこの瞬間　無駄にしてる…とかね

思春期感と学生感

ナンセンスでアクセント

顔文字はちょっと
やり過ぎだったかしら？

B

アンプ点ければ　語りかける
セッション！　ディストーションが！
シュッポッポ　ロコモーション♪
なんてったって胸が震えてるよ
ピックアップ！　ステップアップ！
ほら　縦を合わせ Take You My Way
└(┐卍^o^)卍ドゥルルル！ Strike Up The Band!!"

音楽用語で世界観を一気に
そっちに引っ張り込む！
韻もいっぱい踏んでリズミカルに
英語のところは辞書で調べたし
大丈夫だと思う。たぶん

Strike Up The Bandは
演奏開始って意味らしいわ

パワースポット

C

歪みがドンと鳴って　ぶっちぎっちゃって
青春は　始まっちゃったんだ！
勇気を出して　響け君も君も君も君もきっと！
音楽って最高だって　誰かに褒められなくたって！
私らしくね　ギターを弾くよ　こんな風にね

尚子が言いそうなこと

あと
全体的に「え」の母音を
フレーズの最後にする
ようにしてることで
「え」で終わるとなんか
おさまりがいい感じ

この曲を聴いた人に自分も何かやるぞ！って思って欲しい
元気になったり
励まされたりとかしてほしい

↖重要！

ミニチュアダックス↗

CamScannerでスキャン

録音の仕方

作詞をするのにも「仮歌」を入れたりするなど録音は必須だ。ここでは作詞家が録音をする必然性とおすすめの機材を紹介していく。

なんで歌わなきゃいけないの？

「歌詞ができた！」っつっても歌詞カードだけ渡したんじゃ雰囲気が伝わらない。ってわけで、「作詞家がどういうつもりなのかってのを実際に歌って録音したのを渡す」ってのは実はかなり大事なことだ。文字だけじゃ伝わらないことはたくさんあるからな。下手でもいいからしっかり歌っていけよ！

録音する機材

◇超簡易システム

スピーカーで曲鳴らしながら歌って、それをスマホのボイスレコーダーで録るだけ。超アナログな方法だけど、これだけでもいいっちゃいい。うまくなくていいから、音のハマリだけはハッキリわかるように歌うこと。

◇簡易システム

フリーの音声編集ソフトとかを手に入れてきて、ノートパソコンとかについてる音声マイクを使って録る方法。ヘッドホンをして伴奏が入らないように気をつけて歌う。細かい設定とかはまぁわからなくていい。

◇ガチシステム

音楽制作ソフト（DAW）を使ってのマジな録音。この知識があれば歌の音痴なところとかを修正することもできるし、伴奏の音量を良い感じに調整したりもできる。

けどそれのやり方を喋るにはスペースが少なすぎるからあとは勝手に調べてくれ。ネットで『DTM』で調べたらいろいろ出てくるぞ。

CamScannerでスキャン

第11話

私が知りたくなかった作詞の話

CamScannerでスキャン

学校までの通学路、電車の中。私は、自分の書いた歌詞を見つめながら、自分の歌った仮歌を聞いている。

（うん、良いんじゃないかしら）

詩文から作詞レッスンの終了を告げられた私は、それからひとり、3日ほど試行錯誤をして尚子の歌詞を書き上げた。基本的な作法は全部、詩文から習った通りに『音楽語の日本語吹き替え』や『ナンセンスの発音快楽』を軸にした母音検索を基準にしつつっていうことはしっかり守って。そうやってできた歌詞を見てみるとたしかに、これ以上詩文に質問するのも変な話なのかもしれないなと感じるくらい、レッスンの内容はしっかりと足りていた。

（これでいいのかしら……）

出来は悪くないと思う。っていうか、最初の歌詞と比べたらもう天と地の差がある。これは、ちゃんとしてる歌詞だわ。……でも、私はドキドキしている。書き上がった歌詞を昨日の夜尚子にメールして、仮歌も送って、まだ反応が返ってきていない朝。もしまた苦笑いみたいな反応をされたら、今度こそ心がダメになる。でも、きっと大丈夫よね。詩文と出会っ

てから今日まで、散々頑張ってきたんだから。今度こそ、きっと良い歌詞だって言ってもらえるはず。

学校の最寄り駅に降り立った私は、駅前で立っている人たちを見かける。
「難病のユウキちゃんに募金をよろしくお願いしますー！」
ああ、募金ね。難病って、どういうのなのかしら。……と思って立て看板を見てみると、どうやらそれは何十万人にひとりっていう珍しい種類の病気で、必要なワクチンを買うにはかなりのお金が必要になるものらしい。写真に写る、鼻にチューブをつけた難病の子、ユウキちゃん。こんなに小さくて、難しい病気でも、精一杯生きようとしている。周りの人も、こんなに真剣にこの子を助けようとしている。人間の優しさって、こういうことなのかもしれないわね。
「……すいません、１００円なんですけど、いいですか？」
「ありがとうございます！」
募金の人のまっすぐな笑顔に少し恥ずかしさを感じた私は、ささっとその場から離れる。けど、勇気を出して募金できてよかった。今日は何か、良いことがある気がする。

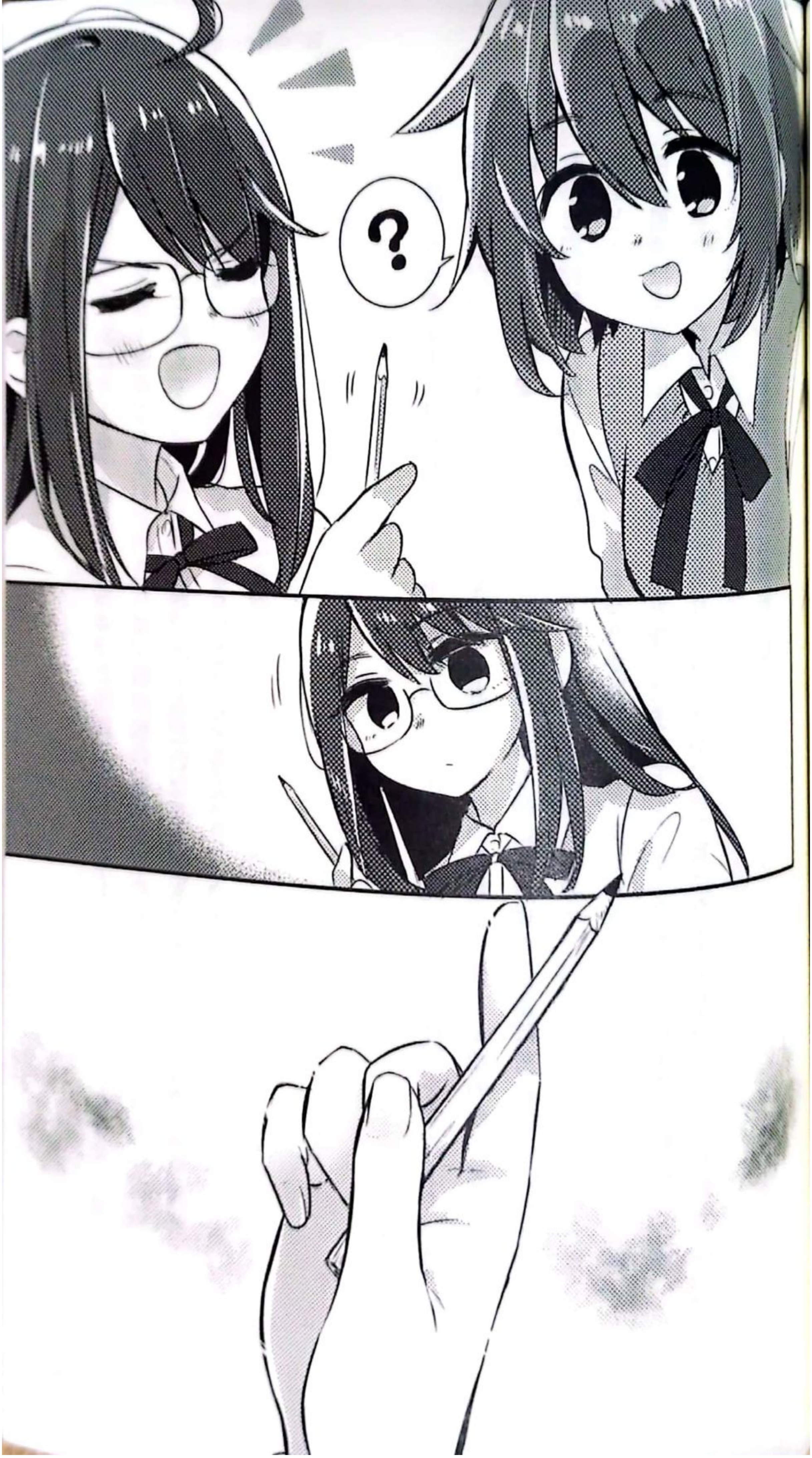
＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「ゆっぴ！　もらった歌詞聴いたよ！　すっっっっっごい良かった！　ゆっぴって天才なんじゃない⁉　こんな短期間でここまで上達するなんて！」
「ホ……ホント⁉　よかった！　いろいろ悩みながら書いたから、ちょっと心配だったの。でも、気に入ってくれたなら大丈夫そうね！」
「気に入ったなんてもんじゃないよ！　メンバーのみんなもバッチリだって！」
「ありがとう尚子！　何か気になる部分とかない？　もしあるなら修正するけど」
「ないない！　今日からバシッと練習しちゃうよ！　文化祭は1週間後だから今から猛練習だ！　これは良いのになるよ～♪　ゆっぴも絶対観に来てね！」
「ええ。もちろん」
「ああそうだ、あとね、ゆっぴの仮歌すごい良かったよ！」
「へっ⁉」
「ゆっぴ、もっと歌やればいいんじゃないかなぁ」
「そ、そ、そそ、それはないわ。それは絶対ないない。ない、ありえないわ。け、けど、ホント……？」
「うん。うまいっていうか味があるっていうか？　なんか、こういう風に歌ってほしいんだ

な〜っていうのが伝わってくる良い歌だったよ。っていうか、歌詞だけじゃなくて仮歌までくれるなんて、すごい助かった！」
「いや、それは先生の教えで……」
「ああ、そういえばＳｉＥに習ってたんだったよね。やっぱりプロのレッスンは違うなぁ〜！」
「そうね。あの人はそこらへんにいるテキトー作詞家とは全然違うわ。あの人は別格よ。厳しいけど、優しい先生だわ」
「そっか〜。なんか最近、ゆっぴ生き生きしてたもんね。良い先生に会えて良かったね！」
「ええ。ホントに」
「ねぇねぇ、ＳｉＥってどんなこと教えてくれたの？　私にもわかるやつある？」
「……そうね。あーでも、口で説明するのはちょっと難しいわね……いや……ちょっと待ってね」
……勘の良い尚子は、きっと少しのヒントでかなりのことをわかってしまいそう。それは、困るわ。そうね、尚子でも簡単には理解できないだろう話は、何かしら……。
そう思いながら机に目を泳がせたときに、目に入ったペンケースを見て思い出したことを私は話してみる。たしか詩文が最初の方に教えてくれた、ちょっと難しい話。

「……そうだ、ふふ。これがあったわ。ねぇ尚子、この鉛筆を見て」
「鉛筆？　うん。これがどうしたの？」
ペンケースから取り出したのは、いつか詩文が私にくれた鉛筆。なんて言ったっけ……なんとかの鉛筆。相対価値の鉛筆……？　だったかしら。
「この鉛筆は、相対価値の鉛筆なの。この鉛筆には価値がないけど、有名人が持ってたらこれは価値のある鉛筆になる。意味わかる？」
「ん？　ん～？　……なんとなくは。でも、それって作詞とどう関係あるの？」
「これがつまり、作詞の真髄ね」
「……え、ええ……？　そうなの？　な、なんかよくわかんないけど、すごそうだね……。哲学っぽいっていうか……。そうかぁ、やっぱり私に作詞は難しそうだなぁ。でも、ゆっぴそういうのわかるってすごいね！　ねぇねぇ、そのなんとかの鉛筆って、わかりやすく言うとどういうことなの？」
「え？」
「私あんま賢くないから……子供向けな説明で教えてほしいなーなんて……あはは」
「……それは……えっと……それは自分で考えなきゃダメね！」
「え～！　そりゃないよゆっぴー！」
「あはは、まぁ、また今度ね。ちゃんと説明するわ」

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

——授業中。私は考える。尚子め、ちょっと油断したら好奇心旺盛に作詞のことなんか聞いてきちゃって、油断ならないわ。これは、私が私の手でようやく手にいれたノウハウなのよ。誰にだって教えてあげるもんですか。尚子みたいな音楽語ネイティブが詩文の話を理解しちゃったら、どうせ作詞もできるようになっちゃうんでしょ。まったく。私がどれだけ苦労してこのテクニックを手にいれたと思ってるのよ。

（……そういえば、この鉛筆って結局なんだったのかしら）

私は、さっき尚子に見せた例の鉛筆『相対価値の鉛筆』を見つめる。作詞をする上で一番大事なことだって詩文が言ったこの鉛筆。でも、私はこの鉛筆が一体なんなのか、どういう意味があるのかをあまりわかっていない。詩文は基本的に無意味なことは言わない。だとしたら、この鉛筆は作詞にどう関わってくるものなのか……。

（あのとき、詩文はなんて言ったんだったかしら……）

この鉛筆は手塚治虫の鉛筆だ、バーカ嘘に決まってるだろ、これが相対価値の鉛筆だ。みたいな感じだったかしら。それってあれよね、誰かの持ち物になると普通のものでも特別になるみたいな……。

（特別になる……。普通の鉛筆が、特別になる）

鉛筆を見つめる。そこにあるのは、まるで私みたいな何者でもない鉛筆。でも、この鉛筆だって、特別になる方法はある。……そういうことなのかしら。

（やっぱり、まだ終わってないんじゃない……？）

私は、口の中で小さく呟く。詩文は終わりだって言ってたけど、少なくとも私はこの鉛筆の意味を理解していない。作詞レッスンが終わって3日、あれからバードランドには毎日顔を出してたけど詩文は一度も来なかった。携帯に電話しても「何の用だ。忙しいんだが」っていう感じで、ほとんど会話も続かずに切られて取りつく島もない。……明らかに詩文は、私を避けてる気がする。

――避ける？　あの詩文が？

考えてみれば変な話な気がする。あの我が道を行く詩文が、人を跳ねのけるならまだしも人を避けるなんてことが、あるのかしら。なんだか詩文らしくないというか……。

いや、もしかして……これは私の推測だけど、詩文はこう思ってるんじゃないかしら。『人に聞かず、自分で考えて仕上げてみろ』って。この3日間は、つまりそういうことだったんじゃないかしら。

詩文に質問することなく教わったことを何度も確かめながら自力で書いた歌詞。その歌詞は、私のとっておきの第一作になった。もし詩文にあれこれ聞きながら仕上げていたら、それは私の歌詞というよりは詩文の歌詞になっていたのかもしれない。そういうことを予想して、わざと私に距離をとったとか……そういうことかしら？　だとすれば合点がいく。詩文は無意味なことはしない。辻褄の合わないこともしない。そうよ。だって……作詞レッスンをしてた頃の詩文と私は――友達だったでしょ。

そう。友達。友達だった。一緒にバイク乗って、屋上に入って怒られて、泊まりで夜中までゲームして、夜の学校に忍び込んだりして……。私と詩文は、友達だった。それこそ、私が敬語を使い始めたらそれを嫌がるくらい、詩文も私を友達だと思ってくれていたと思う。だとしたらやっぱり……詩文が急によそよそしくなったのは、私ひとりの力で歌詞を仕上げさせるため、なのかしら……？

~~*~*~*~*

「歌詞ができたわ詩文。今から会えない？」
『おお。そりゃ良かったな。だったら屋上に来い』

放課後、私はもう一度詩文に電話をかけてみた。やっぱりそうだ。歌詞の完成報告については、忙しいとかって理由で電話を切られたりしなかった。……たった3日会ってなかっただけで、なんだか1週間ちょっとくらい会ってないような感じがする。それくらい、詩文がいる日常は濃度が濃かったのかもしれない。電話越しの詩文の声は、ちょっと懐かしい気がした。

「いや、屋上はダメよ。バードランドにしましょう」

『屋上だ。アタシは今日屋上で空を見るって決めてるからな』

「………」

この強情さ。そう、これが詩文よね。……って、屋上は立ち入り禁止でしょ。

「詩文、忙しい忙しい言ってたけど、屋上で空見てるの？」

『ああ。それのどこがおかしいんだ？　屋上で空を見ることより大事なことがあるなら、教えてくれよ』

「………」

『アタシはここを動かねぇから、もしなんか用があるならお前が来い。今日は良い空だぞ』

「ハァ……わかったわよ」

詩文のこの断固として人の言うことを聞かない態度に、むしろ私は安心に似た気持ちになる。そう、私と詩文はこういう感じだったはず。……とはいえ、私も詩文に巻き込まれて違反行為をさせられるのはちょっと困るわ。だから、まずは詩文と会って、屋上から連れ出して話を始めましょ。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

屋上を目指して、階段を上がる。屋上の扉は閉まっていた。……というか、さすがに詩文も学習したのね。開けっ放しじゃ先生に見つかるっていうことをようやくわかったのか、屋上の扉は鍵だけ開けて、扉自体は閉ざされていた。屋上の重い扉を開くと、ブワッと外の風が私に吹きつける。その視線の先にいるのは、逆光で秋風にスカートをなびかせる詩文だった。

「よお」

何を話せばいいんだろう。とりあえず、歌詞ができたっていう話よね？　……っていうか、私なんかちょっと緊張してる？　詩文に？　なんで？

「歌詞ができたから、報告しようと思って」

「おお。そうみたいだな。よかったじゃねぇか♪」
「詩文のおかげよ」
「歌詞、見せてみろよ」
「ええ。もちろん」
一段高いちょうど座り心地の良いところに座り、そのまま寝そべったりしている詩文は妙におとなしく、荒々しさもなく、ただ淡々と涼しげに歌詞を見つめながら、イヤホンで私の仮歌を聴く。その４分程度の時間、私は寝転ぶ詩文の横顔を見たり、空を見たりした。
「うん……まあまあだな。これなら尚子チャンも納得したんじゃねぇの？」
「ええ。こっちがビックリするくらい喜んでくれたわ」
「だとしたら、目的はまさに達成じゃねぇか。よかったな。尚子チャンに喜んでもらうことがお前の最優先ミッションだったわけだしな」
「それは、ええ。もちろんそうよ。詩文のおかげで達成できたわ」
「なんだ、今日はえらくアタシのおかげおかげって言うんだな。お前の手柄だろ」
「事実だもの。詩文がいなかったら私、まともな作詞なんてできなかったわ」
「はは。そりゃそうだ」
「……………」
「ねぇ、それだけ？　ほかに何かコメントない？」

CamScannerでスキャン

詩文のこの断固として人の言うことを聞かない態度に、むしろ私は安心に似た気持ちになる。そう、私と詩文はこういう感じだったはず。……とはいえ、私も詩文に巻き込まれて違反行為をさせられるのはちょっと困るわ。だから、まずは詩文と会って、屋上から連れ出して話を始めましょ。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

屋上を目指して、階段を上がる。屋上の扉は閉まっていた。……というか、さすがに詩文も学習したのね。開けっ放しじゃ先生に見つかるっていうことをようやくわかったのか、屋上の扉は鍵だけ開けて、扉自体は閉ざされていた。屋上の重い扉を開くと、ブワッと外の風が私に吹きつける。その視線の先にいるのは、逆光で秋風にスカートをなびかせる詩文だった。

「よお」

何を話せばいいんだろう。とりあえず、歌詞ができたっていう話よね？　……っていうか、私なんかちょっと緊張してる？　詩文に？　なんで？

「歌詞ができたから、報告しようと思って」

CamScannerでスキャン

「おお。そうみたいだな。よかったじゃねぇか♪」
「詩文のおかげよ」
「歌詞、見せてみろよ」
「ええ。もちろん」
一段高いちょうど座り心地の良いところに座り、そのまま寝そべったりしている詩文は妙におとなしく、荒々しさもなく、ただ淡々と涼しげに歌詞を見つめながら、イヤホンで私の仮歌を聴く。その４分程度の時間、私は寝転ぶ詩文の横顔を見たり、空を見たりした。
「うん……まあまあだな。これなら尚子チャンも納得したんじゃねぇの？」
「ええ。こっちがビックリするくらい喜んでくれたわ」
「だとしたら、目的はまさに達成じゃねぇか。よかったな。尚子チャンに喜んでもらうことがお前の最優先ミッションだったわけだしな」
「それは、ええ。もちろんそうよ。詩文のおかげで達成できたわ」
「なんだ、今日はえらくアタシのおかげって言うんだな。お前の手柄だろ」
「事実だもの。詩文がいなかったら私、まともな作詞なんてきっとできなかったわ」
「はは。そりゃそうだ」
「………」
「ねぇ、それだけ？　ほかに何かコメントない？」

「……ん？　ねぇけど？」

「そう……」

詩文は、両腕を枕にして寝転んで空を見ている。そういえば、今日は空を見るのに忙しいんだっけ。いつも饒舌なはずの詩文は、なぜか私が話しかけないと会話を始めないし、話しても、すぐに話題を終わらせた。そんなやり取りが3分くらい続いてから、私は聞く。

「……ねぇ詩文」

「なんだよ」

「作詞のこと、まだ私に教えてないことあるんじゃない？」

「ねーって言ってんじゃん。全部教え切ったよ」

「嘘。まだあるでしょ？」

「ねぇよ」

「……」

「………」

「いや、嘘だわ。だって私、まだわかってないことあるもの」

「しつっけーなぁ！　教えたって言ってるだろ⁉」

私は、ペンケースにしまってあるアレを取り出す。

「ほら、これ。……私、まだこの意味わかってないわ。相対価値の鉛筆……よね？　これ、ものすごく大事な意味があるのよね？　これって作詞にどう関係するの？　……これって、結局なんだったの……？」

詩文は一瞬目を開き、露骨に嫌そうな顔をした。嫌そうな顔……？

「……まだそのこと覚えてたのか。忘れてりゃいいのに」

「忘れないわよ」

「意味なんかねーよ」

「それは嘘ね。意味、あるんでしょ？」

空気が重い。何かしら、私は、何か聞いちゃいけないことを聞いてるの……？　でも、ここに何かあることはどうやら間違いなさそうだった。

「……今までアタシが教えたことだけでも作詞はできんだろうが。それでいいだろ」

私の目を見ず、面倒くさそうに寝返りをうちながら言う詩文。私は、さらに追求する。

「やっぱり詩文、まだ私に教えてくれてないことあるのね？　だったら教えてよ。私、もっと良い歌詞を書けるようになりたいの」

「……どうしたもんかねぇ」

「…………」
頑なに、何かを隠し続ける詩文。私は私で、教えてくれるまで食い下がるつもりでジッと押し黙る。その無言のやりとりが少し続いたあと――。
「……わかったよ。わかった。教えてやるよ」
「ホント……？」
沈黙を破った詩文は、なんだか、うんざりしたようなというか、ものすごく面倒臭いことをしなきゃいけないみたいな重たげな雰囲気でそう言った。でも、やっぱりそうなのね。思った通り、まだ教わってないことはあった。
ガバッと体を起こした詩文は、陽の光を遮るようにして私の前に立つ。逆光で妙に影の濃い詩文は、たっぷりとした調子で、まるで警告するように言う。
「ここから先は、楽しいことだけじゃない領域だ。さっきも言った通り、ここまで教えたことだけでもそれなりに作詞はできるだろう。……でも実際のところ、作詞の本質はここから先にある。……でもな、できればこれは教えたくない……ってのが本音だ」
詩文の声色には、聞き慣れないニュアンスが含まれていた。それは、なんだか優しげというか……。
「どうして？　ああ、でもちょっとわかるわ。秘伝のテクニックは黙っておきたいみたいな

「……そういう話よね？」

「ちげーよバカ。そんな低俗な話と一緒にすんじゃねえ。アタシが出し惜しみなんてケチな真似をするかよ。単純に、お前には無理なんじゃないかと思ってな」

「……そ、そんなに難しいの？」

「難しくはない。むしろこんなにシンプルな話はない。でも、だからこそ無理っていうかね」

「……具体的にはわからないけど……大丈夫よ。もっと作詞のことが知れるなら、どんなことにだって挑戦するわ」

「……あー、ホントに良いのか？」

「もちろん」

執拗に、確認を促す詩文。こんなにも再三にわたって確認を繰り返すって、一体この先に何があるのかしら。でも、ここまで聞いて引き下がるなんてできっこないわ。

うやうやしくひと呼吸置いた詩文は、まるで注意書きか何かを読み上げるように、ことさら丁寧に言う。

「……今からする話は、作詞家もとい、〝作家〟の世界の話だ。ここに踏み込めば、お前は今日から普通じゃなくなる」

「普通じゃなくなる……？」

「勘違いするなよ。現状のお前からしてみればそれはまるで特別になること、すなわち『優れた何者か』になることのように聞こえるかもしれねぇが、これはそんなもんじゃねぇ。気の触れた異常者になるって方が真実に近いだろう。果たしてそれが幸せなことかどうかはわからねぇし、お前がこれに耐えられるかどうかは本当にわからん。もし途中で脱落したらお前は確実に不幸になるし、もし最後まで行けたとしても、この選択をすればわかりあえる人間は極端に少なくなり、場合によっては孤独のまま死ぬことだってありうる。これは、そのレベルの話だ」

「……え、ええ」

物々しく語る詩文の言葉は、ひと言ひと言が妙に重い。私はそれを、しっかりと聞く。

「……引き返すチャンスは何度も与えたからな。これはお前が自分で選んだ道だってことを、ゆめゆめ忘れるなよ。誰のせいにだってできない。〝これ〟は、お前が選んだことだ」

「もちろんよ。どんな難しいレッスンだって越えてみせるわ」

「そうか。じゃあ早速始めようか♪」

――不意に、詩文の声色は明るくなった。仕切り直しというか、パッと切り替えるように。

「ところで悠、お前はどういう作詞家になりたいんだ？」

「え？　どういう作詞家に？」
「ああ、どういう作詞家になりたいのかだよ。誰に向けて、どんな歌詞を作っていきたいんだ？　これが次のレッスンでものすごく重要な部分だ」
「そうね……」
　どういう作詞家になりたいか……。って、たしかに、大事なことね。ビジョンっていうか……そういう話かしら。
「私は、聴いた人が優しい気持ちになるような、そんな歌詞が書けるようになりたいわ。何かつらいことがある人には励みになって、応援するような……。それに、夢を与えるような。理想でいったら、音楽で人を救えたら最高だと思う。そういう話？」
「ほー、そうか。なるほどな」
　詩文は、私に背を向けて屋上を適当に歩く。楽しげに、ブラブラと足を放り出すように。
「お前って優しいヤツだよな。でも正直、アタシにはその感じがあんまよくわかんねーんだ」
「そ……そう？　別に、優しくなんかないわよ。っていうか、あんただって実は優しいトコ、あると思うけど？」
「アタシが？　まさか。アタシにそんなトコはねーよ。なんつーかさ、苦手なんだそういうの。人のためとかさ。嘘くせえっつーか。キレイなこと言ってるなあと思ってしまうっていうかね。マザーテレサじゃあるまいし」

「……ああ。それも、ちょっとわかるかもしれないわね。なんていうか、これって偽善（ぎぜん）なんじゃない？って思っちゃったりすることもあるっていうか」

「偽善？」

「詩文の気になるところってたぶんそういうことでしょ？　人のためとか、チャリティーとか、そういうのってどうなの？　っていう……。募金のことを偽善だって言う人も、結構いたりするわ。……私も、たまにそれは思うことあるし……」

「偽善ねぇ。偽善だと思うなら、なんでそんなことをするのかと思うけどな」

詩文は、なんだか物憂げに、ちょっと優しい声で話す。でも、その話は私にとっては結構得意っていうか、語れるテーマな気がした。

「でも詩文、こういう考え方もあると思わない？　『やらぬ善よりやる偽善』っていうんだけど、それがもし偽善っぽいことだったとしても、それで実際誰かが救われるなら、その偽善には価値があると思うの」

「へぇ、なんだそれ？」

「最近だとそうね、SNSとかで共有するとワクチンの募金になったりとか、そういうのもあるわ。まぁ……それも偽善っぽいといえば偽善っぽいけど、でも、やらぬ善よりやる偽善でやれば、誰かのことは救えるでしょ？」

「はー。そんなのがあるんだな」

CamScannerでスキャン

パッと、興味あり気な反応をする詩文。ちなみに私は、クリック募金や共有のワクチン募金、ほかにも、目についたらそういうのには参加するように心がけている。募金っていうものにいろいろ言いたいこともある人もいるんだろうけど、でも、私はその点については『やらぬ善よりやる偽善』のポリシーでいる。何もしない人より、何かはしてる人になりたいというか。

「……まぁそうね。自分のやってることが偽善っぽいかどうかで言ったら、まぁそういう風に見えたりすることもあると思うけど、それでいいと思うの私。たとえそれが偽善でも、誰かが助かるならそれでいいっていうか――」

「――ああもういい、もう十分だ。はは。いかにもテキトー作詞家のお前が言いそうなことだよな」

「……………え？」

一瞬、耳を疑う。詩文は、たっぷりとした嘲りを込めた調子で、含み笑いをしながら、半笑いで、そんなことを言った。その声色には、今までの詩文とは違う、なんだか悪魔めいた不気味さがあった。

「……え、し……詩文？　今なんて……？　テキトー作詞家って、私が……？」

「おいおい、まさかお前、自分はテキトー作詞家じゃないとか思ってんじゃねえだろうな？

冗談キツいぜ」

「……ちょ……どうしたの詩文……？　何？　どういうこと？」

10秒前とまるで雰囲気が違う。相対する詩文は、別人のようだった。でも……その様子には既視感がある。そう……これはまるで初めて詩文が私と出会った、あの図書室のときみたいな……。

「お前はテキトー作詞家だよ。いや、もっとポピュラーな呼び方で言い直してやろうか。テキトー作詞家のお前の別の呼び名。それはな――〝偽善者〟だ」

「…………なんですって？」

「何をもってテキトー作詞家なのか、それはアタシの決めつけだと、初めて会ったときのお前はそう言ったよな。だが違う。決めつけなんかじゃねぇよ。お前は歴然と偽善者で、だからこそ、ハッキリとテキトー作詞家だ」

偽善者。偽物の善意を行う人。詩文は低く響く声で、確かな蔑(さげす)みをもって、私のことをそう呼んだ。

「……急になんなの？　意味わかんないんだけど、普通にムカつくわよ？　あんたとはもう結構打ち解けたけど、悪口を正面から言っていいわけじゃないわ。親しき仲にも礼儀ありで

CamScannerでスキャン

「打ち解けた？　親しき仲？　よせよ。このアタシがお前みたいなクズと一緒にされるなんて、死んでもごめんだ」

たっぷりと侮辱を込めて私のことをクズと呼ぶ詩文に私は、ショックを受けていた。私は、やっとまともな作詞ができるようになったと思っている。それに、詩文とも仲良くなれたと思っていた。けど、その詩文から発された言葉は、私の信じているものを真っ向から台無しにする、悲しくなるくらい刺々しい言葉だった。……何かの間違いか、それとも、また私を試していたりするのか。どっちにしても、それは冗談で言っていいような言葉じゃない。

「あんたから作詞を教わって、あんたのやり方で作詞ができるようになった私に、テキトー作詞家って言うの……？　それは、あんた自身がテキトー作詞家ってことにはならないの？」

「お前は何もわかってねぇな。テキトー作詞家が一体なんなのか、全然」

「わからないわ。なんで急にそんなこと言われてるのかも全然わからない。なんなの？　どういうこと？」

「テキトー作詞家という分類に、テクニックは関係ない。薄ら寒い偽善で歌詞を書いてる、お前みたいなヤツのことをテキトー作詞家っていうんだ」

「………」

「はは。聞いちゃいられねぇ話だったぜ。やらぬ善よりやる偽善？　すげぇなおい、そんなことを散々やっておきながらまさかお前、自分が偽善者だってことに気づいてないのか？」
「……偽善的かもしれないけど、偽善者とは言ってないわ。大体、偽善だったらなんだっていうのよ。あんた『やらぬ善よりやる偽善』の意味ちゃんとわかってる？」
「わかってるよ。よおくわかってる。偽善者のお前が見つけてきた、自分の偽善を肯定するとてもよくできたキャッチコピーだ。なるほど、さすが良い嗅覚してるぜ。お前らみたいなクズどもにとってこんなに都合のいい言葉はないもんな」
「……どういうことよ」
「募金は〝善行〟だよどう考えてもな。それについては疑う余地もない」
「……そ、そうでしょ？　当然じゃない」
「はは。嘘だな。お前の場合は違うよ。だったらなんでお前、募金を偽善だと思ったりしたんだ？」
「それは……」
「〝偽善だと思っているから〟、だろ？」
「………」
「お前は人を救おうだなんて思っていない。優しい人間でもない。臆病で卑怯なお前が守りたいのは〝優しくて美しい自分〟とかいう、ありもしないでっちあげの自分像だけだ」

「何の決めつけ？　何それ。全然違うわ。あんたに私の何がわかるっていうのよ。私は人を守りたいと思ってるし、困ってる人がいたら助けたいと思ってるわ。あんたがそうじゃないからって、私のことまで勝手に決めつけたいだけでしょ」
「だったらバイトでも何でもして金を稼いでこいよ」
「……は？　何？　バイト？」
「そうだ。そうやって得たその金を、今まさに助けが必要な人たちに送れ。お前の小遣いも一緒にな。服や趣味といった贅沢品に使ってるその金を自分のために使わず、ガンガン送りゃいいんだ。〝大勢の困ってる人たち〟がきっとすごく助かるぜ。お前のわずかな財力と行動力でも、本気を出しゃそれなりにまとまった額にはなるだろ」
「……それは、極論よ」
「極論なもんかよ。人を救うってのは、そういうことだ。でもま、やりゃあしねぇよな」
「……違う。人を救うっていうのは、そういうことじゃないわ」
「何が違うんだよ。説明してみろよ。〝やらぬ善よりやる偽善〟とやらを見せてくれよ。なんだ？　もしかしてお前、ネットを見ながら適当にクリックするって程度の気持ちしか、人を救おうと思ってねぇのか？　お前の優しさとやらはその程度のものなのか？」
「……そういうことじゃないわ。っていうか、何この話？　論点がズレてるわ」
「ズレてねぇな。残念ながら」

「…………」
「お前にとって〝不幸な誰か〟は、自分をキレイな人間にするための材料でしかない。お前は、募金箱に小銭をぶち込むたびに、嘘くさいキレイな自分と、免罪符（アリバイ）を買ってるんだよ。そのくだらねぇ『やらぬ善よりやる偽善』とかいう薄っぺらな建前でな。……優しい歌詞が書きたい？　夢を与える歌詞が書きたい？　音楽で人を救えたらだぁ？　笑っちまうな。お前が救いたいのは不幸な誰かなんかじゃあない。誰のことも助けねぇ冷酷で薄情な、自分自身だけだろうが」
「……バカじゃないの？　何を根拠にそんなこと言ってるのよ。仮に、私がどんなつもりでも、それでも誰かは救えてるでしょ」
「……目をそらせば不幸な人はいないことになる。だからお前は上手に調整して、利用して、自分の都合で適度に不幸な人を〝見繕（みつくろ）って〟、自分をキレイに保ってるんだ」
「違う。私は目をそらしたりしてないし、不幸な人を利用したりもしてないわ」
「命の価値は平等だろう？　でもお前、平然とその価値を選別してるじゃねぇか。どういうことだよ。お前の心持ちひとつで、お前が贅沢を少し抑えたくらいのことで楽しく元気に生きることができる人間は大勢いるんだ。それを知ってるのに、なんでお前はそれを見て見ぬ振りしているんだ？　人を救いたいんじゃなかったのか？」
「…………」

「〝そんなもん知ったこっちゃねぇし、自分の贅沢の方が大事だから〟だろう？　お前はそういう人間だ」
「……違う」
「はは。そういえば、お前が目をそらしてる〝汚ねぇ自分〟はそれだけじゃねぇよな。『友達の幸せを心から祝えない自分』ってのも、たしか腹の中に溜め込んでなかったっけ？　そうだ、もっと言うと、お前がアタシに作詞を習いに来た動機だってそうだ。『有名な作詞家のＳｉＥから作詞を習う』とかいう虚栄心だもんな。じゃないとお前がアタシから――ほかでもないどう考えてもお前からしてみりゃ一番嫌いなタイプのはずのこのアタシから作詞を習おうだなんて、いくらなんでも筋が通らねぇもんな。……どうだ？　このふたつはあくまでアタシの推測なんだが、当たってるなら正解って言ってくれよ」
「……なんのこと？　言ってる意味が全然わからないわ」
「ほらな。汚い自分なんていなかったことになってる。これが、お前が偽善者である証拠だ」
　交わしている言葉以上に、心を直接握り潰しにくるような詩文の声に、私は答える。
「……仮に、私が偽善者だったとして、それがなんなのよ……そんなの作詞に関係ないでしょ？」
「いいや。作詞に関係するからこそアタシはこの話をしているんだ。むしろ、作詞に関係な

いならこんな風にわざわざ偽善を糾弾する必要だってない。ほっときゃいいんだ、そんなもん。しかし作詞をする場合についてはこれは無視できない。なんでだと思う？」

「………」

「そんなこともわからねぇからお前はテキトー作詞家だってんだよ。お前に歌詞を書く資格なんてない。……創作においてはあらゆる価値観や概念が役に立つ――が、しかし、偽善だけは違う。偽善だけは、煮ても焼いても食えない正真正銘のゴミだ。そんなお前の書く歌詞も、ゴミでしかない。そうは思わねぇか？」

「思わないわ」

「どうしてだ？　お前のその、自分のクズさを誤魔化すために書いた薄ら寒いキレイゴトを並べ立てた歌詞がゴミじゃないって本当にそう思うのか？　だとしたらお前、とんでもねぇゲテモノ好きだな。アタシはそんな汚ねぇもんとてもじゃねぇが耐えられねぇよ。お前、それを本当に良いものだと思ってるのか？」

「……言ってることの意味がわからないわ」

「こんなにもわかりやすく話してるのに、わからねぇってことはねぇだろ。……もしかして、本当にわからねぇのか？　こんなことがわからねぇくらい深刻な馬鹿なのか？　それとも、わかってるがわかりたくないだけの、卑怯者なのか？」

「……あーあ、話にならないわ。もういい。あんたと話しても無駄ってことがよくわかった。

もうあんたの話なんて聞きたくもないわ」

「逃がさねぇよ。何度だって聞くぞ。お前は本当に、誤魔化しとキレイゴトだらけの偽善者の歌詞を、良い歌詞だと思っているのか？」

「……うるさい」

「うるさいじゃねぇ。ちゃんと答えろよ。お前の言葉でハッキリとだ。『YES』か『NO』か。どっちなんだ」

「…………どっちでもないわ――」

「――だと思ったぜ。〝そうやってなんでもかんでも曖昧にして、大事なことをうやむやにするのはてめぇらのいつものやり方だよな。まったく手に負えねぇよ〟」

「…………」

「やっぱり無理だったな。まぁ、わかっちゃいたんだが。これがお前の知りたがっていた次の作詞レッスン『見たくない自分を目撃する』ということだったんだが。はは。しかし残念ながらお前はこれに耐えられそうにないな。こんなにハッキリと目の前に突きつけてるってのに、まだわからねぇとかほざいてんだから」

「……こんなの作詞レッスンでもなんでもないわ。ただの暴言じゃない」

「そう。その通りだ。これは作詞レッスンなんかじゃねぇ。これはお前の闇を暴（あば）く『尋問（じんもん）』だよ」

………………。

「そぉーだ、最後にひとつ、お前が知りたがっていたことを教えてやるよ」

目を細めて、鼻で笑いながら詩文は私の肩にポンと手を乗せ、そしてすれ違いざまの耳元で、信じられないようなことを言った。

「……アタシがお前に作詞を教えたのはな、こうやってお前みたいなテキトー作詞家の心をぶっ壊すことが目的だったんだよ。喫茶店でお前とやり合ったあの瞬間に、そう決めたんだ。ご苦労さん。お前はこれで終わりだ。あとは自分に殺されて死ね」

肩越しに、屋上の扉が開いて閉まる音がする。詩文のいなくなった屋上で私は、ただ何もない場所を見つめていた。

CamScannerでスキャン

第10話

江戸川悠の話

CamScannerでスキャン

「悠、あんた学校！　いつまで寝てるの!?」

「……お母さん」

朝8時20分。ホームルームは8時40分だから、遅刻するのはもう確実。まだパジャマだし。なんの準備もしてないし、する気もないし。

「今日……なんか風邪っぽい……」

寝坊している私を起こしに来たお母さんに、私はそう告げる。するとお母さんは手際よく体温計を持ってきた。……体温計。体温なんか測ったら風邪ひいてないのバレちゃうじゃない。

「……36.5度……」

体温計を指で摩擦して温めるとか、なんかそういう小細工をしようかとも思ったけど、そんなことをする気すら起きなかった私は、ただ普通に熱を測った。そして、当然のド平熱。……でもお母さんは私の顔色の悪さを察してか、今日は学校は休んでいいと言ってくれた。

その言葉がどれだけ私を安堵させたか、計り知れない。

（……ズル休みしちゃった）

CamScannerでスキャン

布団の中で私は、寝返りをうちながら時計を見る。9時前。もう学校は始まってる時間ね。みんなが学校にいる時間に自分の部屋のベッドで寝てるって、なんだか変な気持ち。……ズル休みなんて、小学校の頃のマラソン大会以来だわ。……ああでも、よかった。学校行かなくていいんだ……。いや、別に学校に行きたくないわけじゃないんだけど……なんていうか……。なんていうんだろう……。何も考えたくない。ただただ、何も考えたくない。

——お前はもう終わりだ。

頭の中で、何度も繰り返し再生される言葉。ほかにもいろんなことを言われた気がする。頭の許容量をオーバーするような、とてつもない暴言の洪水。

昨日はあれからどうしたんだっけ。あんまり覚えてないんだけど、たしか、屋上から出て、家に帰って、普通に夕飯を食べて、普通に、普通に過ごして……。何をして何を考えていたのかはほとんど覚えてない。けど、一晩経ってしまった今朝、嫌でも考えてしまう。私は詩文に何を言われたのか。何を突きつけられたのか。

「……いや、考えてみれば、あいつの言ってることはやっぱりめちゃくちゃだわ」

CamScannerでスキャン

布団の中で私は頭を整頓する。あいつの言ったことは、一見筋が通ってるように見せかけて実はそういうわけではない。言葉のレトリックが巧みなのは素直にさすがと思うけど、でもそれは、ディベートに強いってだけで正しいってわけじゃないわ。大体、あいつに私の何がわかるのよ。私の心の中でも覗いたの？　あいつの正義はあいつの常識の中で成立してるもので、あいつのフィールドで勝負したら私が論破されるのは考えてみれば当たり前のことだわ。

「……そうね。そもそも、あいつと口喧嘩なんかで勝てるわけないのよ。あいつは屁理屈大王なんだから。ストレートなやり方で話そうとしても、テクニックでいなされて一方的にやられるだけだわ」

そう。あいつは文字と言葉のスペシャリスト。その点はもう完全に認めるわ。天才レベルだと思う。あいつはすごい。すごいけど、すごいだけ。正しいかどうかは別の話。

「何が偽善者よ。笑っちゃうわ」

……偽善者。偽善者。偽善者。何度も言ってたわね。私のことを偽善者偽善者って。じゃあ聞くけど、あんたはどうなのよ？　あんたは偽善者ですらない、真の悪党じゃない。私はたしかに善人ではないかもしれないけど、悪党ではないわ。あんたよりはマシよ。悪党のくせに私のことを偽善だとかなんとか言って責めるなんて、自分のクズっぷりを棚にあげるに

もほどがあるわ。全然筋が通ってない。まったくの論外だわ。

「はーあ、一体何だったのかしらホント。まいっちゃうわー」

私は、カラッとした声で言ってみる。平日午前の、本来私がいないはずの部屋で、ベッドに仰向けに寝転がりながら。うん。そうよ。やっぱり思った通り、私は間違ってない。ただ、あのイカレた過激派の作詞家と口喧嘩をして、負けた。ただそれだけのこと。

「……口喧嘩に強いのが、作詞には必要不可欠なのかしら？　ふふ、バッカみたい。優しさを理解できない可哀想なやつ。ホント、逆に気の毒だわ。なんかずいぶん自分勝手なことをいろいろ言ってたけど、わ……っ」

――唐突に、内臓にこみ上げる嫌な予感。ベッドから起き上がった私は口を押さえながら早足でトイレに向かい――嘔吐（おうと）した。

「……ォエ……ォエエ！　……ゴホッ……ゥ……ォエ……ッ！」

風邪をひいているわけでもないのに、突然もよおした吐き気。便器を抱えながら、胃酸で焼ける喉と、引きつる胸の筋肉が痛むのに耐える。一通り吐き終わり、ドキドキした体が落ち着くのを待って、脱力しながらトイレを流してうがいをして、フラフラと洗面台に映る自分の顔を見て、その人相にギョッとした。

「………」

死相でも出てるんじゃないかと思うような顔色。お母さんが休んでいいって言ったのも頷けるわ。絶対普通じゃないもの。

謎の吐き気は、吐き切ったら収まってくれた。顔を洗いながら、私はもう一度考える。私は、優しい人間になりたい。人を救う人間でありたい。それのどこがおかしいのよ。そうじゃない方がおかしいでしょ。……あんたの方が、おかしいでしょ。

「……言い返してやろうかしら」

今考えた理屈で詩文に言い返すことはできると思う。そう思って、呟いてみたひと言。……でも、その強気ぶった言葉は私の意思とは裏腹に、唇と体の芯をブルブルと震えさせた。

「……何、これ……？」

私は、震える体を抱くように腕でギュウと抑えながら、その反応に驚く。……あいつと正面から話すのが恐い。できればもう二度と会いたくない。……でも、もしかしたら会うかもしれない。会ったら今度は何を言われるの……？　あいつのことだし、もしかしたら突然私の前に現れるかもしれない……そういう、凄まじい脅迫感で、外に出るのが恐い。……どこにいたってあいつは現れそうだけど、とりあえず学校には必ずいる。私の体は、あいつとやり合うことをもう本能で拒絶しているようだった。

CamScannerでスキャン

「……今までのことも、全部嘘だったのよね」
　震えがおさまるまでと、洗面所にへたり込むように座った私は、ポツリと呟く。私は、あいつのことを良いやつだと思ってた。尊敬もしてた。けど、あいつは私を傷つけることしか考えてなかった。結局あいつの中で私はテキトー作詞家とかいう敵でしかなくて、攻撃の対象でしかなかった。
「……なんでなのよ……」
　絞り出す言葉と一緒に、数粒の涙がこぼれる。私は、詩文がどういうつもりだったかなんて知らなかったけど、詩文のことは好きだった。おもしろいやつだし、過激だけどハッキリしてるその姿に憧れみたいなものもちょっと感じてた。あいつが私のノートを守ってくれたあの日、私はあいつの優しさを信じた。……あいつが私のことを冗談でもマブダチだとか言ってたのを、私は心のどこかで誇らしくも思っていた。……けど、全部。全部嘘だった。私は程よく、あいつの罠にハマって弄ばれた、ただの愚か者だった。
「なんでなのよ詩文……」
　食い込む爪が痛いほど膝を掴んで、流れ出る涙。私は、ただただ悲しいらしかった。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「コンコーン、ゆっぴ起きてる～？　寝てる～？」

呼び声に目を覚ました私は、ぼんやりと時計を見る。時刻は午後4時40分。泣き疲れた私は、あれからたっぷりと眠りに落ちていたらしい。部屋の向こうから聞こえるのは、能天気な尚子の声だった。

「……起きてるわ。入って」

そう声をかけると、ドアを開けて入ってくる尚子。手には、たぶんお見舞いの何か。

「ゆっぴ風邪～？　大丈夫？　杏仁豆腐とドーナツ買ってきたんだけど、食べれる？」

「うん、もう平気。ドーナツは太るからいいわ。ありがと」

「じゃあ私はドーナツ食べて太ることにしようかな！」

「……ははは」

元気一杯の尚子。その様子に私は、少しくたびれる。

「そぉ――だゆっぴ！　聴いてよこれ！　作詞・江戸川悠先生の渾身の処女作を我らざ☆ぐっとたいみんぐが演奏してみた音源！　昨日レコーダーでさらっと録ったんだけどさ、バッチリじゃないこれ!?」

「……えっ？　ああ、聴かせてもらうわ」

興奮気味の尚子が差し出してくるイヤホン。そして再生するのは、私が書いた歌詞のあの

歌。尚子のボーカルで、曲の演奏も前よりグッと迫力のある感じになっていた。

「どう？　どうゆっぴ？」

「え、ええ。いいんじゃない？」

「え――？　リアクション薄！　薄いよゆっぴ！　いやぁ～しかし良い歌詞だねぇ！　なんかこう、ゆっぴの人柄があらわれてるっていうか！　歌いながらグッときちゃったよ！　あれ？　どうしたのゆっぴ？　もっとテンションマックスで……って、あ、そっか、風邪ひいてるんだもんね。ごめんごめん、あはは！」

「良い歌詞だと思う？」

「え？　そりゃあもう！」

……そう。そのキレイゴトをキレイゴトだと思わないのは、あんたが本物だからなんでしょうね。あんたっていつもそう。嫌んなるわ。

「でねでね、実はゆっぴに頼みたいことがあって……今書いてる新しい曲があるんだけど、これもまた作詞頼めないかな？」

「……へぇ。そうなの。どういう曲なの？」

「今度のはバラードなんだ！　歌詞の雰囲気はこれみたいな感じでやってほしいんだけど……」

そう言って尚子は、スクールバッグからＣＤを取り出す。そのＣＤは、よりにもよって――。

「《シャム猫とピアノマン》、ゆっぴもこの曲好きだよね？　歌詞が超良いんだよねー！　なんかゆっぴの歌詞ってさ、Ｓ・ｉＥに通じるものがある気がするんだ私。やっぱり師匠に似るみたいなところもあるのかな？　だからね、こういう方向性のやつを――」
「――帰って」
「……え？」
ほぼ無意識に、私はそう言っていた。
「ど、どうしたのゆっぴ……？　あ、ごめん、ちょっと騒ぎすぎだね……」
「うん、うるさいから帰って」
「……？　ゆっぴ、なんか変だよ？　何かあったの？」
「何もないわ。風邪って言ってるでしょ」
「でも……え？　なんで怒ってるの……？」
「いいから帰ってよ。気分が良くないの」
「……そ、そっか。あはは、うん、そうだね、ごめん。じゃあ、そのＣＤ置いてくから、元気になったら――」
その言葉を言い終わるより早く、私はＣＤを掴むと、壁に投げつけた。ガシャンとプラスチックの割れる派手な音が部屋に響き、投げ出された円盤が覗く。音のない静まった部屋で

は、時計の針の音が妙に耳についた。
「…………」
「…………」
「……本当にどうしたのゆっぴ……？」
尚子のテンションが、真面目な感じになった。そりゃそうよね。
「……どうもしない」
「そんなわけないよ。どうしたの？　相談してよ」
「どうもしないって言ってるでしょ。早く帰れよ」
「……！」
「……あんたなんかに、あんたみたいなやつに、私の気持ちがわかるわけないでしょ」

私の喉から出る、乱暴な言葉。震えつつ低く発する声。

「は……大体、あんたがあの日、私に作詞なんか押し付けなければ、こんなことにはならなかったのに。……どうしてくれるのよ。あんたのせいよ！　一体どうしてくれるのよ！」
「……ゆっぴ……？　わ……私のせいって……何が？　えっと……ごめん、本当に心当たりがないっていうか……何を言ってるのか全然わからないんだけど……」

「うるさい、消えろ！　帰って！　帰ってよ！」

「…………」

私の剣幕に何事かと駆けつけたのは、母親だった。それから尚子と母親は何か話してたようだけど、布団の中にくるまってあらゆるものを拒絶する私にふたりは手の出しようがなかったのか、しばらくすると部屋からいなくなった。尚子は去り際にひと言、ごめんねと言った。

――本当は、わかってる。詩文のことを悪党だとか、口喧嘩が達者なだけだとか言って話をすり替えて、それらしいことを言って自己弁護してるけど、そうやって私は、また触れないようにして、徹底的に避けてる。もう誤魔化しきれない私自身のこと。私という偽善者のこと。

自分が偽善者だって。一番最低なのは私だって。優しい人になりたいとか、そう言っておきたいだけで、いざとなったら言い訳ばっかりで逃げ出す卑怯者だって、優しい人になりたいだけで実際は何もしない冷たい人間なんだって、そんなことわかってる……。わかってるけど……。

――でも、そんなのみんなそうでしょ……？

「……なんで私ばっかり悪者にされなきゃいけないのよ……なんで私ばっかりこんな目に遭うのよ？　一生懸命やってるのに……こんな仕打ちに遭うような悪いこと、してないのに……」

もう終わりだ。

こんなにも世界が真っ暗だったなんて、知らなかった。

いや、それは違うわね。真っ暗で、真っ黒だったのは私だ。世の中は何も変わっていない。私も何も変わっていない。唯一違うことといえば、私が私の誤魔化しに気づいてしまったという、その一点。私はもともと卑怯者で、それが自分で見えるようになってしまった。ただそれだけのこと。それ以外は何も変わっていない。

ひどいやつ。友達の幸せに嫉妬して、才能に嫉妬して、ズルいズルい、私も欲しい、私のせいじゃない、私だけなんでって言い続けて。努力するわけでもなく、勇気を出すわけでもなく、文句ばっかり言って。……誰かを救いたい？　音楽で癒せたら？　なんの冗談だったのかしら本当。自分のことだけしか考えてない、さっきのが私の本性。いよいよ化けの皮がはがれたわね。……でも、もし尚子が作詞しろとか言い出さなかったら、私はこんな目には

遣わ——なかったし……。

「……みっともない。——いい加減にしろよ私……」

涙声で、さめざめと呟く。私、一生こんなこと言い続けて生きていくのかな。

自分がどれだけめちゃくちゃなことを言ってるのか、やってるのか、もう向き合わなくちゃいけない。どう考えても悪いのは私で、尚子にはなんの落ち度もない。

私が書く歌詞は、嘘と誤魔化しと自分を守るためのキレイゴトばっかり。そうね。その通りだと思うわ。それが、どれくらい最悪な歌詞なのか、もう私にはわかってしまう。詩文が教えたいろんな知恵や概念が、私の頭にはもう入ってしまっている。ゆえに私は、私の誤魔化しを見逃すことがもうできない。見つけることができてしまう。……私はもう、歌詞を書くことはできないと思う。だって、全部嘘なんだもの。

「……歌詞が書けないだけじゃないわね。……もう、何もできない」

あいつは全部、本当に全部わかってたんだ。私がこんな風になることも、あの日、私に作

涙を教えると言ったあの瞬間——私という傍観者の心を破壊すると決めたその時にすべて、私が破滅する今この瞬間のことまでを既にお見通しだったんだ。

「……なんでこんなひどいことをするの。なんで私を裏切ったのよ詩文……」

……信じてたのに。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

——6日が経った。

「悠、尚ちゃん来てるわよ……？」

「会いたくない」

私は、あれからずっと学校を休んでいる。これが噂の不登校なのね。2日連続で休んだら、3日目はなんとなく行きにくくて、4日目はもっと行きにくくて、ずるずると5日目を休んで今日は6日目の月曜日。なるほど、こういう事で不登校になっていくのかって思う。私は

ただ駄々に親の説得を拒絶して、部屋に引きこもり続けた。スマホも見ない。誰とも話したくない。

尚子からのあらゆる連絡を無視し続けた私は、もちろん尚子にも会いたくなくなっていた。っていうか、会えるわけなかった。どんな顔して話せばいいのよ。悪いのは私でしょ？　わかってるんだから。できるだけ何も考えたくない。ただ永遠に寝ていたい。

……と、そのとき、部屋の扉が開いた。

「お、お邪魔しまーす……」

「……なに入ってきてるのよ」

どうやら、連日の不登校をさすがに普通じゃないと察した母親が、尚子を部屋に入れることにしたらしい。こっちの様子を伺ってる尚子は、若干挙動不審になりながら話す。

「……あのね、昨日、文化祭だったんだ。だから……その……」

「………」

「昨日の演奏の録音、持ってきたんだけど……」

「………」

「すごい評判良かったよ」
「……そう」
　そういえば、昨日は文化祭だったのね。自分の書いた歌詞のお披露目を見れなかったのは、少しだけ残念だわ。
「ゆっぴが歌詞書いてくれて嬉しかった。ゆっぴに頼んで良かった。あの――ゆっぴには嫌なことだったかもしれないんだけど、でも、私すごい助かったんだ。だから、その……ありがとう。あと、ごめんね。迷惑だってわからなかったから……ゆっぴも楽しんで書いてくれてるのかなって、思って……」
「……」
「でも、ねぇゆっぴ？　歌詞書くの、本当に嫌だったの？　そんなはずないって、あの歌詞を歌ってて思ったんだ。ゆっぴはたぶん、歌詞を書くのが嫌で怒ったんじゃない。……私、いっぱい考えたんだけど――あはは――やっぱりあんま賢くなくて――ゆっぴが怒ってる本当の理由がわかんなくて……。わかんないから謝っても逆に怒らせるだろうなーって思って……それで、いっぱい考えて考えたんだけど――やっぱりわかんないから……その……教えてほしいんだ。私、何をしちゃったのかな……」
「――」
「――」

「……あんたのそういうところが――」

――嫌いだと、言いかけて私は言葉を改める。もう、疲れてしまった。

「……あんたのそういうところが、うらやましくて……なんであんたってそんなに幸せそうなの……？　私……もう毎日そんなことばっかりで、器小さいやつだなってわかってるんだけど……自分よりできてない人とか、不幸な人を見つけて安心したりして、なんでもかんでも人のせいにして……人にどう思われてるのかずっと気になってて、嫌なこと言われたら精一杯自己弁護して……頭の中だけで反論して、どうにかして相手のことを見下したりして……自分のせいじゃないとか、自分は悪くないとか……そんなことばっかり考えてて、そんな自分は最低だってわかってて………あんたが楽しそう笑ってるのが、見ててキツいのよ。……ね？　……最低でしょ？」

私は、自嘲をたっぷり込めた情けない声で語る。でも、言ってみたら逆にスッキリしたような気もする。そうね。私くらい最低な人間は、そうそういるものじゃない。いつのまにこんな人間になったのか、もしかしたら最初からそうなのか、わからないけど。

少し間を置いた尚子は、ぽつりと呟くように言う。

「……それって普通のことだよゆっぴ。ゆっぴから見たら楽しそうに見えてるだけで、私も卑怯なやつだもん」
「そんなことないでしょ」
「そんなことあるよゆっぴ。忘れそうになったら思い出して。この世に、嫉妬しない人間なんていないんだから。私だっていっぱい嫉妬するよ？　でも、それじゃしんどいから、自分で自分のことをうらやましいって思えるように、精一杯楽しいこと探してるんだ。人一倍嫉妬心が強いから、できるだけみんなのやってることを見ないようにして、一番うらやましいのは自分のやってることだって、思えるようにしたいっていう、ただそれだけなんだ」
「それは……嫉妬心なのかしら」
「わかんない。わかんないけど、似たようなものじゃないかな。……ねぇゆっぴ、怒ってたのって、私への嫉妬心……なの？」
「……どうなのかしら」
尚子に八つ当たりをしたのは間違いなくそれが理由だと思う。けど、私がこんなことになったのは、明らかに尚子が原因じゃない。
「……ううん、私が悩んでるのは、尚子とはあんまり関係ないことなの。尚子に怒ったのは……し……嫉妬と八つ当たり……なの。……本当にごめん」

「そっか、そっかー！　そっかぁゆっぴ！　私こそごめんね！　あ！　でも！　私は悪くないカンジなのかな⁉　えっと、あはは！　謝っていいのかよくないのか、よくわかんなくて！でもごめん！　これで仲直り！　ね！」

心底安心したような顔で笑う尚子。なんでなの？

「……はは……あんたってなんでそんなに良いやつなのよ……私がクズって知ってるでしょ？　仲良くしても何の得もないわよ」

「クズじゃないし、損得なんかで友達を選んだりしないよ。はーでもよかったぁ。もう一生ゆっぴと話せないのかと思った！」

「……やっぱり、器が大きいわね。私は……尚子みたいにはなれそうにないわ」

「器？……はちょっとよくわかんないけど、私もゆっぴも似たようなものだと思うけどなぁ」

「とんでもないわ。もういいよいよ敗北宣言よ。尚子と競い合うなんて、身の程知らずもいいところだったわ」

「競い合うもなにも、ゆっぴ歌詞書けるじゃん！　私、作詞できないもん！　ね、一緒に音楽やろうよ！」

「…………」

尚子のその言葉に、私は言葉を続けられない。

「ううん。作詞はもう、やめておくわ。もう、自分のことわかっちゃったから。私は、歌詞

を導くべき人間じゃないわ。というか、愛とか友情とかを語れるような人間じゃないって、わかったの」

「……ゆっぴ、本当に何があったの……？　あ、いや、ごめん、なんでもない。うん。でも……あのね、もし私で相談相手になりそうなことがあったら、言ってね。私じゃダメかもしれないけど……」

「あんたって優しいわね尚子。あんたみたいな人が、本物なんだと思う。私は偽物だわ」

「本物とか偽物とか、大げさだよ。友達のことを心配するのは、普通のことだと思うよ？」

「……それを普通に言ったりやったりできるのが、すごいのよ」

私の意味不明な八つ当たりに本気で悩んでいたらしい尚子。なんで私みたいなやつと友達でいるのかしら。それについては本当に、理由がわからないわ。私だったら、私みたいなやつとなんて友達にならないもの。……でも、よかった。尚子に謝れて。こんな私にも、まだ友達でいてくれる人がいて。

「じゃあ、あのねゆっぴ、友達として、ひとつだけゆっぴにお節介なこと、言っていいかな」

「ええ。何？」

尚子にしては珍しく、かしこまった様子で言葉を選んで、言う。

「『もういい』って、ゆっぴはさっき言ったよね。作詞はもういいって。もし本当にゆっぴが心の底からそう思ってて、それが一番幸せだっていうならそれでいいと思う。思うんだけど。……余計なお世話だけど、ほんとのほんとに余計なお世話なんだけどね？」

「うん」

「……ゆっぴ、楽しそうじゃないんだもん」

「…………」

「何に悩んでるのかはわからないけど、本当にそれでいいの？　もう辞めるって、作詞しないって、本当にそれでいいの？　作詞、楽しくなかったの？　辞めたその先に、幸せなゆっぴはいるの？　あとで後悔しない？　もう一度本気で考えて本当に、それでいいの……？」

「…………」

「…………」

「……よくない」

「……うん」

「よくない。よくないのよ尚子。全然よくない。ああ、よくない！　よくない！　このままじゃダメだって知ってるの……でも……でも……！　――ねぇ尚子……あんたってなんでそんなに強いの……？　私もう、わかんないのよ……。どうすればいいのか……。何を間違えてるのかもわからないし……何をわかってないのかもわからないし……。どっちを向いても

真っ暗で……信じてた人からも見放されて……世界中からお前はクズだって言われてるような気がして……目を閉じてもそれは同じだし……」

尚子の問いかけは、あまりにもストレートで、私は嘘をつけなかった。見切りをつけて、潔くなったつもりの自分すらも誤魔化しだっていうことに、気づかされてしまった。私は、みっともなくても諦めたくない。たとえ偽善者でも自信をもってこれだって言えるもの——作詞は私の誇りだって言えるようになりたい。もし無理でも、精一杯抗いたい。

「ねぇゆっぴ。あのね。私、強くなんかないよ？　でも、強くなくても、守りたいものはあるんだ」

「守りたいもの……？」

「ゆっぴが絶対、それだけは守りたいものって、なんなのかな。それが見つかればきっと、恐いことがあっても、頑張れるんじゃないかな」

「私が守りたいもの……」

「私はギターが好きなんだ。それだけでいいって思ってる。その部分だけは、ゆっぴから見たら強そうに見えたりもするのかもね。ゆっぴの大事なものは、何？」

CamScannerでスキャン

私の一番大事なもの。私が絶対に捨てたくないもの。
それはなんだっただろう。

「……ココロノート」

「ココロノート?」

「……ううん、なんでもないわ。私にもひとつだけ、命に代えても守りたいものがある。もう裏切らないって決めたことがあったわ。ありがとう尚子」

「え、えっと……うん！　よくわかんないけど、そのココロノートがあれば大丈夫だよゆっぴ！」

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

尚子が帰ったあと、私は制服に着替えた。時刻は午後4時半。今から学校に行けば、着くのは5時頃。この時間ならまだきっと、あいつはあそこにいるはずだ。そう思って私は、ココロノートを片手に学校の屋上へ向かった。

CamScannerでスキャン

第[illegible]章

一番大事な作詞の話

CamScannerでスキャン

「……何の用だ。作詞のレッスンはもう終わっただろ」

夕暮れの屋上。一段高い場所に立って空を見ていた詩文は、血のような赤い陽の光を受けていた。まるで虎かライオンにでも相対しているような、凄まじいプレッシャー。重く響くその声色は、たったひと言で私の体の自由を奪う。……指先と唇が震えるのがわかる。……それでも私は、一歩詩文に近づく。

「ハァー……。ここはアタシのお気に入りの場所なんだが、目障りだから消えてくれねぇかな。景観が台無しだ」

「…………」

「ご存知の通りアタシはテキトー作詞家が死ぬほど嫌いなんだ。わざわざ探し出して殺そうだなんてそんなナめんどクセェことはさすがにしねぇが、目の前をハエみたいにチョロチョロ飛んでやがったら、叩っ殺すぞ。アタシに殺されないように気をつけて生きろ。ほら早く逃げろよ。今なら見逃してやる」

「いいえ、逃げないわ。あんたに言いたいことがある」

「……ははー。逃げろって。ここ数日のお前みたいに、ガンガン逃げろよ。いろんなことから。見たくない自分から。それだけがお前が生き残る手段だってお前ももうわかってるだろ」

「もう逃げないって決めたの」

「はは。そうか。ゴリッパ。何もかも終わったはずのお前がまたアタシんところに来たってことは、意外や意外、なんかその続きでもあるのか？　どうせくだらねぇことだろうがひと言くらいなら聞いてやる」

私は、深呼吸してから詩文に言う。

「……人はね、誰しも完璧じゃないわ。あんたの理屈は、誰にでも当てはまる話ばっかりじゃない」

「意味がよくわからねぇな。何が言いてぇんだ？」

「……じゃあ、わかるように言ってやるわ」

「お前頭悪ぃのか？　アタシがこう言ったときは、〝意味はわかるがハッキリ言って論外だ〟って意味に決まってんだろうが。そんなことを言うためにお前、わざわざここに来たのか？〝人は誰しも完璧じゃない〟。ああ、聞き飽きたぜそれ。お前らの好きな『人間だもの』ってやつだろ？」

「………………まぁ、端的に言えばそういうことよ」

「はは。冗談。お前らの言い分じゃ、大事なものを見捨てて逃げるのも、〝人間だもの〟だからなんだろ？　どんな卑怯さも、臆病さも、人間だものでオールクリアとか言いたいんだろ？

CamScannerでスキャン

くだらなすぎる。議論する価値もない。人間だもの？　冗談じゃねぇよ。お前ら偽善者は人間なんかじゃねぇ。〝動物〟だよ」
「動物……？」
「動物と人間の決定的な違いを教えてやる。それはな、〝誇りを持っているかどうか〟だ。生き延びることだけを考え、大事なものを平然と捨てるお前ら偽善者どもに、およそ魂と呼べるものなんてありゃしねぇよ。お前らは動物……いや、動物に失礼だな。お前らテキトー作詞家は畜生と呼ぶのがふさわしい。人間だものなんておこがましいことを二度と言うんじゃねぇ。『畜生だもの』だったら、言ってもいいぜ」
「あんたのそこが間違ってる。臆病さの、何がいけないの？　あんたは、臆病な人をすべて悪だっていうの？　そんなの、ただの暴君だわ」
「……はーはは。ちょっとはマシな返事をするようになったじゃねぇか。だったらサービスに教えてやる」
詩文は、ニヤッと私を見下ろしながら言う。
「お前はひとつ勘違いをしているが、アタシは臆病なやつをことさら責めたりしない。なぜなら、〝臆病だって個性のひとつ〟だからだ。別に悪いと言ってるわけじゃない。臆病であることを見下したり馬鹿にしたりするようなヤツは下衆野郎だ」
「……は？　……どの口がそんなことを言うの？　あんた、さっき自分が言ったこと覚えて

る？」

「もちろんだ。個性を侵略しないこと、それはアタシのポリシーのひとつでもある。その個性がたとえ臆病さというものだったとしてもだ。……ただし例外がひとつだけある。お前みたいに『作家の領域に踏み込んだやつ』の場合だ。この場合についてだけは〝同種として〟遠慮なく言わせてもらうよ。作家とは——その本質は、見たくない自分と向き合う心の専門家であるということにほかならない。臆病さに立ち向かい、勇気を持つからこそ、アタシらは作家だ。この人種についてのみ——この人種であると自称する者についてのみアタシは、臆病であることを断じて許さない」

「…………」

「自分の本性に向き合うこともできない臆病な卑怯者の分際で、誰かに何かを伝えるだと？フン、失笑だよ。お前みたいなやつがいるから作詞はなめられるんだ。わかったらもう消えろよ。二度と作詞なんかするな。せめて作曲家の邪魔をしない生き方をせいぜい選んでくれ。それがお前にできる唯一の音楽への貢献だ」

「……やっぱりあんたは間違ってる。私は絶対、あんたみたいな作詞家にはならない」

「もういいって。大体なんだ？　お前がアタシみたいな作詞家になんてなれるわけねぇだろうが。図々しいにもほどがある。お前が書けるのは薄っぺらい嘘つき野郎どもが喜ぶクソみてーな戯れ言だけだ」

「……」
「消えろテキトー作詞家。アタシからは以上だよ。あとはテキトーに生きてテキトーに死ね」
「……」

日が落ち、夜になってきた屋上。その冷えた風を受けながら私は、詩文の弾丸のような言葉の雨にうつむく。深く息を吸い込んで、吐いて。そして、顔をキッと上げて、震えてうまく動かない唇を大きく開いて、萎縮する喉をさらにギュッと絞って、ありったけの本音を詩文に叫んだ。
「……ええ！　あんたの言う通りよ！　私は人を救わない、冷たくて自分勝手で、嫉妬の塊で、臆病で卑怯で最低な人間のクズよ！　でも……優しい人になりたいっていう気持ちは、そんなにいけないことなの!?　できてないかもしれないけど……困ってる人がいたら助けたい……それは本当に思ってることなのよ！　……でも……限界ってあるじゃない……！　たかが私ひとりができることなんて、本当に少ししかないじゃない……」
「……で？」
「……あんたはきっとこう言うのよね。『少しだろうとやれるならやれ』って。それもできないくせに薄っぺらい正義なんか語るんじゃないって……。ええ。それもその通り。言われなくてもわかってるわ。本当に、あんたの言葉は徹底的に正しい。わかってるわよ。できて

ない。他人より自分のことを守ることしか頭にない私は、臆病で、卑怯な、畜生かもしれないけど！　それでも私は言うわ！　臆面もなく叫んでやる！　私は、人を守りたい！　優しい人でありたい！　たとえあんたがどんなにバカにしても、それは死んでも変えないわ！　あんたを敵に回しても、たとえ世界中からみっともないって笑われても、絶対に！　いつか私は優しい人になる！　なってみせるって、そう決めたんだから！」

「…………」

私の精一杯の叫び声を、詩文はジッと、静かに聞いていた。そして、一段高い場所から降りて、ゆっくり私に歩み寄ってくる。身構えて強張（こわば）る私の体。そんな私に詩文は、思いがけないことを言った。

「……バカだな。誰が今すぐ解決しろって言ったんだよ。その矛盾を抱えていることを認められたなら、それでいいんだよ」

「え？　……え？　何？　どういうこと……？」

以前、いつかは忘れたけど一度だけ聞いたことがある、詩文とは思えない優しい声だった。

困惑する私に笑いかけた詩文は、私の後ろに回り込んで、背中に抱きついてきた……!?

「ちょ……ええ!?　何!?　なんで……何してるの詩文……？　ちょ……え!?」

「うひひひ♪　良いことがあったから喜んでんだ♪　こいつめー！」

詩文が、背中に抱きついたまま私の頭をなでてくる。動物を褒めてるみたいな感じで、乱暴にワシワシと。

「ちょ、やめて！　な、なんなの⁉　一体なんなの本当に⁉　わけわかんないんだけど⁉　っていうか恐いんだけど⁉」

「あっはっはっはっは！　あ――っははははは！　そうか、そうかそうか、そうかぁ～」

まるで、以前の仲が良かった詩文に戻ったみたいなムード。何が起こっているのかわからない私はただ混乱しつつ、背中に飛び乗る詩文の軽い体重を感じる。その感覚は、正直に包み隠さず言うと、嬉しいものだった。けど……一体なんなの。もう、本当になんなの……？

詩文は楽しげな呼吸を整えると、改めて私に向き合う。そして、詩文とは思えない……いや、もしかしたらこれが本当の詩文かもしれないと思うような、穏やかな声でこう言った。

「……それでいいんだ、悠。『人を救いたい』、けど自分のことすら救えていない余裕のないお前は、人を救うなんてことはまずできないだろう。ま、アタシの目的はそもそも人を救うことなんかじゃねぇからそれについては目指すところは違うけど。もしお前が本当に人を救いたいと思っているなら、人を救えるくらい強い、そういう実力のある自分を目指せばいい。

よく覚えておけよ、大事なのは『できていないことをできていると勘違いしないこと』だ。もしそれをしてしまったら、その瞬間にお前は偽善者になり、その歌詞には嘘とキレイゴトが乗る。うわっつらになるんだよ。できていない自分を知って、その悔しさを背負っていくなら、その純粋な気持ちも悪いものじゃない。……まぁ、大変だとは思うけどな」

「…………」

「お前が背負うことになるのはそういうものだ。そして、ここからが作詞の第一歩だよ。肝心なのはすべて、ここからなんだ」

呆気にとられる私を置き去りにして、詩文は朗々と語る。しかしその声には、抑えきれない喜びみたいなものが含まれていて、それが、私に対するものだということは間違いなかった。その締めくくりに、詩文は言う。

「次のレッスンを始める。お前さえ望むなら、明日からまたバードランドに来い。お前には、アタシのとっておきを叩き込んでやるよ。あとさ……」

少しだけ気恥ずかしそうに、でも誤魔化さず、まっすぐな目で私を見て、詩文はささやく。

「――よく頑張ったな、悠」

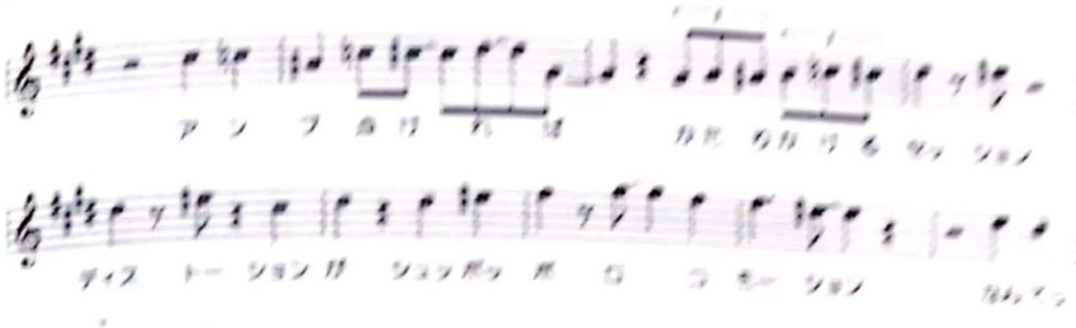
聞き間違えじゃないかと思った。でも、詩文は間違いなく、私にそう言った。

CamScannerでスキャン

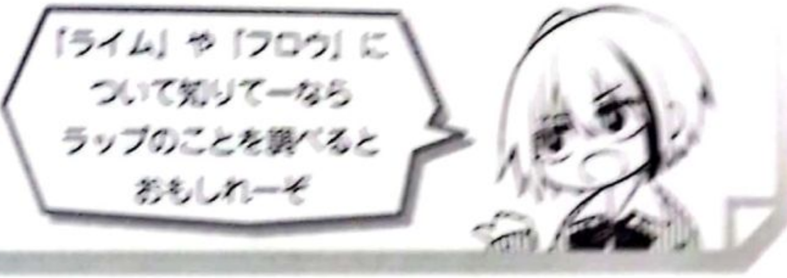
韻の世界

ぶっちゃけ韻については語り出したらキリがねえから、あくまで作詞っていう分野においてのテクニック的な意味でまとめることにする。

悠には言わなかったが、例の曲のこの部分はかなりテクニカルなことが起こっている。まあ、「母音検索」から「語像あてこみ」のタイミングでちょっとだけヒントはやったんだが、これをやってるってのは初心者としちゃ結構なもんかもしれねえな。せっかくだから具体的に解説していく。



『韻を踏む』ってのは、同じような発音や母音の言葉を繰り返し使ってグルーヴを出す手法のことだ。しかし、ただ繰り返すってだけじゃこれは効果的じゃない。一体どうすれば韻踏みは効果的になるのか、その一例を書いておく。上の譜面で言うなら、初心者が韻を踏むとすれば『セッション』のところと『ディストー』のところ。この部分が譜面的にまったく同じ動きをしているから、ここに似たような言葉をふたつ置くっていうのがやりそうなことだろう『勇敢』『You Can』とかいった具合にな。 しかし偶然か奇跡か、悠はそれをせずにセッ”ション”、ディストー”ション”、ロコモー”ション”という部分に韻を踏んだ。この部分の特にディストーションは前後のふたつと違うメロディで動いている。これこそが、韻が気持ち良くなるベストな瞬間とも言える。本来同じじゃないはずのふたつ目のメロディモーションが、前後の歌詞の韻踏みによって”強制的に関連性を持つことになった”というこの状態。これがちょっとオツな韻の魅力であり、ただの繰り返しとは違う応用的なテクニックだ。『ション』じゃない言葉も混ざってたらさらに上級テクと言えるかもな。 とはいえ“韻を踏む”って聞いて連想する同音異語連発のいわゆる『ライム』的なラップテクももちろん大事だが、こういった『フロウ』的な部分の方が若干優先度が高いとアタシは考える。



第12話

伊佐坂詩文の話

CamScannerでスキャン

「行ってきまーす！」

あやうく不登校1週間目に突入しかけた私だったけど、もう大丈夫。元気に家を出た今朝は、冬の匂いが混ざり始めた初冬の風を胸いっぱいに吸い込みながらいつもの道を歩く。けど、その景色は昨日までとは少し違う。私が見つけた未熟な――弱い自分。だからこそ向き合うことにした自分。その覚悟をした初めての朝は、まるで世界中が希望に満ちているように見えた。

……思い返せば、まるで悪い夢でも見ていたような1週間だった。その1週間の意味を、私は改めて考える。自分の身に起こったこと。詩文が私にしたことの意味。それは私にどういう変化をもたらすものだったのか。……まだ整頓しきれてないけど、ひとつずつ丁寧に頭の中でまとめながら――。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「おっはよーんゆっぴ！」

「あら、おはよう尚子」

「おっはよーんユッピ！」
「……おは……詩文⁉」
朝の校門。校舎に向かって胸を張って歩いていた私を呼び止めたのは、聞き慣れた尚子の声……と、詩文の声だった。駐車場でバイクにまたがる詩文と、トレードマークのギターを背負う尚子。振り返ってギョッとした私はつい変な声を出しちゃったけど、改めて歩み寄りつつ、とりあえず挨拶をする。
「……お、おはようございます詩文先輩……」
「ありゃ、敬語はつかわねーって約束だろ悠？」
「いや……尚子いるし……一応あんた先輩だから……建前上っていうか……マナーというか……。っていうかなんで尚子と一緒にいるの……？」
「やめろやめろ、そんなのくだらねーよ。はは。お前を待ちぶせしてたら尚子チャンが通ったからな。暇つぶしに捕まえてたんだよ」
「そう。暇つぶしに捕まってたんだよん！」
尚子は嬉しそうに返事する。なんだか妙に仲良さげなふたり。……そういえば、尚子の先輩って詩文の友達とかだったかしら？　っていうことは、尚子も詩文もゆるく面識はある感じなのね……？
「いや〜、しかしケッサクだな悠！　どうやらお前、この1週間ソートーおもしろいことに

なってみたらしいじゃねえかよ!?」
「えっ」
「……あ、シーッ！ 伊佐坂先輩ぃ、それ、ゆっぴには言わない約束って……!?」
「……え……ちょ……な、何？ なん、の話してるの……？」
ニヤニヤしてる詩文に、バツが悪そうにしている尚子。一体何を話したの尚子……!?
「ご……ごめんゆっぴ、伊佐坂先輩いきおいすごくて……その……」
「『あんたが作詞を私に押し付けなければ！』……だっけ？ うははは！ 名言だなぁおい！ まさかそんなトンデモ発言をしてたなんて、すげえな！ いやぁ～もったいないことをしたなぁ！ アタシともあろうものがそんな名シーンを見逃していたとは！」
「尚子おおおおおおお!!」
「ひぃいいごめん！ ホントごめん！」
「あっはっはっは！ おいおい、悪いのはお前だろ悠!?」
「そうだけど……そうだけどぉおおおお!!」
ああ、朝っぱらからなんてことかしら。もう……ホント、こいつ、マジでもう、ホントもう……。
「お、怒ったゆっぴ……？ ごめんね……伊佐坂先輩、すごい迫力だったからその……ホントごめん……」

シュンと落ち込んでいる尚子。いや、でもその脅しに屈した気持ちは痛いほどわかるわ。むしろ被害者の会（？）会員ナンバー001の私からしたら、むしろようこそって感じですらある。うん、詩文に問い詰められたなら、それを責めようとは思わない。実際、あの件で悪いのは間違いなく私だったし。

「いや、別にいいわ。言ったのは本当のことだもの。情けない私のめちゃくちゃな八つ当たりのひと言だったわ」

「よ、よかった……話しちゃってごめんね……」

「ありゃりゃ？　ずいぶんあっさりしてるな。チェー、もうちょっとこれで遊ぼうと思ったのに」

ケラケラと、悪ガキみたいに笑う詩文。けどまぁ、なんかこういういじり方をしてくれた方がむしろ気がラクになるっていうか、深刻に考えなくて済む気がしてくる。

「……で、でもねゆっぴ、伊佐坂先輩さっき――」

「――おいギター娘、余計なこと言ったらただじゃおかねぇからな。口には気をつけろよ」

「あ、ナンデモナイデス。ごめんなんでもなかったよゆっぴ」

「……？」

詩文の迫力に押されて何かを言うのをやめた尚子。……何かしら。あとで聞こう。

「……で、だ。お前を待ち伏せしてたのはほかでもねぇ。今から出かけるぞ。俺らん家だ」

「へぇ、そうなの。……え?」
「ほらメット、早く乗れよ」
「いや、いやいや、ちょっと待って? 出かける? 今から? だって……授業あるでしょ?」
「授業なんかどうでもいいだろ?」
「どうでもよくないわよ!」
「6日もサボっといてよく言うぜ」
「……それは、そうだけど……っていうか放課後でいいでしょ? 出かけるのはわかったから……」
「アタシは学校に用なんかねぇんだよ。授業よりもっと重要なことを教えてやる」
「……いや、私は学校に用あるわよ。……っていうか1週間も休んじゃったし、これ以上はダメよ。今日だってちょっと緊張しながら登校してるくらいだし……」
「…………」
「…………」
「……あ、そう。じゃあもういいいや、グズグズしてるやつに合わせてたらアタシまでババアになっちまう。アタシは忙しいんだ。じゃあな」
「……っ! わ……わかったわよ、もう! あんたのそのやり方ホント卑怯だと思うわ!」

抵抗しても無駄ね。この感じで来られたらもうオールオアナッシングな感じで、選択の余地がない。……ホント、こいつの強引さには慣れても慣れきらないわ。

「尚子……私、今日も欠席って先生に言っといて……。あ、理由は風邪でいいわ」

「う、うん……。な、なんか……大変そうだけど頑張ってねゆっぴ……」

「行ってくるわ」

心配そうというかどうすればいいかわからない顔をしている尚子に見送られつつ、私を乗せた真っ赤なブンブン丸はどこかに向かって走り出した。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「……で、どこに行くのよ」

「ふふーん♪　それはナイショだ」

詩文の運転するバイクの後ろに座って、長距離を走る。学校を出てかれこれ40分は走ってるんじゃないかしら？　……ずいぶん走るわね。どっちの方向に進んでるのかはわからないけど、周りの景色は自然が多い感じになったりして、見慣れない場所になっていく。

「……ねえ……詩文」

「あ？」

午前9時のバイク旅。ほんとに学校サボっちゃった。……まぁ、不登校の延長みたいな感じだけど。快適に走るバイクの振動をお尻に感じつつ、あたりを見渡す。峠の国道か何かを通ってるのか、そこはすっかり山道だった。バイク乗る人ってこういう場所好きそうね。そんなことを考えながら、秋色が終わりかけている木々の匂いを吸い込みつつ、詩文の背中にヘルメットを当てながら私は言う。

「……この1週間のこと、今さら意味がわかった気がするわ。たぶん、全部はまだわかってないんだけど。……あんたが何を教えようとしたのか……。1週間前、なんであんたが私にあんなこと言ったのか……全部、意味があったのよね……」

「…………」

「見たくない自分を見つめる、っていうことを……理屈じゃなくて体験で教えてくれたのよね？　それに私は耐えられないだろうって……あんたはそう思ってたから、私がその領域に踏み込まないように、何度も警告してくれてたのよね。……でも、私はその一線を軽はずみに越えてしまった……」

「…………」

CamScannerでスキャン

ねえ詩文……これは今だから思うんだけど、もし私があんたの立場でも、きっと私に無理だって、言ったと思うわ。だって私だもんね。そりゃそう思うわよ。………私くらい誤魔化しだらけの人間なんて、いなかったものね。……あんたからしてみればもう笑っちゃうくらい、そんなことばっかりだったもの。……でも、詩文。わからないことがひとつあるの」

——わからないこと。そう。詩文の行動の中で、ひとつだけ辻褄が合わないところがある。

「……あんたは、私には無理だろうと思ったから、この領域に入らないように私を追い返そうとしてたんでしょ？　……でも、それって変じゃない？　あんたが私に作詞を教えた最初の理由は……偽善者だった私に作詞をさせないように……壊すことが目的だったんでしょ？　もしそうなら、それって、やってること矛盾してない？　わざわざ罠に飛び込んでくる私を、なんで追い返そうとしたの？」

「………」

聞かなくていいことだと思う。けど、つい私はこのことを確認してしまう。少しの臆病さと、期待で。

「……ううん、わかってる。……これは推測だから、間違ってたら違うって言ってくれていいんだけど。……いや、えっと……なんていうか、その……。ぁ……あんたって、もしかし

たら結構良いやつなのかな～とか、思ったりして……あの、どう聞いたらいいのかしら。ぁん……あんたって、私のこと友達だと思ってくれたり、とか……したのかしら。だから、心配してくれたの……？　もしそうだったらその……あ、ありがとう」

「…………」

「ねぇ、詩文。……詩文？」

「ぁあ!?　なんか喋ったか!?　もっかい言ってくれ！」

「えっ」

………。

「え、ちょ……もしかして、聞こえてなかったの……？」

「おーっ！　なんだ!?」

「……どこから聞こえてなかったの……？」

「声ちっせーって！　なんだ、便所か!?」

「…………違うわよ……っ……バカ！　もういい！」

「は!?　なにキレてんだよ!?　キレやすい若者かお前は！　なぁなんて言ったんだよ！」

「『バカ』って言ったのよ！　運転に集中しなさい！」

「ええ!?　なんだそりゃ!?　急になんだ!?　アタシが何したってんだ！」

CamScannerでスキャン

まぁ、なんでもいいか。言葉にすれば野暮になることも、きっとあるのかもしれないわね。

＊～＊～＊～＊～＊～＊

「さてっと、トーチャクだ。ふふん♪　ここがどこかわかるか悠？」
「ここって……」
学校からバイクで1時間20分ちょっと。そこにあったのは、印象的な大きな鳥居と、なんだか統一感のある和風な建物が並ぶ大通り。……そして、風にのって鼻をくすぐる匂い。これは……海が近い……？
「………鎌倉……？」
「そ、鎌倉だ。大正解♪」
通りにドンと違和感と存在感を誇る大鳥居。これはどうやら、鶴岡八幡宮の鳥居のようだった。街の景観になにか決まりでもあるのか、見渡すと妙に空が広い。……背の高い建物が少ないから？　その開放感は、都会とは違った時間軸を感じさせる、ちょっと異世界的な不思議さのあるものだった。
「鎌倉に……何しに来たの？」
「鎌倉に来たらそりゃ、海だろ海！」

「……うみ……？　つうわ⁉」
そう言うと同時に、詩文はまたバイクを発進させる。そして、大通りをまっすぐ進むと、建物はさらに低く、空がどんどん広くなる。——由比ヶ浜と書いてあるアーチのような歩道橋をくぐり抜けると、そこには視界いっぱいの水平線があった。
「おお……海ね……」
「ビーチってのはいかにも海って感じでいいよな！」
ギューンと堤防の駐輪場に入りバイクを停めた詩文は、慣れた手つきで素早く靴と靴下を脱いで裸足になる。ジャーンとか言いながら。……そして、石段をピョンピョンと降りて砂浜に向かう。その様子はまるで、中学に上がりたてのまだあどけなさがある元気な子供のようだった。
「悠！　何してんだ、早くしろよ！」
「……何してんだって……ちょっと待ってよ……」
私も詩文の降りていった先についていく。貝殻と潮の香りと、打ちよせる波。砂浜だった。
「あれ？　ローファー脱げよ、砂入るぞ？」
「……ねぇ詩文、なんなの？　ここに何しに来たの？」
「べっつにー。だってほら、きもちーだろ？」

CamScannerでスキャン

砂浜をパタパタと走り、小さな足跡をテンテンとつけていく詩文は、波音の中で心底楽しそうに振り返る。そして、両手を広げてこう言った。

「……ようこそ、アタシの故郷へ！」

「……あんたの故郷？　……なの？」

「そ。このあたりがアタシが生まれ育った場所だ」

「……そうなの。へえ……ここがあんたの……」

なるほどたしかに、詩文の様子の慣れた感じというか、地元なんだなっていう独特の落ち着きや、この街の開放感は、いかにも詩文を育てた場所という印象、かもしれない。

「小魚発見！　食っちまうぞー！　あっはははは！」

浅瀬でピチャピチャと波を蹴る詩文。私は足元が濡れないくらいの波打ち際で、波から逃げたり近づいたり。ちょっと波で手を濡らしたりしている。秋の砂浜って、こんなに静かなのね。たしかにこれは、学校の屋上に通じる開放感があるわ。

「なあ悠！」

膝下まで海に入りながら海に向かって、私の方を見ずに、詩文は呼びかけた。

「何？」

「……今朝な、もしかしたら赤憑みのひとつでもされてんじゃないかって、ずっとお前のことを縛ってしまった。すまん」

「……え？」

どんな顔をしてるのかはわからない。でもその声は、初めて聞くまっすぐな謝罪が込められた声色だった。何に対しての謝罪なのか、それを考えていると、詩文はバシャバシャと波を蹴りながら私に近づき、ズイッと顔を寄せて満面の笑顔で言う。

「なぁ悠、ジャンケンで負けた方が、制服のまま海に飛び込もうぜ♪」

「え……え？　い……ハァ!?　何それ？　そんなことやるわけ――」

ニヤッとした詩文が、急に変なことを言い――っ！

「さーいしょーはグー！　ジャンケン――」

「ええっ!?　ちょ、えっ!?　ポンっ！」

詩文の唐突な言葉に焦りつつ、でもその掛け声に反射的に応えてしまった私は、とっさにグーを出してしまった。……そして詩文は――チョキだった！

「うおおおおアタシの負けかー！　あっはっはっは！　だったらしょうがねーなぁ！」

「ちょ……しふ――！」

呼び止める間もなく、詩文はすごい速さで助走をつけて波に向かってダッシュし、本当に制服のまま海に大ジャンプした。バッシャーンという景気のいい音を上げて、もう、それはそれは見事な飛び込みっぷりだった。

「あっはっはっは！　こりゃあいいや！　一度制服で泳いでみたかったんだよ！」

CamScannerでスキャン

「…………」

呆気にとられて詩文の様子を見ている私。一瞬心配しちゃったのがむしろ恥ずかしくなるくらい、詩文は楽しそうに泳いでいた。

「悠！　お前も来いよ！」

チラッと、背泳ぎをしながら私の方を見る詩文。いや、おかしいでしょいろいろ。

「……何言ってんのよ。ていうか何やってるのよ。あんたって本当にアホなんじゃない……？」

「そうかもしれねぇなぁ！　はは。……で、来ないのか悠？」

浅瀬にきた詩文が立ち上がり、スカートの先まで海に入っている状態で、ずぶ濡れになりながら私に尋ねる。砂浜にいる私は、その異常な様子の詩文と見つめ合う。

「……もう一回聞くぞ。来ないのか？」

「…………」

優しく誘う声だった。そして、これはただの冗談じゃないことがそのひと言でわかった。どうやらこれは、大切なことらしい。

「……わかったわよ……ひ、膝のとこまでね……」

そう言うと私は、ローファーと靴下を砂浜に脱いで、波に歩いていく。足の裏に感じるゆるい砂と、貝殻の感触。そして、きめ細かい波と、潮水の冷たさ。

「なーんだ。そんなもんか？　思い切って飛び込めよ。中途半端なことはもうやめとけって」
「……いや、だって、着替えとか……」
「…………」
「…………わかったわよ！　やればいいんでしょ！」
——なんでこんなことをしてるのか、全然わからない。けど、これは、やらなきゃいけないことだと思う。やらなくてもいいことだった。けど、私にはこの意味がわかりかけている。何かを掴みかけている。そう思った私は砂浜に引き返し、少し助走をつけて——飛んだ。
バッシャーンと景気のいい音をあげるつもりが、私のジャンプは浅かったらしい。思いっきり飛び込もうとしたのに、結局は半端につまずいたみたいな感じで、前傾に転ぶかたちで両手と両膝を浅瀬についただけだった。なんか、やることなすこと中途半端な私をあらわすダメジャンプ。……スカートがほとんど水没して、下半身と両腕が冷たい。
「うわっ!?」
そう思った瞬間、私の両腕は強い力で引っ張られて、顔から一気に海にひきずりこまれた。思いきり海水を飲み込んでしまいつつ、ガボガボ言いながら水面に顔を出すと、私はむせながら言う。

「……ゲホッ……ゴホッ……辛……鼻に入っ……ちょっ……詩文！　ゲホッ……何すんのよ⁉」
「あっはっはっは！　は——、あっはははは！」
「……ケホッ……あは……ふふ……ふふふ……」
自由全開で笑う詩文。すっかりずぶ濡れになりながら私は、これでいいんだと思い直す。こんなの本当に、ナンセンスな話なんだけど。

＊～＊～＊～＊～＊～＊

「さ……寒いわね……」
「おう……ささ、寒いな……」
海の中にいたときはよかったけど、砂浜に戻ると寒さがヤバい。11月の初冬の海に服着たまま海に飛び込んだらこうなるに決まってる。いや、こんなこと最初からわかってたんだけど、やっちゃったものは仕方ない。頭の先からつま先まで余すところなく濡れた私達は、小刻みに震えながらバイクに戻る。
「ど……どうするのこれ……風邪ひくわよ……？」

「……そうだな。あはは、まぁ、心配すんな。バイク乗ってりゃしまいに乾く」
「あんたそれマジで言ってるの……？　乾かないでしょ」
詩文はバイクにまたがる。ああ、なんかもう、なんなの本当。ホントに風邪ひくじゃない。
でも……まぁ、ここにいても仕方ないっていうのはたしかにそうね……
「さて、帰るか」
「……え、帰るの？　……あんたほんと、何がしたかったのよ……」
海に来て、飛び込んで、帰ると言いだす詩文。まさに振り回される私。時間はまだ午前10時半。そしてバイクはまた走り出す。……と思ったら、今度はすぐに停まった。
「降りろ」
「何？」
「ここが本当の目的地だよ」
詩文は、さっきの大鳥居から少し奥まったところというか、古い家並みが並ぶ道に入り、その一角で停まった。なんかすごく年季の入った大きなお屋敷があったり。そういう感じの場所。こういう家ってどういう人が住んでるのかしらね。
「ここがアタシんちだ」
「ここって、どこ？」

「これだよこれ」

詩文が指差しているのは、今まさに私が見ていた目の前にある大きな屋敷だった。門構えはまるで時代劇のようで、その扉の奥には庭園みたいなのがある。高級旅館か高級料亭を思わせる贅沢な空間。そしてその奥、どこまであるのかわからない広い敷地に堂々と建てられている、大きな和風家屋。その大きさは、敷地的にいうとたぶん普通の一軒家の5倍くらいはありそうだった。

「……いや、え？　ここ？　……が？　あんたの家……？」

「表札、伊佐坂って書いてあんだろ？」

「……いささか……だわ」

……たしかに、その大きな門の袖には達筆の表札で〝伊佐坂〟と書いてある。

「あんたってひょっとして、お……お金持ちの家の子なの……？」

「金持ち？　……あー。まぁ、どっちかっていうとそーだな」

「そ、そうなんだ……」

さらっと答える詩文。……でも、考えてみれば逆に詩文らしい気もする。私と同じような普通の一軒家やマンションに住んでる普通の家庭の普通の子供っていう方が、詩文の場合は違和感というか。……この大屋敷の娘が詩文……ああ、なんか、なるほどって感じだわ……。

「詩文ちゃんどうしたの!? ずぶ濡れじゃない！」
私たちの姿を見つけて、屋敷の奥から誰かが声をあげた。物腰の柔らかい感じの、目尻の下がった細い目の和服姿のおばさん。……この人は、詩文のお母さん……？
「ああ、芳子さん、今から風呂に入るから、すまねぇが着替えをふたつと……あと早いけど適当な昼飯を頼む」
芳子さん……？ お母さんじゃない!? も……もしかしてメイドってやつ!? あれって実在するの!? 架空の存在じゃなかったの!?
「……何があったらふたりしてずぶ濡れになるの詩文ちゃん……？ 大丈夫……？ 怪我とかしてない？」
「ああ。平気だ。ちょっと外で遊んでたらこうなっただけだよ。あと、こいつの制服を大至急クリーニングしておいてくれ」
「……ああ。ふふっ♪ あらそう、そういうこと。はいはい、かしこまりました♪」
何かを察したらしい芳子さんと呼ばれたお手伝いさん（？）は、楽しげに笑う。詩文の声色とこの芳子さんの態度。詩文のその貫禄に満ちた様子は、この家では普通のことのようだった。そして芳子さんは私に視線を移す。
「こちらは……詩文ちゃんのクラスメイト？」

「あ、はぁ……」
「いいや、違うよ芳子さん。こいつはアタシの友達だ」
「……へぇ！　……詩文ちゃんの友達……へぇ〜〜。あら〜〜。……ようこそいらっしゃいませ。御世話係の岡部と申します。お名前は？」
「あ、江戸川です。江戸川悠です」
「うふふ、詩文ちゃんと一緒にいたら大変でしょう？　着替えは浴衣でいいかしら？　すぐ用意しますから、お風呂に入っていてくださいな」
いそいそテキパキと歩き去っていく芳子さん。こんなことって現実にあるのね……。
「今のって、もしかしてめ……メイド……さん？　和服だけど」
「メイドじゃねぇよ。芳子さんはうちの家政婦だ」
「家政婦……」
なんなのそれ、どういう違いがあるのよ。金持ちの家の常識が全然わからないわ……。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

お風呂……と呼ぶにはあまりにも規模が違う、これはちょっとした銭湯なんじゃないのっていう大きな湯船と洗い場の浴場。木造っぽい作りは全体的にやたらと風格があり、檜(ひのき)の良

い匂いがするリッチな空間は半分露天みたいな感じで、外には森の緑が茂っていた。
「……なんかもう、どこから開けば良いのかわからないんだけど……」
「おう」
ふたりで湯船に浸かりつつ、詩文に話しかける。……ふたりで入ってもまだまだ全然余裕っていうか、むしろ運動部の合宿でも使えちゃうんじゃないってくらい広い浴槽に持て余すようにチョンチョンと並びつつ、頭に手ぬぐいを巻いていかにもな入浴スタイルになっている私。詩文は、両腕を湯船の縁に乗せて王様みたいな（いつも通りの）入浴ぶりだった。ちょっとは隠そうとしなさいよ。なんでそんなに自信満々なのよ。
「私こういうのよくわからないんだけど……あんたん家って……〝名家〟とかそういうの？」
「アタシんちは、100年続いてる音楽家系だ。四世代に渡って音楽業界に関わってる。アタシはその家系の生まれなんだよ。伊佐坂家ってのは、音楽業界じゃちょっと知れた名前なんだぜ。どーでもいいけど」
「へ、へぇ～……なんか、現実離れしてるわね……」
「現実離れ？　してねぇよ。まぁ、珍しい方だとは思うが」
「いやいや、これはさすがに現実離れしてるでしょ。家政婦がいる家なんて、昭和バブルの話かと思ったわ」

「想像力がねえ？　よく考えてみろ。世の中に、一体どれだけの人気の脚本家や有名作家や、役者がいると思ってんだ。もちろん、その本人だけじゃなくその数の何倍も家族はいる。代々、代々やってる奴らもサラブレッドも、今までお前の身の回りにいなかっただけだ。そういう人間はゴマンといるんだよ」

「――まあ、言われてみればそうだ。いるにはいるんだろうけど――」

「……」

「――あんたが作詞に詳しいのって、この家で育ったから……なのね」

「――本音だが、半分はそうだと言うしかねえな」

「本音――？」

詩文は、一瞬黙りかけて、でもやっぱり黙らないという様子の顔をして、問う。

「――アタシを育てたのは、この家、この親だよ。伊佐坂の人間だから、英才教育、っていうか、英才教育というか、のびのび偏った常識を吹き込まれてたんだよ。それさ、のんびり物を覚える頃にはそれと同時に譜面の読み方を覚えて、足し算を覚える頃にはもう作曲なんかするようになっていたんだ」

「――すごい児童ね――神童――？」

「神童ではねえよ。ただ偏ったことを覚えさせられて育っただけ。小学校に行けば、

CamScannerでスキャン

てない」
「え……小学校に行かないって、そんなこと可能なの？　だって義務教育でしょ？」
「学校に籍だけはあったようだけどな。義務教育に相当する学習を保護者が施している場合、そういうことも可能だ」
「……初耳だわ」
「12歳までのアタシの世界は、とにかく閉じていた。このやたら広い家とあの浜辺だけが世界だった。子供の頃のアタシってやつは、そりゃあもう、疑うことを知らない素直で良い子な、ただのバカだったんだぜ？　かぐや姫かってくらい長い髪だったりしてな。親父の言うことを全部真に受けて、親父だけがアタシのすべてで、あれはもうほとんど洗脳だった。
……その時期に、小学生レベルじゃ絶対知ることではないような世の中の真理、人間の心理、条理に不条理、義理道理、自然の原理、最終的には宇宙の法則なんてものまでを徹底的に叩き込まれた」
「……宇宙の法則……って……なんだか、もういよいよわけわかんないっていうか…………哲学的すぎるっていうか……ちょっと普通じゃないわね」
「その普通を測ることもできなかったんだよ。なぜなら、アタシにとっちゃそれが常識のすべてだったんだから。比べる対象がそもそも存在しない。基本的に家の中で過ごしてたし、出かけるときは必ず誰か伊佐坂の人間がついてたしな。同世代の子供から外的影響は受けよ

うかなかった」

「でも、あんたのお父さんはそれはそれで、あんたを優秀な人間にしたかったとかそういうことじゃないの？　……実際、優秀な人間になったわけ……だし」

いや、優秀な人間にはなったけど、それだけじゃないわね。それによる弊害も、詩文には起こってるわ。

「親父がどんなつもりだろうが、アタシの人生はアタシのものだ。アタシの思考はアタシのものだし、アタシの決定も覚悟も、挑戦も挫折も、アタシのものだ。断じてあの親父には一欠片だってくれてやらねぇ。……でも、物心つく前についてはこっちはどうしようもない。アタシの人格に明確に影響をりえる幾多の概念を、親父は三つ子の魂の時点でアタシに植え込んだんだ。アタシの許可なくな」

「でも……それって……親の務めっていうか……」

「放っておけばよかったんだ。普通に、自由に、好きにさしてやりゃよかった。それなのに、頼んでもねぇのにいろんなことを教え込まれた。そしたらどうなるか、わかるよな？　アタシは、何もかも親父にプログラムされた上で生きてる、本当にクソックタレな作りモノだった。……素質のない子供なら単純についていけないだけで終わりだったんだろうが、血は争

えねぇのかアタシにはやっぱり天稟があった。だからこそ徹底的に叩き込まれたんだろうけどな。やったらやっただけ褒められたし、アタシも気を良くして伊佐坂の教えを修得してたよ。でも、言っちまえばアタシは親父の創作物のひとつ、クソみたいなお人形でしかなかった。それに気づいたのは中学の頃だったな」

　そこまで言い切るのは、むしろ親に対する反抗心がこじれてるっていうニュアンスもある気がするんだけど。……って、あれ？

「中学には行ったんだ？」

「洗脳教育とはいえ、そんなアタシにも少しくらい疑問はあったからな。中学については、通いたいと自分から言ってどうにかして通った。うまく親父を騙してな。そしたらどうだ？　世の中はあの親父が言ってたこととかなり違う。……でもそれと同時に、親父がなぜアタシを小学校に通わせず、周りの子供たちとの関わりを徹底的に遮断したのかも、わかってしまった」

「……う～ん……？　……何が……？」

「イジメや、多数決や、ほかにもいろんなことが――いろんなくだらないことが中学の教室では起こっていた。生徒はもちろん、教師も含めてだ。個性が大事だとか表面上は言いながら、異端を見つければすぐさま殺しにかかる。臆病で下劣な大勢の卑怯者がそこにはいた。ここにいたら心が曲がって、いつのまにか自分らしく在ることを放棄してしまうだろうって

いうのも、わかった。『自分らしく在る』ということを12年間徹底的に叩き込まれたアタシにとってこれは強烈だったよ。"協調性"の名の下に人の個性を平然と蹂躙するゴリッパな思想が当たり前みたいに横行してんだから。イカレた世界だと思った。もちろんアタシは凄まじく浮くし、摩擦が起きるし、普通のことだと思ってやったことがいちいち誰かの気に障った。……でも、そんな連中の憤りや苛立ちを見てアタシはむしろ冷静になってしまった。親父の教育は完璧だったよ。クラスメイトがなぜこんなくだらないことをするのか、その心理的な現象の"うしろめたさ"をアタシはすべて一瞥で看破できてしまったし、言語化すらできてしまった。それどころか、臆病さが引き起こすあらゆる現象の原理にすら思考が行き着いてしまった。その、伊佐坂の娘のアタシからすれば奇異とも思える小さな社会現象を目撃しながら、それが未来の——大人の社会の縮図であるということも直感的に確信しながら、実際に体験しながらアタシは、親父から教わったいろんなことを"実感"に変えていった。世間でいう中1としちゃ、ほとんど異常としか言いようのない思考順序の女子だったよ」

いや、それは中学だろうと、高校だろうと、普通の思考レベルじゃない。たぶん、大人でも普通とは言えないものだと思う。やっぱり詩文の話は、ちょっと常識離れしていた。でも、次のひと言は……違った。

CamScannerでスキャン

「意外かもしれねぇけどさ、アタシ、いじめられっ子だったんだぜ」

「え……？」

「普通じゃない教育を受けて中学から突然同い年の群れの中に飛び込んで、おかしいことがあればなんでも〝おかしい〟ってハッキリ言うチビの女子だ。腕力は全然ない。弱っちいチワワみたいなやつがキャンキャン正しげなことを言ってたらさ、そりゃあもう、暴力的な馬鹿どもはおもしろくねぇよ。群れになってアタシをイジメ始めた」

「…………」

どう言葉を返せばいいのかわからない私は、ただ黙って聞く。

「特に豚みてぇな女がアタシをイジメてきたな。でも、体ちっせぇからダメなんだよ、アタシみたいなチビは。それだけでもう負けが決まってるんだ。力でねじ伏せられて、どんなに強い気持ちで守りたいと思ってる誇りでも、簡単に折られてしまう。大事にしてた宝物だって、壊されてしまう。弱けりゃ、正しさなんて全然関係なく、ただ腕力があるだけの卑怯な臆病者に支配されて、おしまいだ」

「……そう……なるわね」

「ただ、その状況を逆転させることがあった。擒拿術を身につけたことだ」

「きんなじゅつ……？」

「まぁ聞いたことねぇだろうな。中国武術だよ。相手を慈しむ日本的な武道とは根本的に違

う、相手を再起不能にすることを前提にした兵法だ。ある日見たなんでもねぇドキュメンタリー番組だったんだけどな。アタシと同じくらい背の低い小男が、まるで割り箸でも折るみたいに大男の腕や脚を次々に折っていくその映像に、アタシは凄まじい衝撃を受けた」

「あんた、そんなことまでできるのね……」

「イジメでふさいでたアタシが興味を持ったことだったから、親父は嬉々として擒拿術を習うことを勧めてくれたよ。でも、どうやらスポーツみたいなものと勘違いしてたらしくてな。それが武道ではなく兵法であるっていうことを知って、さらに、アタシの習得意欲が尋常じゃないということも知って、すぐに辞めさせた。けど、その頃にはもうアタシは基礎を覚えていたし、訓練の仕方もわかった。自前の勘の良さと、〝親父の教育の賜物〟でな」

「…………」

「それをクラスメイトに使おうと思ってるということにも親父は当然気づいていた。まぁ親としては止めるしかないよな。そしてある日、アタシと親父は怒鳴りあいみたいな喧嘩をして、アタシは勢い、親父にそれを使って病院送りにした」

「……お父さんに……？」

「それを機にアタシは知ったんだ。体が小さくてもアタシは、アタシの誇りを守れる。自分よりずっと大きな男が相手でも、覚悟を持てば負けることはない。アタシは誰の支配も受けない。……体が大きけりゃ、もっと言うと男に生まれてりゃ、これだって本当は必要なかっ

CamScannerでスキャン

たんだけどな。誰かがアタシの個性を侵略するからには、自衛する力が必要だったんだ。自分の自由を守れて初めて、人生は健康で文化的になる。自由のない人生は、生き地獄だ」

「……うん。そうね」

詩文の言うことは、きっと世の中の真実の一辺なんだと思う。特に、背の低い詩文にその腕力というものは一番大きな脅威だったのかもしれない。……でも、そうね。これはきっと、腕力に限った話じゃない。力や、知恵がないと、自由は守れないんだと思う。

「その日からアタシは、自分らしくあることを絶対に守り通すと決めた。アタシが今のアタシみたいになったのは、その頃だ。イジメてきたやつらにも、全力で抵抗するようになった。……抵抗というよりは、〝逆襲〟に近かったかもな。くだらねえもんでな、連中は、少しでもこっちがその意思を見せて、覚悟を持って、〝だったら殺し合いでも始めようか〟ってテンションになったらヘラヘラ笑って逃げ出したよ。〝仲直り〟とか急に言い出してさ。そういう連中だって、最初からわかっちゃいたんだけどな。……そしてこれもまた、大人の社会の縮図だったんだなと、今では思う。中2の頃から音楽業界で作詞の仕事をするようになって、そこにいる1割のまともなやつと、9割のクズの存在を知った。見た目は大人でも中身はほとんど変わらない。結局そこでも同じことが起こってる。もううんざりだよな。……

んな連中がプロデューサーだったり、作詞家だったりして、〝プロ〟とか名乗ってるんだぜ？
本当につくづく、手に負えねぇよなまったく」
「…………」
きっと私もそのひとりだっただけに、何も言えない。
「なんかもう実際を体験すればするほど、親父の言っていた原理があまりにも正しかったことを思い知ったよ。何度となくな。だからこそ――なんだこれ、アタシの人生は一体どこにあるんだと思ったりしてな。それから発見はなく、再確認ばっかりだ。まるで、最初から犯人を知ってる推理小説を何冊も読まされてるような気分だった。新発見かと思ったことはどれもアタシが掴んだものじゃなく、親父の教えたことだ。だからこそ、生きてる心地がしない」
「…………」
「とはいえ、自分らしく在ることの尊さをこれだけ強烈に自覚できるようになったのはもしかしたら親父の功績みたいなところも少しくらいはあったかもしれねぇ。それについて理解できないほど稚拙じゃあない。しかもアタシは、その知恵や発想があったからこそ作詞家として中学生の時点で仕事を始めることができたし、経済的に自立することもできた。実力もその基礎――伊佐坂の音楽力と作家力があってのことだった。……ってことは、アタシはどうやらあいつに借りがあるらしい。これについての恩を、作詞で手に入れた金で……まぁ300万ぽっちだったが……支払って全部チャラにしようとしたところで、あいつが提示し

CamScannerでスキャン

てきたのか〝金は全部払うん、その代わり、高校に3年間通え〟だったんで。アタシの自由をとこまで奪えば気がすむんだこのクソ親父はと思ったが、中学卒業まで子供を育てるのにかかる総額は一般家庭の場合だとしてもざっと1700万以上だ。うちの場合はもっとだろう。そう考えたら、その3年だけで済むなら安い買い物だと思ってな。しっかり〝服役〟してお前とはこれっきりだと、そう言って、仕方なく高校には通ってやった。2年の頃までは鎌倉の高校で、今年からはどういうわけか転校させられて、お前がいるあの高校に通ってる」

「……そう。なんていうか、家庭って人によってこんなに違うのね。私の感覚にはない話ばっかりっていうか………」

正直、思ってもみないような話ばっかりで面食らっている。親と勘当することを前提に高校に通うとか、正常な関係じゃない。いや……その正常さっていうのも、あくまで世間一般との比較でしかないのかもしれないけど。……詩文が詩文になったわけ。育った環境の話。……でも、この話を聞いたことで、今まで見てきた詩文の行動や言動の意味がわかったような気もした。

「なーんてな！　あっはっはっは！　まぁそんなくっだらねぇ話はどうでもいいんだよ！うまいもん食って、楽しいことやって、ドカッと寝て、自分の責任で好きに生きる覚悟がありゃ、人生は最高だ！　お前もそう思うだろ悠！」

「え、ええ。もちろんよ――ぅわっ⁉」
急に元気になって私の正面に移動した詩文は、さっきみたいにまた私の両腕を引っ張って湯船に引きずり込む。今度はなんとなくわかったから、息を止めてお湯を飲まずに済んだ。
「ぷはっ！　もう！　それやめなさいよ‼　子供じゃあるまいし！」
「あっはっは！　大人じゃあるまいし、なーに気取ってんだ！　お前も泳げ！　湯船でどんどん泳いじまえ！　アヒルちゃんもいるぞ！」
そう言いながら、お風呂で遊び始める詩文。その姿を見ながら私は、詩文っていう人間について考える。詩文には世界がどんな風に見えているのか。詩文には私がどんな風に見えているのか。私の見ている世界と詩文の見ている世界には、どんな違いがあるのか。半露天風呂の天井を見上げて、長風呂に少し茹で上がりながら。

第13話

共感する歌詞の正体の話

CamScannerでスキャン

――『詩文の間（親父侵入禁止。入ったら家を燃やす）』

お風呂上がり、芳子さんが用意してくれた浴衣に着替えた私たちは、長い廊下を歩く。そしてたどり着いたのは、表札と張り紙のある部屋――詩文の間。和風建築の扉は基本的に襖……だから鍵はまぁかかってないわけだけど、詩文の雑な殴り書きで書かれた警告文はむしろ鍵以上の効果を持っていそうだった。詩文なら本気でやりかねない。……それにしても、ホントにお父さんのこと嫌いなのね……。

「ここがアタシの部屋だ」

そう言いながら、詩文は襖を開ける。そこには――。

「……あれ。思ったより普通なのね。ちょっと意外……」

詩文の部屋は、拍子抜けするくらい普通だった。ありえないいくらい大きなお屋敷で、家政婦なんかもいちゃったりするようなハイソサイエティな家柄だし、詩文の子供部屋も洗練されてる感じなのかと思ったら、むしろわざとらしいくらい普通の女子高生っていう感じがする部屋だった。和室をどうにか洋風にするために抵抗する感じで畳に敷かれたかわいい絨毯に、ポップな座卓。寝具は布団じゃなくてベッドで、一部の家具は妙に古めかしいタンスとかだけどその隣にはおしゃれなカフェにありそうな木組みのブックスタンド。それに、らし

からぬくらい一般的な学習机。そして、スピーカーや鍵盤といった音楽機材とパソコンのデスク。クラシックギターに、足元に転がるクッションやキャラもののぬいぐるみや、脱ぎっぱなしの靴下や上着。生活感丸出しのビニール袋やその中に突っ込まれたお菓子のゴミ。ちょっと大きいテレビと、雑に接続されたゲーム機。……襖一枚の向こうは時代劇みたいな家だけど、この詩文の部屋の中は逆に安心するくらいものすごく普通の、年頃の女子高生の部屋だった。

「……あんたの部屋ってもっと、仙人みたいな部屋かと思ったわ」

「仙人みたいな部屋ってどんな部屋だよ」

「いや、なんていうか、無駄なものが一切ない〝悟りの間〟みたいな……道場みたいな……」

「はは、なんだそりゃ。まー適当にくつろいでくれ。座布団とか勝手に使っていいぞ」

勝手知ったる自分の部屋、まぁ、そりゃ当然なんだけど、詩文はベッドにドカッと倒れ込むと、腕を枕に足を組んでリラックスする。浴衣がはだけてパンツが見えそうなのを注意しようと思ったところで詩文は、さて、と言った。

「お前に教えてない話の続きを、そろそろしようか」

「それって、作詞の？」

「もちろん。それをするためにわざわざお前を拉致ってきたんだから」

「拉致って……っていうか、作詞の話をするのは別に放課後とかでもよかったんじゃない

の？」

……まぁ、あんたの家に来たのはいろいろ発見があってよかったとは思うけど……。

「はは。まぁそのへんは、こっちの事情でな、もうあんまり時間もねぇんだ。大事なことをまとめて教えるには、これが手っ取り早かったからな」

「時間がない？　いや、あるでしょ？」

「ねぇよ。ほら、気づいたらもう昼だ。人生ってのは短いねぇ。グズグズしてたら終わっちまう！　ところで今からする話は、たぶんお前の好きな話だぜ。次の作詞レッスンはな――『売れる歌詞の書き方』、ヒットという現象の正体についてだ」

………。

「……ヒットの正体？」

「そう、ヒットの正体について」

詩文が切り出したのは、思いのほか俗っぽいというか、〝一般的〟なテーマだった。詩文のことだしもっとこう、精神論的な話っていうか、作詞の真髄みたいな話が始まるのかと思ったんだけど……？

「ヒットって、ヒットチャートとか、そういう話？」

CamScannerでスキャン

「そうだ。『ウケる歌詞の書き方』と言ってもいいかもしれねぇな」

「……………」

ますます、詩文らしくない。なにその話？　なんか、違う。

「なんだ？　いぶかしげな顔して。こんなお得情報を知りたくないのか？」

「いや、知りたいというか興味のある話題ではあるけど、なんかちょっと、あんたがそういう話をするのって違和感っていうか……」

らしくない。売れるとか、ウケるとか、そういうことを意識してるあんたって、なんか違う気がするのよ。あんたはもっとこう、違うでしょ……？

「はは。大丈夫だよ。〝そういう話〟じゃねぇから」

「え？」

ベッドに寝転んでいた詩文はガバッと体を起こして、ベッドの上であぐらをかく。そして、見透かしたように笑いながら、こう続けた。

「お前が今想像した、〝ヒットのコツ〟だとか、〝ウケる歌詞〟だとか、そんな話をしようってんじゃない。もっともっと、もっともっともっと根本的な話だ」

「……そうなの？」

「お前さ〝売れるもの〟ってなんだと思う？」

「売れるもの……？　そうね……」

どうやら詩文の次のレッスンは始まっているらしい。売れるものとは何か。そうね……。
「〝人の心に響くもの〟――いや、待って……それって、意外と難しい質問ね……？」
「お、わかるか。……そう。これは、そんなピュアな話じゃない」
「……うん。〝良い歌詞やおもしろい作品が売れる〟って、言いたかったけど、たぶんそうじゃないと思うわ。それは理想で、実際はそういうわけでもないと思う」
「そうだ。はは、良い勘してるぜ。でも不思議だ。良い作品やおもしろい作品なら、売れてもいいんじゃねぇか？　もしそれが売れるものじゃないんだとしたら、一体何が〝売れるもの〟なんだ？」
……これは難しい。けど、漠然とだけど、確かな何かを導き出す糸口はあるような気もする。
「以前のお前ならきっと、それ以上のことは考えなかっただろう。『心に響くものが売れる』と言って、きっともう耳を貸さなかっただろう。けど、今のお前ならわかることがある。今のお前だからこそ、この話をする意味と価値があるんだ」
詩文は、もったいぶりながら話す。けど、これは軽々に答えを聞いてしまってはもったいないことのような気もする。
「………でも、名作は内容が良いからこそ求められるっていうのも……実際よね？」
「それもそうだ。しかしよく考えろ。世の中に、日の目を見ない名作なんてそれこそ星の数ほどあるんだぞ？　だったら、それは――質が良いっていうことは〝売れるもの〟の決定的

CamScannerでスキャン

なポイントではないってことだ」

「うん……そうね。知ってるわ……」

なんだろう、売れる作品……売れる歌詞……売れない作品……良い作品、悪い作品……。

悪い作品？　悪い作品って何？　何が基準で悪いとか……いや、それは私は知ってる気がするわ。何かしら、掴めそうな気もするんだけど……。

「逆に言うと偽善的な作品は、良い作品とは言えないわよね……？」

「ほほぉ、良い線いくじゃねぇか。もうお前、ずいぶんわかるようになってきたんだな」

「そ、そう？」

詩文が以前言った言葉。〝創作において煮ても焼いても食えない正真正銘のゴミ、それが偽善〟。それを基準に作られたものは、良い作品じゃないとは思うけど――それは、売れないものなのかしら……？

「……偽善的なものは、売れる……？」

「行き着いたようだな。そう。それが答えだ」

「いいや、その言い方はまだ狙いが甘いな。アタシはそれをこう言う」

詩文は、さて、とばかりに一呼吸置いて、耳に刺さるようにと意識したような声で言う。

「――『良いもの』が売れるんじゃない。『都合の良いもの』が、売れるんだ」

CamScannerでスキャン

「……都合の良いもの……」
詩文はベッドから降りると、座布団をひとつ掴んで私の正面に座り、上目遣いで語る。
「基本的にな、人は卑怯で臆病だ。そして、それを自分で認めることができない。そういう人間が世の中の9割だってこと——つまり恐ろしいほどの大多数であり、そういう人間が世の中の〝潮の流れ〟そのものだということをまずは確認しておこう。この意味は、お前にはもうわかるよな?」
「……ええ、そうね。それは間違いなくそうだと思うわ」
「よし。で、そんな大多数の卑怯で臆病な人間が何を欲し、求めるのか。わかるか?」
「……つまり、少し前の私が何を求めるか、っていうことよね」
「そう。少し前のお前みたいなやつが欲しがるのは——『許し』だ」
「許し……?」
「作詞の話で具体的に言おう。たとえばこういった語彙だ。『大丈夫』だの『君の頑張りを見てる』だの『明日から頑張ろう』だの。なるほどこれは常套句(じょうとうく)だよな。大丈夫じゃねぇし、君の頑張りなんか知ったこっちゃねぇし、そもそも頑張ったかどうかなんて関係ねーし、〝明日から〟ってお前、今まで一体何回それ言い続けて何もせずに生きてきたんだって話だ」
「……そういう歌、なんだか聴き覚えがあるわ」

CamScannerでスキャン

「だろうな。たくさんあるからどれって感じでもないだろう。それくらいよくあるものだ。さぁ、これを分析してみようじゃねぇか。この歌——この歌詞が持っている力は『許し』だ。許しの文句を次々に羅列して、それを実際に甘くて優しい歌声のボーカルが歌う。これは、『許し』を求めてる人にとってそれはもうとんでもない甘美な響きに聴こえる。そして、アイドルの歌にこの類の手法が使われがちなのは、アイドルを求める大衆ってのはそもそも癒されたり元気になったりすることが目的だから、欲しいところに欲しい言葉が飛んでくりゃそりゃ感動もする。頭の中で歌詞の意味を都合の良いように解釈もする。……アタシは別にそういうものを悪いと言ってるわけじゃない。誤魔化したり、卑怯だったり、許しを求めたりするのは、みっともなかったとしても〝悪〟じゃあない。責める必要だってない。ただ単純に、仕組みで言ったらたったそれだけのことなんだよ。身も蓋もねぇがな。作詞をするからには、この点を理解する必要がある。リスナーはさておきアタシらは、自分と向き合う専門家だからな」

「……たしかに、まさに身も蓋もないわね……」

「都合の良いものが売れる。『許し』『安息』『社会性』『エロス』『滑稽』『スリル』、『啓発』『冒険』『好奇心』。ほかにもきっとあるだろう。自分にとって都合の良い気分を促してくれるものはどれか、意識的と無意識的で選んでる。その内容が良いものか悪いものかどうかは、また別の話だ」

「ちょっと……整理するわ」

詩文の文言はなるほど、よくある〝ヒットの法則〟みたいなそれらしい統計論とは違うものだった。〝身も蓋もない〟っていう言葉がものすごく頭にドンと響くけど、まったくそうね。身も蓋もない。けど……これは真実のひとつだとも思う。人は、自分の心に抱えてる問題を解決してくれるものを求めるわ。その気持ちが実は卑怯な気持ちだったりすることも、よくあることなんだと思う。……けど、本当にそれだけかしら。そうじゃないってことも、あるんじゃないかしら。

「ねえ詩文、あんたの言うことにはほとんど賛成だわ。けど、そうじゃない歌も、歌詞も、あると思う。素晴らしい内容で大ヒットしてる歌も歌詞も、あるでしょ？」

「あるな」

「だったら、都合の良いものばっかりが売れるとは言い切れないんじゃない？」

「良いもの……の定義をまずはしなきゃならねえが、じゃあここでいう良いものは〝冒険心と好奇心と誇りを持った人間性に富んでいる作品〟ということにとりあえずしておこう。それがヒットしてたとしてだ」

「ええ」

「全体の数で言って、何が売れてるのかを見渡さなきゃこの話は曖昧になる。良いものだっ

てたしかに売れることはある。しかし、そうじゃないものの数の方が圧倒的に多いし、その合計額は凄まじい数字だろう」
「……そうね」
「良いものだって売れることはある。……が、〝売れるものとは〟、っていう話だけで言ったら、都合の良いものがやっぱりただ強い。だからこそだ――」
詩文は座布団から立ち上がってベッドに腰をかけると、足を組んで私に問う。
「――これを知った上で、〝お前は誰に、どんな歌詞を書いていくのか〟っていう話だ」
「……なるほど」
「さぁどうする？　良いものを作るってことを選べば、その〝良いもの〟を支持する少数の評判は勝ち取れるかもしれない。けど、大多数の〝許しを求めてる人〟からはそっぽ向かれるし、場合によっちゃ攻撃すらされるかもしれない。この大多数ってのがまた凄まじい強さなんだぜ？　なにせ数がいる。ライオン一匹がどんなに力強く吠えても、ヌーの大群が押し寄せてきたらひとたまりもない。踏み潰されて挽き肉になるのがオチってわけだ」
「………そうなる……わね」
「ここで迷わないように気をつけろよ悠。守りたいものを見捨ててしまった人間は、もう絶対に幸せにはなれない」
「…………」

ゾッとするようなことを言う詩文のその言葉の意味を、私はできるだけ正確に感じ取ろうとする。その言葉が指す意味。私がこれから、何と向き合っていくことになるのか。

「……そうね」

でも、だったら気になることがある。詩文は、どうやってその自分らしさを保ったまま、ヒット曲を出すことができたんだろう。

「ねえ詩文、あんたはどうやったの？」

「ん？　ああ。なるほど、良い質問だ」

「あんたの話じゃ、あんたはその少数の人に向けて作詞してるのよね。だったら、あんたも厳しいんじゃない？」

「そうだな。しかし、だからこそ作詞にはテクニックってもんがあるんだよ。たとえば、『ナンセンス』の使い方だ」

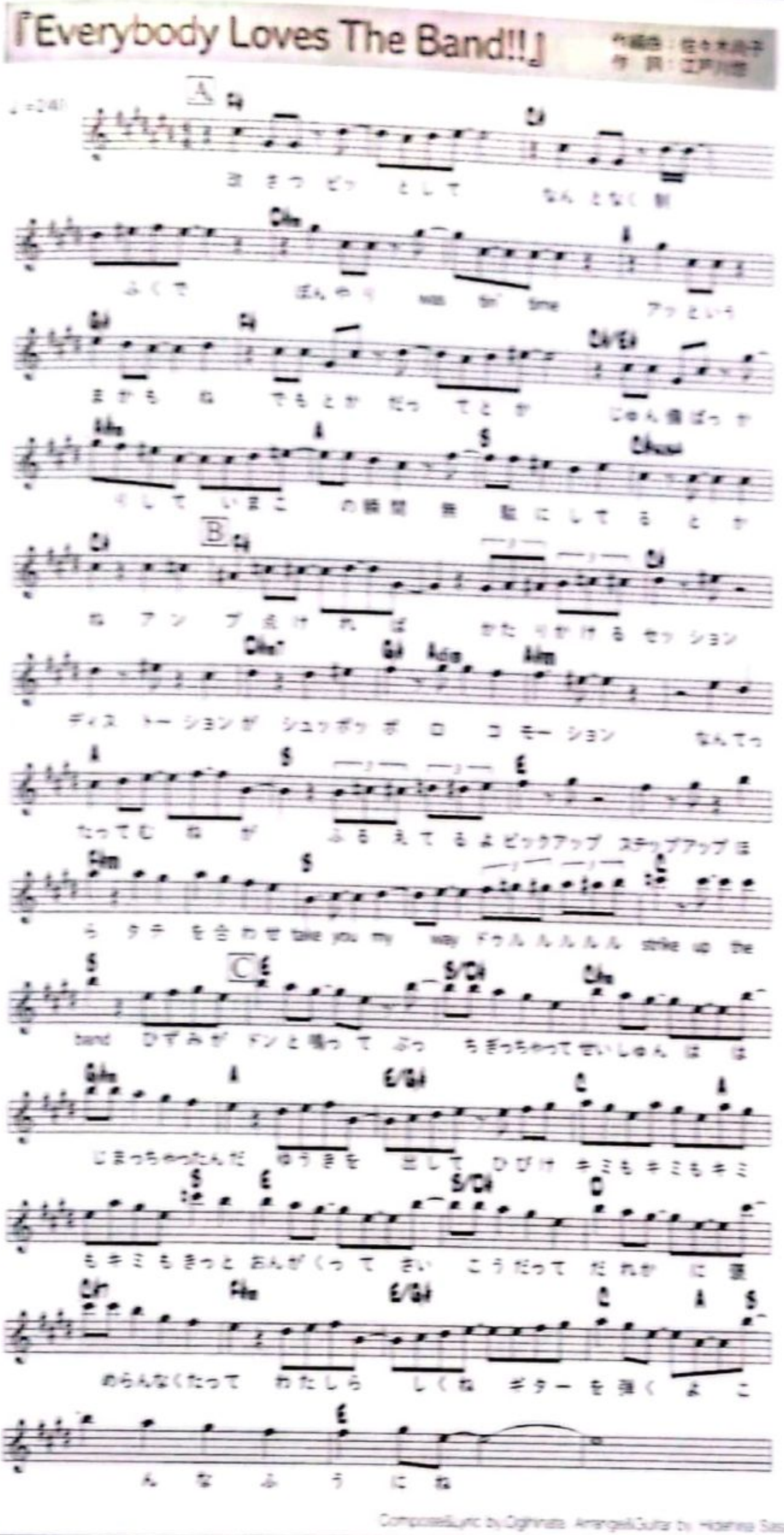
「……ああ。なるほど」

「口うるさく説明しなくてもわかると思うがな、意味性の強い歌詞ではなくナンセンスという表現方法なら、嘘をつかずに書くことができる。そして、あらゆる意味性のある言葉や意思をすべてぶっちぎるほどナンセンスというものは射程範囲が広く、愛され、なおかつ本質的だ。ちょっと教えすぎな感もあるが、こんな風に、戦い方を工夫していけ」

CamScannerでスキャン

——「詩文ちゃん、お食事の用意が整いました」

芳子さんの声が、襖の向こうから聞こえる。そこで話は終わった。おう、今行くと返事する詩文の威厳のある声を聞きつつ、私たちは広い屋敷の中を移動する。



ボーカルさんにメロ譜を用意するのはマナーだから最低限の読み方と歌詞の書き方は覚えとけよ。ひらがなと漢字が混ざってるのは、譜割的に分けなきゃいけない2音以上のものはひらがなにしたり、わかりやすそうだったら漢字で書いたりとか、"ボーカルが歌いやすそうなもの"を基準に考えるから決まったルールはない。

CamScannerでスキャン

第14話

音楽という呪術の話

CamScannerでスキャン

「親父の気配がする」
「……え？」
　これは、ダイニングなのかしら？　ひときわ広い板張りの和室に、なんだかすごく高そうな、御神木（ごしんぼく）をスライスしたみたいな感じの高級っぽい大きな座卓。高そうな屏風。迫力のある日本画。綺麗な紫色の座布団に座った私たちは、詩文がさっき芳子さんに頼んでいた〝簡単なお昼〟の食膳に手を合わせる。……鯛が入ってるお茶漬けに、キノコのお刺身（キノコの〝お刺身〟……？）、山菜の和え物、魚や鶏肉やなんかいろいろ入ってるダシが香ばしい茶碗蒸し。そのひとつひとつのお碗から小皿に至るまで、もうなんか引くくらい高そうだった。
〝簡単な〟お昼……。
　そんな、手を合わせるだけでちょっと緊張してしまいそうな立派な御膳をほぼ無視して、キッと不機嫌になる詩文。どうやら、お父さんがいる……？
「……芳子さん、親父にさ、『もし友達の前に姿を現したらただじゃおかねぇから』って、言っといてくれ」
「……あ、あはは……そ、それは詩文ちゃん、その……自分で伝えてもらえるかしら……？」

CamScannerでスキャン

おお、さすがに物腰の柔らかい家政婦さんも困ってる……。

「あと、なんだあれは？　テレビにくっついてるの」

「え？　ああ、あれ？　あれは――」

詩文が目をやったのは、大きい部屋の真ん中にドンと存在感を誇る大きなテレビだった。

そして、その脇にあるのは……ゲーム機？

「うふふ、旦那様、詩文ちゃんに内緒であの車のゲーム練習してるんですよ？　あっ。内緒だったかしら……」

……詩文に内緒でレースゲームの練習？　なんか、さっき聞いた感じの厳格なお父さんとはやっぱり印象が違うような……？　ゲームやってるなんてフレンドリーなお父さんじゃない？　……と、思っていたら、詩文の顔がものすごく恐くなっていた。

「……親父に言っとけ、『気持ち悪りぃ』って」

「………あら～、あはは……あ～……どうしましょ……」

「いや、詩文、それはちょっと言いすぎなんじゃ……」

「二度とアタシに興味を持ってほしくねぇんだよ。1秒でも早く縁を切りてぇんだこっちは。いただきます！　……美味い！　やっぱ秋は山菜だな！　お前も食え悠！」

「……い、いただきます」

伊佐坂御膳は、それはもう、筆舌(ひつぜつ)に尽くし難(がた)い美味しさだった。私の粗末な舌じゃその味

の半分も楽しめてない気がするけど、なんかよくわかんない深みのあるダシとか、ふわっと香る潮の香りとか、お米がすでに違うなぁとか……なんか、うん、とにかくすごい。とにかくすごく美味しかった。

「お前に話しておくべき作詞の話が、あとふたつある」

食後、縁側に座って紅葉を見ている私たちは、ゆったりとした時間を過ごす。御膳に浴衣に縁側に紅葉。こんなのが日常だなんて、詩文の世界はやっぱり私の生活環境とはまるで違うわ。……と、そんなことを思っていると、詩文がポツポツと、また話し始める。

「あとふたつなの？」

「まぁ、あとふたつだな」

「そう……ねぇ、もっとじっくりでもよくない？　別に焦ることとなんかないでしょ？」

「いや、今のうちに言っとかねぇとダメだ」

「……そうなの」

「さてと、じゃあ残りふたつも話していこうか。さっきの話は音楽というよりは『聴衆心理の話』だったが、今度は純然たる『音楽の話』だ」

CamScannerでスキャン

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「音楽という現象はそもそも、何だ？」
「……ビックリするくらい漠然とした質問ね……」
一呼吸置いて詩文が言ったのは、そんな言葉だった。音楽という現象はそもそも何か。あまりにも広すぎるというかとりとめがなさすぎる質問だけど、でも、これまでの感じなら詩文にはどうやらその答えというか、捉え方みたいなものがあるらしい。……けど、これはさすがに広すぎるでしょ……。
「音楽くらい日常に溢れてるものはないよな。テレビをつけてもラジオをつけても、街を歩いても、コンビニに入っても、学校にいても。どこにいても音楽ってやつはほとんど常に流れている」
「学校でも流れてるかしら？」
「チャイムがあるじゃねぇか。それに、下校を促すBGMとかな」
「ああ、あれも含むんだ？」
「もちろんだ。〝音の流れで人に影響を与えるもの〟はすべて音楽だ。これがどれくらい神秘と驚異に満ちたことか、わかるか？」

「……思わせぶりに言うわね。なんか、大げさに言ってない？」
「いいや、これこそはものすごく大げさに考えるべき部分だ。というか、この現象の恐ろしさをわかってないやつは、音楽をやらない方がいい」
縁側から庭の飛び石にピョンと降りた詩文は、グーっと伸びをしながら言う。

「――音楽はな、呪いだ」

「……？」
「ピンとこねぇか」
振り返った詩文は、私にたずねる。
「……そうね、あんまり……」
「音だけで人間の心を意のままの方向に誘導するんだぞ？　楽しい気分にもできるし、緊張感のある雰囲気にもできるし、忙しない気分にも、感動的な気分にもできる。……これがどれくらい恐ろしいことか、わからないのか？」
「………」
そう言われてみると、たしかにそれはすごいことかもしれない。けど……詩文の文言はまるで、毒物か爆発物でも扱うような……実際よりかなり大げさなものに感じる。

「でも、誘導できるって言っても、ちょっとだけじゃない？」
「それが、思った以上にちょっとじゃねぇんだ。——人間の、行動原理のほどんどは意識的ではなく、無意識的だ。そして音楽や美術は、聴覚や視覚といった器官を通してアタシたちの〝無意識に浸透する〟。正体不明の漠然とした〝直感〟は、そうやって作られていくし、それはつまり、アタシらの心を潜在的にマインドコントロールするっていうことに、限りなく近い。『言霊（ことだま）』って、聞いたことあるか？」
「なんだっけ……〝言ったことはそのまま実現する〟とか……ちょっとオカルトっぽい話よね？」
「オカルトだなんてとんでもねぇ。あれはものすごく確かな物理現象なんだぜ？　——言霊。たとえば、企業の理念だとか軍人の教訓だとか、宗教の教えだとか、人はなんでそんなに頻繁に『復唱』なんてことをさせるのか。それは、その〝言霊〟が持つ圧倒的な力をみんな知ってるからだ。思ってもないことでも、口にしたら心は確実にその方向に引っ張られる。〝心を込めずに言ったとしても〟だ」
「そうかしら……？」
「はは。だったら試してみるか。そうだな、お前が絶対に口にしたくない言葉は……どんな言葉だろうな。……たとえばこれなんかどうだ？『騙される方が悪い』って、言ってみろ」
「……なにそれ？　いや、言いたくないいんだけど……？」

「いいから言ってみろって。心を込めなくていいから。口を動かすだけでいい。これを20回だ」

「まぁ……言うだけなら……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い………」

「止まるなよ、ちゃんと最後まで言え」

「うん……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い……騙される方が悪い」

「……ほんの少しだと思うが、わかるか？」

「そうね……なるほど……」

それは、本当にごくわずかなことだと思う。けど、20回言った『騙される方が悪い』というその言葉は、明らかに私の意識に〝何らかの影響〟を及ぼしている。それは、否定するにはちょっと無理があるくらい実際的な心理現象だった。

「20回くらいじゃ効果は薄いが、これを1日中、思い出したらいちいち言うようにしてみりゃもっと効果は如実(にょじつ)に現れる。1週間、1ヵ月やりゃもう絶対に抗えない」

「そうね……たしかにこれは――」

「どんな言葉だってこれができるんだぜ？　プロパガンダや思想操作に頻繁に使われるこの

CamScannerでスキャン

強烈な無意識へのアプローチ……これが言霊という現象の恐ろしさだ」
「なるほどね……ちなみにこれって、発音しなくても、もしかしたら効果あるんじゃない？」
「ん？　どういうことだ？」
「いや、たとえばなんだけど、ネットとか見てて『○○は悪だ』っていう言葉をなんとなく、自分には関係ないことだと思って見てても、いつのまにかそれを悪だと思うようになってたりとか……してる気がするような気がして」
「……はは。お前、ずいぶん賢くなったというか、見えるようになってきたじゃないか」
「そ、そう？」
「そうだ。視覚に入るだけですらそれは意味を持っている。コマーシャルっていうものがなぜこんなにも世の中で重要視されるのか。それはな、繰り返し視覚や聴覚にその情報を叩き込むっていうのが究極のマインドコントロールだってことを、賢いやつはみんな知ってるからだ。広告代理店が恐ろしいほどの権力を持っているのはそのためだ。無意識を支配するってのは、人間を支配するってのとほぼ同義だからな」
「……たしかに、いつのまにか覚えてることってたくさんあるものね」
「さて、最初の話に戻るがな。『音楽は呪い』だ。もう少しポジティブな言葉であえて美しくいうなら、音楽というものは〝人類が誰でも使える魔法〟と言って差し支えないだろう。この行為は、意識の部分ではなく無意識の部分を操作する、使いようによっちゃ極めて危険

CamScannerでスキャン

な洗脳行為ってわけだよ」
「……少しだけ意味がわかったわ」
「その音楽の分野の中でも、アタシたちが特に扱うものは、なんだ？」
「……歌詞……言霊ね」
「そうだ。しかもな、歌ってのは誰かが発音することを前提に作られている――つまり、復唱させることを前提に作られているんだ。これが一体どういう意味か、もうわかるよな。作詞ってのは、〝言霊の内容を司る呪文そのもの〟だ」
「……そうかもしれないわね」
「たとえば《上を向いて歩こう》はセンチメンタルをグッと脳に刻む言霊で、中島みゆきの《糸》は人との絆、《ファイト》はこれから勇敢な選択をしようって人が発音したい言霊というわけだよ」
「わかるわ。でも詩文……？　じゃあ……あんたがこの前話したことだけど……《リンダリンダ》やきゃりーぱみゅぱみゅはどうなるの？　だって……ナンセンスなんでしょ？　どっちの方向に作用する言霊とか、あれにはない気がするんだけど？」
「あるさ。あれは〝ナンセンスの方向に作用する言霊〟だろ？　ナンセンスってのはもっとも忠実に音楽語を〝直訳〟したものだ。つまりその音楽語の内容に従った方向に作用する」
「………そういうこと。そうね。その通りだわ」

CamScannerでスキャン

「音楽という呪いを美しく『魔法』と呼ぶか、それとも禍々しく『呪術』と呼ぶかは好きにすりゃいいけどな。意に沿わず強制的に無意識を操作するっていう行為って考えると、アタシには『呪術』の方がしっくりくる」

「……魔法っていう言い方が私は好きだけど……うん。そうね。言わんとすることはわかるわ」

「魔法なんて言ったら、まるで良いことしてるみたいじゃねぇか。どんなつもりであれ人の心を少しでも曲げるんだ。良いことなんかじゃねぇよ。扱うものの危なさを忘れないように気をつけるのは大事だ。それを扱うのが、アタシらなわけだよ」

「そうね」

　飛び石をヒョコヒョコ歩いていた詩文はピョンと私の隣――縁側に座って懐っこく肩を寄せると、無邪気な笑顔で言う。

「でもさ悠！　これがわかれば作詞って、なんっっってもおもしろいもんだと、思わないか!?」

「……え!?　そ、そうね、それはもう、うん。本当にそうね」

「……ほんの少しだけどアタシらは、人の無意識に侵食するようなものを扱ってるんだ。だからこそ、何を伝えるのかをもっとちゃんと見つめねぇとな。アタシらは作詞家であり、作家だからこそ、未熟な自分から目を背けちゃならねぇんだ。〝人の心にお邪魔する〟わけだからな」

CamScannerでスキャン

「うん。その通りだと思うわ」

──「難しいことをたくさん考えてる」と、私はちょっと、一歩引いたようなそんな感覚で詩文の話を聞いていた。私は、こんなにいろいろ深く考えたことが今までなかったんじゃないかと思う。こんなに難しく考えても仕方ないとか、そう思ってたこともある。……けど。

今、この瞬間。隣で心底楽しそうに笑顔で「作詞はおもしろい」って言ってる詩文の顔を見て、わかった気がする。本当に心から笑って生きるためには、考えなきゃいけないことがあるっていうこと。考えてもわからないとか、途中で投げ出さず、見たくない自分や大事なことをしっかり見つめて、そうやって生きてるからこそ、詩文はこんな顔で笑うんだと思う。

CamScannerでスキャン

第15話

テーマの作り方の話

CamScannerでスキャン

「ここがアタシの書斎だ」
「おお……雰囲気あるわね……」
伊佐坂邸の離れに位置する部屋。そこは壁一面、天井いっぱいまでギッシリ本棚になっている、オレンジ電球が光る書物庫みたいな建物だった。全体的に妙にレトロっていうか、大正浪漫みたいな厳かさのある雰囲気。そこに並ぶ数え切れない本。『社会学と人類学Ⅰ』とかいうタイトルからしてめちゃくちゃ難しそうな本に、美術や音楽、芸術に関する本。偉人の伝記や、伝統芸能にまつわる本。……かと思ったら『ガラスの仮面』や『藤子不二雄異色短編集』、『ゲゲゲの鬼太郎』みたいな漫画もある（どれもチョイスが妙に渋いけど）。本の種類はさまざまっていうか混沌としてて……まるで、詩文の脳内にいるみたいな感覚にとらわれた。
「作詞について、お前みたいなタイプの人間はどうも"真面目に"勉強したがるからな」
「え？　ああ、うん。——まぁ、そういうとこもあるとは思うけど……？」
「どうせ勉強しちゃうお前に『作詞の役に立つ本』とはどういう本なのか、教えておこう」
「作詞の役に立つ本……？　作詞の本とか読んでるの？　あんたが？　なんか意外ね」
「誰が作詞の本っつったよ」

「あ……そうね。……じゃあ作詞の本じゃないやつ？」
「そうだ。というか、作詞をする上で読むべきはむしろ作詞に関する本じゃない。『歴史の本』に『古典落語の本』、『宗教の本』、そして――『詐欺の本』とかだな。

そう言いながら詩文は、棚からいくつかの本を取り出して座卓に置いていく。

「アタシがお前に教える最後の作詞レッスンはズバリ、テクニックを教えている際にさらっと深く触れずに飛ばしたもの。ナンセンスと対を為すもうひとつの重大なもの。……対でありつつナンセンスよりもごく一般的に知られている作詞の要。……『共感性／テーマの作り方』だ」
「テーマの作り方……」
これは、私が個人的に読んだ作詞の本でも取り扱ってたものな気がする。テーマ……つまり作詞のあらすじや物語性や、題材。
「ナンセンスってのは、言語化できない表現の音楽語をそのまま歌詞にするっていうことだが、テーマってのはつまり整合性――意味の塊だ。実際のところ、はとんどの歌はこの『ナンセンス』と『テーマ』の組み合わせてできている。最初から最後までナンセンスだけの歌詞っていうのは珍しい。《リンダリンダ》を例にあげても、あの曲のイントロやメロは、ゆるく意味のある歌詞を歌っている」

「言われてみれば……そうね。でも……物語……か……」
テーマ、物語。そう聞くとちょっと萎縮する。それってあれでしょ？　なんかこう、小説じゃないけどざっとしたあらすじを考えたりグッとくる話を題材にしたりとか……そういうスキルの話よね？　それは……すごく難しそうだわ……。
「私もちょっと勉強してはみたんだけど、歌詞で使う物語の作り方ってあれよね……たとえば……シナリオっぽかったり……ふとした日常の景色を発想の転換で描いたりとか、視点を変えてみるとか、シチュエーションから連想したり、とか……」
「違う。そんな小手先のことをいくらやってもどうしようもねぇよ。それで出来上がるのは流行りのパクリくらいなもんだ」
「え、違うの？」
「繰り返し言うがアタシたちが扱うのは〝人間の心〟だ。作り話の上手さをどれだけ鍛えても、そんなもん薄ら寒い偽物だよ。〝迫真〟ってのは、心の真に迫ってるからこそ迫真だ」
「……言ってることは深そうだけど……それってつまりどういうことなの……？　だって物語って、なんだかとりとめなくて……作れそうにないっていうか」
「まぁ今のお前に作れるものはほとんどねぇよ。まだお前っていう発射台が貧弱なんだから。お前の〝人間自体〟を鍛えなきゃ物語性なんてものは扱えないに決まってる」

CamScannerでスキャン

「……まぁ、なんとなくだけど、たぶんそういうものよね……」

でも、だったらなおさらとりとめがない。そんなの、何をどうすればいいの？

「たとえばラブソングがあったとする。ラブソングってのは作詞家の恋愛に関する倫理観が如実に現れるものだったりするが、何もわかってない誤魔化しだらけのテキトー作詞家が書いたらその歌詞はご都合主義全開のクソみたいな歌詞にしかならねぇ。外見だけは綺麗に整えてるから一瞬は美しく見えるだろうがな。だがそれは、よく見りゃ人の気持ちを平然と踏みにじっている醜悪（しゅうあく）で下劣（げれつ）な、耳に入れるだけで心が曲がる言霊だ。口で発音するなんて冗談じゃねぇ、もっての外だよ。……人間の物語を描くっていうのに必要なのは『人間の正体』を知ることだ」

本に囲まれたオレンジ色の空間。いかつい座卓の前であぐらをかいて座る詩文の言葉は、いよいよ本気というか、〝詩文にとってのいつもの景色〟の中だからこそ出る言葉のようだった。……言っている内容は正直難しい。頭の回転がついていけるように、私は〝その詩文〟に合わせてできるだけ集中する。

「……勉強好きなお前に勧めておくのは、まずはこれだ。『歴史の本』に『古典落語の本』。このふたつを読んで知ることができるのは〝人間はそう簡単に進化しない〟ということだ。昔も今も、人間の考えることは大体同じなんだよな」

「そうなの？　今と昔じゃ結構考え方って違うと思うけど……？」
「人間はそれほど変わってねぇよ。変わってるのは『状況』だけだ。現代戦後戦前幕末戦国、どんな時代でも人間は、アタシらとほぼ同じ感性で生きている」
「……見てきたように言うわね……？」
「はは、さすがに見てきたわけじゃないがな。でも、もしかしたら1億年前だって今と大して変わらねぇようなことをみんな喋ってたのかもしれないんだぜ？『税金がひでぇ』とか『ブラック企業がどうの』とか『受験戦争』とか『エロ産業』とか『SNS映え』とかさ。SNSはねぇだろうが、それに代わるコミュニティツールはきっとあっただろう」
「……そうかしら？　でもまぁ、そうだったらおもしろいわね」
「まだピンとこねぇようだな。……たとえばだ。最近、キラキラネームとかあるだろ？　子供に、読めねぇような奇抜な名前をつけるっていう例のアレだ」
「あれね。うちのクラスにも読みにくい子はたまにいるわね」
「これについて700年前の歌人であるところの吉田兼好はこう言っている。『人の名も目なれぬ文字を付かんとするは益なき事なり。何事もめづらしき事を求め異説を好むは浅才の人の必ずある事なりとぞ』ってな」
「……え、えーっと……ごめん、日本語で頼めるかしら……？」
「日本語だろ。……まぁ要するに、『子供にやたら珍しい名前をつけたがるやつがいるが、

ろくなもんじゃねぇ。あんなもんは教養のねぇアホのやることだ』って、そう言ってんだ」
「……結構、過激なのね吉田兼好」
「キラキラネームの是非についてはまぁどっちでもいいけどな。どんな名前でも名前は名前だ。でも、現代でもこれと似たようなことを言ってるやつは大勢いるだろ？　要は吉田兼好は700年前の日本でバズってた影響力のある人間だ。ほら、こんな具合だよ。今も昔も、世の中の話題ってのは大して変わらねぇ。"人の関心／人の質もほとんど変わってねぇ"ってことだ。それを滑稽話としてエンターテインメントにまとめて、今でも見ることができる"生き伝えられている化石"が、古典落語ってやつだよ」
「なるほど……たしかにその話を聞いたら、なんか急に昔も今と変わらない気がしてきたわ。古典落語って、なんかもっと難しいやつかと思ってたんだけど」
「古典落語は数百年経っても笑える、人間のどうしようもなさを描いてるからこそおもしろい。何度も言うが、もうわかったろ？　今も昔も大して変わらねぇんだ要するに。そしてその背景──つまり状況を知るって意味で歴史本ってのは便利なんだぜ。昔と今を比べて"何が変わらないものなのか"をもっと正確に知ることができるからな。本を読めっていろんな人が言うのは、つまりこれを知れって言ってんだよ。それこそが、本で得られる究極の叡智（えいち）だ」
「……歴史の勉強は学校でやってるけど、あんたからしたら、学校の授業って本当に退屈かもしれないわね」

「そーだな。テストなんて暗記競争だろ？　坂本竜馬が何をした人物なのかで言ったら『薩長同盟を結び大政奉還を成すために奔走した人物』とかってくらいしか触れてねぇもんな。あのたったひとりの脱藩浪士が一体どれくらい驚異的な人物だったか、そのたったひとりにこの日本って国がどれだけ振り回され、あらゆる捻れを解消したか、かの人物がどんな夢に胸を踊らせていたのか、それに誰が魅せられ動かされたのか、とかさ。語るべき物語や学ぶべき人の心、群像劇がそこにはいくらでもある。あるのに、テストでやるのは穴埋め暗記問題だ。歴史を学ぶってのはそういうことじゃねぇよ。過去と今がどう違うのか、どう同じなのかを当事者として考えること、それが歴史の勉強をするってことだ。アタシらはみんな現実に、現代の日本で生きてる一個の命なんだからな」

「……そうね。なんだか、歴史ってもっと他人事っていうか、ただの物語だと思ってたわ」

　詩文の言葉はいちいち大袈裟に感じる。けど、これは果たして本当に大袈裟なのかしら。一歩引いて聞いてる私は、その大袈裟さに〝陶酔〟することをためらってしまう。……けど、それは、私がその覚悟を持っていないから、なのかもしれない。〝詩文の側〟に行くことができていれば、それを大袈裟だなんて、思わないのかもしれない。でも……やっぱり私にはその感覚に対する現実感が薄い。

思案する私の様子を、ゆったりした間で待つ詩文。どうやら、私の考えがまとまるのを待ってるらしい。そのあたりも含めて、詩文が私より何枚も上手なのを感じつつ、それと同時に胸を借りるような安心感もあった。

「さてと、ほかにも読むべき本はまだあるんだぜ」

「ええ。あとは何を読めばいいの？」

そして詩文が次に手にしたのは、こんな本だった。

「——『宗教の本』は、特に日本人は読むべきものだ」

「宗教ね……」

「おーおー、その反応。まさに日本人的だな。大して興味ねぇし、ぶっちゃけよくわからねぇもんな？」

「……いや、まぁそうね……」

「はは。多くの日本人にとって宗教ってのは、そんなイメージだもんな。まともな宗教も変な組織も一緒くたで、ざっくり全部まとめて敬遠してるってとこだろ」

「……ええ、そうね。それよ」

バッサリ言う詩文。たしかにたとえばお葬式やお墓参りは仏教よね。でも、ただ「宗教」と聞くと、私にはなんだか正体不明なもののように感じられた。

「別にお前を宗教勧誘しようだとかってそんなことはねーよ。アタシもお前と同じで自分を何教だとか自覚はしてねーし、もちろん敬虔な信者でもねぇからな。ただし、それでも〝宗教とは一体何か〟を知るのは、人類を知る上でどう考えても無視できないものだ。ちなみに、お前だって宗教には関わってるんだぜ？　お前は、ゆるい仏教とゆるい神道が混ざったごく一般的な日本人だ」
「……ああ、それもなんか聞いたことあるわ。初詣も行くし七夕とかもそうなのかしら」
「まぁそうだ。深く考えてるやつの方が珍しいけどな。でもそれでいいんだよ。どれが正しいとか間違ってるとか、思慮深いとか思慮が浅いとか、そんなことは決まってないし優劣もない。宗教の本で得られる知識はこれだ──『人間の価値観はそれぞれ違う』ということ。漠然とした話に感じるかもしれねぇが、宗教くらいこれをわかりやすく見せてくれるものはない。ブタを食っちゃいけねぇとか、アタシらからしたら意味のわからんルールだ」
「そういう宗教もあるらしいわね」
「人間がしょっちゅう間違えるのはな、『自分と他人が同じルールで生きている』という勘違いだ。人間の性質は個々にかなり違う。見た目が似てるだけだ。本当は猫なのにワンと鳴くような生き方を強いられてる人間も、たくさんいる」
「みんな違ってみんな良いってやつよね。他人と自分は違うって、理屈ではわかっててもなかなかそうは思い切れないけど……」

「はは。そうだな、じゃあこの話をしておこう。……『自分がされて嫌なことは他人にもしない』って言葉があるだろ。お前、あれについてどう思う？」
「え？　それは……そうね、大事なことだと思うけど？」
「この言葉は人間のことを何もわかってないやつが使う言葉だ」
「……え、そう？」
「お前、スカイダイビングは好きか？」
「突然ね……スカイダイビングって……あの空から落ちるやつ？　いや、絶対やりたくないわね。お金もらってもやりたくないわ。お金払ってあんなのやるなんて頭どうかしてると思う」
「まぁお前はそうだろうな。でもアタシはあれがやりたくてしかたねぇんだよ。ゼッテー楽しいよな。……さて、ここでさっきの言葉を使ったらどうなる？『自分がされて嫌なことは他人にもしない』、逆に言うと、自分にとっては嬉しいことを他人にしたら、他人も喜んでくれるというとんでもない思い込みになる。お前はスカイダイビングが嫌いなのにな。アタシは〝良いことをしてるつもり〟でお前をスカイダイビングに連れてったりするわけだよ」
「……なるほど。そうなるわね」
「こういう間違いを、人は平然とやる。世の中を見渡しても、間違うやつは大体これを間違えてる。そして擦れ違い、憎み合うようになって、お互いの尊厳を泥靴で踏みにじったりしてるんだ。それを見つめる切り口として、宗教にまつわる勉強は有効だ。土地柄として生ま

CamScannerでスキャン

れた民族風習や宗教、それを実行する群衆の心理。それは地球上のあらゆる場所で起こり、何百何千という傾向や経緯がある。自分と他人がどう違うか、それを知ることで初めて、自分がなんなのかがわかってくる」

「…………」

少し黙って考える私。そんな私の顔を覗き込みながら、詩文は楽しげに次の話題に移る。

「――そしてとっておき、『詐欺の本』は言うまでもない、人間心理の弱点や無意識に関する傾向を徹底的に研究してる悪のプロフェッショナル――心の専門家たちの本だ」

「ものは言いようね。でもたしかに、詐欺師くらい人間の心をわかってる人はいないわね」

「そうとも。ここに書かれている〝吐き気を催す人間の真実〟は、今まで見えていなかったもの、見たくなかったものを見せてくれる。詐欺師にとっちゃお前が心酔してた偽善ってものなんて、そりゃあもうカモ中のカモなんだぜ？　お前から全財産をむしり取るくらい造作もないことだろう」

「でしょうね……悪は悪だし、良いとは思わないけど、すごいとは思うわ」

「詐欺のターゲットは『臆病』や『悲観』だ。そしてそれは多くの人間が持っているものだ。やつらはそれを鋭く察知するわけだよ。それこそがメシの種だからな。道徳を無視して臆病なやつやネガティブなやつからガンガン財産と自由を奪い取る。それが詐欺師という吐き気

CamScannerでスキャン

を倒す悪だ」

「……やっぱり、そういうのは許せないわ」

「だろうな。お前は臆病でネガティブだし、ドンピシャでやつらのターゲットだ。やつらを憎まない方がおかしい。でも、憎むだけじゃダメなんだよ。やつらの思考順序を知って、手口を知らなきゃ、お前は人を守れるような人間にはなれない。その決意は本物なんだろう？　だったら学べ。敵を知って初めてわかることがある」

「まぁ、それもそうね」

「さてさて」

詩文は、ようやく本題だとでもいう感じで、トンと膝を叩いて調子を整える。

「最初の話に戻ろうか。『テーマ性の作り方』だ」

「そういえばそうだったわね」

「『人間は変わらない』『人間は個々に違う』。そして人間は誰しも、認めたくない『心の闇』を抱えている。こういったことを深く知って初めて、物語というものは作れるようになる」

「……じゃあ、ラブソングで言ったら……」

「同じ話だよ。『普遍性』と『違い』と『記号化』。この3つが見えてくれば、そこで語る愛についてはうわっつらの作り話ではなくなる。そういう『心に直結するもの』を扱うのが、つまり物語を作るっていうことだ」

「……言ってることの意味はわかるけど、やっぱりなんだかつかみどころがないっていうか……時間がかかりそうね……」

「そうとも。これは掴みどころがないし、時間もかかる。お前の人間性そのものこそが、テーマの質になるんだからな」

「…………」

私は考える。詩文の言葉の意味。私の人間性がテーマの質になる。私はこの言葉を、以前一度聞いたことがある気がした。なんだったかしら……。

「詩文、それ前に一度、言ったことがあるわね……？」

「ん？　そうだったか？」

「どんな言葉だったかしら……でも、言ったと思うわ」

私は記憶を探る。いつ、どのタイミングだったか……。

「ああ。言ったかも知れねぇな」

「……でしょ？」

「あれは、ゲームしてたときだ」

「……！」

その言葉で思い出した。そうだ、あのとき――。

CamScannerでスキャン

「『悩みの質は人間の質だ。つまらないことに悩んでるお前は、つまらない人間だったりするんだぞ』っていう話、よね……？」

「まさにその話だ。そして一番難しいのはそこだ。悠、お前今『悩んでもわからないこと』があると思ってるんじゃないか？」

「……？　ええ。そうだけど。それはそうじゃない？　誰でも」

「本来そんなことはあり得ないんだよ。ピラミッドの謎についてはそりゃあ悩んでもわからないかもしれないが、お前の心のことについて、お前がわからないってことは〝絶対にありえない〟」

〝絶対〟と、妙に強く断言する詩文。その言葉をうけて私は、やっぱりその〝絶対〟っていう言葉に若干の疑いを持つ。

「そう……？　考えてもわからないことは、あると思うけど？　人の思考ってそんなに理屈で仕切れるものじゃないでしょ……？」

「それは一般の話だ。アタシらは、〝それ〟ができるからこそ作家なんだよ」

「……それ？」

「そろそろいい時間だな。散歩に行くぞ」

「散歩……？」

時計に目をやった詩文は、そう呟く。太陽が沈み、夕暮れも夜に差し掛かる頃だった。

＊～＊～＊～＊～＊～＊

ちょっと出かける、と言った詩文の声を聞くと、すかさず着替えを出す芳子さん。やわらかいシャツに、ストレッチ生地の7分丈のジーンズ、足元はビーチサンダルに着替えた私たちは、駐車場に停めてあるバイクに向かう。

「で、どこに行くの？」

「砂浜」

「もう暗いわよ？」

「暗いから行くんだよ」

「……？」

詩文のバイクに乗って数分。私たちは再び砂浜にやって来た。昼間とはずいぶん様子が違う。波の音がザワザワとやかましく、黒くなった海はちょっと不気味さを感じさせた。

「……夜の海って、ロマンチックかと思ったら意外と怖いわね……」

「おい悠！　足元なんかかいるぞ!?」

「キャアアアアー!?　何!?　何が!?　何!?」

「なーんちゃって」

「……あんたねぇ……！」
「あっはははは！」
私が慌てるのをみてまた遊んでる詩文。まぁ、いつものことだけど……。
「……で、なんなの？　夜の浜辺に来たけど、暗いだけじゃない？」
「いいや、ここでやるのはこれだ」
そう言いながら、詩文はパッと手元の懐中電灯をつける。
「そんなの持ってきてたんだ？」
「悠！　足元！」
「はいはい。その手には乗りませんよ」
「でっけぇカニがいる！」
「へ……？　キャアアアア!?」
今度はホントにいた。そして、詩文に照らされたカニはすごい速さで走り出して、どこかの穴に消えてしまった。
「び、ビックリした……」
「あはは。子供の頃さ、こうやってよく遊んだもんだよ。カニをライトで照らしてさ、逃げるの追いかけたりして」

「……カニって、よく見たら気持ち悪いわね。妙に素早いし……」
「これにちょっとだけな、似てるんだよ。今からする話はさ」
「これ……？　って、さっきのカニ？」
「概念っつーか、イメージだよ。暗闇にうごめいて、でも照らしたらすぐに物陰に隠れてしまうもの。カニじゃないなら虫でもネズミでもいい。――そういう、"照らされることを嫌う者"の話だ」
懐中電灯を消して、街の明かりが遠く光るだけの暗い浜辺に立つ私と詩文。波の音を聴いていた詩文は、ゆっくりと話し始めた。
「真っ暗だなぁ」
「そうね」
「これが、今お前がいる場所だ」
「……？」
「お前はこれから先、長くて暗い迷路の中を、ひとりで歩いていくことになる。その道は果てしなくて、終わりがいつなのかもわからなくて、もしかしたら出口なんてないんじゃないかと思うことも、きっと何度もあるだろう」
「………」
なんの話をしているのかは、わからない。けど私は、詩文の話を聞きこぼさないように、

CamScannerでスキャン

気をつけて聞く。
「先に言っておくと、その迷路にはちゃんと出口が存在する。でも、どうやって出口まで行けばいいのかについてを、お前に教えることは誰にもできない」
「…………」
「だからお前に、アタシのとっておきを伝授するよ。——これは、『心の闇の暴き方』だ」

波に声がかき消されないように詩文は、私に一歩詰め寄って、暗闇の中で語る。

「一度しか言わねぇからよく聞けよ。……考えても考えてもわからない自分の心——心の闇、見たくない自分、誤魔化しだらけの自分——〝アイツ〟は、どんなに真剣に見つけようとしても自分じゃ見つけられない。でもな、〝アイツ〟の姿を照らして追い詰めて、正体を暴く方法がひとつだけある。それは、『言われて腹が立ったことの裏側を覗く』という方法だ。いつか誰かのひと言に腹が立ったら、考えろ。なぜ腹が立ったのか、5回『なぜ』を繰り返して考えろ。苛立ちの裏側に必ずお前のコンプレックス、お前の本性——〝アイツ〟は隠れている。暗闇に潜んだアイツの腕を掴んで、引きずり出して、対決して、そしてその未熟さを受け入れた数だけ、お前は出口に近づくことができるだろう。何十回、何百回、もしかしたらもっとか

もしれないそれを越えてゆけ。その迷路を突破して初めて見ることができる場所がある。そこがきっと、お前のスタートラインだ。……この話をすぐにわかれなんて言わねぇよ。ただ、もし迷って苦しんで、死にたくなったら思い出してくれ。これが、アタシがお前にしてやれるたったひとつの助言だ」

暗い浜辺、詩文の顔はハッキリ見えない。けど、それはとても力強いエールだった。

「……言ってる意味は、うん。わかると思うわ」
「そっか。だったら良かった」
まるで、これから先の私の人生に何が起こるのかをすべて知っているかのような、未来でも見てきたかのような詩文は、胸をなで下ろすように優しい声でそう締めくくった。
「……これにてアタシの作詞レッスンは今度こそ終わりだ♪」
パッと明るい声になって、詩文はヒョコヒョコと懐中電灯を照らしながら座り心地の良い乾いた砂場を探す。そして、そこにパタンと倒れ込んだ。
「今夜は良い星だなぁ。見ろよ悠」
「ええ」
詩文がいる場所に歩いて、隣に座る。黒い海の上には、いつのまにかちょっとしたプラネ

きりうみみたいな星が広がっていた。

「……本当は、お前と話したいことはまだまだいっぱいあるんだけどな。星の話、海の話、貝殻の話、音楽の話、絵の話。歴史の話。踊りの話、人間の話。神様の話。自然の話。宇宙の話。……けど、ここが潮時だ」

「もっと聞かせてよ。そういう話」

「んっ？　……あはは。それはさ、いつかお前がアタシに聞かせてくれよ。どんな話でもいいからさ」

「……私が？」

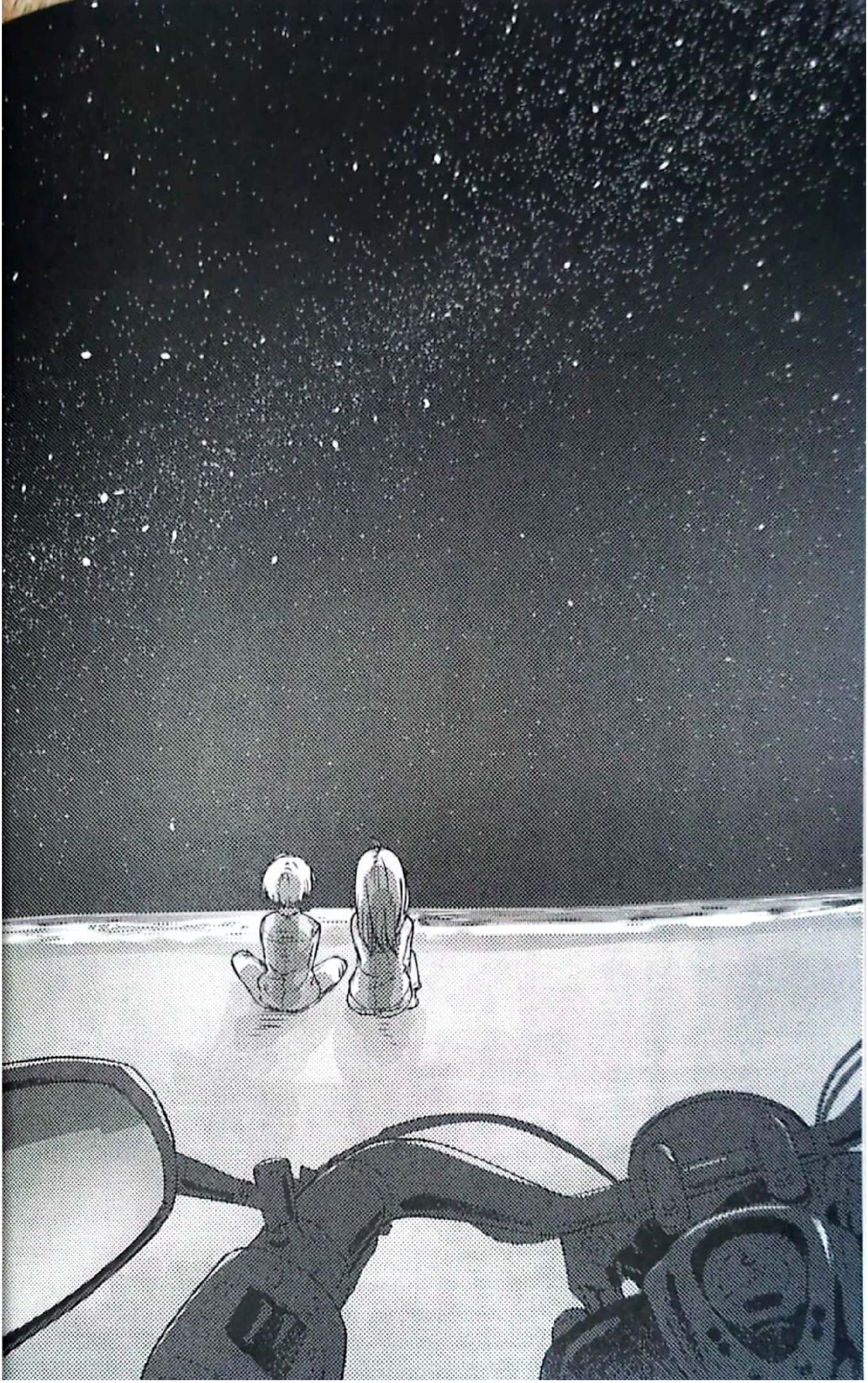
「そ、お前がだ」

「だって私、そんなの知らない……し。私が知ってることなんて、普通のことばっかりよ？」

「ああ。そうだろうなぁ」

「…………」

少し冷えた夜風にあたりながら、愛しげに星を見上げる詩文を見て私は考える。私には遠すぎて、とてもじゃないけど届かない哲学。その――〝遠すぎる場所〟に、何年も前からずっとひとりでいる、詩文という背の低い少女のこと。



CamScannerでスキャン

学校になんかなんの用もないって、詩文はしきりに言った。でも、それもそうよね。詩文と対等に話せる人なんて、うちの学校にいるはずがない。……いや、日本中の学校を探しても、そんな人はきっといないと思う。……詩文はずっとこんな風に、空ばかり見つめながら、解決しない孤独の中で生きてるのかもしれない。

「なんだ、押し黙っちゃって」

「……あんたのこと、考えてるの」

「な……なんだ……？　もしかしてそういう趣味かお前……？」

「そういう意味じゃないわよ。バカね」

「はは。だったらなんだ？」

「……孤高の天才って、あんたみたいなやつのことをいうのかなって」

「……あはは。そーだ。……そのとーり！　天上天下唯我独尊！　アタシは、天下無敵の詩文様だ！　宿なき人が如く、いや遠く我は歩まん！　……なーんてな♪」

詩文は、力なく笑ったあと、まるで誤魔化すようにそう言った。それを聞いて私は確信する。私の言葉が、今詩文を少しだけ傷つけたこと。――だからこそ、口にすることをためらいながら、勇気を振り絞って私はこう告げる。

CamScannerでスキャン

「……私、頑張るから。もうちょっとだけ待っててね、詩文」

「……ん……何を言ってるのか全然わからねえなあ。どういう意味だ」

「そうだ、わかるでしょ。あんたがそう言う言葉は、いつだってそうだもの」

「…………」

多く言葉を交わす必要はない。詩文は、誰よりもたしかにこの言葉の意味を読み取るに違いなかった。これは、ここまでで、身の程知らずな私の、精一杯の決意表明。

「…………」

「…………」

「……はは……ん、すげえなあ」

「……うん」

「…………」

「…………」

「――お前となんか、出会わなきゃよかったなあ」

何かを誤魔化すような楽しげな声色だった。表情を見上げられなかったから、きっと笑顔でそう言った詩文の声は、ほんの少しだけ、掠れていた気がした。

CamScannerでスキャン

「じゃ、そろそろ帰るか。家まで送るよ」

「ええ」

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「鎌倉はいいトコだったろ」

「ええ。あんたん家も楽しかったわ。芳子さんによろしくね。今度は夏に泳ぎに行きたいわ」

「はは。ごもっともだ。11月に海で泳ぐなんて正気の沙汰じゃねぇ」

「ふふ……誰のせいよ」

私の家の前にバイクを停めた詩文は、そんな他愛ない話をする。

「じゃ、またな」

「ええ。また明日、学校で」

長居せずバイクのエンジンをかけ直す詩文。そして数メートル進んだ場所で思い出したように止まった詩文は、私に大きな声でこう叫んだ。

「……悠！　お前さぁ！」

「何さ」

「……やっぱなんでもねーわ！　じゃあな！」
「……？」
私を振り切るようにして、詩文のバイクは走り去っていった。

CamScannerでスキャン

第26話　周りの目と羞恥心の話

（クスクス……なるほど、おもしろいわね）

朝の通学電車の中、私はスマホで古典落語の動画を見ていた。もちろん、ほかのお客さんの迷惑にならないようにイヤホンをつけてね。

〝酢豆腐は一口にかぎりやす〟っていうフレーズは、なんとなく聞いたことがある気がする。これは古典落語『酢豆腐』のオチのフレーズ。イヤミで知ったかぶりの若旦那に一泡吹かせてやろうと思った町人が、〝これは私ら下々にはわからん珍味の豆腐らしいので詳しいことを教えてくださいな〟と言って、ただ腐ってるだけの豆腐を食べさせてギャフンと言わせるお話。面子を守りたい若旦那はひどい臭いと味にむせながらもその豆腐を食べて〝これは酢豆腐でげすな〟と言ってまだ知ったかぶるものだから、もう一口どうぞと促して、オチに結ぶものだった。

（……これはなんていうか、痛快ね。うふふ）

正直、古典落語なんておじいちゃんおばあちゃんの好きなものだと思ってたけど、たしかにこれはおもしろいっていうか、時代を問わず笑えるお話だった。調べてみると、この話が誕生したのは江戸時代中期の1763年らしい。今から250年以上前のお話って……すごいわね。なるほど、詩文が言っていた〝人間は別にそれほど変わってない〟っていうのは、本当のことなのかもしれないわ。

CamScannerでスキャン

（しかしみっともないわねこの若旦那。自分が見栄っ張りなことになんで気づかないのかしら？　そんなにメンツが大事なのかしらね）

動画サイトでいくつかの落語を見ながら、私は詩文の言っていたことの意味を今正確に理解する。なるほど、これが古典落語。数百年の時を経て、流行りの波に揉まれても残り続けた本物中の本物。人間の変わらない部分、普遍の物語。……古典が大事だってなんとなくはわかってたけど、つまりこういうことだったのね。

（あれ？　そういえばこれって……もしかして……）

私は、もう一点気づいたことがあった。それは落語ではなく、詩文のこと。詩文は、見た目はギャル系なんだけど実際のところいわゆるギャルとは全然違って、たとえば言葉遣いなんかも現代ギャルのその感じではない。でもざっくり乱暴ではあるっていうその変な語感の正体はもしかしたら、この江戸っ子みたいなてやんでぇ言葉が由来なのかもしれない。言葉のチョイスが妙に古めかしいときがたまにあったのも、つまりそういうことなのかもしれないわね。

（……伊佐坂家の偏向教育は、これを詩文に叩き込んだのね……）

古典の大事さを知るのと同時に、なんだか思わぬ収穫。これ、詩文は自分で気づいてるのかしら？　実は気づいてなかったりして？　だったらちょっとおもしろいわね。

CamScannerでスキャン

——〝もうちょっと待っててね〟、なんて。ちょっとクサかったかしら。でも、詩文に言ったその決意表明が嘘にならないように、私はひとつずつ勉強していく。あいつがひとりぼっちにならないように。私が頑張ればもしかしたら、あいつの孤独を解決してあげられるかもしれない。……なんて。まぁ、そう簡単に成長なんてしないだろうし、今すぐにどうこうって話でもないとは思うんだけど、ひとつずつ、ね。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

「そういえば尚子、この前言ってた次の曲の歌詞、今さらだけど書かせてもらっていい？」
「え？　もちろんだよ！　やったぁ！」
　昨日も含めてジャスト1週間の不登校を経た私は、若干挙動不審になりながらも登校した。……と思ったら、どうやら尚子が気を利かせてくれてたらしくて、クラスメイトからは「おたふく風邪大丈夫？」みたいな心配のされ方をした。……嘘はまぁ、いけないことだけど、正直助かったわ。こういうところで機転が利くあたり、尚子のすごさを感じる。
「……でね、実はちょっとやりたいことがあるの。今度の歌詞はＳ･ｉＥ先生に添削をしてもらおうと思って」

CamScannerでスキャン

「え？　そんなことできるの？　だってプロだよ？」

「んー、わからないけど、もしかしたらやってくれることもあるかなと思うのよね。私の歌詞はまだまだ未熟だから、もっと先生から学ばなくちゃ。……まぁ、頼んでも無理な場合は無理だろうけど。あの人は気分屋だし聞くだけ聞いてみようかなって」

「プロ作詞家の……しかもＳ・ｉＥのチェックが入るなんて……すごい贅沢だね……！」

……この反応を見てる限り、どうやら尚子は詩文がＳ・ｉＥだっていうことをまだ知らないみたい。親しげに話してたし、もう知ってるのかと思ったけど。

「……そうだゆっぴ、Ｓ・ｉＥでちょっと思い出したんだけど、Ｓ・ｉＥ何かあったの？」

「え？　何かって？」

「いや、Ｓ・ｉＥのＳＮＳのアカウント消えてるから。どうしたのかなーって」

「……え？」

尚子の口から出た、何気ない話題のようなひと言。Ｓ・ｉＥ……詩文のアカウントが、消えてる？

「いやいや、何かの間違いでしょ？　なんで消えるのよ？」

「昨日の夜からちょっと話題になってるよ？　私もフォローしてたんだけどな～。ほらこれ」

「……ちょっと見して」

尚子のスマホをせわしなく手に取ると、私はその画面の文字を何度も確認する。

――〝このアカウントは存在しないか、すでに本サービスを退会しております〟――

「……ホントね。間違いなく詩……S・i・E先生のアカウントみたい」

「ゆっぴ何か聞いてないの？」

「……いや。聞いてないわ」

――昼休み、気になった私は詩文にメールをする。けど、返ってきたのは〝宛先不明〟を意味するシステムメール。……もしかしてと思って電話もかけてみたけど、これもダメだった。

「どういうこと……？」

……なんとなく、嫌な予感がする。あまりにも漠然としてて自分でもよくわからないんだけど、ざわつく嫌な予感。なぜか、詩文がいなくなってしまうような、そんな胸騒ぎ。

「まぁ、あれよね、スマホがおかしくなったとか、なんかそういう……」

ポツリと呟いてみながら、そうじゃないと思う。きっとこれはそういうのじゃない。なんだろう……この感じ……。

CamScannerでスキャン

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

放課後になってからすぐに私は、学校の屋上やバードランド、3年2組の教室とか、詩文がいそうな場所を歩き回ってみた。別になんでもないことかもしれない。だったらだったで、それを確認しておきたい。

あいつがいないっていうことに、なんでこんなに胸が騒ぐんだろう。本当にまったく手がかりがない。連絡も取れない。……といいつつ、考えてみればそれだけのことだし、あいつってそういうやつだとも思う。……でも、気になって仕方がない。

予感の根拠は、たぶん昨日の夜のことなんだと思う。私の決意表明に詩文が笑いながら返した言葉──〝お前となんか出会わなきゃよかった〟というひと言。詩文が何を思ってあ言ったのかは、正直わからない。その言葉は一体どういう意味だったのかもわからないけど、私はなぜか、詩文がどこかに行ってしまうような、そんな遠さを感じていた。

……思い切って私は職員室を訪ね、3年2組の詩文の担任の先生に会いに行った。

CamScannerでスキャン

――そこで私は、その予感が的中していたことを知る。
聞いた話はざっとこうだった。詩文はもう、必要なだけの出席日数をクリアしていて卒業式まで学校には来ないということ。詩文は卒業後、長期間にわたって海外に行くということ。……今日からはその準備も兼ねて、自動車免許の取得のためにどこかの合宿教習に行っているということ。
「……ありがとうございます。失礼しました」
職員室を出た私は、廊下の前で立ち尽くす。運動部の活発な声が遠く聞こえる、人影のない廊下。その空間で、消え入るような声で私は呟く。
「……なんにも聞いてない。何それ……」
高2の私にも、そろそろ進路の話っていうのは真面目に考えなさいけない話になってきている。高3の冬にさしかかっている詩文からすればそれはもっと現実的な話で……というか今まさに一番大きな問題で間違いない。考えてみれば、それはそうに違いなかった。……けど。
「……そんなことひと言も言ってなかったじゃない。なによ海外って」
たしかに私は、進路のこととか将来のことについて詩文に聞いたことはなかった。勝手な想像だったけど、詩文はこれからもブツブツ文句を言いながら学校に通い続けて、普通に卒

業して、たぶん作詞家としてそのままプロの活動をしていく大人になるんだと思ってた。
……海外……ね。詩文らしいといえば詩文らしい。うん。すごくあいつらしいわ。

……けど、なんで言ってくれなかったの？　言ってくれなかったのはじゃあいいわよ。なんで？　どうして連絡が取れないの？　なんで携帯が繋がらないの？　なんでSNSのアカウントまで消したの？　……あんたに連絡する方法が、ないじゃない。どこかに行くなら行くって、そう言ってくれればいいじゃない。は……？　海外……？　海外ってなによ。突拍子なさすぎて意味わかんないわ。
何が起こっているのかを、私はひとつずつ整頓していく。でも、かなり早い段階で私は"この意味"がわかってしまう。……できれば認めたくないこと。早い話が、つまりこれは、要するに……。
「……要するに、相手にされてないのね」
詩文にとって、今生きているこの日常はすべてくだらない茶番で、学校も、SNSも、スマホも、必要ないものだった。……私のことも含めて、もともと眼中になかった。それは私も知ってた。そんなことは最初からわかってたことで、どんなに虚勢を張っても、カッコつけて決意表明なんかしても、私じゃ詩文の相手にならないことくらい知っていた。
……ほんの少しだけど私は、詩文の心に近づけた気がしていた。たぶんそれは勘違いじゃ

なかったと、思いたい。私はつまらないやつだけど、それでも精一杯ついていってたつもりだった。でも……こうやって何の挨拶もなく突然いなくなれるくらい、あんたの視界には、私の姿なんて映りもしてなかったのね。

——それからも私は、詩文に連絡する方法を探した。鎌倉の実家に行ってみようかと思ったこともあった。けど、行ってどうするのかも結局はわからない。もし詩文が運転免許の合宿から帰ってきてたとしても、会って何を話せばいいの？　私にとって詩文っていう人間は凄まじい影響力を持つ存在だったけど、それは私だけの話で、詩文からしてみれば私はよくいる人間のひとりでしかなかった。そういうことだったのねって、わざわざ詩文に確認したところで、そんなことに一体何の意味があるんだろう。

＊～＊～＊～＊～＊～＊

「期末テストの範囲についてだが——」

12月上旬。2学期も終わりに向かいつつある冬の日常。詩文がいなくなってからの毎日は、驚くほど普通だった。というか、これが私にとってのもともとの日常だったことを思い出す。

CamScannerでスキャン

いつも通り授業を受けて、テスト勉強をして、球技大会があったりして、家に帰ったら流行りの番組を見たり、ネットを見たり。

日数だけで言えば詩文と過ごした時間は、たった1ヵ月くらいなものだった。まるで1年にも感じるような壮絶な1ヵ月。あいつと会ってまだ1ヵ月しか経ってなかったなんて、時間の感覚がおかしくなりそう。私はぼんやりと、あいつとのこの関わりがこれから先もずっと続いていくのかと思った。……けど、私が予定していたこれからの日常は、まるでシャットダウンするように突然終わりを迎えた。

「……重く考えすぎね」

一方的な詩文の連絡遮断に、私はまた少し傷ついている。けど、よくよく考えればあいつってそういうやつだわ。そのひとつひとつにいちいち心を乱されるのも、バカげた話。あいつがいない日常になったからって、私の人生にそんな大きな変化があるのもおかしな話。だってそうでしょ？

……違う。今の言葉は嘘ね。私は、つらいんだ。詩文に相手にされていないことがキツいんだと思う。自分が取るに足らないありふれたつまらない人間だっていうことを、突き

つけられてるみたいで、それがみじめで、見たくなくて、私は……詩文に見放されても平気とか、言ってみてるだけだわ。

「……ふふ……早速役に立ったわよあんたのレッスン。……本当、暗い迷路にひとりでいるみたい」

教室の隅、先生の話をまるで聞いていない私は、誰にも聞こえないくらい小さな声でささやいた。……奇しくもあいつの最後のレッスンは、役に立った。私は、自分の心が誤魔化しかけた何かを初めて自分で看破することに成功したのかもしれない。

なるほど、と思った。きっとこれの繰り返しなのね。あいつのことだし、どうせ今回のことにも何か意味があるんでしょ？　だとしたら、私は私でもっと強くならなきゃいけない。あいつが何を考えてるのかなんてそんなのわからないけど、でも、確かなのは、私が今自分で自分の誤魔化しを暴けたということ。これを繰り返した先に、きっとあいつはいるんだと思う。そういうことでしょ詩文。

………なんで何も言わずに消えるのよ、バカ。

＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊〜＊

CamScannerでスキャン

「ユッピース、どうしたの？　なんか最近元気なくない？」

「ユッピースは絶好調よ尚子。どうして？」

「そうかなぁ。なんか、モヤモヤしてるようなオーラを感じるんだけど」

……まったく、なんて勘の良さかしら。できるだけ平然と振舞ってたのに、それでも見破ってくるのね。

私はもう、詩文の件については吹っ切れていた。まぁ、あれから2週間くらい経つしね。いつまでもグズグズ言ってられないわ。

「そういやゆっぴ、次の曲のことなんだけどさ♪」

あれから私は、尚子からのオファーと私自身の申し出で、ざ☆ぐっどたいみんぐの新しい曲の歌詞を手がけることになった。準メンバーっていうか、尚子的にはメンバーくらいな気持ちでいてくれるらしくて、こうやって昼休みとかに曲の相談をしたりすることが日常になり始めている。

詩文はもういないけど、それでも詩文が教えてくれた作詞に関するあらゆるテクニックはすべて有効だった。あれから私は、詩文から聞いたことを忘れないうちにココロノートの後ろの方のページに改めて作詞法のメモとしてまとめたりもした。それを何度も読み返して、私は歌詞を書いている。実際、これらを気をつけたら歌詞は良い感じになったし、あとは自

分なりの修行を積んで行くだけなんだと思う。そう考えると、これ以上詩文が私に何かを教える必要もたしかに、もうないのかもしれないとも思った。

「——と、そうだそうだ、ゆっぴ、良いものができたんだよ♪」

「いいもの？」

尚子は満面の笑みで、スクールバッグを机の上にドンと置くと、中からあるものを取り出す。

「ジャーン！　我ら『ざ☆ぐっどたいみんぐ』が自信をもってお送りするファーストミニアルバム！　その名も『青春サンダーゴロゴロ』！　ピカッときてバーンってなってワーーッ！って感じの一枚だぁ——っ♪」

「お、おお……そのアルバム名はなんていうか……な……尚子っぽくて良いわね」

「えへへ、これすっごい悩んだんだぁ♪」

ま……まぁ、尚子が気に入ってるならそれでいいわね。

「……へぇ。かっこいいじゃない。ジャケットのデザインとかもちゃんとしてるし、こういうの自分たちでも作れるものなのね……すごい。お店で売ってるやつみたい」

「チョーット奮発したけどね！　メンバーでお金出しあって作ったんだ♪」

「へぇ。素敵ねそういうの」

CamScannerでスキャン

「はい、これゆっぴの分！」
「え、もらっていいの？」
「もちろんだよ。まぁみんなにも配るんだけどね♪　最後の曲、ゆっぴの初作詞曲だよ♪」
「……ほんとだ」
そこには、私が初めて書いたまともな歌詞のあの曲が入っていた。……そういえば結局お披露目を聴けなかった、あの曲。
「文化祭のライブ盤だけどね。いやーあの文化祭の盛り上がりはゆっぴにも見せてあげたかったなぁー！　すごかったんだよー？」
「それは、本当に惜しいことをしたわ」
「そうだ、そういえばあの曲の歌詞、ゆっぴが書いたってみんなに言ってなかった！　今からこのCDみんなに配るんだけど、みんなにもゆっぴの歌詞もっかい見てもらおうよ！」
「ええ。…………え!?」
「そうと決まれば、おーいみんなー♪」
「ちょ……スト――ップ！　ストップストップ!!　尚子待って！」
「え？　何ゆっぴ？」
「い、いや、あの……な、なんていうか……それは……言わなくてもよくない？」
「えー？　だって、みんな知らないんだよ？　ゆっぴの歌詞だってちゃんとわかってもらっ

て聴いてほしいなぁ」

「いやいやいや、だから、それを待ってって言ってるの」

「なんで？」

「いや、なんでって……」

あまりにも自然な流れの不意打ちにビックリだわ。私の歌詞だってみんなに言う？　え、なんでそんなことするの？　いや、まぁたしかに書いたのは私なんだけど、それ、え??

「あー、さてはゆっぴ、みんなに歌詞読まれるの恥ずかしいの??」

「……は、恥ずかし……恥ずかしくなんかないわよ？　……あの、でも……それは……」

……その歌詞は私がまだ何もわかってない頃に書いたやつだし……。

「あはは。大丈夫だってゆっぴ！　だってすっごく良い歌詞だもん！」

「ああ……いや、そういうことじゃなくて……」

歌詞を書くということ自体について、詩文のレッスンの中で〝恥ずかしい〟っていう気持ちについてを話したことはなかった。詩文は、そんなことはもう低レベルすぎて相手にもしてなかったっていうか……いや、違う。一度だけ、恥ずかしいっていう気持ちのことを話したことがあったっけ。

あれはそう、ココロノートのときだ。私があのノートを捨てそうになったときの話。創作が恥ずかしいのは、自分らしいからだって、詩文は言ったけど、でも、自分らしいものを見

られるのはやっぱり恥ずかしい。自分が納得いってないものならなおさら。それがどんなに正しいことだったとしても、恥ずかしいものは恥ずかしい。

「あの……尚子。正直に白状するけど、私その……みんなに歌詞読まれるの……恥ずかしい……かも」

尚子は、あ、ホントにそうなんだ、とでも言いたげな感じの顔で私の赤い顔を覗き込む。やめなさい。見るのやめなさい尚子！　これはなんか……仕方ないのよ。なんでかわかんないけど、恥ずかしいものは恥ずかしいの……！

「あははは！　恥なんてかき捨てだよゆっぴ！　精一杯仕上げたものなら『どんなもんだー！』って感じで、あとは野となれ山となれ、だよ！　恥をかく勇気を持ってる人が、一番カッコイイんだから！」

「いや、言ってることの意味はわかるし、良いこと言うなぁ～とも思うけど……でも、そう簡単に割り切れるもんじゃないでしょそれ……？」

「恥をかくって楽しいよ？　踊る阿呆に見る阿呆、同じアホなら踊らにゃそんそんだよゆっぴ！」

「ちょ、ちょ、ストップ。ストップよ尚子。そのハイテンションで私を巻き込まないで。あのね尚子？　いい？　よく聞くのよ？　恥をかくっていうのは……とっっっても、恥ずかしいことなのよ？」

CamScannerでスキャン

「何を当たり前のことを言っているんだいゆっぴ??」

キョトンと、アホの子の顔をする尚子。これは手強いわ。

「……そうなんだけど、そうなんだけどね？　たとえば……ん〜もう！　どう言えば伝わるのよこれ……」

「――恥をかかないようにカッコつけて周りを見渡す生き方の方が、よっぽど恥ずかしいと私は思うけどな」

「…………………」

少しだけ真剣な声色が混ざっている尚子の言葉は、シンプルで――真実だった。

「……あ、あはは。いや、ごめん、なんでもないや。うん、そうだね。ゆっぴの言う通りかも。誰でも向き不向きってある――」

「いいえ尚子、あんたが正しいわ。ごめん。私が間違ってた」

「え、ゆっぴ……？」

……これじゃまるで、私はあの『酢豆腐』のイヤミな若旦那じゃない。恥をかかないように周りを見渡して生きる……そのカッコ悪さは……ああ、なんてこと。私じゃないそれ。

……最悪。あの若旦那、私だったのね。

「……どおりであの話、笑えたわけだわ」

CamScannerでスキャン

「あの話……」

「ううん、こっちの話」

「え、えーっと……ごめんねゆっぴ。無理させてる感じだったらやっぱりみんなには……」

「――みんなに、私から言わせてよ尚子。あの文化祭のときの曲、私が歌詞書いたのって、私がみんなに言いたい」

「……うん！」

うん。これでいい。精一杯やった私の歌詞は、もしかしたら笑われるかもしれない。でも、それでもいい。精一杯やったんだから。胸を張って堂々と、自分の作ったものを誇る勇気を、私は持ちたい。……もしかしたら、誰かに悪口を言われるかもしれないし、下手とかつまんないとか……キレイゴトだとか、言われるかもしれないけど……それはかなり……ものすごくキツいけど、でもそれでもいい。あの歌詞に込めたキレイゴトは、書いたときの気持ちとは少し違ったとしても、私がまっすぐ言うと決めたものと同じでもある。その覚悟があるかないか。私は、自分の作ったものに胸を張れる作詞家でありたい。

あいつからしてみればきっと、こんな決意は低レベルすぎて話にならないことだと思う。あいつが自分の歌詞を恥ずかしいとか、モジモジグズグズしてる様子なんて想像もつかないもの。……そんな、取るに足らないようなことにすらいちいちこんなに勇気が必要な私は、

本当に未熟だと思う。けど、それも含めて私だ。一個ずつ、一歩ずつでも勇気を出していくって、そう決めたんだから。——これは、その第一歩。
「これ、よかったら聴いてもらえるかしら。尚子のバンドのアルバムなんだけど、1曲だけ私が作詞してるの」

尚子と一緒に、クラスメイトに配るCD。薄い反応の人もいれば、喜んでくれる人もいる。尚子の顔や声色は笑顔だったけど、よく見るとその目は、クラスメイトの反応の一挙手一投足にものすごく注目していた。
さっきあんなにおちゃらけてた尚子だって、本当は恐いんだ。自分の作ったものがどう思われるか。それでも、これが精一杯だって思うから、そこに飛び込んでいる。そういう覚悟があるから、尚子はこんなに楽しそうに笑うのかもしれない。
「……ねぇ尚子」
「何？」
「次の曲、めっちゃくちゃ良い曲にしたいわね」
「うん！　めちゃめちゃめちゃくちゃ良い曲にしちゃおう！」

＊～＊～＊～＊～＊～＊

CamScannerでスキャン

こんな風に、私の日常は過ぎていく。ゆっくりでも、ダメな自分と向き合いながら。暗闇の中に隠れた臆病な自分を見つけては、その手を掴んで、ひとりずつ抱きしめていきながら。

クリスマスが過ぎ、お正月を迎え、3学期が始まり、雪の季節も終わり、いよいよ春の芽が顔を出し始める頃。

詩文がいなくなって、3ヵ月半が過ぎた3月中旬。

3年生を送る日——卒業式がやって来た。

CamScannerでスキャン

作詞に役立つ参考文献

ここでは、アタシが個人的に参考になった本を書いておく。興味が向いたのがあったら暇つぶしに読んでみるといいぞ。

芸術に関する本	
岡本太郎 著 『原色の呪文』 (講談社)	芸術というものについての入門書であり、ある種の真髄が書かれている本。読者の理解度によって納得のいくことが増えていくので、何度も読み直して欲しい名著だ。まぁ、序文だけでも圧巻だから特にオススメだぞ。
詐欺に関する本	
坂口孝則 著 『営業と詐欺のあいだ』 (幻冬舎)	詐欺のテクニックと基本的な概念が書いてある本。一箇所に問題を抱えている人を集める方法なんかは本当、読んでいてゾッとする凄まじいものがあった。詐欺ってのはすごいね。こりゃ滅ばないわけだ。
キャッチコピーに関する本	
川上徹也 著 『1行バカ売れ』 (KADOKAWA)	「ただ頑張って作っただけの醤油」を100万本売ったり、「台風でほぼ収穫のなかった年の傷だらけのリンゴ」を1個3000円で売って完売させた方法、といった、まるでトリックのような『キャッチコピーの世界』が書いてある本。「ステーキを売るな、しずるを売れ」という言葉は作詞に応用できることの多い名言だ。
言語学に関する本	
金田一春彦 著 『日本語』 (岩波書店)	言語学の大家・金田一家の中でも特に日本語のアクセントを研究していた金田一春彦先生の名著。特に『発音から見た日本語』の章は、諸外国語との比較や日本語イントネーションの特徴についてを非常に物理的に分析していて、明らかに作詞において重要な情報が多分に含まれている。
宗教に関する本	
中村圭志 著 『教養としての宗教入門』 (中央公論新社)	どの宗教の立場からでもなくそれぞれの宗教の傾向や、それに付随する様々なことに触れている本。読みやすく、それでいて大事なことにはしっかり触れている無駄のない一冊。
落語に関する本	
古今亭志ん朝 著/京須偕充 編 『志ん朝の落語(全6巻)』 (筑摩書房)	落語は身振り手振りなんかも含めてのエンターテインメントだから寄席やビデオを見た方がいいが、本で読むならこれだな。アタシが個人的に好きな、粋でいて色気と奥行きの深い噺家、古今亭志ん朝の落語をそのままの口語で本にまとめたシリーズだ。せっかくならこの本を音読して実際に演じてみるのもなかなかオツなもんだぞ。

CamScannerでスキャン

最終話

相対価値と絶対価値の話

「おはよう尚子」
「あ、おはゆっぴ♪」
その日の朝はいつもとは少し様子が違う。桜の木に少し桃色の花びらが見え始めた3月。
校門には卒業式の大きな看板が出ていた。その側を、学生と保護者がぞろぞろと歩いていく。
特に部活をやってる人からすればこの日は慌ただしいようで、2年生や1年生は3年の先輩に向けたなにかサプライズを用意したりで結構忙しいらしい。尚子も、卒業式が終わったら部室で改めて、卒業生を送る部室ライブっていうのがあるんだとか。
「ついに私らが最高学年になっちゃうというわけだねーゆっぴ」
「そうね。……まぁ、私は部活やってないから、世代交代とかあんまりそういうの実感ないんだけど」
「ゆっぴも軽音部入る？　うひひ、今から入ればいきなり先輩スタートだよ♪」
「……一瞬いいかなと思ったけど、全然ギター弾けない3年生なんてむしろキツいでしょ」
「あ――。あ――。それは若干あるかもね！」
「うふふ、でも、部活やってる人には卒業式って特にイベント性高いわね」
「ん？　ゆっぴもイベント性高いでしょ？」

「そうかしら？」

「伊佐坂先輩が卒業するんだから、普通の日ではないでしょ？」

「……まぁ、うん。っていうか、え？　なんでそう思うの？」

「言わなくてもわかるよ。仲良いんだろうなーって。バイクに乗せられてどっか行くゆっぴ、すっごい楽しそうだったもん」

なんでも直感で見抜くのは、やっぱりさすが尚子だった。１年生のときの卒業式は別になんてことない日だったけど、今日は違う。今日は、あいつが卒業する日。３ヵ月半ぶりに、あいつに会う日だった。胸ポケットにはあいつがくれたあの鉛筆を入れたりして、今朝はやたらと朝早く目が覚めてしまったり。正直、めちゃくちゃ意識していた。

「……そうだ、そういえば尚子あの日、詩文先輩からなんか言われたのよね？　言おうとしたら口止めされてたけど」

「あはは、あー、それはー……内緒にしとくよ」

「え、言ってよ」

「ダメダメー！　だって『言ったらタダじゃおかねぇからな』って言ってたもん。私まだ死にたくないから、これは墓までもっていくんだ♪」

「大丈夫大丈夫、あいつあれで結構いいやつなんだから」

「知ってるよ。優しい人だよね、伊佐坂先輩」

「……うん」

詩文はあの朝、尚子になんて言ったんだろう。でも、尚子の顔を見れば、それはなんとなくわかる。あいつと私は住む世界が違うけど、それでも私のことを少しくらいは気にかけてくれてたんだって思う。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

朝のホームルームを終えた2年2組の生徒たちは、それぞれに先輩の晴れ舞台を祝福するために体育館に集まっていく。いつもの体育館に所狭しと敷き詰められた式典並びのパイプ椅子。2年2組の生徒が全員集まったことを点呼で確認した私は、それを担任に伝えにいく。その時、いつか詩文のことを教えてくれた詩文の担任の先生に出会った私は、会釈をした。

「その節はありがとうございました」

「ああ、あなたたしか伊佐坂さんのこと聞いてきた子ね」

詩文の担任なんて、さぞ大変だっただろうなと思う。シャキッとした姿勢の穏やかな学年主任の先生は、ゆっくりとした声でこんなことを言った。

「あれから伊佐坂さんには会えたの？」

CamScannerでスキャン

「いえ、でも大丈夫です。先輩には今日いろいろお話しするので」
「あら、伊佐坂さん来ないわよ？」
「え……？」
一瞬、時間が止まったような気がした。詩文、来ないの？　卒業式に？
「卒業式には来るって、言ってませんでしたか……？」
「ああ、ごめんなさいね。あれからまた連絡があって、卒業式も来ないことになったの」
「……そうなんですか」
「たしか今日の便だったと思うけど、もう出た頃じゃないかしら」
「……は……？　え？　ちょ……ちょっと待ってください、それ……ほんとですか？」
「えーっと……そうね、時間まではわからないけど――」
「どこの空港ですか!?　何時の便なんですか!?」
「ええ……？　そんなこと聞いて、どうするの？」
「どうするって……その……」
「ほら、もう時間よ。在校生は着席して、そろそろ式が始まるわ」
「……はい」

詩文は来ない？　何よそれ。なんでそんなことになるのよ。
——私の混乱を無視するように、卒業式は厳かに始まる。

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊

『卒業生、入場』
マイクから発される、校長先生の声。体育館に並べられたパイプ椅子には、在校生全員と、卒業生の父兄が並んで座っている。体育館をぐるっと一周するように立っているのは、在校生の担任教師や、教員関係者の大人たち。
吹奏楽部の演奏する、卒業式ではお馴染みの曲《威風堂々》が流れ、体育館には厳かで優美な音色が響く。その旋律は、ただそれだけでちょっと感動してしまうような、特別な意味のあるものだった。
うやうやしく行進し、体育館に入場する卒業生たち。その横顔はどこか凛々しく、大人になっていく青年の貫禄を感じさせた。
——その列の中をどれだけ注意深く探しても、詩文の姿は見当たらなかった。

CamScannerでスキャン

『一同、礼』

卒業生が前方のパイプ椅子を埋め尽くし、すべての席が埋まりきった体育館。校長先生は少しの静寂（せいじゃく）のあと、開式の言葉を言う。それが終わると、校歌斉唱。そして、卒業生ひとりひとりが名前を呼ばれ壇上に歩む『卒業証書授与』が始まった。

『3年1組、青山裕二殿――』

再び吹奏楽部は、《威風堂々（いふうどうどう）》をさっきよりは小さな音で演奏する。出席番号順に呼ばれる卒業生たち。その生徒の中には運動部のキャプテンだった人とかもいて、そういう時には後輩生徒たちが一斉に先輩の名前を叫んだりすることもあった。……そんな、卒業式らしい卒業式の様子。

『3年2組、安立美代子殿』

3年2組の番になる。そのクラスは――。

『伊佐坂詩文殿』

校長先生は、詩文の名前だけ呼んでスッと卒業証書を壇上の中にしまう。欠席する生徒は、そういう対応になるらしい。……そして、次の生徒の名前を呼んだ。

（ちょ…ゆっぴ？　どうしたの？）

CamScannerでスキャン

「え……」
　私は、気づいたら立っていた。その様子を見た後ろの列の尚子が、小さく私に喋りかける。
「あ、えっと……」
　在校生たちの視線と、先生たちの視線が突き刺さる。なぜか急に立った2年生の私は、そのまま、それがさも当たり前かのようにスッと歩き、体育館の出口に向かう。
（ちょっと、江戸川さん、どうしたの？）
　出口のあたりにいた担任の先生が、私の肩を掴んで声をかけてきた。
「すいません、トイレをどうしても我慢できなくて」
「……もう少し我慢できなかったの？」
「はい。すいません」
「……もういいわ。早く行って、できるだけ目立たないように席に戻りなさい」
「はい」
　体育館を出た私は、なんだか不思議な気分だった。体育館の中で行われている、学校行事の中でももっとも大事な式。その内側から外に出た私は、ある感覚にとらわれた。
　それはきっと、以前感じたことのあるものだった。そう……これは……。

CamScannerでスキャン

体育館と校舎をつなぐ通路を歩き、そして校舎内のトイレの前を横切る。その瞬間、私の中の何かが千切れる音がした。

「……っ……！」

こんなことをしてる場合じゃない。行かなきゃ。今すぐに。

そして私は下駄箱まで走る。誰もいない昇降口を突っ切って、校門を越えて――学校の外へと飛び出していった。

「……こんな別れ方、絶対許さないんだから……！　待ちなさいよ……詩文！」

学校から駅まで、止まらず走り続ける。息が上がっても関係ない。1秒でも早く行かないと、あいつはもう飛行機でどこか私の知らないところへ、行ってしまう。

駅の階段を駆け上がる。その途中で足を踏み外して膝を打った。けど、それもどうでもいい。改札をくぐって、とにかく駅のホームに行く。そして……。

「……っ……羽田空港と成田空港、どっちなのよ……っ！」

私はスマホで検索する。関東圏でリーチできる空港は羽田と成田。羽田空港はここからそれほど遠くない。でも成田空港も行けない距離じゃない。……けど、そもそもこのふたつってどう違うの？　っていうか海外って、どこ？　詩文はどの国に行くの？　それによってもルートは違ってくるんじゃない？　何時の便なの？

「……なんでなんにもわかんないのよぉお！」
イラついて叫ぶ私の声に、駅のホームにいる人たちが驚く。一瞬しまったと思いながら、でも、それだってどうでもいい。羽田か成田、たぶんこのふたつのどちらかだ。だとすれば……。
「近い方に行くしかない。羽田空港……！」
学校から羽田空港までは約1時間。……遠くはない！　まずは羽田空港ね。そこで探して見つからなかったら、そこから急いで成田空港に移動して……。
「………そうだ」
……聞けばいいんだ。バードランドにいる詩文の叔母さんなら、きっと詩文の出発時刻だって知ってる！　空港だってきっとわかる。そうだ……その手があった！　なんで気づかなかったのかしら！
「もしもし……！」
バードランドの店長さん、詩文の叔母さんは血相変えた私の声に驚いた様子だった。けど、これはアタリだった。詩文が発つのは羽田空港からで間違いないらしい。……でも。
『そうね、詩文ちゃんが出発するのは、たしか11時の便だったと思うわ』
「え……」
私は駅の時計に目をやる。時刻は9時45分。羽田空港までかかる時間を合わせたら、間に

CamScannerでスキャン

合うかどうか。……いや！

「具体的に教えてください！」

『……ちょっと待ってね……ああ。これね。ちょうど11時羽田発、ロサンゼルス行き』

「そうですか……ロサンゼルス……」

ロサンゼルスってアメリカよね。アメリカのどこよ。

「……ありがとうございます」

私は電話を切る。そして、時計を睨みつけた。本当にギリギリだけど、間に合うかもしれない。羽田空港に着くのは10時45分。空港に着いて10分以内に詩文を探し出せばいい。

……でも、そんなこと可能なの？　新宿駅や東京駅でも、連絡の取れないひとりの人間を10分以内に見つけ出すなんて、ほとんど不可能だわ。池袋や渋谷でもそんなの無理かもしれない。羽田空港ってどれくらい大きいの……？　……なによこの空港マップ？　第1ターミナル？　第2ターミナル？　チェックインカウンターはAからL……？　何個あるのよバカにしてんじゃないわよ！　そうだ、だったら空港のアナウンスで呼び出しとか……。

「——っ……」

私は息が詰まりそうな気持ちで、走る快速電車のシートに座りつつ、ギュッと膝を抱く。

こんなの無理でしょ。もし詩文がどこにいるか最初からわかってても、空港について10分で

その持ち主を探し出すなんて難しい。きっと、ほとんど状況は決定してるような気がしたな

「……そんなことどうでもいいわ。とにかく行くのよ」

もはや、そこに詩文がいるかどうかは関係ない。行かなきゃ。もし会えなかったとしても、私が納得するために行かなきゃいけない。

私を乗せて電車は走る。その景色の向こうには遠く、飛行機が飛んでいる様子が見え始めた。これより速い移動手段はないってわかってるけど、電車の遅さに苛立つ。5分があっという間に過ぎる。……少しずつ、飛行機が大きくなってくる。そして目に入る『東京国際空港』の文字。

～～*～*～*～*～*

10時45分に羽田空港に到着した私は、途方に暮れる。予想はしてたけど、空港の大きさは私の予想をはるかに上回っていた。

「…………」

考えても仕方ない。とにかく走るしかない。あたりを見渡しながら、国際線の出発ロビーを探す。きらびやかで大人っぽいターミナルには、たぶん旅行者向けのブランド店や飲食店が並んでいる。きっと別の時に来たら楽しい場所なんだろうなとか、少し思いながら、光の

反射する綺麗なフロアの中を走って、何度もあたりを見渡す。
大きなアルファベットの看板と、発着を示すターミナルの電子掲示板。行き交う人並み。大きな旅行カバンを転がす外国人や、日本人。視界を遮るその何百っていう人の群れ。いくつもある待合ロビーみたいな場所を探しては走り、また移動して、移動して、あいつの姿を探す。
「ここも違う……！」
3ヵ所目を見回した。私は、その視界に飛び込んでくるものに、力なく呟いた。
「……そう。もうそんな時間」
——時計の針は、11時2分。詩文の便はもう、2分前に離陸している時間だった。
「…………」
体中の力が抜ける。そして私は、目についた待合ベンチに座った。
「……はぁ」
雑踏が目の前を、いくつも横切っていく。その音は耳にやかましく、でも、聞いているとだんだん音がなくなっていくような感覚もあった。色を薄く感じる。まるで、この空港には私しかいないんじゃないかと思うような、そんな気分だった。
「なんで勝手に行っちゃうのよ……バカ」

「――そのキュートな声はもしかして、アタシのマブダチの江戸川悠ちゃんじゃねぇか？」

「え……？」

……聞き間違えかと思った。けど、この声だけは聞き間違えるわけがない。顔を上げた私の目の前には、少ない荷物を肩にぶら下げた身軽な旅支度の――詩文がいた。

「……ええ、そうよ。このキュートな声は、あんたのマブダチの江戸川悠ちゃんよ」

なんて、いつか交わしたのと同じ言葉を私も言い返す。まともに声が出てるかどうかは、自分じゃわからなかった。

ラフなシャツに、きっとSサイズのジャケット。スリムなストレッチジーンズの足元には、やたらと底が厚くていかついブーツ。制服を脱ぎ捨てて自由になった、きっと本来の自分らしい姿の詩文が、そこにいた。

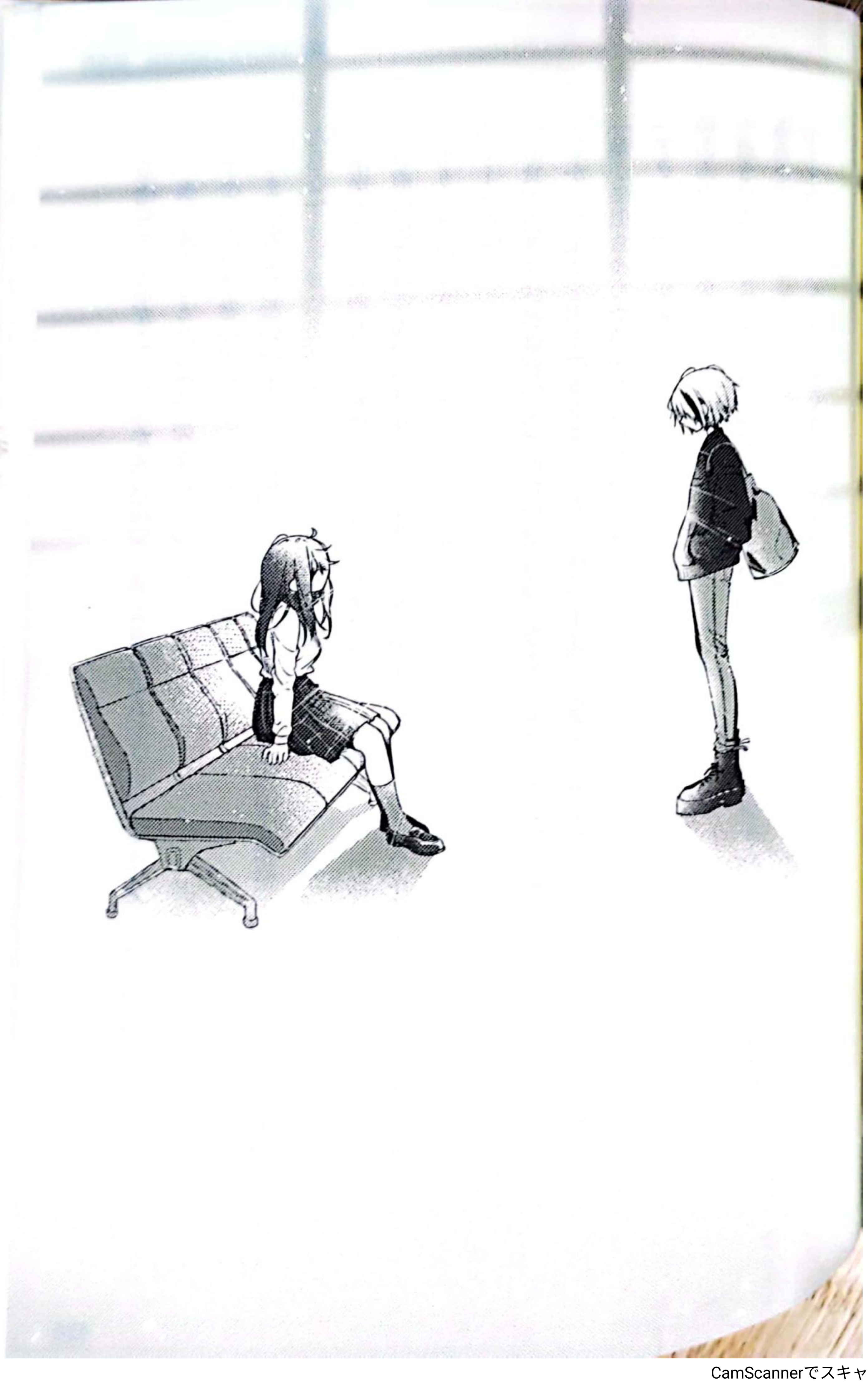
「で、こんなところに何しに来たんだ悠？」

「…………今日は卒業式だから、3年生の先輩を見送りに来たのよ」

「はは。そうか」

何から話せばいいのかわからない。私は、とりあえず思ったことを言う。

「……あんた、さっきの便で出たんじゃないの？」



CamScannerでスキャン

「空港側の事情だよ。なんか人数調整が必要だったらしくてな、急ぎじゃない人はこの次の便に乗り換えてくれって、頼まれたんだ」
「……そんなことって……」
「たまにあるらしいぜ？　それに、アタシにとってもちょうどよかった。待ってるやつもいたしな」
「誰かと待ち合わせしてたの？」
「お前に決まってんだろうが。……まったく、来るのおせぇってんだよ♪　あやうく出発しちまうところだ」
「……そう」
詩文の言葉に、私は言いようのない気持ちになる。でも、会えてよかった。本当に。
「しかし卒業式をボイコットするなんて、悪い生徒だな悠？　センセーに怒られちゃうぜ？」
「誰かに似ちゃったのかもしれないわね」
「アタシのせいかよ」
「あんたのせいよ」
違う。こんなことを言いに来たんじゃない。言いたいことも、聞きたいこともいっぱいあるのよ。
「……海外って、どこに行くのよ。っていうか何しに行くのよ」

CamScannerでスキャン

「とりあえずアメリカだな。目的はいろいろだ。作詞家らしい理由をあえていうなら、『外国語の習得』だな。なーんて、本当はもっと別の目的なのかもしれないぜ？　……アメリカのあとはまたどっか違う場所に行く。それについては決めてねぇ。いろんなもんを確認しに行くんだよ。自分の目でな」

「そう……」

「楽しそーだろ♪」

「……いつ帰ってくるのよ」

「それも決めてねぇな。最終的には日本に戻ってくるかもしれねぇし、そうじゃないかもしれねぇし」

「……ねぇ、なんでSNSのアカウントを削除したのよ」

「もう、いらねぇからな」

「仕事で宣伝とか……なんかそういうのに使うでしょ」

「なくても平気だよ。SNSやってない作詞家なんて腐るほどいるだろ？」

「……あんたに送ったメール、宛先不明で届かなかったわ。……電話も」

「ああ、携帯も解約した。必要ないからな」

「……連絡とかどうするのよ」

「誰からの連絡も受けたくないんだよ。携帯電話なんて、首輪みたいなもんだ」

「……私は！　……何があってもあんたに連絡するわよ。届かなくてもメールし続けるから、必ず同じメールアドレスでまた携帯を持ちなさい」
一瞬キョトンとした詩文は、楽しげに笑う。
「おお、お前がアタシに命令とは、偉くなったもんだな悠！　あはは！　バ――カ！　もたねぇよ！」
あくまで朗らかに、でもたしかに詩文は私を突き放した。
「あともうひとつ……あんたに聞き忘れたことがあって」
「なんだ、まだあるのか。そろそろ時間だ」
「この鉛筆の意味、教えてよ」
私は、胸ポケットにしまっていたあの鉛筆――相対価値の鉛筆を取り出す。
「……はは。お前その鉛筆好きだなぁ。捨てちまえよそんなの。なんの価値もねぇんだから」
「私、わかってないの。この意味。ねぇ、どうしてこれが作詞に関係あるの？」
「……その顔を見る限りどうやらお前、なんでアタシが何も言わずに消えようとしたのか、わかってねぇんだよな？」
「え……」
詩文は、私が一番聞きたかった核心に触れた。

CamScannerでスキャン

「……ええ。わからないの。何回も考えたし、たぶんいろんな的外れなことも考えたけど、あんたがいなくなって3ヵ月ずっと考えたけど……でも結局わからなかったわ」

「その鉛筆が示すものこそが、その答えだ。でも、わからねぇなら教えねぇよ。聞いた答えを書き写すだけのバカじゃねぇだろ、お前はさ」

「……………うん。もうちょっと頑張ってみる」

わからない。私はなんてバカなんだろうと思う。きっとそれは、考えればわかることなんだと思う。でも、そんなこともわからない私は、ただ、自分の出来の悪さが嫌になってうつむいた。その様子を見た詩文は、世話の焼けるやつだとでも言ってるようにため息をひとつついて、こう続けた。

「……アタシがブレちゃいけねぇんだ。たとえひとりになるとしてもな。……それが一体どういうことなのか、お前にもきっといつかわかる日が来る」

「………………」

「お前と遊ぶのは、また今度な。もしいつか、その鉛筆の意味がわかって——わかるだけじゃなくてできるようになったら、きっとアタシたちはお互いの意思とは関係なく、また自然に出会うことになるだろう。そんときは、お前と話せなかったいろんな話がしたいよ」

「……うん」

答えは結局わからない。けど、その言葉の意味だけはわかる。わかるような気がする。それはきっと、私がこれから挑むことになる暗闇の先にあるもので、今の私には理解できないメッセージだった。

私に背を向けた詩文は、視線の先を見上げて言う。

「——見ろ悠。このゲートをくぐったら、アタシの人生が始まる。何が起こるかわからない、誰も助けてくれない、ひょっとしたら死ぬかもしれない、でもそのかわり最高にエキサイティングな、アタシの冒険が始まるんだ。こんなに幸せなことって、ないよな！」

振り返って、屈託のない少年のような笑顔を見せる詩文。その顔は、いつか海で星空を見上げていた詩文の横顔と同じものな気がした。

「ねぇ詩文」

「なんだ」

「卒業おめでとう」

「ああ。ありがとう」

「…………」

「じゃあな。もう行くわ」

「待ちなさいよ。……あんたに言いたいことが、まだあるわ」

「まだあるのかよ。はやく言え。飛行機の時間だ」
言いたいことは山ほどある。聞きたいことだって山ほどある。あるのに、全部の気持ちが胸に詰まって、何を言えばいいのかわからない。その複雑すぎる気持ちを、もしうまく言葉にできたらどんなにいいだろう。あんたに伝えたいことはこんなにいっぱいあるのに……。
「……あん、あんたさ、ケガとか病気とか……気をつけなさいよね」
「ん？　ああ。気をつけるよ」
「…………」
「お～⁉　なんだぁお前、泣いてんのか～？」
「泣いてない！　もう行きなさいよ！　時間ないんでしょ！」
「はは。お前はバカだなぁ」
本当に言いたいことが、どうしても出てこない。今までありがとう詩文。元気でね。写真いっぱい撮ってね。メールがダメなら、手紙書いてよね。私いっぱい歌詞書くから。それもまた読んで、キツい感想聞かせてよね。……私、ずっとあんたのこと忘れないから。だから……。
「じゃ、もう行くわ」
「……」
「…………」

「……あんたなんか……大っ嫌い……」

言いたい言葉の代わりに出てきたのは、こんなどうしようもない言葉と、両目からこぼれる涙だった。そして、滲む目の先に見えていた詩文の足が、視界から消えた。

「……待って！」

ハッと顔を上げると、目の前に詩文はいなかった。

「——詩文……」

「……」

「うわっ!?」

横から突然、力強く肩を組んで私の首を引き寄せる詩文。驚いた私の耳元で詩文は、ひとつだけ呟いた。

「また会おうな、悠」

詩文は腕をほどくと、一度も振り返ることなく歩いていく。私は、その背中が見えなくなるまで、ずっと立ち尽くしていた。

「……なんでも見透かして、やなヤツ」

＊～＊～＊～＊～＊

詩文を乗せた飛行機は、ガラス越しに見える滑走路から飛び出していく。その姿はまるで、生まれて初めて空を飛んだ鳥のように、冒険と、喜びと、希望に満ちていた。

「……さぁ、こうしちゃいられないわ」

グーッと背伸びをした私は、空港のターミナルをあとにする。

初めて歌詞を書いた頃の私には見えていなかったもの。今の私には見えるようになったもの。そして、これから人に見せていきたいもの。この次の一歩が、私を決める。

「良い歌詞書いてやるから、見てなさいよ」

私よりもずっと先を行く友達に向けて、私はそう呟いた。胸いっぱいに吸い込んだ春の風が、新しい季節の訪れを感じさせる。そして私は歩き出す。これから始まる本当の戦いに。

ちょっとだけドキドキしながら。

CamScannerでスキャン

○エピローグ

『Dear My cutie pie. I'm in Concord California ☆ ×××』

詩文が卒業し、3年生になった私。そんなある日に届いた、写真付きの絵葉書。それは、サングラスにホットパンツ姿の、完全にアメリカナイズされた詩文からの手紙だった。本文はさっきの英文しかない。けど、詩文のその生き生きした楽しそうな表情は、それだけで私を懐かしくさせた。……詩文の隣に写っている誰かは、きっと不幸にも詩文に出会ってしまってその旅に巻き込まれた人だろう。フロントガラスが前開きのへんなワゴン車（ポンコツキャラバン号ってサインペンで矢印が書いてある）の天井に乗ってる詩文と、その隣で明らかにグッタリしているお上品そうなそのお姉さん。そのくたびれた顔色からは、すでに詩文に振り回されたあとだということが読み取れた。

「ふふ……あんたって、どこでもそうなのね」

詩文と始めて出会った図書室で、私はその絵葉書を見つめる。今日は、歴史と宗教に関することを調べているところ。知的に見えるようにするためにそういう振る舞いをしていた私

は、奇しくも今は本当にそういうことを学ぶために図書室に通う生徒になっていた。まぁ、それがどうしたのって話なんだけど。

「おおー、図書室ってこんな感じだったのか！　なんか落ち着いた雰囲気でいいね！　あたしここに住もうかな！　おお！　コーヒーまであるじゃん！　あ、有料なのか」

!?

「…………」

そのフレーズに私は、ドキッとする。でもそこにいたのは、もちろん詩文ではなかった。

「いろはー、100円貸してー♪」

（珠ちゃんシーッ！　図書室では静かにしなきゃダメだよ！）

「ん？　そうなの？」

（ほら、みんな静かにしてるでしょ？）

「ああ、言われてみれば」

そこにいたのは、クラスメイトのふたり、山波いろはさんと……変わり者で有名な黒白珠美さんだった。そういえば、黒白さんって現役女子高生作曲家……とかそんな噂を聞いたことがあるけど、どうなのかしら？　いつもひとりでいた印象だけど、山波さんとはいつのま

じゃ一緒に活動するようになってたのね。
「うん！　江戸川さん！」
「へっ？」
「え、何？　山波さん、私に用事なの……？」
「江戸川さん、実は私たち作曲やってるんだけど、今作詞できる人探してるんだ！」
「作詞って……私が？」
「江戸川さんって、佐々木さんのバンドで作詞やってるんだよね？　曲聴いたよ！　すっごく良い歌詞だった！　私ああいうの好きなんだぁ！」
「いや、私はまだまだっていうか……」
　作詞ができる、なんてまだ私は言えない。けど、初めての感想は、ものすごく胸にくるものがあった。
「もしよかったら、私たちと一緒に音楽やらない？　作詞のこと、教えてほしいんだ」
「……じゃあその代わりに山波さん、黒白さん、私に作曲を教えてくれないかしら」
「え？　作曲やりたいの？」
「うん。作曲をわからなきゃ、本当の作詞はできないの。こちらこそよろしくお願いするわ」
「やったぁ！　じゃあ決まりだね！」

CamScannerでスキャン

ここからなのね詩文。そうでしょう？　私はそう思いながら、クスッと微笑んだ。歩けば歩くほど離れていく、放射線状に伸びる私たちの道は、もうここから始まっていた。

おしまい

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

あとがき

前作『作曲少女』が発売したのが２０１６年の６月。それから５ヵ月経ってＷｅｂ連載の番外編『作曲少女Ｑ』を書き始めていた11月くらいの頃に、今回の本『作詞少女』を出版する提案をいただいたように覚えています。

「作曲少女の次は作詞少女！」という提案はまぁ、流れとしてはシリーズ感があって良さそうでしたし、自分のつもりとしても作詞についてはいつか書きたいなと思っていた題材ではあったので、トントンと意欲的に書き始めたものではあったのですが、これは前作（作曲少女）の作詞版、とかそんな単純なことではすまないな……ということにはかなり早い段階で気づきました。それというのも、作詞と作曲は響きになんとなく近親感があるだけで、実はそこで起こる初心者の問題は根本的に違う〝完成させるのが難しい〟作曲と、〝完成させるくらいは容易い〟作詞という点があり、そしてこの部分こそがこの本の一番重大なポイントになるだろうなと察してからは、心の中でゾッとしながら初稿のバリエーションを試し書きしていました。

音楽をやっている人はかなりの割合で「作詞は難しい」と言い、音楽をやっていない人はかなりの割合で「作詞くらいはできそう」と言う。これの正体は何か、作詞とはどういう技術なのか、曖昧に語られがちな部分はなぜ曖昧にしか語られてこなかったのか。そういった作詞にまつわる〝違和感〟の奥の奥に掘り進んでいくと、いくつかとんでもないものにも出くわしてしまいましたが、物語形式のこのシリーズだからこそ肉薄して語ることができることもあるのではないかと思い、しかし書けるのだろうかという心配もありつつ、ひとまず精一杯の内容として書き終えることができた今は胸をなで下ろしております。

CamScannerでスキャン

本書を投げ出さずここまで読んでくださった読者の皆さん、本当にありがとうございました。この本に書いたことがひとつでも作詞入門者の皆さんのお役に立つことがありましたら、嬉しく思います。また、内容に稚拙さを感じられた先輩諸氏におかれましては、未熟者の精一杯の一冊として暖かく見守っていただけたらと存じます。

手短に謝辞をいくつか。もともとの出版予定よりかなり遅れてこの本を出すことになってしまうなど散々迷惑をかける著者にもめげずに付き合ってくださっている編集K氏、今回も本当にありがとうございました。打ち合わせ時のプリントアウト原稿にビッシリと生えている付箋を見るたびに、誠実な仕事ぶりを心強く感じます。ダメな著者を甘やかさないようにしていただきつつ、これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。そしてもちろん、今回も言い尽くせないほど素晴らしいイラストを手がけてくださったまつだひかりさん、忙しい中この原稿を読んでくれた作詞・作曲家の友達、作中楽曲の編曲とギター演奏協力もしてくれた佐々木秀尚さん、本当にありがとう！

そして、この本の制作、出版、販売に関わってくださったお仕事仲間の皆様、改めて本当にありがとうございました。今後とも、よろしくお願いします。

この本が、どこかにいる自分みたいな誰かに読んでもらえていることを祈りつつ。
また、それぞれの道を歩み始めた悠と詩文が、いつか再び出会う日を楽しみにしつつ。

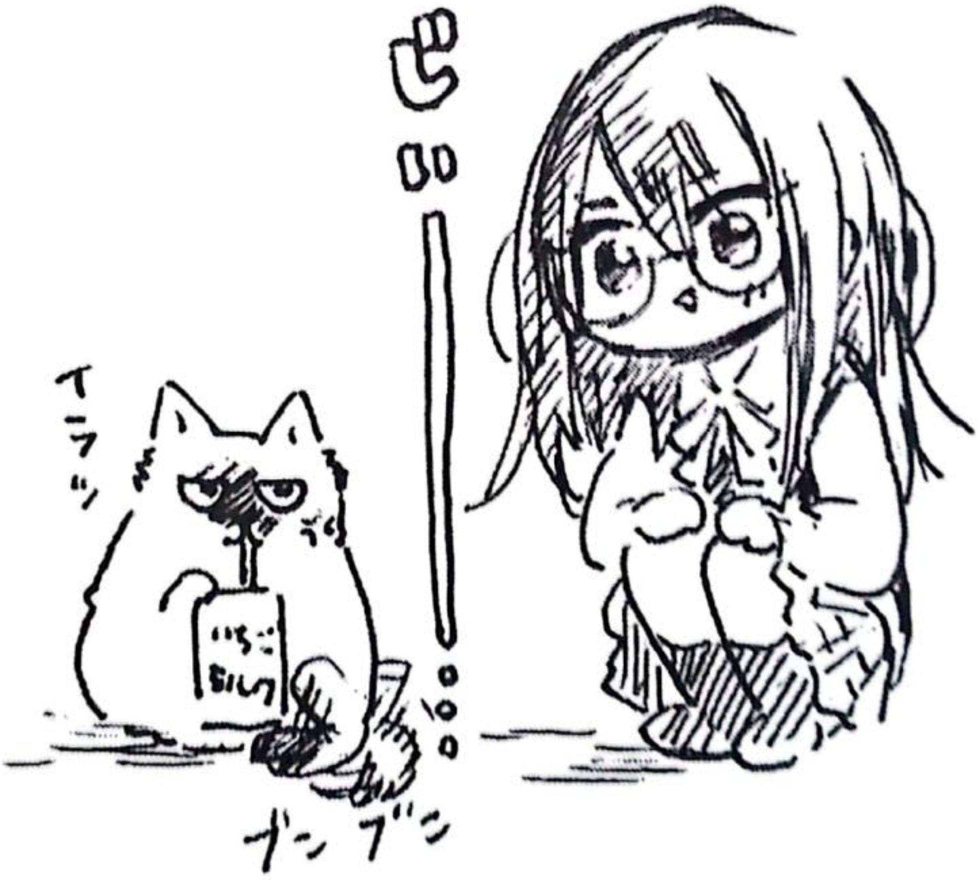
２０１７年10月
仰木日向

CamScannerでスキャン

この本を読んでいる時、そして
詩文と悠を描く時、背筋がピンとなりました。

自分にとってのココロノートも
楽しく大量生産していこうと思います！

『作詞少女』挿絵・マンガ作画担当
まつだひかり



CamScannerでスキャン

著者
仰木日向（おうぎ・ひなた）

音楽制作会社で作曲のノウハウを学び、その後フリーランスとして作曲を始め、本名名義でアニメ楽曲やゲームBGMを多数手がける。その後2014年からは自らの適性を文字に見出し、ペンネームを仰木日向と改め、サンリオ『SHOW BY ROCK!!』や『ガールフレンド（仮）』、『私立グリモワール魔法学園』、その他声優やアニメ作品の作詞を手がけつつ、ライトノベル『スーパーヒロイン学園』シリーズ（ぽにきゃんBOOKS）、『作曲少女～平凡な私が14日間で曲を作れるようになった話～』（ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス）の小説執筆。時おり作曲もしながら、ゲームやアイドルプロジェクトの音楽プロデュースなども行っている。また、DTMの4コマ漫画『できるかなってDTM』を執筆する同人作家でもある。

まんが・イラスト
まつだひかり

漫画家、イラストレーター。YouTubeに投稿している自主制作アニメ『女子高生エフェクターを買いに行く!!』シリーズでは、島村楽器やエフェクターブランドBOSSとのコラボも果たす。また、『月刊コミックフラッパー』（KADOKAWA）で漫画『まことディストーション』、『ベース・マガジン』（リットーミュージック）で4コマ漫画『よんてい』を連載するほか、同社のフリーペーパー『軽音マガジン』では表紙を担当した。著書に『スライディングV 女子高生バンドを始める!!』『まことディストーション①』（ともにKADOKAWA）がある。

作詞少女（さくししょうじょ） 詞をなめてた私が知った8つの技術と勇気の話

2017年12月10日　初版発行

著　者　　仰木日向
まんが・イラスト　　まつだひかり

発行者　　須田直伯

発行所　　株式会社ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス
出版部
〒171-0033
東京都豊島区高田3-19-10
電話　03-6894-0250
インターネット・ホームページ　http://www.ymm.co.jp

デザイン　　上林将司（有限会社チタンヘッズ）
編　集　　片山 淳（株式会社ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス出版部）

印刷・製本　　シナノ印刷株式会社

造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がございましたらお知らせください。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き、禁じられています。
本書の定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-636-94334-4 C0093
©2017 by Hinata Ougi, Yamaha Music Entertainment Holdings, Inc.
Printed in Japan

CamScannerでスキャン